

千歳市

しゅくばい がわ お の
祝梅川小野遺跡(2)

うめ かわ
梅川 1 遺跡(2)

—道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

しゅくばい がわ お の
祝梅川小野遺跡(2)

うめ かわ
梅川1遺跡(2)

—道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



Ⅲ H-3・4 検出



Ⅲ H-3・4 調査状況



Ⅲ H-3 竈



Ⅲ H-8 竈



Ⅲ H-8 竈付近の遺物



Ⅲ P-24 V群c類の土器



Ⅲ P-56 V群c類の土器



Ⅲ P-56 壺内部の黒曜石製剥片



V群c類土器



VI群土器

例 言

- 1 本書は、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部が行う道央圏連絡道路建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成19・20年度に委託を受けて実施した、千歳市祝梅川小野遺跡と梅川1遺跡の埋蔵文化財発掘調査のうち、第1黒色土層（当報告書呼称ではⅢ層あるいは包含層）についての報告書である。なお、第1黒色土層のうち低湿地で検出された遺構・木製品・金属製品については、次年度以降に報告を予定している。
- 2 報告内容は、祝梅川小野遺跡の平成19年度調査範囲（1,550㎡）および平成20年度調査範囲（6,787㎡）、梅川1遺跡の平成20年度調査範囲（893㎡）、計9,230㎡の遺構と遺物である。
- 3 調査は第1調査部第3調査課が担当した。
- 4 本書は、鈴木 信、菊池慈人、芝田直人、山中文雄、酒井秀治が執筆し、文末に執筆者を示した。編集は芝田が担当した。
- 5 遺物の整理は、土器等を芝田、石器等を酒井が担当した。
- 6 現地調査での写真撮影、室内での写真撮影・整理は菊池が担当した。
- 7 放射性炭素年代測定については、(株)加速器分析研究所に依頼した。
- 8 黒曜石原産地同定については、(株)第四紀地質研究所に依頼した。
- 9 炭化材樹種同定については、(株)パリオ・サーヴェイに依頼した。
- 10 ⅢP-56より出土した壺形土器内部の黒曜石製遺物6点の三次元計測および実測図作成については、(株)シン技術コンサルに依頼した。
- 11 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部用地課、同部千歳道路事務所、千歳市教育委員会、千歳市埋蔵文化財センター、北海道教育委員会
赤石慎三、秋山洋司、天方博章、石井 淳、稲垣和幸、乾 哲也、乾 芳弘、上野秀一、上屋真一、遠藤龍敏、大谷敏三、大林千春、大沼忠春、小川康和、長田佳宏、小野哲也、小野寺聡、柏木大延、川内谷修、木村英明、工藤 肇、佐藤一志、関根達人、仙庭伸久、高橋 理、田村俊之、豊田宏良、中岡利泰、長町章弘、奈良智法、野村 崇、羽賀憲二、原 靖寿、藤井誠二、松田淳子、松谷純一、森 秀之、森岡健治、山田昌久（五十音順・敬称略）

記号等の説明

1 遺構の呼称について

遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。先頭のローマ数字「Ⅲ」は、第Ⅲ黒色土層（Ⅲ層）から検出されたことを表す。

ⅢH：住居跡 HF：住居にともなう焼土 HP：住居にともなう土坑・柱穴

HS：住居にともなう集石

ⅢP：土坑 ⅢSP：小土坑 ⅢF：焼土 ⅢA：灰集中 ⅢB：骨片集中 ⅢS：集石

ⅢR：道跡

2 遺構図について

(1)遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、N-77°50'-Wである。

(2)遺構平面図の「+」は5m方格の大グリッドラインまたは2.5m方格の小グリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字は調査区の名称を表す。詳細はⅡ章に記す。

(3)遺構平面図の小黒丸「・」とその下的小アラビア数字、および遺構断面図のセクションレベルは標高(単位m)である。

(4)掲載した遺構図の縮尺は基本的に40分の1である。ただし、住居跡は50分の1、道跡は200分の1の縮尺を用いた。また、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。

(5)遺構図の記号は、以下の遺物の出土地点を表す。また、付された数字は掲載番号を示し、正字体は土器、斜字体は石器等を表す。

●：土器 ▲：剥片石器 ■：礫石器 △：剥片 □：礫・礫片 ★：土・石製品

(6)遺構の規模は、「上端の長軸×短軸/下端の長軸×短軸/確認面からの最大深」(単位m)で示している。

(7)土層の表記は、基本土層についてはローマ数字(I、II、III・・・)、遺構内の層序についてはアラビア数字(1、2、3・・・)を使用した。

(8)土層の色調は『新版標準土色誌29版』(小山・竹原2007)に準じた。

(9)火山灰は『北海道の火山灰』(北海道火山命名委員会1982)に準じ、以下の略号を用いた。

樽前山火山灰a層：T a - a 樽前山火山灰c層：T a - c

白頭山-苫小牧火山灰層：B - T m 恵庭岳火山灰a層：E n - a

(10)土層の混在状態の表記は、基本土層と以下の記号を用いる場合がある。記号と面積割合の相関関係については、「千歳市オルイカ1遺跡」(北畑調報188)に準拠している。

A+B：AとBがほぼ同量混じる (Aが45%以上・55%未満、Bが45%以上・55%未満)

A>B：AにBが少量混じる (Aが80%未満、Bが20%以上・45%未満)


































A>B：AにBが微量混じる (Aが80%以上、Bが20%未満)

3 遺物図について

(1)遺物図の縮尺は、復元土器・拓影土器・礫石器(石斧以外)が3分の1、剥片石器・石斧・土製品・石製品が2分の1である。

(2)遺物図右下の太ゴチックアラビア数字は掲載番号である。大型の復元土器の展開図などが複数

ージに亘る場合は、掲載番号に丸数字(①、②、③・・・)を付した。また、拓影土器の掲載番号に後続する小文字アルファベット(a、b、c・・・)は同一個体を示す。

- (3) 復元土器の「」は上面観を模式的に表したもので、十字の垂直線は下端が前面側-上端が裏面側を、十字の水平線は左端が左面側-右端が右面側を示す。「」の直下の図は「」に太線で示した弧の範囲の文様・器面調整を図化表現している。太線は転写範囲を表し、「」の外面に太線がある場合は外面の情報、「」の内側に太線がある場合は内面の情報を表現している。
- (4) 復元土器の断面図上方に「」「」「」が付されている場合、正面図に「」「」「」が付されている部位の断面を表す。「」「」「」は正面側180°、「」は裏面側180°の範囲を表す。
- (5) 土器の断面図に付されている太ゴチックアラビア数字は、露呈した粘土紐の接合面の段数を表す。数字の降順は成形順を示す。
- (6) 土器の正面図上方の太ゴチックアラビア数字付き「」「」は、露呈した粘土紐の接合面の位置・段数を表す。「」は正面側180°、「」は裏面側180°の範囲を表す。太ゴチックアラビア数字は、(5)で述べた断面図の接合面の段数に対応する。
- (7) 土器の正面図に付されている「」「」は粘土紐の接合面の露呈部分を示す。「」は外傾接合、「」は内傾接合である。「」は口縁部方向へ接続する面、「」は底部方向へ接合する面である。
- (8) 底面図の「」-「」は、正面図の「」-「」に対応し、底面図の天-地は、正面図の手前-奥に対応する。
- (9) 石器・土製品・石製品の大きさは、最大長・最大幅・最大厚(単位cm)で示した。破損しているものについては現存最大値を()、不明なものは「-」で示した。
- (10) 石器の実測図中でたき痕は「-」、すり痕は「-」で範囲を示した。また、被熱部分をドットのスクリーントーンで示した。

4 写真図版について

遺物写真の右下のゴチックアラビア数字は、図掲載番号を示す。

5 その他

文中において「北埋調報」としているものは、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である(平成24年度より公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書)。

目 次

口 絵
例 言
記号等の説明
目 次
挿図目次
表目次
図版目次

I 緒 言

1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	2
3 調査の経過	2
4 調査結果の概要	3

II 調査の方法

1 調査範囲	5
2 掘削など	6
3 測量と記録	6
4 資料整理	7
5 保管	8
6 遺物の分類	8

III 遺跡の環境

1 位置	9
2 周辺の遺跡	9
3 地層	12

IV 祝梅川小野遺跡

1 遺構	
(1) 概要	13
(2) 住居跡	14
(3) 土坑	47
(4) 小ピット	85
(5) 焼土	85
(6) 灰集中	85
(7) 集石	90
(8) 道跡	94

2 遺構出土の遺物

(1) 土器等	97
(2) 石器等	119
3 包含層出土の遺物	
(1) 土器等	126
(2) 石器等	162

祝梅川小野遺跡一覧表	175
------------	-----

V 梅川1遺跡

1 遺構	193
2 包含層出土の遺物	
(1) 土器等	194
(2) 石器等	197

梅川1遺跡一覧表	198
----------	-----

VI 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定結果	199
2 黒曜石原産地同定結果	211
3 炭化材樹種同定結果	218

引用参考文献	225
--------	-----

写真図版
報告書抄録

挿図目次

Ⅰ 調査の方法		図Ⅳ-1-26 掘り上げ土	46
図Ⅱ-1 発掘区の設定	5	図Ⅳ-1-27 ⅢP-1~4	48
		図Ⅳ-1-28 ⅢP-5~8	49
Ⅱ 遺跡の環境		図Ⅳ-1-29 ⅢP-9~11	51
図Ⅲ-1 遺跡の位置と周辺の遺跡	10	図Ⅳ-1-30 ⅢP-12~15	52
図Ⅲ-2 遺跡の位置と調査範囲	11	図Ⅳ-1-31 ⅢP-16~19	54
図Ⅲ-3 土層柱状模式図	12	図Ⅳ-1-32 ⅢP-20~23	56
		図Ⅳ-1-33 ⅢP-24~25	58
		図Ⅳ-1-34 ⅢP-26~29	59
		図Ⅳ-1-35 ⅢP-30~32	61
Ⅳ 祝梅川小野遺跡		図Ⅳ-1-36 ⅢP-33~36	62
図Ⅳ-1-1 遺構位置図(全体)	15	図Ⅳ-1-37 ⅢP-37~40	64
図Ⅳ-1-2 遺構位置図(南側)	17	図Ⅳ-1-38 ⅢP-41~44	66
図Ⅳ-1-3 遺構位置図(中央)	18	図Ⅳ-1-39 ⅢP-45~48	67
図Ⅳ-1-4 ⅢH-1	19	図Ⅳ-1-40 ⅢP-49~52	69
図Ⅳ-1-5 ⅢH-2	20	図Ⅳ-1-41 ⅢP-53~55・57	70
図Ⅳ-1-6 ⅢH-3(1)	22	図Ⅳ-1-42 ⅢP-56(1)	72
図Ⅳ-1-7 ⅢH-3(2)	23	図Ⅳ-1-43 ⅢP-56(2)	73
図Ⅳ-1-8 ⅢH-3(3)	24	図Ⅳ-1-44 ⅢP-56(3)	74
図Ⅳ-1-9 ⅢH-3(4)	25	図Ⅳ-1-45 ⅢP-58・59	75
図Ⅳ-1-10 ⅢH-4(1)	26	図Ⅳ-1-46 ⅢP-60~62	77
図Ⅳ-1-11 ⅢH-4(2)	27	図Ⅳ-1-47 ⅢP-63~65	78
図Ⅳ-1-12 ⅢH-4(3)	28	図Ⅳ-1-48 ⅢP-66~68	80
図Ⅳ-1-13 ⅢH-5	30	図Ⅳ-1-49 ⅢP-69~71	81
図Ⅳ-1-14 ⅢH-6(1)	31	図Ⅳ-1-50 ⅢP-72~74	83
図Ⅳ-1-15 ⅢH-6(2)	32	図Ⅳ-1-51 ⅢP-75~77	84
図Ⅳ-1-16 ⅢH-6(3)	33	図Ⅳ-1-52 ⅢSP-13・14・19・21・29・32~36・ 52・54・55	86
図Ⅳ-1-17 ⅢH-7(1)	35	図Ⅳ-1-53 ⅢSP-56・70・71・73・75・79・82~ 84・86・89・92~96	87
図Ⅳ-1-18 ⅢH-7(2)	36	図Ⅳ-1-54 ⅢSP-100・101・109~112・ 114~121	88
図Ⅳ-1-19 ⅢH-8(1)	37	図Ⅳ-1-55 ⅢSP-122~132	89
図Ⅳ-1-20 ⅢH-8(2)	39		
図Ⅳ-1-21 ⅢH-8(3)	40		
図Ⅳ-1-22 ⅢH-8(4)	41		
図Ⅳ-1-23 ⅢH-8(5)	42		
図Ⅳ-1-24 ⅢH-9	44		
図Ⅳ-1-25 ⅢH-10	45		

図Ⅳ-1-56	ⅢF-1・2、ⅢA-1・2、 ⅢS-4	91	図Ⅳ-3-13	包含層の土器等(13)	147
図Ⅳ-1-57	ⅢS-1・3	92	図Ⅳ-3-14	包含層の土器等(14)	148
図Ⅳ-1-58	ⅢS-2	93	図Ⅳ-3-15	包含層の土器等(15)	149
図Ⅳ-1-59	ⅢR-1	95	図Ⅳ-3-16	包含層の土器等(16)	150
図Ⅳ-2-1	遺構の土器等(1)	105	図Ⅳ-3-17	包含層の土器等(17)	151
図Ⅳ-2-2	遺構の土器等(2)	106	図Ⅳ-3-18	包含層の土器等(18)	152
図Ⅳ-2-3	遺構の土器等(3)	107	図Ⅳ-3-19	包含層の土器等(19)	153
図Ⅳ-2-4	遺構の土器等(4)	108	図Ⅳ-3-20	包含層の土器等(20)	154
図Ⅳ-2-5	遺構の土器等(5)	109	図Ⅳ-3-21	包含層の土器等(21)	155
図Ⅳ-2-6	遺構の土器等(6)	110	図Ⅳ-3-22	包含層の土器等(22)	156
図Ⅳ-2-7	遺構の土器等(7)	111	図Ⅳ-3-23	包含層の土器等(23)	157
図Ⅳ-2-8	遺構の土器等(8)	112	図Ⅳ-3-24	包含層の土器等(24)	158
図Ⅳ-2-9	遺構の土器等(9)	113	図Ⅳ-3-25	包含層の土器等(25)	159
図Ⅳ-2-10	遺構の土器等(10)	114	図Ⅳ-3-26	土器等の分布(1)	160
図Ⅳ-2-11	遺構の土器等(11)	115	図Ⅳ-3-27	土器等の分布(2)	161
図Ⅳ-2-12	遺構の土器等(12)	116	図Ⅳ-3-28	包含層の石器等(1)	164
図Ⅳ-2-13	遺構の土器等(13)	117	図Ⅳ-3-29	包含層の石器等(2)	165
図Ⅳ-2-14	遺構の土器等(14)	118	図Ⅳ-3-30	包含層の石器等(3)	166
図Ⅳ-2-15	遺構の石器等(1)	121	図Ⅳ-3-31	石器等の分布(1)	167
図Ⅳ-2-16	遺構の石器等(2)	122	図Ⅳ-3-32	石器等の分布(2)	168
図Ⅳ-2-17	遺構の石器等(3)	123	図Ⅳ-3-33	石器等の分布(3)	169
図Ⅳ-2-18	遺構の石器等(4)	124	図Ⅳ-3-34	石器等の分布(4)	170
図Ⅳ-2-19	遺構の石器等(5)	125	図Ⅳ-3-35	石器等の分布(5)	171
図Ⅳ-3-1	包含層の土器等(1)	135	図Ⅳ-3-36	石器等の分布(6)	172
図Ⅳ-3-2	包含層の土器等(2)	136	図Ⅳ-3-37	石器等の分布(7)	173
図Ⅳ-3-3	包含層の土器等(3)	137	図Ⅳ-3-38	石器等の分布(8)	174
図Ⅳ-3-4	包含層の土器等(4)	138			
図Ⅳ-3-5	包含層の土器等(5)	139			
図Ⅳ-3-6	包含層の土器等(6)	140			
図Ⅳ-3-7	包含層の土器等(7)	141			
図Ⅳ-3-8	包含層の土器等(8)	142			
図Ⅳ-3-9	包含層の土器等(9)	143			
図Ⅳ-3-10	包含層の土器等(10)	144			
図Ⅳ-3-11	包含層の土器等(11)	145			
図Ⅳ-3-12	包含層の土器等(12)	146			
			V 梅川1遺跡		
			図Ⅴ-1-1	遺構位置図	193
			図Ⅴ-2-1	包含層の土器(1)	195
			図Ⅴ-2-2	包含層の土器(2)	196
			図Ⅴ-2-3	包含層の石器	198

VI 自然科学的分析	
図VI-1-1 暦年較正年代グラフ(1)……………	205
図VI-1-2 暦年較正年代グラフ(2)……………	206
図VI-1-3 暦年較正年代グラフ(3)……………	210
図VI-2-1 北海道の黒曜石SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図 (標準図)……………	213
図VI-2-2 北海道の黒曜石Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 図 (標準図)……………	214
図VI-2-3 北海道の黒曜石K ₂ O-CaO図 (標準図)……………	215
図VI-2-4 北海道の黒曜石Rb-Sr図 (標準図)……………	216
図VI-2-5 祝梅川小野SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図……………	217
図VI-2-6 祝梅川小野Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 図……………	217
図VI-2-7 祝梅川小野K ₂ O-CaO図……………	217
図VI-2-8 祝梅川小野Rb-Sr図……………	217
図VI-3-1 同定試料出土地点……………	218
図版VI-3-1 炭化材(1)……………	223
図版VI-3-2 炭化材(2)……………	224

目次

I 調査の経緯		V 梅川1遺跡	
表I-1 祝梅川小野遺跡 年度別検出遺構数一覧……………	4	表1 包含層出土掲載土器一覧……………	198
表I-2 祝梅川小野遺跡 出土土器等点数一覧……………	4	表2 包含層出土掲載石器一覧……………	198
表I-3 祝梅川小野遺跡 出土石器等点数一覧……………	4	VI 自然科学的分析	
表I-4 梅川1遺跡 出土土器等点数一覧……………	4	表VI-1-1 測定試料の ¹⁴ C年代 および炭素の同位体比(1)……………	202
表I-5 梅川1遺跡 出土石器等点数一覧……………	4	表VI-1-2 測定試料の ¹⁴ C年代 および炭素の同位体比(2)……………	203
IV 祝梅川小野遺跡		表VI-1-3 測定試料の ¹⁴ C年代 および炭素の同位体比(3)……………	204
表1 検出遺構規模一覧……………	175	表VI-1-4 放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果(1)……………	204
表2 遺構出土遺物一覧……………	178	表VI-1-5 測定試料の ¹⁴ C年代 および炭素の同位体比(4)……………	209
表3 遺構出土土器等一覧……………	182	表VI-1-6 放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果(2)……………	209
表4 遺構出土石器等一覧……………	183	表VI-2-1 黒曜石原産地同定試料一覧……………	211
表5 遺構出土掲載土器等一覧……………	184	表VI-2-2 化学分析表……………	212
表6 遺構出土掲載石器等一覧……………	186	表VI-2-3 原産地対比表……………	212
表7 包含層出土掲載土器等一覧……………	188	表VI-3-1 樹種同定結果……………	222
表8 包含層出土掲載石器等一覧……………	190	表VI-3-2 遺構別種類構成……………	222
表9 土壌フローテーション成果一覧……………	191		

図版目次

<祝梅川小野遺跡>

図版1	調査状況
図版2	住居跡(1)
図版3	住居跡(2)
図版4	住居跡(3)
図版5	住居跡(4)
図版6	住居跡(5)
図版7	住居跡(6)
図版8	住居跡(7)
図版9	住居跡(8)
図版10	住居跡(9)
図版11	住居跡(10)
図版12	住居跡(11)
図版13	住居跡(12)
図版14	土坑(1)
図版15	土坑(2)
図版16	土坑(3)
図版17	土坑(4)
図版18	土坑(5)
図版19	小ピット
図版20	焼土・灰集中・集石・道跡
図版21	遺物出土状況
図版22	遺構の土器等(1)
図版23	遺構の土器等(2)
図版24	遺構の土器等(3)
図版25	遺構の土器等(4)
図版26	遺構の土器等(5)
図版27	遺構の土器等(6)

図版28	遺構の土器等(7)
図版29	遺構の土器等(8)
図版30	遺構の土器等(9)
図版31	遺構の土器等(10)
図版32	遺構の土器等(11)
図版33	遺構の石器等(1)
図版34	遺構の石器等(2)
図版35	遺構の石器等(3)
図版36	包含層の土器等(1)
図版37	包含層の土器等(2)
図版38	包含層の土器等(3)
図版39	包含層の土器等(4)
図版40	包含層の土器等(5)
図版41	包含層の土器等(6)
図版42	包含層の土器等(7)
図版43	包含層の土器等(8)
図版44	包含層の土器等(9)
図版45	包含層の土器等(10)
図版46	包含層の土器等(11)
図版47	包含層の土器等(12)
図版48	包含層の土器等(13)
図版49	包含層の土器等(14)
図版50	包含層の土器等(15)
図版51	包含層の石器等(1)
図版52	包含層の石器等(2)
<梅川1遺跡>	
図版53	包含層の土器等
図版54	包含層の石器等

I 緒言

1 調査要項

事業名	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査（平成21年度まで）	
	道央圏連絡道路新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査（平成22年度）	
	道央圏連絡道路千歳市泉郷道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査（平成23・24年度）	
事業委託者	国土交通省北海道開発局札幌開発建設部	
事業受託者	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター	
遺跡名	祝梅川小野遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-48）	
	梅川1遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-56）	
所在地	北海道千歳市祝梅485-2ほか：祝梅川小野遺跡	
	北海道千歳市祝梅498-3：梅川1遺跡	
受託期間	平成19年4月2日～平成20年3月31日（発掘調査：平成19年5月9日～10月26日）	
	平成20年4月1日～平成21年3月31日（発掘調査：平成20年5月9日～10月23日）	
	平成21年4月1日～平成25年3月31日（整理作業：平成24年11月30日まで）	
調査面積	8,337㎡：祝梅川小野遺跡	
	893㎡：梅川1遺跡	
調査体制	第1調査部 部長 越田賢一郎（平成19～21年度）	
	部長 千葉 英一（平成22～24年度）	
	第2調査部 部長 三浦 正人（平成23・24年度）	

平成19年度	平成20年度	平成21年度
第1調査部第2調査課	第1調査部第3調査課	第1調査部第3調査課
課長 遠藤香澄(発掘担当者)	課長 鈴木 信(発掘担当者)	課長 鈴木 信
主査 菊池慈人(発掘担当者)	主査 菊池慈人(発掘担当者)	主査 菊池慈人
主任 芝田直人	主任 芝田直人	主任 芝田直人
主任 酒井秀治	主任 山中文雄	主任 山中文雄
嘱託 山田和史(発掘担当者)	主任 酒井秀治	主任 酒井秀治
平成22年度	平成23年度	平成24年度
第1調査部第3調査課	第1調査部第2調査課	第1調査部第2調査課
課長 鈴木 信	課長 鈴木 信	課長 鈴木 信
主査 菊池慈人	主査 菊池慈人	主査 菊池慈人
主査 芝田直人	主任 山中文雄	主査 芝田直人
主任 山中文雄	第2調査部第2調査課	主査 末光正卓
主任 酒井秀治	主査 芝田直人	主任 山中文雄
	主任 酒井秀治	第2調査部第2調査課
		主任 酒井秀治

2 調査にいたる経緯

札幌開発建設部が計画・実施している「道央圏連絡道路（一般国道337号）：千歳市～小樽市を連結する延長約80kmの地域高規格道路」事業は、平成元（1989）年に事業化され、そのうち「新千歳空港関連」事業が本調査の原因となる。平成2年12月に札幌開発建設部は、千歳市教育委員会を經由して、北海道教育委員会あてに国道337号根志越道路整備工事に伴う千歳市柏台～中央までの路線内における事前協議書を提出した。平成3年6月に北海道教育委員会は路線内の遺跡所在確認調査を行い、同年7月に周知8か所・未登載4か所（対象面積299,000㎡）について範囲確認調査の必要を札幌開発建設部に回答した。

その後、平成7（1995）年5月に事業名変更等のため再び事前協議書の提出があった。事業名は「一般国道337号新千歳空港関連工事」、事業面積828,000㎡となる。この包蔵地については現状保存が望ましいが、やむをえない場合は記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、北海道教育委員会より札幌開発建設部に伝えられた。札幌開発建設部は工事計画の変更は困難と判断した。

以上の経緯から、平成19年2月に北海道教育委員会は財団法人（平成24年4月より公益財団法人）北海道埋蔵文化財センターに祝梅川小野遺跡の発掘調査（12,310㎡）を指示し、3月に財団法人北海道埋蔵文化財センターは調査実施を受託し、調査計画を立案した。同年4月に札幌開発建設部と委託契約を交わした上で、5～10月に発掘調査し、工事計画の変更により7,630㎡（4,680㎡減）を終了した。このうちⅢ層の調査面積は1,550㎡である。平成20年2月に北海道教育委員会は財団法人北海道埋蔵文化財センターに祝梅川小野遺跡の発掘調査（6,630㎡）を指示し、3月に財団法人北海道埋蔵文化財センターは調査実施を受託し、調査計画を立案した。同年4月に札幌開発建設部と委託契約を交わした上で、5～10月に発掘調査した。遺跡範囲の拡大変更により10,267㎡（3,637㎡増）を完了した。このうちⅢ層の調査面積は6,787㎡である。兩年合わせて最終調査面積は17,897㎡となった。

梅川1遺跡については、平成20年2月に北海道教育委員会は財団法人北海道埋蔵文化財センターに発掘調査（780㎡）を指示し、3月に財団法人北海道埋蔵文化財センターは調査実施を受託し、調査計画を立案した。同年4月に札幌開発建設部と委託契約を交わした上で、5～10月に発掘調査した。遺跡範囲の拡大変更により893㎡（113㎡増）を完了した。

3 調査の経過

（1）発掘経過

平成19年度 5月9日：開所式、5月11～17日：Ⅴ層25%調査、5月14日：Ⅲ層25%調査、5月18日以降：Ⅲ・Ⅴ層遺構調査（住居跡・土坑・焼土を検出）、10月24日：Ⅲ層遺構調査終了、10月26日：Ⅴ層遺構調査終了、10月29日～11月1日：撤収作業・越年準備

平成20年度 5月9日：開所式、5月13日以降：Ⅲ層遺構調査（住居跡・土坑を検出）、5月15～30日：調査区南半の鋼欠板打設、6月2～12日：調査区南半の排水準備工・表土剥ぎ、6月9日：調査区南半のⅢ・Ⅴ層25%調査、6月21日：調査区北半の鋼欠板打設、6月23日以降：調査区南半のⅢ・Ⅴ層遺構調査、7月11～30日：排水準備工・表土剥ぎ、7月13～15日サミットによる作業休止、7月29日調査区北半のⅢ・Ⅴ層25%調査、8月8日以降調査区北半のⅢ・Ⅴ層遺構調査、9月3日：調査区南半の調査終了、10月23日：調査区北半の調査終了、10月24～29日：撤収作業

（2）整理経過

平成19年度 出土遺物の破片接合・遺物復元・遺構素図作成・遺物図作成を行なう。並行して報告書「千歳市 梅川4遺跡（1）」（北理調報253集）を刊行した。

平成20年度 土器破片接合・石器接合・遺構素図作成・遺物図作成・微細遺物の選別。

平成21年度 遺物復元・遺構素図作成・遺物図作成・微細遺物の選別。並行して報告書「千歳市 梅川4遺跡(2)」(北理調報269集)を刊行した。

平成22年度 遺構素図作成・遺物図作成・原稿執筆、微細遺物の選別。

平成23年度 遺物図作成・遺物図作成・一覧表作成・写真撮影・原稿執筆、並行して報告書「千歳市キウス5遺跡(9)」(北理調報284集)、「千歳市 祝梅川小野遺跡(1)・梅川1遺跡(1)」(北理調報285集)を刊行した。

平成24年度 遺物図作成・写真撮影・原稿執筆、並行して報告書「千歳市 祝梅川小野遺跡(2)・梅川1遺跡(2)」(本書・北理調報297集)、報告書「千歳市 キウス5遺跡(10)」(北理調報299集)、報告書「千歳市 祝梅川上田遺跡(2)」(北理調報300集)を刊行した。(鈴木)

4 調査結果の概要

(1) 祝梅川小野遺跡

Ⅲ層より検出された遺構は、住居跡(ⅢH)10軒、土坑(ⅢP)79基、小ピット(ⅢSP)77基、焼土(ⅢF)10か所、灰集中(ⅢA)4か所、骨片集中(ⅢB)1か所、集石(ⅢS)4か所、道跡(ⅢR)1条である(表I-1)。これらの時期は、縄文時代晩期後葉、弥文文化期、近世アイヌ文化期に属する。本書では、調査範囲南西側の祝梅川へ降りる西向きに緩斜面上、中央の北向きに急斜面の肩部で検出された住居跡10軒、土坑77基、小ピット54基、焼土2か所、灰集中2か所、集石4か所、道跡1条について報告する。調査範囲北東側の低湿地の遺構は、保存処理・整理作業を継続中の木製品・鉄製品などと関連するものが多いため、次年度以降に報告する。

Ⅲ層より土器・土製品は18,330点出土した(表I-2)。縄文時代晩期後葉(V群c類)の土器が14,136点と最も多く、弥文文化期の土器(V群)が3,256点で次ぐ。土器の出土分布は遺構とはほぼ一致しており、調査範囲南側の段丘面から祝梅川へ降りる斜面上に集中し、北側の低地部分は希薄である。土製品は、V群に伴うと考えられる紡錘車が3個体出土した。

Ⅲ層より石器等は剥片石器447点、剥片2,986点、礫石器103点、原石・礫・礫片865点、石製品5点の合計4,406点が出土している(表I-3)。石材は、剥片石器・剥片では黒曜石が占める割合が非常に高い。礫石器は、砂岩、泥岩、安山岩、凝灰岩を利用している。このほか、黒曜石製石製品1点と有孔石製品3点、玉類1点が出土している。

自然科学的分析は、放射性炭素年代測定(AMS法)、黒曜石原産地同定、炭化材樹種同定を行った(Ⅵ章参照)。放射性炭素年代測定は、縄文時代晩期後葉、弥文文化期に該当する年代値が得られている。晩期後葉の壺形土器の内部より出土した黒曜石製Uフレイク6点は、赤石山産であった。炭化樹種は、昨年度報告したV層の遺構出土のものと合わせて同定した。

(2) 梅川1遺跡

Ⅲ層より近世アイヌ文化期の建材集中1か所を検出した。祝梅川小野遺跡の低湿地と同様に、保存処理・整理作業を継続するため、次年度以降に報告する。包含層より、土器はV群c類414点、Ⅶ群31点の計445点、石器は剥片石器36点、剥片78点、礫石器2点、礫1点の計117点が出土した(表I-4・5)。(芝田)

表 I-1 祝梅川小野遺跡 年度別検出遺構数一覧

調査年度	調査面積 (㎡)	遺 構							
		住居跡 (Ⅱ)	土坑 (Ⅲ)	小ピット (ⅢSP)	焼土 (ⅢF)	灰集中 (ⅢA)	骨片集中 (ⅢB)	集石 (ⅢS)	道跡 (ⅢR)
平成19年度	1,550	(7)	(59)	(48)	(2)	(2)	0	(4)	(1)
平成20年度	6,787	(3)	20 (18)	29 (6)	8	2	1	4	
計	8,337	(10)	79 (77)	77 (54)	10 (2)	4 (2)	1	8 (4)	(1)

* () 内の数字は今回報告する遺構数

表 I-2 祝梅川小野遺跡 出土土器点数一覧

分類	遺 構	包含層	計
V群	542	2,714	3,256
Ⅱ群a類	2	7	9
Ⅱ群b類	58	45	103
Ⅱ群a類	0	1	1
Ⅱ群b類	14	18	32
Ⅱ群a類	15	11	26

分類	遺 構	包含層	計
Ⅱ群c類	105	26	131
Ⅱ群不明	4	39	43
V群b類	0	1	1
不明	9	10	19
土製品	13	35	49
総 計	3,250	15,080	18,330

表 I-3 祝梅川小野遺跡 出土石器点数一覧

分類	遺 構	包含層	計
石鏟	3	2	5
石槌・ナイフ	2	0	2
つまみ付きナイフ	2	5	7
スクレイパー	58	99	157
両面調整石器	0	1	1
楔形石器	0	4	4
Rフレイク	11	69	80
Uフレイク	13	50	63
石核	1	9	10
剥片	613	2,373	2,986
石斧	7	17	24
石のみ	1	1	2
すり石	6	0	6
たたき石	19	21	40
砥石	1	8	9
矢柄研磨器	0	2	2
台石	0	4	4
石皿	2	3	5
加工痕ある礫	1	5	6
研磨痕ある礫	0	5	5
原石	2	3	5
棒状原石	1	2	3
礫・礫片	408	449	857
石製品	0	5	5
総 計	1,179	3,227	4,406

表 I-4 梅川1遺跡 出土土器点数一覧

分類	遺 構	包含層	計
V群	0	31	31
総 計	0	445	445

表 I-5 梅川1遺跡 出土石器点数一覧

分類	遺 構	包含層	計
石鏟	0	1	1
スクレイパー	0	11	11
Rフレイク	0	10	10
Uフレイク	0	9	9
剥片	0	78	78
たたき石	0	1	1
加工痕ある礫	0	1	1
礫・礫片	0	1	1
総 計	0	117	117

II 調査の方法

1 調査範囲

(1) 発掘区の設定

a 方格組みおよび座標

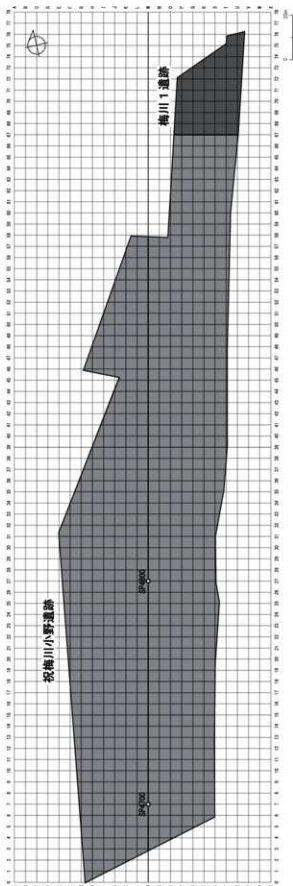
発掘必要区域は「道央圏連絡道路（一般国道337号）」内であるため、発掘区の設定は以下のように行った（図II-1）。

まず、計画路線のうちSP4400（梅川4遺跡内）～SP5348.492（梅川2遺跡内）が直線であることからこれを基線とし、さらに梅川4遺跡・祝梅川小野・梅川1遺跡が同系の座標に入るように基線に対して平行・直交する方格を組み、平成19年度には方格設定の原点として点間100mのSP4700（調査方格名称M7）・SP4800（調査方格名称M27）を選定した。平成20年度はこれを踏襲している。

方格間隔は、方格杭打設の経費節減、1グリッドあたりの投入人員数・作業員の班構成、遺構内に含まれてしまう方格杭の低減、調査面積累計把握の容易さを考慮して5mに設定した。それぞれの区画線にアルファベット（東西方向）と数字（南北方向）を与え、調査区（グリッド）の呼称は、方眼の南西角で交差する区画線を読む。さらに、5m方眼を25m四方に分割して、反時計回りに南西角から「a」・「b」・「c」・「d」と呼ぶ小調査区（小グリッド）を設置し、調査の便宜を図った。

平成19年度の調査着手に当たっては株式会社総合測量設計に委託し、3級基準点2か所の測量を行い、20m間隔の基準杭を14か所設置し座標値と標高を得た。平成20年度の調査着手に当たっては株式会社田中測量に委託し、鋼矢板打設などの準備工があったため、複数回にわたり基準杭を39か所設置し座標値と標高を得た。これらを基本杭として5m方眼杭の打設を行った。なお、調査に必要な5m方格杭は、その都度自ら打設することがあった。

下記方格の原点平面直角座標（平面直角座標系第XII系）は図II-1のSP4690・SP4790にある。



図II-1 発掘区の設定

M5 (SP4690) : X=-129,595,445, Y=-45,721,772 (北緯42° 49' 55"・東経141° 41' 26")

M25 (SP4790) : X=-129,497,984, Y=-45,699,534 (北緯42° 49' 58"・東経141° 41' 27")

b 水準点

平成19年度に用いた水準点は以下である。

M5 : 13.116m M10 : 13.919m M15 : 13.869m M20 : 14.122m M25 : 14.025m

平成20年度に用いた水準点は以下である。

L11 : 13.262m N29 : 13.584m R45 : 10.134m S49 : 10.649m S61 : 9.964m S73 : 8.660m

2 掘削など

人力掘削作業は主に移植ゴテ・ねじり鎌を使用して行った。遺構・遺物の検出状況に応じて竹べらや竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように掘削を行った。精査・清掃の際には前記のほかには炉ボウキ・ブラシ等を用いた。また、移植ゴテでは掘ることが困難な場所や遺構・遺物の見られない範囲、掘乱坑等ではスコップ等を併用した。

遺構は火山灰土壌に包埋されているため、降雨による流水・乾燥により崩壊が起こりやすい。そのため、適度にじょうろや噴霧器を用いて散水を行い、ベニヤ板・ブルーシートなどをかけるなど降雨・乾燥に配慮して調査を進めた。黒色腐植土は水を含みやすく滑りやすく危険をともなった。そのため、排土道や通路に歩み板や麻袋やまき砂（遺跡内の細粒火山灰を利用）を敷いて転倒の防止に努めた。

人力掘削方針は、上面での精査、第1黒色土層はアイヌ文化期・樺文文化期の遺構・遺物の確認のため深度3cm、それ以降は深度5cm単位で掘削し、第2黒色土層は深度5cm単位で掘削した。なお、状況に応じて深度3cmと深度5cmを適宜用いた場合がある。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

委託設置した基準杭をもとに5m方格の各交点に本杭を設置し、平面測量の基準とした。水準測量は自動レベルと1mm目盛のアルミスタッフを用いて方格杭に基準杭を与点とする標高を入れ、方格杭と対象の比高を直接観測した。平面測量は方格杭を基準としての手測りによる。

遺構・遺物の詳細な出土位置と範囲を記録することにより、その接合関係を把握し、遺構の形成順序を把握するため下記のような方法を用いて遺物の検出範囲と出土位置を記録することとした。

実測は1mm方眼のA4版セクションフィルムに基本的に20分の1スケールで記入した。出土状況の詳細図を必要としたときは10分の1スケールで行った。(鈴木)

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は、6×7サイズカメラを使用し、デジタルカメラで補助記録を撮った。記録保存のため同一カットを同じ条件（シャッタースピード・露出）で複数コマ撮影し1セットとした。なお、絞りを替えてさらに撮影した場合がある。撮影は遺構・遺物の出土状況などを行った。また、進行状況の確認となる定点撮影も行った。撮影に際しては、各被写体の撮影方向・出土位置・取上面など必要な情報を入れることを考慮した。ブレ・ボケなどを防止する為に、全ての撮影は三脚・レリーズを用いて行った。

b 撮影機材・撮影データ

撮影機材・フィルムは下記を使用した。フィルム（フジネオパンアクロス100-120・フジRDPⅢ

120)の使用頻度や収納スペースの観点から、ほとんどを6×7サイズ(Mamiya R Z67PRO II)で行なうこととした。スライドには必要に応じて6×7サイズリバーサルフィルムより作成した。現場での撮影データ(カットNo・撮影日・被写体名・被写体詳細または出土層位・撮影方向・フィルム種類・撮影者)は撮影者が野帳に記入し、記録とデジタルカメラによる撮影の統合を行い写真台帳とした。

(菊池)

(3) 出土品の収集

掘り出し遺物についての取り上げ方法は、点取り上げと一括上げがある。一括上げとは5m方眼・層別である。土壌の取り上げは遺物の取上げと同じ方法で行った。ただし、すべて範囲を記録した一括上げである。土壌に含まれる、多量の小剥片などは、土壌ごとポリ袋に採取し、その後の整理作業で水篩選別方法により取り出している。

(鈴木)

4 資料整理

(1) 図面等

遺構などの原因は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその個所が確認できるように原因に書き込んでいる。その後、原因から1mm方眼の方眼紙に鉛筆(芯径0.5mm)をもちいて作成した。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(A Adobe Illustrator CS3)により補正・加工し版下を作成した。

(2) 出土品

一次整理：掘り出された土器・石器等は、野外作業と平行して現地で水洗・乾燥・遺物台帳の作成・遺物カードの添付・注記作業を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、遺物乾燥小屋の室内で行った。室内では除湿機などを用いて乾燥を促した。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに遺物名と点数を決定したうえで遺物番号を与え、遺物台帳に登録した。

遺物台帳は、土器・土製品と石器等とに分けて作成している。B5判の様式を印刷して手作業で記入し、グリッド別に全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には出土グリッドまたは遺構のほか遺物番号・取り上げ日・層位・遺物名・分類・材質(石器等に限る)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードとともに遺物番号ごとにチェック付ポリ袋に納めた。

注記は、手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が剥片や礫を除いたものである。注記できなかった遺物は遺物番号ごとにポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。

注記内容は、遺構については、遺跡名の略号「オノ」「ウ1」、出土遺構名の略号「例えばP」と遺構番号「アラビア数字」、層位名「ローマ数字」、遺物番号「アラビア数字」を記入した。組み合わせ表記順は「例えばオノ」+「P：第1黒色土層→U P、第2黒色土層→L P」・「遺構番号」+層位名+「遺物番号」である。包含層については、遺跡名の略号「例えばウ1」、出土方格南北方向「アルファベット」と東西方向「アラビア数字」、層位名「ローマ数字」、遺物番号「アラビア数字」を記入した。組み合わせ表記順は「例えばウ1」+「層位名」+「遺物番号」である。

二次整理：一次整理の終了した遺物を埋蔵文化財センターに搬入し、分類・材質の確認、接合などを行った。遺物の整理と平行して遺物台帳の修正・コンピューターへの入力を進めた。整理終了後、原則として各遺物と遺物カードを同封したチェック付ポリ袋に戻し、出土方格南北方向「アルファベット」と出土層ごとに遺物番号順に整頓し、プラスチックコンテナに収納した。

立体復元は、遺物台帳と破片の照合→接合関係表記入→土器接合→樹脂充填の手順を取った。土器拓

本は破片個体について行い、断面は人手による原寸実測、2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。石器実測は立体復元について行い、人手による原寸実測、2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。石器実測は人手による原寸実測、原寸または2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。一部の遺物については実測図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CS3)により墨入れを行った。(芝田)

(3) 写真

室内撮影は、6×7版カメラ・4×5版カメラ・ストロボを用いて行った。俯瞰は無影撮影台を用い、遺物集合写真などの立面は、撮影台に遺物が載り切らない時は、背景紙を床に直に垂らして撮影した。フィルム現像はカラーリバーサルフィルムを外注し、モノクロフィルムを自動現像機で自家処理した。モノクロ写真の焼き付けは自家処理しており、写真図版用の焼き付けや密着焼きを行なっている。フィルムには1コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。(菊池)

5 保管

今回の報告に関する図面等・写真・出土遺物は平成25年1月現在、道立北海道埋蔵文化財センターで保管している。図面等は全てA2版図面ファイルに調査年度・北埋調報番号・遺跡名をつけて収納している。写真アルバムは定温・定湿に保たれた特別取蔵庫に保管される。出土遺物に関しては、石器片や石器等はコンテナに収納する。コンテナには調査年度・北埋調報番号・遺跡名・遺物名・分類・収納番号を記したラベルを貼り、取蔵庫に保管し、今後の活用に備えた。(鈴木)

6 遺物の分類

a 土器等

縄文時代早期に属するものをⅠ群、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、統縄文時代をⅥ群、擦文文化期をⅦ群とした。Ⅲ層の調査では主にⅤ群c類、Ⅶ群が出土している。

V群 縄文時代晩期に属する道央の土器群

- a類 大洞B式、大洞B-C式とこれに並行する在地の土器群。東三川I式など。
- b類 大洞C₁式、大洞C₂式とこれに並行する在地の土器群。浜中大曲式、美々3式など。
- c類 大洞A式、大洞A'式とこれに並行する在地の土器群。タンネトウL式、氷川式など。

Ⅶ群 擦文文化期に属する道央の土器群

土製品は特に細分項目は設けない。紡錘車、焼成粘土塊などがある。(芝田)

b 石器等

分類は器種を基本とした。各器種は剥片石器群、礫石器群に大別される。

剥片石器群

石鏃、石槍、ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、Rフレイク、Uフレイク、剥片

礫石器群

石斧、石のみ、たたき石、台石、すり石、石皿、砥石、矢柄研磨器、加工痕ある礫、研磨痕ある礫、原石・棒状原石、礫・礫片

上記以外の石製遺物については石製品として分類した。黒曜石製石製品、玉、有孔石製品などがある。

(酒井)

Ⅲ 遺跡の環境

1 位置

(1) 所在

祝梅川小野遺跡は千歳市祝梅485-2ほか、梅川1遺跡は千歳市祝梅498-3に所在する。千歳市は北海道の西部、石狩地方の南端を占め、北は恵庭市、南は苫小牧市に接している。両遺跡は千歳市街東南隅に位置する。また、祝梅川小野遺跡は祝梅川上流部右岸にあり、梅川1遺跡は梅川下流部左岸にある。祝梅川は遺跡の500m下流で梅川と合流し、3,500m下流で千歳川と合流する(図Ⅲ-1)。

千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図に記載された祝梅川小野遺跡は100m四方の規模であったが、平成18年に行われた範囲確認調査により下流側を含めた遺跡へと拡大した。梅川1遺跡は平成19年に行われた範囲確認調査により、千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図に記載された範囲が南方へ拡大した。

(2) 地名

遺跡名の「祝梅」はアイヌ語地名に当て字したもので、この地名は少なくとも19世紀後葉まで遡る。アイヌ語地名については幾つかの解説がある。長見義三は「sukup-pay:成長した-イラクサ、または別の語解の可能性あり」「ちとせ地名散歩」(長見1976)と解している。榎原正文は「sukup-hay-us-nay:成長する-イラクサ-群生する-川」「データベース・アイヌ語地名3」(榎原2002)と推定している。「梅川」のアイヌ語地名は存在しないが、長見義三によれば「sino-oman-sukupay:本当に-行く-シユクバイ」「ちとせ地名散歩」(長見1976)であり、祝梅川は源頭部が冷泉であることから「nam-sukupay:冷たい-シユクバイ」と解している。

(3) 地形

遺跡は石狩平野と勇払平野に挟まれた低平な美々台地の東北縁にあり、地質構造分類では石狩低地帯に属する。遺跡がある割れ沢は第四紀更新世末葉の支笏火砕流堆積物が浸食を受けて形成された地形であり、支笏火砕流堆積物の上には恵庭a降下軽石、樽前c降下軽石・岩片、樽前a降下軽石が降下堆積して現地地表を造る。

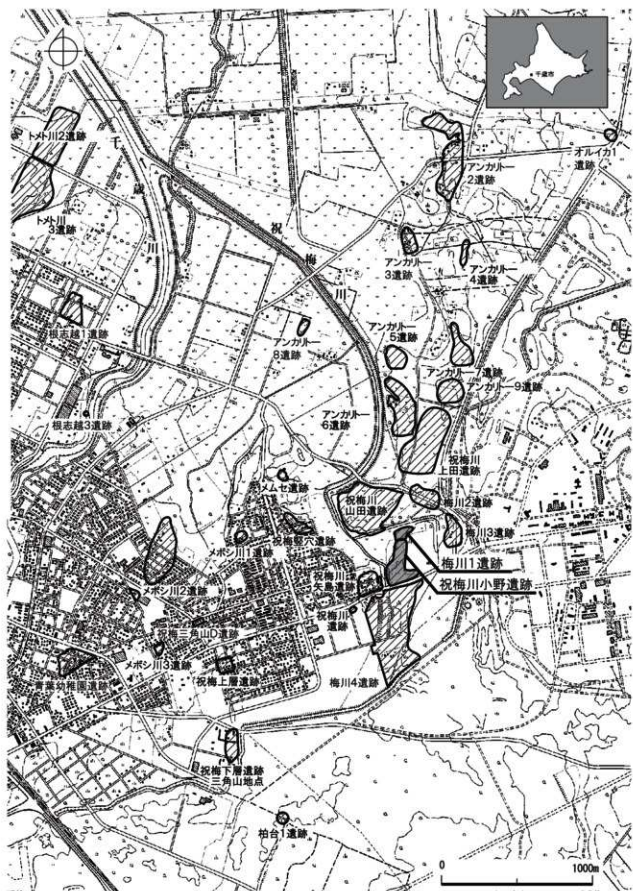
2 周辺の遺跡

祝梅川水系にある遺跡は左岸に4か所・右岸に10か所あり、梅川水系にある遺跡は左岸に2か所・右岸に2か所ある(図Ⅲ-1)。このうち、祝梅川遺跡・祝梅川矢島遺跡・祝梅壑穴遺跡・祝梅川山田遺跡・梅川3遺跡・梅川4遺跡について千歳市教育委員会が発掘調査・報告を行っている。平成18~20年度には北海道埋蔵文化財センターが梅川4遺跡・祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡の発掘調査・報告を行った。以下、今回の報告と関係する第Ⅱ黒色土の遺構について時代別に概要を記す。

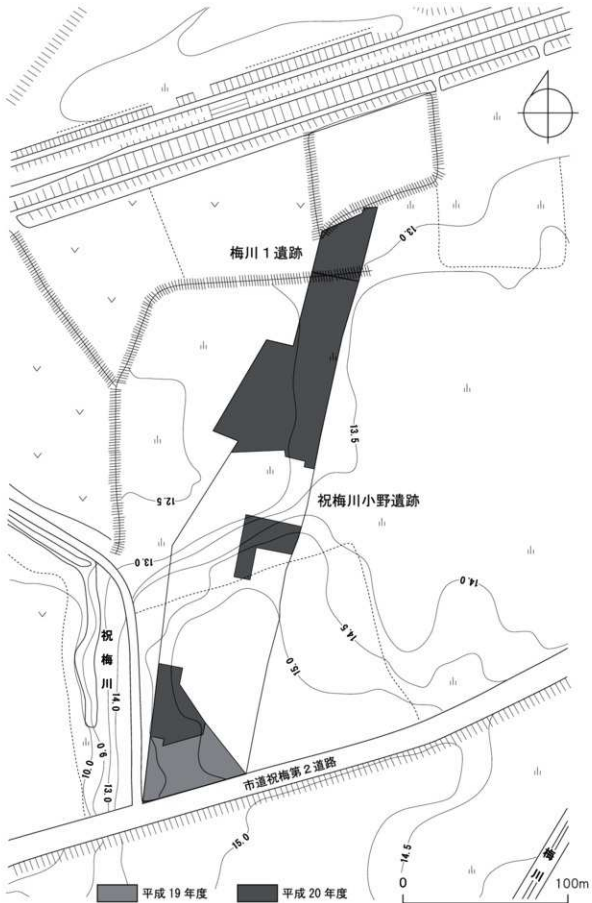
縄文・晩期・第Ⅰ黒色土層: 壑穴住居跡6軒・土坑519基(梅川3)、土坑19基・土器集中1か所(梅川4、千歳市教委、平成8~9年)、土坑40基(梅川4、千歳市教委、平成11・12年)、壑穴住居跡1軒・土坑155基(梅川4、北海道埋蔵文化財センター、平成18年)

縄文文化期: 壑穴住居跡4軒(祝梅壑穴)、壑穴住居跡2軒・土坑1基(梅川3)、遺跡1条(祝梅川上田)

アイヌ文化期: 墓3基(梅川3)、集石1か所(祝梅川)、建物跡1棟・集石1か所(梅川4、千歳市教委、平成8~9年)、建物跡4棟・墓1基・焼土209か所・遺跡3条(梅川4、千歳市教委、平成11・12年)、建物跡12棟・集石4か所(祝梅川上田)、建物跡2棟(梅川2)



図Ⅱ-1 遺跡の位置と周辺の遺跡



図Ⅲ-2 遺跡の位置と調査範囲

3 地層

確認した台地上の標準的な地層は表土層～恵庭 a 降下軽石層下位の鈍い橙色 (7.5YR 6/4) ローム層である (図 III-3)。報告対象とした地層は第 I 黒色土層 (Ⅲ層) である。土層は呼称を設けローマ数字で表記し、遺構内の人為堆積物はアラビア数字で表記した。

I 層 (表土層)：工業用地等造成に関わる客土・畑の耕作土

II 層 (樽前 a 降下軽石層)：元文 4 (1739) 年旧暦 7 月 14 日降下、軽石・火山灰が堆積。3～4 の降下単位が確認できる。上部は耕作によって削られる。略称 T a - a。

Ⅲ層 (腐植土層)：樽前 c 降下軽石・岩片を母材とする黒色シルト質。第 I 黒色土層 (略称 I B) に相当し、近世アイヌ文化期～縄文時代晩期後葉の遺構・遺物を包含する。低地部分では、Ⅲ層中に白頭山～苫小牧降下軽石層 (略称 B - T m、噴出年代 10 世紀) が疎らに分布する。

IV 層 (樽前 c 降下軽石層)：上位の樽前 c₁ 降下軽石層 (略称 T a - c₁)、下位の樽前 c₂ 降下岩片・岩滓層 (略称 T a - c₂) に細分される。T a - c₁ と T a - c₂ 間には厚さ数 cm の灰褐色砂質ローム層がある。縄文時代晩期後葉以降に降下。

V 層 (腐植土層)：恵庭 a 降下軽石層上部のローム層を母材とする黒色シルト質。第 II・Ⅲ黒色土層に相当 (略称 II B・Ⅲ B)、縄文時代晩期後葉～早期の遺構・遺物を包含する。

VI 層 (漸移層)：恵庭 a 降下軽石層上部の暗褐色ローム質土・樽前 d₁ d₂ 降下軽石・恵庭 a 降下軽石を母材とする。縄文時代早期～後期旧石器時代の遺構・遺物を包含する。

VII 層 (ローム質土層)：恵庭 a 降下軽石層上部の暗褐色ローム質土・樽前 d₁ d₂ 降下軽石・恵庭 a 降下軽石を母材とする。後期旧石器時代の遺構・遺物を包含する。

VIII 層 (恵庭 a 降下軽石層)：後期旧石器時代前半に降下。略称 E n - a。

低湿部は沢状地形の谷部分に当たるため水の営力によって、層厚が増すこと・還元土壌化すること・未分解の草本の有機物が混じるため土質が泥炭化することが生じる。II 層・V 層の層厚は著しく増幅する。IV 層は水位の上下による酸化還元が著しく、固結が起り、土色の赤褐色・灰青色が明瞭である。VI 層・VII 層は還元が著しく土色の灰青色が明瞭である。

Ⅲ層は、II 層直下の T a - a 降下軽石が混じる薄層を III-1 層 (近世アイヌ文化期の遺物が出土)、B - T m を挟み上部を III-2 層、下部を III-3 層、さらに下位の泥炭を III-4 層とした。泥炭には暗褐色砂質土の堆積が認められる部分があり、これを「Ⅲ黒砂層」または「Ⅲ B 層」と呼称した。

台地部で T a - c 層が T a - c₁ 層・灰褐色砂質ローム層・T a - c₂ 層が明瞭に三分される状況は、2006 年調査の祝梅川上田遺跡では目視されている。ただし、キウス 4 遺跡・ユカソシ C 15 遺跡の標高 6.5m 以下においては、流水の営力によって層厚が増幅するので、IV 層中の灰褐色砂質ローム層が泥炭質の黒色腐植土層として視認できる。

(鈴木)

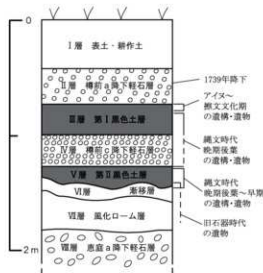


図 III-3 土層柱状模式図

IV 祝梅川小野遺跡

1 遺構

(1) 概要

祝梅川小野遺跡のⅢ層より検出した遺構は、住居跡(ⅢH)10軒、土坑(ⅢP)79基、小ピット(ⅢSP)77基、焼土(ⅢF)10か所、灰集中(ⅢA)4か所、骨片集中(ⅢB)1か所、集石(ⅢS)4か所、道跡(ⅢR)1条である。これらは、①調査範囲南西側の祝梅川へ降りる西向きの緩斜面上、②調査範囲中央の祝梅川へ降りる北向きの急斜面の肩部、③調査範囲北東側の祝梅川から東へ内湾する入江を望む氾濫原に立地する。今回は①および②で検出された遺構(住居跡10軒、土坑77基、小ピット54基、焼土2か所、灰集中2か所、集石4か所、道跡1条)について報告する。③の低湿地の遺構は、保存処理・整理作業を継続中の木製品・鉄製品などと関連するものが多いため、次年度以降に報告する。

住居跡の時期は、縄文時代晩期後葉2軒、擦文文化期5軒、アイヌ文化期3軒である。縄文時代晩期後葉の住居跡(ⅢH-6・7)は、不整形で掘り込みが浅く、内部に複数の土坑が付属するという特徴がある。周辺で検出された同時期の墓と考えられる土坑群とは重複しており、住居跡のほうが古い。類似の遺構は近隣の梅川3遺跡(千歳市教委1986)や梅川4遺跡A地区(北埋調報未報告)でも検出されている。擦文文化期の住居跡は、方形のもの(ⅢH-3・8・10)と隅丸長方形のもの(ⅢH-4・9)がある。ⅢH-3・8は南側に竈をもち、竈穴内に支柱穴がある。ⅢH-10は大部分が調査範囲外で、付属施設などは不明であるが、形状や検出状況からⅢH-3・8とはほぼ同じ構造と推測される。ⅢH-4は掘り込みが浅く、竈は確認されなかった。ⅢH-9は時期を特定できる遺物を伴っていないが、形状や覆土などはⅢH-4と類似する。放射性炭素年代測定の結果から、ⅢH-8・10→ⅢH-3→ⅢH-9→ⅢH-4という構築順が推測されている(Ⅵ章第1節参照)。近世アイヌ文化期の住居跡(ⅢH-1・2・5)は、いずれも方形あるいは長方形に配列する柱穴から成る平地式住居で、中央に灰層をとまなぐ地床炉がある。ⅢH-1・2は長軸(南北方向)の北側に前小屋が付属する。

土坑は大部分が縄文時代晩期後葉のものである。これらは密集して複数の土坑群を成している。いずれも覆土は埋め戻しで、墓である可能性が高いが、骨あるいは遺体の痕跡が残存するもの、ベンガラが散布されたものは見られない。また、坑底面より杭穴や棚溝などの付属施設の痕跡は検出されなかった。遺物を伴うものも非常に少ない。ⅢP-24は、深鉢の口縁部を板状に分割して重ねた個体の上に、大型破片の別個体が被さるように倒立していた。ⅢP-56は、大型の壺形土器が倒立して出土し、内部には黒曜石製のUフレイク6点が納められていた。馬追丘陵の縁辺部に位置する長沼町・由仁町でも、これに類似した壺形土器の出土例があり、乳幼児を埋葬した「土器棺墓」の可能性が指摘されている(野村1985)。近隣の梅川3遺跡でも土坑内より倒立した壺形土器の出土例がある(千歳市教委1986)。また、余市町栄町5遺跡では土坑内で横倒しになった壺形土器の内部より黒曜石製割片5点が出土した類似例がある(北埋調報66)。同時期の土坑は隣接する梅川4遺跡のA地区(次年度以降報告予定)や平成18年度調査範囲(北埋調報253)、祝梅排水路部分(千歳市教委2002)、市道東大通部分(千歳市教委2003)でも多数検出されており、これらは同一の遺跡面を形成すると考えられる。

住居跡や土坑の覆土中より、縄文時代前～後期の遺物が出土する例が多く見られる。これらは本来下位のV層(第Ⅱ黒色土層)に含まれるもので、各時期の遺構・遺物については昨年度に報告済である

(北埋調報285)。晩期の土坑や縄文文化期の住居跡は坑底面・床面がⅣ層(T a - c)以下のⅤ層中まで掘り込まれているものがある。このため、掘り上げ土に混入したⅤ層中の遺物が、埋め戻しあるいは自然堆積により遺構内部に流れ込んだものと推測される。調査範囲南西側ではⅤ群c類土器はⅤ層よりほとんど出土していないことから、晩期後葉の遺物についてはすべてⅢ層に由来するものと見なした。

小ピットの多くは断面が柱穴状であるが、周辺のⅢ層で検出された各時期の住居跡からは離れており、これらに付属する可能性は低い。また、複数基が弧状や直線状に並ぶ例も見られるが、円形や方形の配列を成して住居の外形が想定できるものはない。時期は、Ⅲ層の遺構・遺物から、縄文時代晩期後葉、縄文文化期、近世アイヌ文化期のいずれかの時期と考えられる。

焼土は周辺に掘り込みや柱穴列などを伴わないことから、屋外炉と考えられる。灰集中は下部に被熱層を伴わず、廃棄されたものである。集石は主に自然礫がやや疎らにまとまったもので、下部に土坑などは検出されなかった。礫の大きさや形状については似通った傾向を示し、石材では凝灰岩と泥岩が多い。梅川4遺跡の東大通路改修事業調査範囲でも同様の集石が検出されている(千歳市教委2003)。これら集石の礫は、周囲の河川から大きさを揃えたものを運んできたと考えられる。焼土・灰集中・集石は、検出層位から大半が近世アイヌ文化期に形成されたと推測される。ⅢS-4のみⅣ層上面で検出されており、縄文時代晩期後葉の可能性がある。

道跡は、Ⅲ層上面で帯状の硬化面として確認したもので、踏み分けにより形成されたと考えられる。近世アイヌ文化期の平地式住居(ⅢH-1・2・5)の間をほぼ南北方向に伸びており、南側は調査範囲外へと続く。また、北側では縄文文化期の竪穴住居跡(ⅢH-8・9)を迂回して、東側の祝梅川の方角へ降りている。検出層位と周辺の住居跡との位置関係などから1739年のT a - a 降下以前の近世アイヌ文化期に形成されたと推測される。(芝田)

(2) 住居跡

ⅢH-1 (図Ⅳ-1-4/表1~4/図版2)

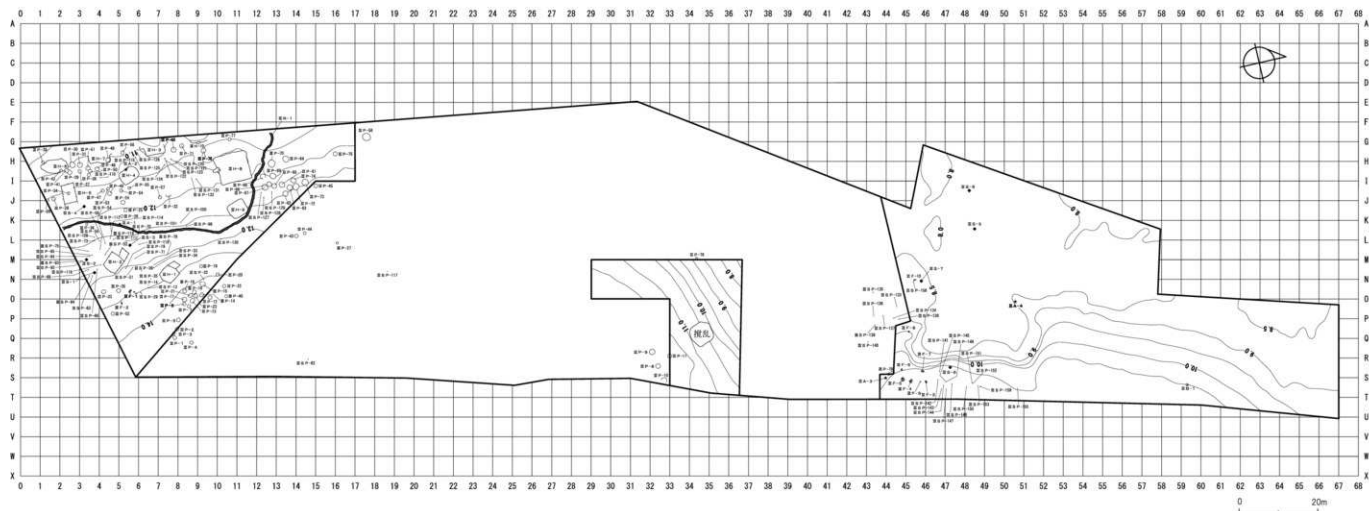
確認・調査 調査範囲南側の緩斜面上、M7調査区周辺Ⅲ層を調査中に、明褐色の灰集中とにぶい赤褐色の焼土の不整形な範囲を確認した。南東側を半載し断面を観察して焼土と判断した(HF-1)。周囲のM・N7・8調査区を精査していったところ、Ⅲ層下位~Ⅳ層上面において直径10cmほどの円形で黒色土の範囲を多数確認した。半載および断面観察を行った。このうち10基を住居に伴う柱穴と判断した(HP-1~10)。このことから、焼土と柱穴から構成される平地住居跡と判断した。**形態** 柱穴と判断した小ピットを繋げると南西側にやや張り出した正方形の主体部(母屋)と北東側に別棟の施設(前小屋)が付属する形態と推定される。

付属遺構 HF-1 : 地床炉と考えられる。主体部のほぼ中央に位置している。層界は非常に明瞭で、上面には炭化材や灰の混じる層があり、焼土の北東側上面には微細骨片を含む明褐色の灰層が6cmほどの厚さで堆積する。その下部には明赤褐色の焼土がレンズ状に観察できる。周囲に炉を囲う施設などは確認できなかった。灰層をフローテーション処理したところ、サケ科歯・椎骨、コイ科椎骨、マイマイ殻、種子(シソ科・ヒエ属・堅果など)が得られた(表9)。

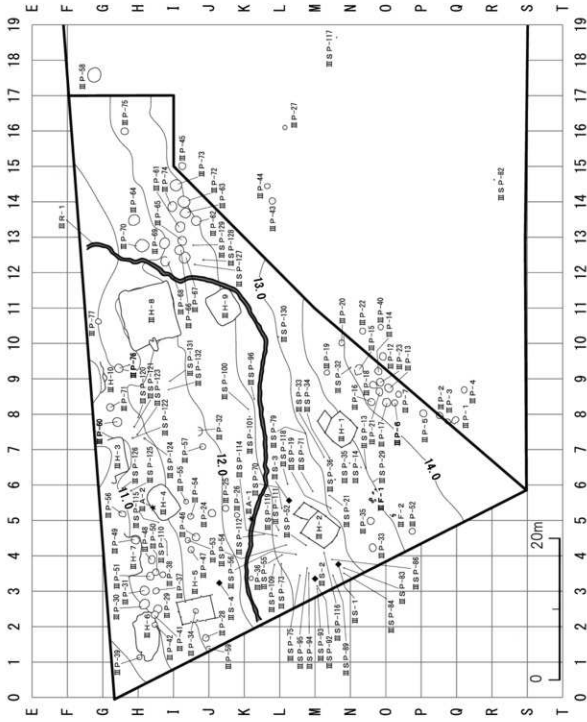
HP-1~10 : 柱穴はⅣ層上面で検出した。直径は8~12cm、確認面からの深さは8~35cmである。炉跡を床面と考えると実際の深さはさらに10cmほど深くなると推定される。先端が尖っている柱穴が多く、ほぼ垂直になっている。

遺物出土状況 たたき石1点、礫3点が出土している。

時期 検出層位および遺構の構成から1739年以前の近世アイヌ文化期とみられる。(酒井)



图IV-1-1 遺構位置图(全体)



図IV-1-2 遺構位置図(新編)

ⅢH-2 (図Ⅳ-1-5/表1~4/図版3)

確認・調査 調査範囲南側の緩斜面上、M4調査区周辺のⅢ層を調査中に、微細骨片を含む黒・灰褐・褐色が斑になる不整形の範囲を確認した。南東側を半載し断面を観察したところ、薄い灰層が上面にある焼土と判断した(HF-1)。周囲のL・M4・5調査区を精査したところ、Ⅲ層下位~Ⅳ層上面において直径10cmほどの円形で黒色土の範囲を多数確認した。半載および断面観察を行い、このうち20基を柱穴と判断した(HP-1~20)。このことから、焼土と柱穴から構成される平地住居跡と判断した。

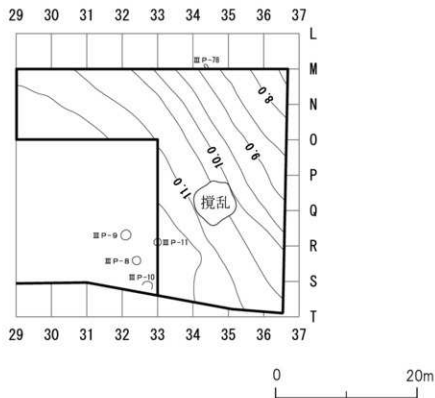
形態 柱穴と判断した小ピットを繋げると、南西側にやや張り出した正方形の主体部(母屋)と北東側に別棟の施設(前小屋)が付属する形態と推定される。

付属遺構 HF-1 : 主体部のほぼ中央に位置する地床炉。層界は非常に明瞭で、上面には炭化材や微細骨片の混じる層があり、その下には橙色の焼土がレンズ状に観察できる。上面の土壌をフローテーション処理したところ、サケ科歯・椎骨、種子(コナラ亜属子葉・堅果・マメ科・ウルシ属・シソ科など)が得られた(表9)。周囲に炉を囲う施設などは確認できなかった。

HP-1~20 : 直径は10~16cm、確認面からの深さは10~42cmである。炉跡の検出面を床と考えると、実際の深さはさらに10cmほど深くなると推定される。先端が尖っている柱穴が多い。主体部を構成する柱穴(HP-1~9)のうち、HP-1・5・6・7・8は柱穴の角度が主体部の中央へ向かってやや傾斜(およそ15°)している。外踏ん張りによって上屋構造を支えていたと考えられる。

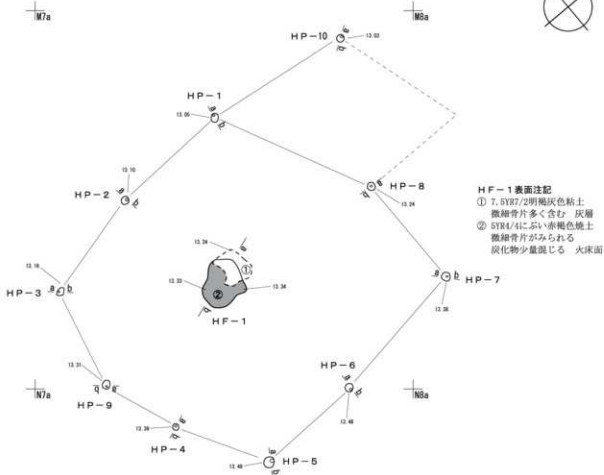
遺物出土状況 Ⅶ群土器3点、礫1点が出土している。

時期 検出層位および遺構の構成から1739年以前の近世アイヌ文化期とみられる。(酒井)

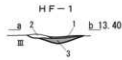


図Ⅳ-1-3 遺構位置図(中央)

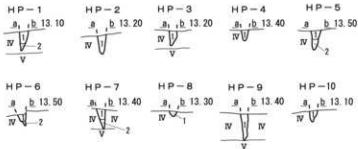
III H-1



HF-1 表面注記
 ① 7.5YR7/2明褐色粘土
 微細骨片多く含む 灰層
 ② 5YR4/4にぶい赤褐色粘土
 微細骨片がみられる
 炭化物少量混じる 火床面



HF-1
 1 5YR4/4にぶい赤褐色粘土 しまり中 粘性中
 微細骨片・炭化物を含む 火床面直上
 2 7.5YR7/2明褐色粘土 しまり中 粘性中
 微細骨片・炭化物を微量含む 灰層
 3 5YR5/8明赤褐色粘土 しまり中 粘性中
 非常によく焼けている
 ※層H-1の地床がと考えられる

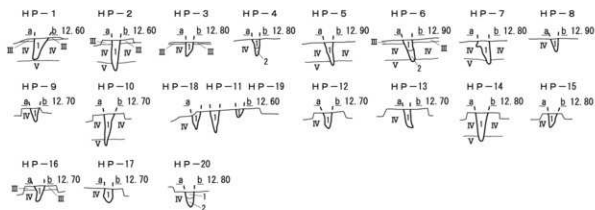
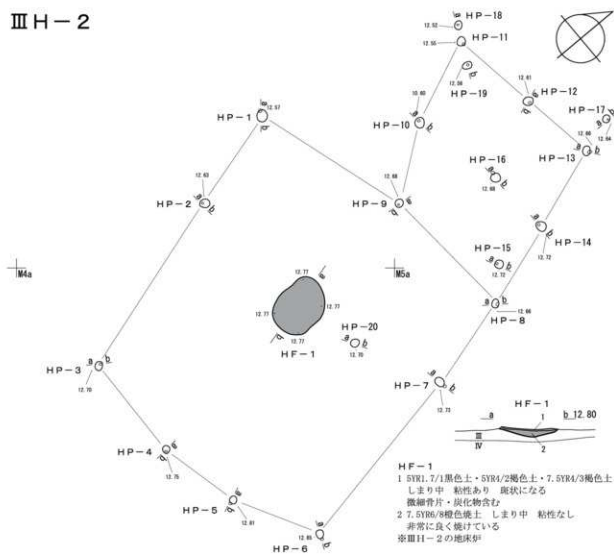


HP-1・5~7
 1 10YR2/1黒色土 しまりなし 粘性弱 Ta-cを非常に多く含む
 2 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性弱 Ta-cを含む
 HP-2・3・9・10
 1 10YR2/1黒色土 しまりなし 粘性弱 Ta-cを非常に多く含む
 HP-4・8
 1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性弱 Ta-cを含む

0 1m

図IV-1-4 III H-1

Ⅲ H-2



HP-1・2・5・7・8・10・14・17
1 10YR1.7/1黒色土 しまりなし 粘性中 Ta-cを多く含む
HP-3・11・18
1 10YR1.7/1黒色土 しまり弱 粘性中 Ta-cを多く含む
HP-4
1 10YR1.7/1黒色土 しまりなし 粘性中 Ta-cを多く含む
2 10YR1.7/1黒色土 しまり弱 粘性中 Ta-cを多く含む

HP-6
1 10YR1.7/1黒色土 しまりなし 粘性中 Ta-cを多く含む
2 10YR1.7/1黒色土 しまりなし 粘性中 Ta-cを少量含む
HP-9・12・13・15・16・19
1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多く含む
HP-20
1 10YR1.7/1黒色土 しまり弱 粘性中 Ta-cを多く含む
2 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多く含む

図Ⅳ-1-5 Ⅲ H-2

ⅢH-3 (図Ⅳ-1-6~9/表1-4/図版4・5)

確認・調査 調査範囲南西側の緩斜面に位置し、約1/2は調査範囲外に続く。T a-a降下軽石除去後にⅢ層上面で深さ70cm程の方形の窪みを検出した。調査区の境界を土層観察用の南北ベルトとし、それに直交する東西ベルトを設定しトレンチ調査を行った。その結果、明瞭な床面と急角度に立ち上がる壁が確認された。南北ベルト南端において竈を確認し、多数の炭化材が出土したことから、擦文文化期の焼土竈穴住居跡であると判断した。覆土を掘り下げたところ壁際に焼土と住居の構築材とみられる炭化材の広がりを検出した。このうち7か所から炭化材を採取して樹種同定を行ったところ、すべてコナラ属コナラ亜属コナラ節であった(Ⅵ章第3節参照)。床面の調査では、主柱穴・壁際の小柱穴、東壁際には竈の構築材と推定される厚さ5cmほどの被熱した白色粘土の集積が検出された。竈穴周辺では黒色土とT a-c降下軽石が混じった掘り上げ土を検出した。住居の構築材とみられる炭化材3点と竈出土の炭化物1点について放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、暦年較正年代で $1,156 \pm 32$ yr B P (IAAA-72165)、 $1,119 \pm 29$ yr B P (IAAA-72166)、 $1,069 \pm 30$ yr B P (IAAA-72167)、 $1,104 \pm 30$ yr B P (IAAA-72168)という結果が出ている(Ⅵ章第1節参照)。

覆土 中央部に薄く堆積する最下層の褐色土は貼り床とみられる。その上に全面的に堆積している黒褐色土は屋根土の崩落と考えられる。最上層の黒色土はⅢ層の流れ込みである。土層C-Dの北側に堆積する4~10層は、壁面の崩落の際に堆積したものと考えられる。

形態 住居南東隅から竈の中心までが約2.5m、南北辺が約5mであることから、一辺が約5mの隅丸方形と推定される。掘り方の深さは約70cmで、Ⅳ層を10cmほど掘り込み、平坦にして床面としている。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構 HP-1・2:主柱穴で平面が方形の掘り方をもつ。また壁の立ち上がり際に土留めのための小柱穴が廻っている。

竈:南壁中央に白色粘土で構築されている。煙道は壁から約1m水平に、住居床面より約10cm深く掘り込まれている。煙道の底面と袖部にかけて黒褐色土(土層e-fの19層)を充填している。また天井部は土器片と炭化材が混入した白色粘土で構築されている。煙道の閉塞の際に、まず褐色土(土層e-fの11層)を充填した後、左袖部を破壊し煙出し口より充填(土層e-fの3・6・7層)したと考えられる。天井部の崩落が土層e-fの4・5・8~10層とみられる。燃焼部は厚さ10cm程で、多量の炭化物と微細な焼骨片が含まれている。この土壌をフローテーション処理したところ、種子(サルナシ)が得られた。

遺物出土状況 竈・床面よりⅣ群土器(図Ⅳ-2-7-15・16、14-80・81)が出土した。80は隣接するⅢH-4覆土出土のものと同構造同接合する。また、縄文時代の包含層、遺構(VP-41)を壊して掘り込まれているため、覆土と掘り上げ土より多量の縄文時代前~晩期の遺物が出土している。

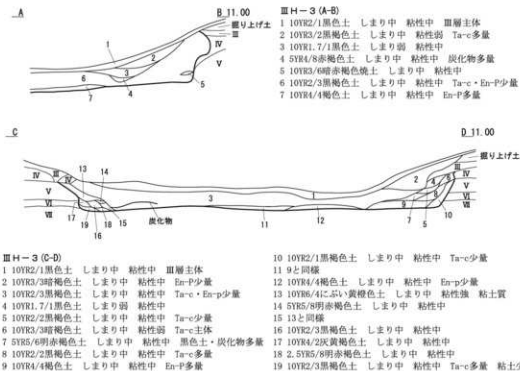
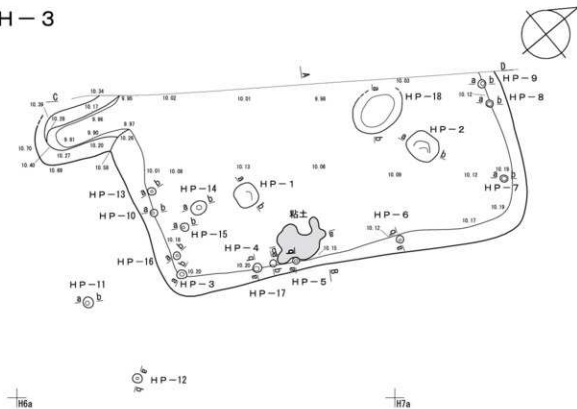
時期 竈・床面出土の遺物、放射性炭素年代測定の結果から擦文文化期と考えられる。(菊池)

ⅢH-4 (図Ⅳ-1-10~12/表1-4/図版6)

確認・調査 祝梅川旧河道へ降りる西向きの緩斜面に立地する。Ⅲ層上面で深さ約20cmの浅い窪みと馬蹄形に廻る盛り上がりを確認した。土層観察用の土手を十字に設定し、トレンチ調査を行ったところ、わずかにⅣ層が掘込まれていることを確認し、Ⅳ層を床面とした浅い竈穴住居跡と判断した。

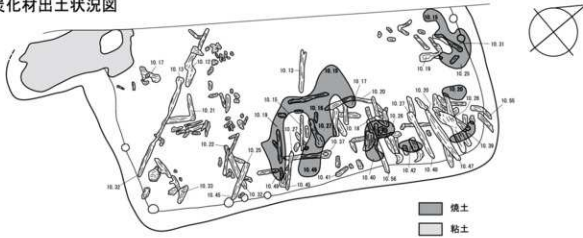
覆土 堆積は薄く、竈穴中央で約5cm、壁面で約15cmの厚さである。1・2層は竈穴内に堆積した覆土。1層はⅢ層主体の黒色土、2層はⅢ・Ⅳ層の混成土で、いずれも自然堆積である。2層は東側壁面(斜面側)にのみ分布し、三角堆積を示す。3・4層は竈穴外に堆積した掘り上げ土で、最大層

ⅢH-3

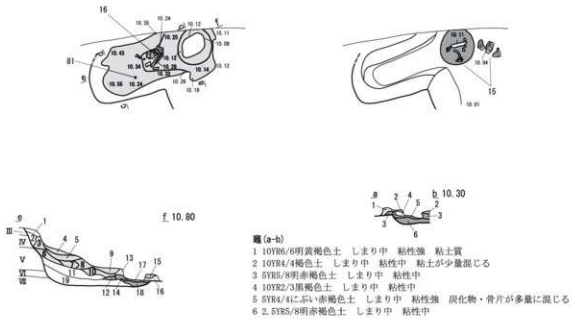


図Ⅳ-1-6 ⅢH-3(1)

炭化材出土状況図



竈



竈(e-f)

- 1 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c・粘土が多量に混じる
- 4 c-dの1
- 5 c-dの2
- 6 c-dの5
- 7 10YR6/6にぶい黄褐色土 しまり中 粘性強 粘土質
- 8 10YR5/3にぶい黄褐色土 しまり弱 粘性強 粘土質
- 9 と同様
- 10 7.5YR4/2灰褐色土 しまり中 粘性中 粘土が少量混じる
- 11 c-dの6
- 12 5YR3/2暗赤褐色土 しまり中 粘性中 炭化物が少量混じる
- 13 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 14 5YR2/4暗赤褐色土 しまり中 粘性中 炭化物が少量混じる
- 15 a-bの2
- 16 a-bの4
- 17 a-bの5
- 18 a-bの6
- 19 c-dの7

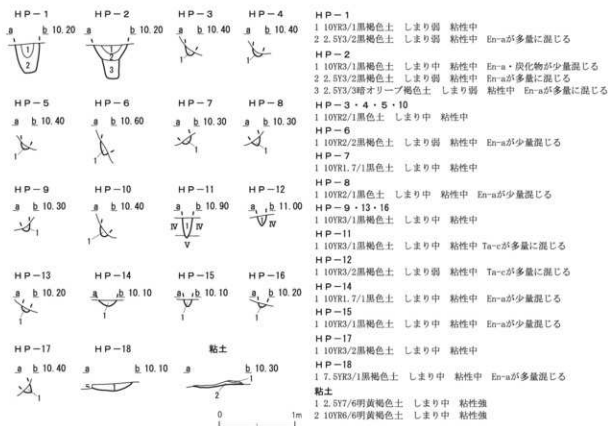
竈(a-b)

- 1 10YR6/6明黄褐色土 しまり中 粘性強 粘土質
- 2 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性中 粘土が少量混じる
- 3 5YR5/6明赤褐色土 しまり中 粘性中
- 4 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中
- 5 5YR4/4にぶい赤褐色土 しまり中 粘性強 炭化物・骨片が多量に混じる
- 6 2.5YR5/8明赤褐色土 しまり中 粘性中

竈(c-d)

- 1 10YR4/2灰黄褐色土 しまり中 粘性強 粘土質
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色土 しまり中 粘性強 粘土質
- 3 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 4 10YR5/6黄褐色土 しまり中 粘性中 粘土質
- 5 10YR3/4にぶい黄褐色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混じる 粘土質
- 6 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 7 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる

図IV-1-7 IIIH-3(2)

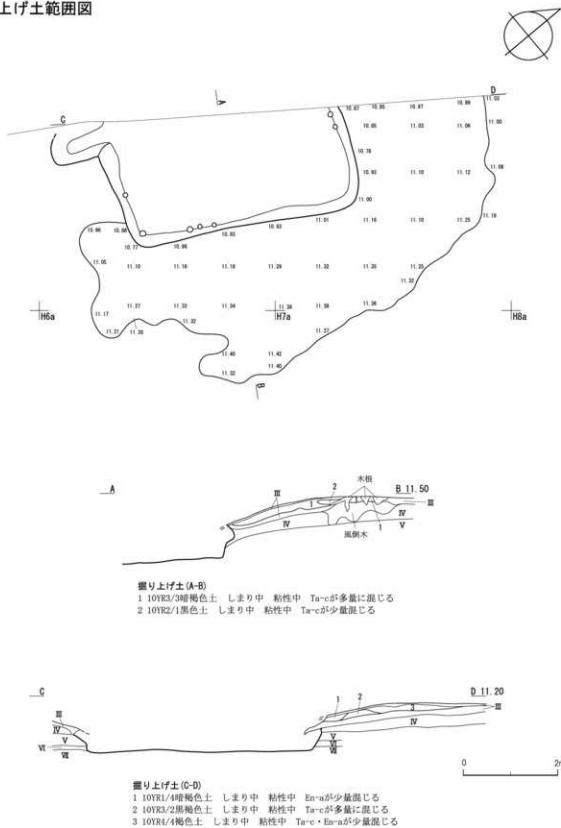


遺物出土位置図



図IV-1-8 IIIH-3(3)

掘り上げ土範囲図



図IV-1-9 IIIH-3(4)

厚は約10cm。

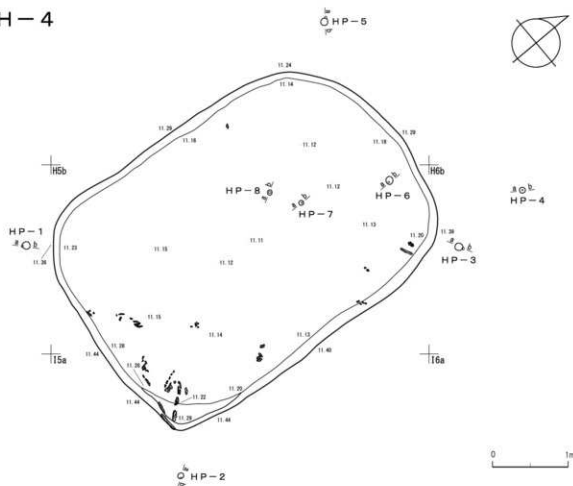
形態 平面形は隅丸長方形。床面は平坦で、IV層中に構築されている。壁面は緩やかに立ち上がる。緩斜面を片切りして構築されており、南東側壁面が深く、北西側が浅い。掘り上げ土は西側(斜面下側)に厚く堆積し、馬蹄形に廻る。北側に掘り上げ土の堆積が途切れる部分があり、住居の出入口と考えられる。また、南東側の掘り上げ土より下位で、縄文時代晩期後葉の土坑(ⅢP-55)を検出した。南東側床面の壁際で炭化材が出土した。これらの炭化材の樹種は、ハンノキ属、コナラ属、トネリコ属、ハリギリなどと同定された(Ⅵ章第3節参照)。また、炭化材4点を試料として放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、暦年較正年代で 820 ± 29 yr B P (IAAA-72169)、 759 ± 29 yr B P (IAAA-72170)、 721 ± 27 yr B P (IAAA-72171)、 835 ± 29 yr B P (IAAA-72172)という数値が得られた(Ⅵ章第1節参照)。

付属遺構 HP-1~8: 竪穴内より3基(HP-6~8)、竪穴外より5基(HP-1~5)の柱穴を検出した。すべて「打ち込み」で、先端が尖る。このうち竪穴外の四隅に位置するHP-1・2・3・5の4基は、住居の中心部へ向かって内傾する。

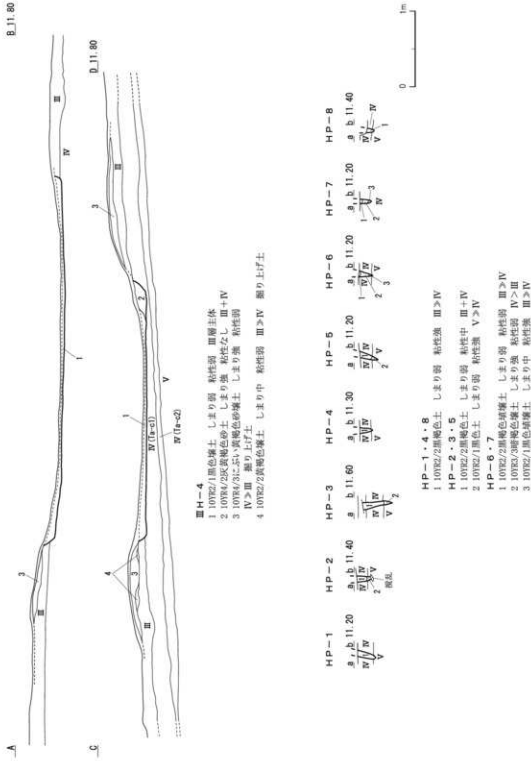
遺物出土状況 床面および床面直上から、V群c類・Ⅶ群土器(図Ⅳ-2-14-82・83)、スクレイパー、原石(チャート)、剥片、礫が出土した。

時期 床面出土の遺物、周辺の遺構との新旧関係、放射性炭素年代測定の結果から、縄文文化期末葉と考えられる。(芝田)

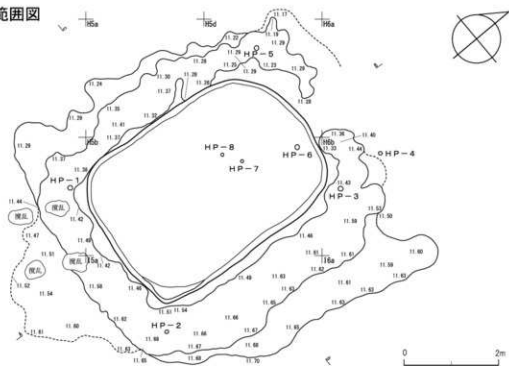
ⅢH-4



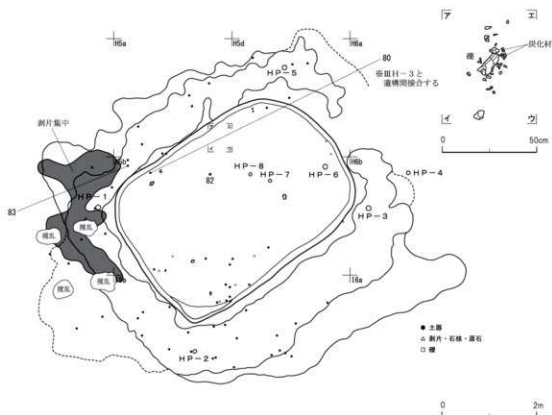
図Ⅳ-1-10 ⅢH-4(1)



掘り上げ土範囲図



遺物出土位置図



図Ⅳ-1-12 ⅢH-4(3)

ⅢH-5 (図IV-1-13/表1-4/図版7)

確認・調査 祝梅川旧河道へ降りる西向きの緩斜面上に立地する。Ⅲ層上位で近接する焼土(HF-1)と集石(HS-1)を検出した。これらは、ほぼ同一面で形成されていることから、アイヌ文化期の平地式住居跡の可能性を想定した。周辺を精査したところ、HF-1を取り囲む13基の小ピット(HP-1~13)の配列を確認し、平地式住居跡と認定した。

形態 屋内炉と考えられるHF-1の周囲を、柱穴13基が40~60cmの間隔でほぼ長方形に並ぶ。HF-1は柱穴列の中心より、やや南東側へ離れた位置にある。住居跡の長軸は北西-南東方向である。南東側壁および前小屋部分に相当する柱穴は検出されなかった。

付属遺構 HF-1：平面形は不整形。形成面はⅢ層上位で、Ⅳ層上面まで被熱されている。強く焼けており、Ⅲ層との層界も明瞭である。灰層は残存していなかった。

HS-1：北東側の壁際で検出された。1.2m×0.5mほどの範囲に、楕円礫など63点が密集する。

HP-1~13：いずれも平面形は円形。断面は垂直、またはわずかに傾斜する。先端が尖ることから、打ち込みによるものと考えられる。それぞれの壁面に相当する柱列(HP-1~5、5~9、9~13)は直線ではなく、若干蛇行している。

遺物出土状況 HS-1より、石斧、たたき石(図IV-2-15-1~6)、砥石(7)、棒状礫が出土した。

時期 炉跡、集石の検出層位から、近世アイヌ文化期と考えられる。

(芝田)

ⅢH-6 (図IV-1-14~16/表1-4/図版8)

確認・調査 祝梅川旧河道へ降りる西向きの緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で、広範囲にわたる黒色土の不整な落ち込みを検出した。黒色土上面では縄文時代晩期後葉の土器(V群C類)が多く出土しており、土器集中2~6が検出された。下部に遺構が存在する可能性を考え、トレンチ調査を行ったところ、Ⅳ~Ⅴ層を浅く掘り込んだ床面と壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と認定した。

覆土 1層はⅢ層を起源とする黒色土で、自然堆積。2・5層はⅤ層、3・4層はⅣ層を主体とし、いずれもしまりは堅い。床面から覆土中、覆土上面にかけて連続して遺物が出土することから、2~5層は埋め戻しの可能性がある。

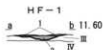
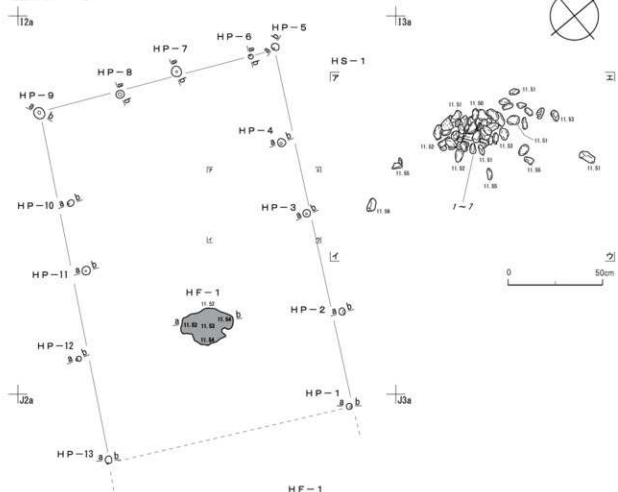
形態 平面形は不整形楕円形。床面は南西側へ傾斜している。壁の立ち上がりは概ね緩やかだが、一部で段が見られる。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。竪穴内外から土坑9基(HP-4~9・11~13)、小土坑8基(HP-1~3・10・14~17)を検出した。北東側の床-壁面をⅢP-42に壊されている。

付属遺構 HP-4~9・11~13：HP-4~6・9・12・13は径1m以下の小規模な円形のもの、HP-7・8・11は不整な長楕円形のものである。覆土は住居跡と同一で、Ⅳ・Ⅴ層土を主体としており、しまりが強い。これらの土坑は重複せず、配列に規則性は認められない。

HP-1~3・10・14~17：竪穴内でHP-1~3・10・16・17、竪穴外でHP-14・15の計8基を検出した。これらは径20cm以下、深さは40cm以下で、柱穴としての用途が想定される。先端形状は丸もしくは角状が多く、尖るものは少ない。HP-3・10が竪穴の長軸上に位置する。

土器集中2~6：これらはⅢH-6が埋没する過程で廃棄されたもので、この住居に直接伴わないと推測される。しかし、住居の覆土が埋め戻された可能性もあることから、住居の廃絶とそれほど時間差がないと考え、付属遺構に準じた。土器集中5はⅢP-39の上部にあり、同時期の遺構であるⅢP-42とⅢH-6の新旧関係から、やや新しいと考えられる。土器集中5周辺のⅢ層中より採取した炭

III H-5



- HF-1**
- 1 7.5YR3/2黒褐色壤土 しまり弱 粘性弱
φ1~3mmの焼土粒多く含む
 - 2 7.5YR5/8明褐色砂壤土 しまり中 粘性なし
φ1~5mmの焼土粒主体 層界明確

HP-1	HP-2	HP-3	HP-4	HP-5	HP-6	HP-7	HP-8	HP-9
$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.60$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.50$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.40$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.40$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.30$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.30$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.30$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.30$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.30$
$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.40$	$\frac{a}{2} \frac{b}{IV} 11.40$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.50$	$\frac{a}{1} \frac{b}{IV} 11.50$					

- HP-1・3・9**
1 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性中~強 Ⅲ>Ⅳ
- HP-2・6・11**
1 10YR2/2黒褐色砂壤土 しまり弱~中 粘性弱~中 Ⅳ>Ⅲ
2 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性中~強 Ⅲ>Ⅳ
- HP-4・5・7・8・10・12・13**
1 10YR2/2黒褐色砂壤土 しまり弱~中 粘性弱~中 Ⅳ>Ⅲ



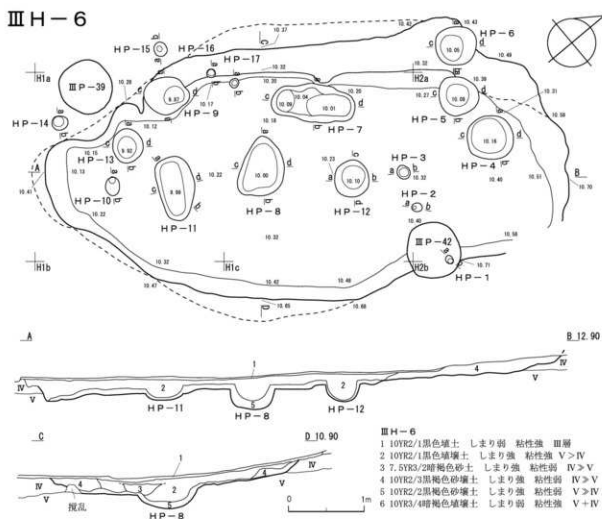
図IV-1-13 III H-5

化物を試料として、年代測定・樹種同定を行った。放射性炭素年代測定（AMS法）では、暦年較正年代で $1,084 \pm 29 \text{yr B P}$ (IAAA-72183) という数値が得られた。この年代値は縄文文化期の住居跡であるⅢH-3 (IAAA-72165~72168) に近接しており、V群c類からなる土器集中5の時期（縄文時代晩期後葉）よりも新しいことから、後世の炭化物が混入した可能性が高い。樹種はハンノキ属と同定された（Ⅵ章第1・3節参照）。

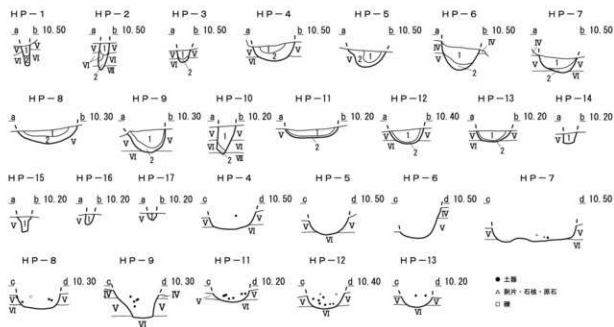
遺物出土状況 床面～覆土より、V群c類土器(図IV-2-1~3・8・9)、石鏝(図IV-2-15-8~16)、つまみ付きナイフ、スクレイパー(15-17~23、16-24~34)、石斧(35)、たたき石(36)、剥片、礫などが出土した。

時期 検出層位、出土土器から、縄文時代晩期後葉の可能性がある。

(芝田)

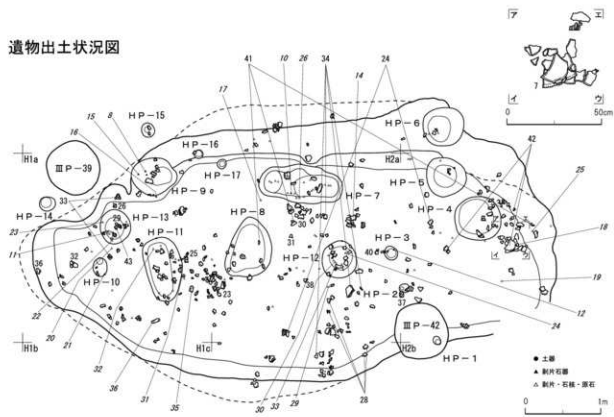


図IV-1-14 ⅢH-6(1)



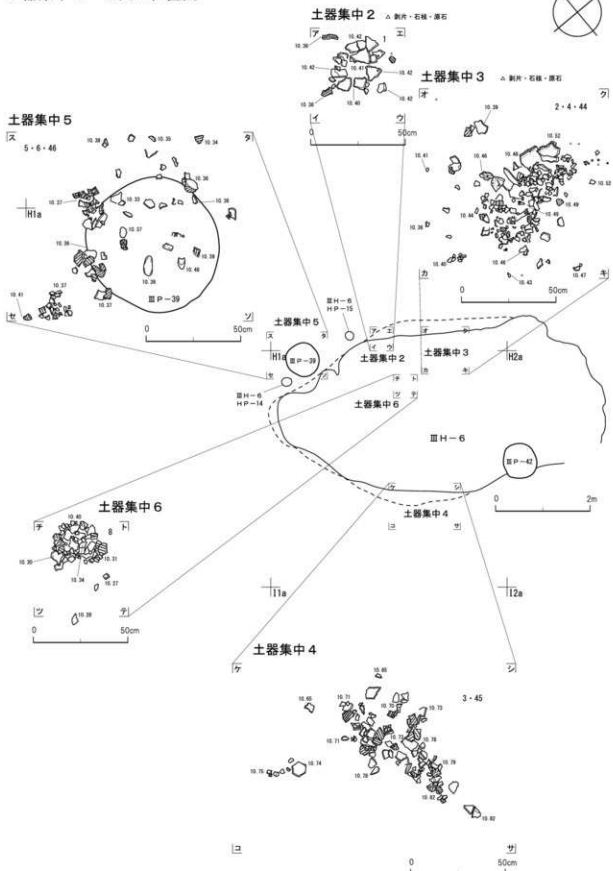
- | | | | | | |
|---|---|---|---|--|--|
| <p>HP-1</p> <p>1 10VR2/3黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>V</p> <p>2 10VR3/4暗褐色壤土 しまり弱 粘性強 V+IV</p> | <p>HP-2</p> <p>1 10VR2/2黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 V>IV</p> <p>2 10VR3/4暗褐色壤土 しまり弱 粘性強 V+IV</p> | <p>HP-3</p> <p>1 10VR2/3黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>V</p> <p>2 10VR2/2黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 V>IV</p> | <p>HP-4・5・6・7・8・9・10・11・12・13</p> <p>1 10VR2/1黒色壤土 しまり強 粘性強 V>IV</p> <p>2 10VR2/2黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 V>IV</p> | <p>HP-14・15・17</p> <p>1 10VR2/3黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>V</p> | <p>HP-16</p> <p>1 10VR2/1黒色壤土 しまり強 粘性強 V>IV</p> |
|---|---|---|---|--|--|

遺物出土状況図



図Ⅳ-1-15 III H-6 (2)

土器集中 2～6 出土位置図



図IV-1-16 III H-6(3)

ⅢH-7 (図Ⅳ-1-17・18/表1~4/図版9)

確認・調査 祝梅川旧河道へ降りる西向きの緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で、広範囲にわたる黒色土の不整な落ち込みを検出した。ⅢH-6と同様に黒色土上面で縄文時代晩期後葉の土器(V群c類)が多く出土していた。下部に遺構が存在する可能性を考え、トレンチ調査を行ったところ、Ⅳ層を浅く掘り込んだ床面と壁の立ち上がりを確認し、堅穴住居跡と認定した。北西側の約1/2~2/3は調査範囲外である。

覆土 Ⅲ・Ⅴ層を起源とする黒色土に多量のⅣ層(Ta-c降下軽石)が混入する覆土を主体とする。全体的にしまりが堅い。1層はⅢ層を起源とする黒色土で、自然堆積。床面から覆土中、覆土上面にかけて連続して遺物が出土することから、2~9層は埋め戻しの可能性がある。

形態 平面形は不整な隅丸方形と推測される。床面はⅣ層中に構築されており、やや凹凸がある。床面中央付近は壁際よりも1段低くⅤ層上位まで達する掘り込みがみられ、ベンチ状構造となっている。壁の立ち上がりは緩やかである。調査区西壁の土層断面ではⅣ層上面からの掘り込みが確認されるが、覆土にⅢ層土が混入していることから、掘り込み面はⅢ層下位からⅣ層上面までと考えられる。床面で土坑4基を検出した。北東側の床~壁面をⅢP-49に壊されている。

付属遺構 HP-1~4:平面形は、HP-1・2が円形、HP-3・4が楕円形。HP-3は坑底面に段が見られる。覆土は住居のものとは同一で、Ⅲ~Ⅴ層を主体とするしまりが堅いものである。配列に規則性は認められない。用途は不明である。

遺物出土状況 床面~覆土より、V群c類土器(図Ⅳ-2-4・10・11)、石鏃(図Ⅳ-2-17-37~43)、石錐(44)、つまみ付きナイフ、スクレイパー(45~47)、たつき石(48)、棒状原石、Rフレイク、剥片、礫などが出土した。HP-1~4の覆土中からも遺物が出土しており、HP-3からはV群c類土器の深鉢1個体が出土した(図Ⅳ-2-4-9)。

時期 掘り込み面、出土土器から、縄文時代晩期後葉の可能性ある。(芝田)

ⅢH-8 (図Ⅳ-1-19~23/表1~4/図版10・11)

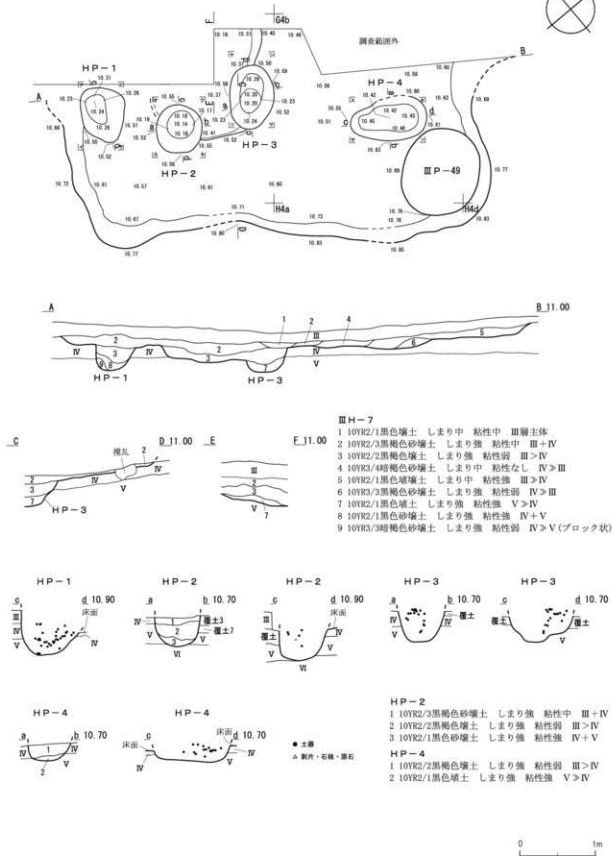
確認・調査 G9~11、H9~11、I10調査区において重機で耕作土(I層)を除去後、Ta-aが方形に、その周囲がコ字状の盛り上がり呈して黒褐色土が堆積していた。Ta-aを除去すると深さ90cmくらいの方形のくぼみが確認された。くぼみはアイヌ文化期の送り場の可能性があるため上面の測量・精査を行った。痕跡が確認されなかったため通常の調査を開始した。

くぼみの中心から竈・煙道方向とそれに直交する方向に土層観察のための畦を設定した。まず、畦の両側に試掘溝を掘削して堆積状況を確認した。その結果、堅穴内には屋根土・炭化材・B-Tmが、堅穴外には掘り上げ土が確認された。構築面での上端平面形を検出するために少しずつ掘り下げた。その過程でB-Tmの薄層の範囲(図Ⅳ-1-23)、屋根土の範囲を検出し記録した。屋根土の調査とともに覆土中に広がる炭化材の検出に勤めた。床面の調査では、支柱穴・竈・竈構築材土の散乱が認められた。竈の調査では、原形をとどめない袖・煙道・竈構築材土が詰まった煙出しが確認された。火床・煙道の土を採取した。

煙道と火床より採取した木炭2点を試料として、放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、暦年較正年代でそれぞれ $1,263 \pm 22$ yr B.P.(IAAA-112152)、 $1,315 \pm 24$ yr B.P.(IAAA-112153)という数値が得られた(Ⅵ章第2節参照)。

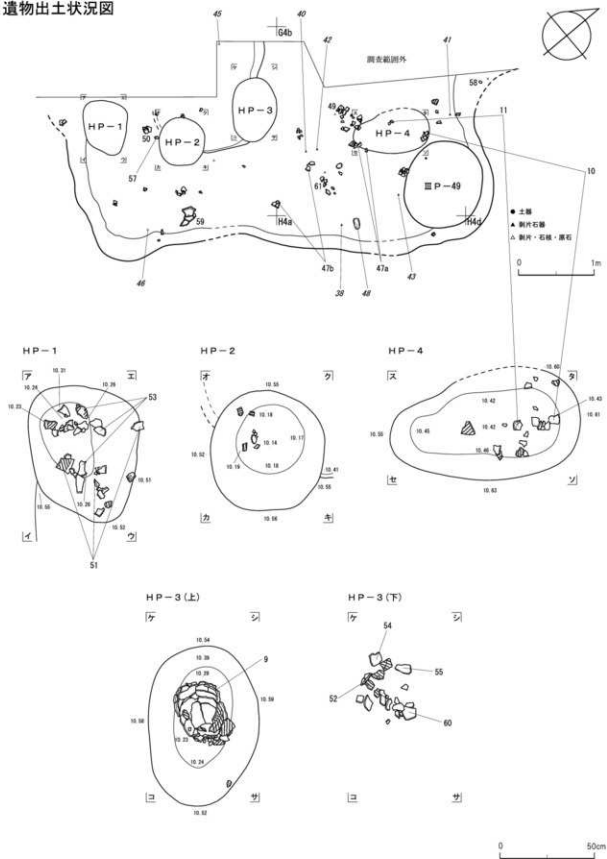
覆土 断面a-bの10層、断面c-dの9層は住居火災後に堆積した。断面a-bの9-13層、断面c-dの8-10層は屋根土で炭化材を多量に含む。これらは堅穴中央に堆積していないことから、屋根裾側下半だけを覆っていたと考えられる。床面はⅥ層の土色である明黄褐色土ではなく暗褐色に近い土色であった。踏み歩きなどの生活による汚れによって暗色化したと考えられる。また、床面には $30\text{cm} \times 10\text{cm} \times 5\text{cm}$ の

ⅢH-7



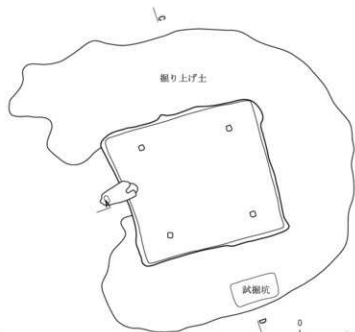
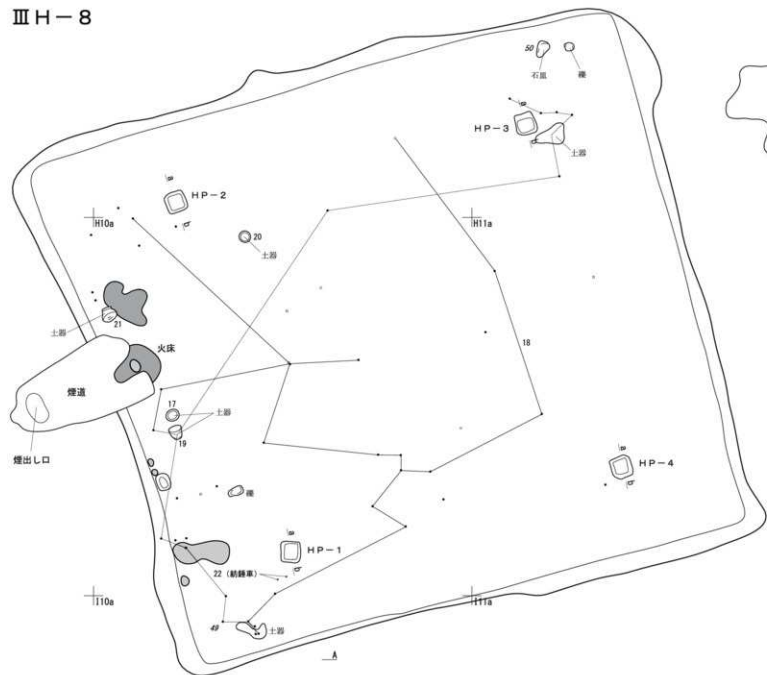
図IV-1-17 ⅢH-7(1)

遺物出土状況図



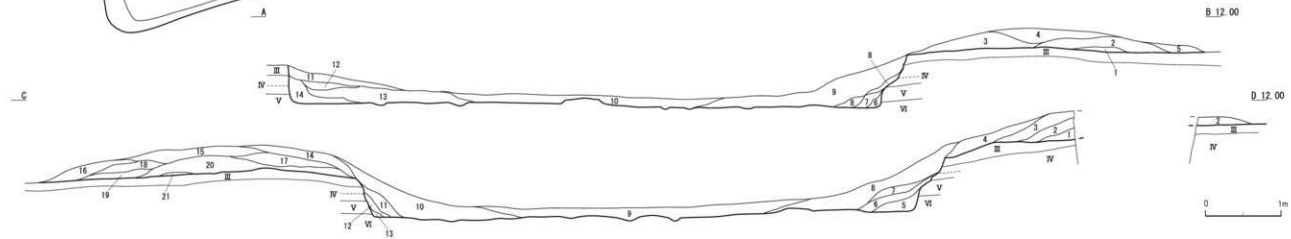
図Ⅳ-1-18 ⅢH-7(2)

III H-8



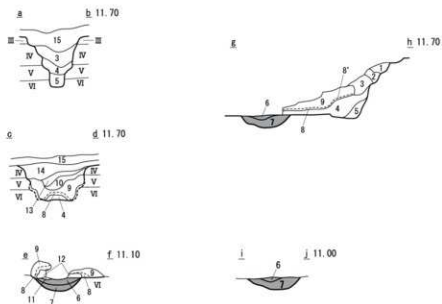
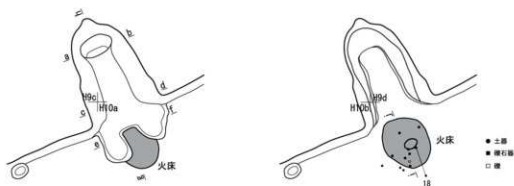
- III H-8 A-B
- 1 10YR3/3暗褐色土 しまりなし 粘性なし Ta-c・En-L・aを多く含む
 - 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 IBを非常に多く含む
 - 3 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c・En-L・aを多く含む
 - 4 7.5YR3/1暗褐色砂土 しまり中 粘性なし Ta-c・En-L・aを多く含む
 - 5 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性中 En-Lを非常に多く含む
 - 6 10YR3/1黒色土 しまりなし 粘性中 II Bを多く、En-Lを含む
 - 7 10YR3/3暗褐色砂土 しまりなし 粘性なし Ta-cを非常に多く含む
 - 8 10YR1/7/黒色土 しまりなし 粘性中 IB・Ta-cを多く含む
 - 9 10YR3/2暗褐色砂土 しまり中 粘性なし Ta-cを多く含む
 - 10 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 En-Lを多く含む
 - 11 8と同様
 - 12 7と同様
 - 13 9と同様
 - 14 10YR3/2暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IBを多く、Ta-cを含む

- III H-8 C-D
- 1 7.5YR2/1黒色砂土 しまりなし 粘性中 Ta-cを多く含む
 - 2 10YR3/2黒色砂土 しまりなし 粘性なし Ta-cを非常に多く含む
 - 3 7.5YR3/1暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IB・Ta-cを多く含む
 - 4 10YR3/2暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IB・Ta-c・En-aを多く含む
 - 5 10YR3/1暗褐色土 しまりなし 粘性中 II B・En-Lを多く含む
 - 6 10YR3/1暗褐色砂土 しまりなし 粘性なし Ta-cを非常に多く含む
 - 7 7.5YR2/1黒色土 しまりなし 粘性なし IBを多く、Ta-cを含む
 - 8 A-Bの9と同様
 - 9 A-Bの10と同様
 - 10 C-Dの8と同様
 - 11 C-Dの7と同様
 - 12 C-Dの6と同様
 - 13 C-Dの5と同様
 - 14 10YR4/2.5/黄褐色土 しまり中 粘性中 En-Lを非常に多く含む
 - 15 10YR2/3暗褐色砂土 しまり中 粘性なし Ta-c・En-Lを含む
 - 16 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性中 En-L・aを非常に多く含む
 - 17 10YR3/2暗褐色土 しまり中 粘性中 IBを非常に多く含む
 - 18 10YR3/1暗褐色土 しまり中 粘性中 IBを非常に多く含む
 - 19 10YR3/3暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IB・Ta-cを非常に多く含む
 - 20 10YR3/4暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IB・Ta-cを非常に多く含む
 - 21 10YR4/6褐色砂土 しまりなし 粘性なし Ta-cを非常に多く含む



図IV-1-19 III H-8 (1)

竈・煙道



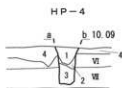
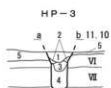
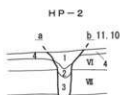
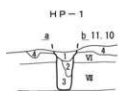
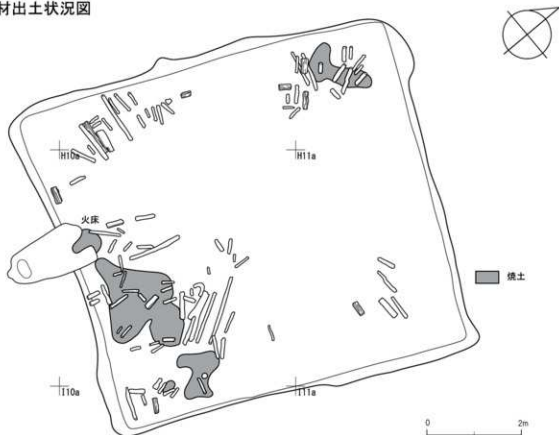
竈・煙道

- 1 10YR3/3暗褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 炭化物を含む 煙出し閉塞の粘土
- 2 10YR5/6黄褐色粘土 しまり中 粘性中 炭土粒を含む 煙出し閉塞の粘土
- 3 10YR6/4明黄褐色粘土 しまりなし 粘性中 明褐色炭土粒を多く含む 煙出し閉塞の粘土
- 4 10YR3/2黒褐色砂土 しまりなし 粘性なし I B・焼土粒・Ta-cを非常に多く含む
- 5 10YR2/1黒色土 しまりなし 粘性中
- 6 2.5YR4/6赤褐色土 しまり中 粘性中 焼骨片・炭化物・焼土粒を含む 火床(En-Lの被熱)
- 7 2.5YR5/8明赤褐色土 しまり中 粘性中 火床(En-Lの被熱)
- 8 2.5YR5/8明赤褐色粘土 竈の粘土天井部
- 8' 2.5YR3/6暗赤褐色粘土 竈の粘土天井部
- 9 10YR6/6黄褐色粘土 しまり強 粘性中 竈の粘土天井部
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 しまりなし 粘性なし Ta-cを多く含む
- 11 10YR6/6黄褐色粘土 しまり中 粘性中 9の削落
- 12 10YR2/2黒褐色土 しまりなし 粘性中 En-L焼土ブロックを含む
- 13 7.5YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多く含む
- 14 7.5YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中 En-Lを多く含む
- 15 7.5YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多く含む

0 1m

図IV-1-20 III H-8(2)

炭化材出土状況図



HP-1・2・4

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中
I B・En-L・Pを多く含む
- 2 10YR4/6褐色土 しまり中 粘性中
En-Lを非常に多く含む
- 3 10YR2/2黒褐色土 しまりなし 粘性なし
I B・En-Lを含む
- 4 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性中
I B・En-L・Pを含む

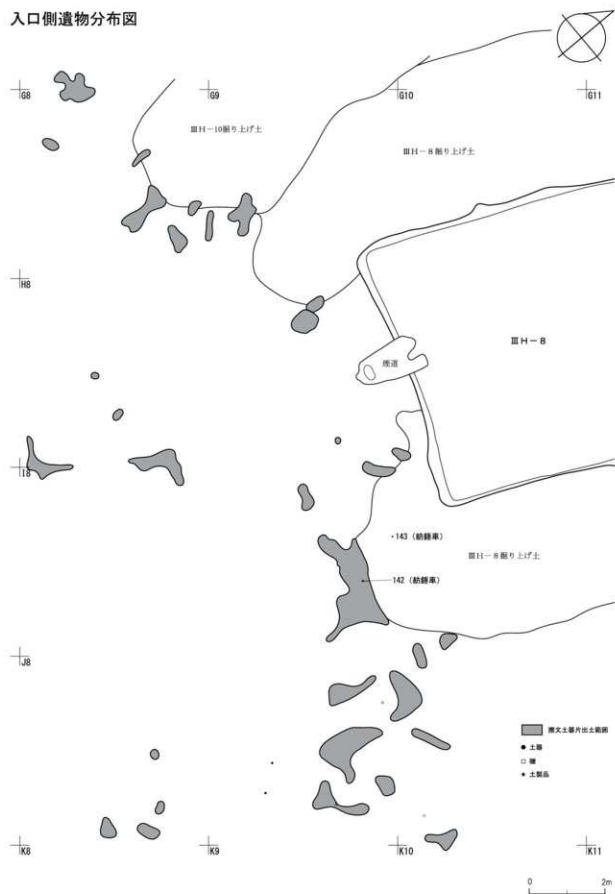
HP-3

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中
I B・En-L・Pを多く含む
- 2 10YR5/6黄褐色土 しまり中 粘性中
En-Lを非常に多く含む
- 3 10YR3/2黒褐色土 しまりなし 粘性なし
I B・En-Lを含む
- 4 10YR2/2黒褐色土 しまりなし 粘性なし
I B・En-Lを含む
- 5 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性中
I B・En-L・Pを含む



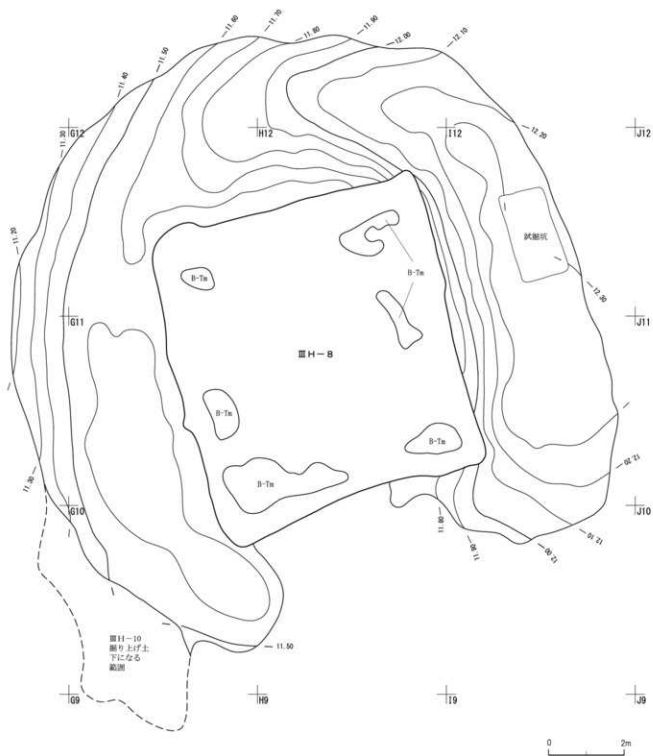
図Ⅳ-1-21 ⅢH-8(3)

入口側遺物分布図



図IV-1-22 III H-8 (4)

掘り上げ土範図



図Ⅳ-1-23 III H-8 (5)

直方状の小土坑が多数あり、壁際ではそれに沿って連続して検出された。堅穴の掘削痕と推定される。
形態 平面形は方形。Ⅵ層中を床構築面とする。規模は上端7.8m×7.4m、下端7.6m×7.1mを測る。壁は床構築面からの現高で約70cm外上方に立ち上がる。

付属遺構 HP-1~4：柱穴は4か所にあり方形堅穴の対角線上の壁よりに配置され、掘り方は長方形である。柱水平断面は方形であることから、柱は面取りをした加工材である。柱穴内には柱を固定するための表込めの土は堆積していなかった。

竈：両袖は長さ・形が異なるので、ともに壊され、懸け口も遺存していない。右袖は左袖に較べて変形が著しいので左袖よりも破壊が著しかったと考えられる。袖は黄褐色粘土（図Ⅳ-1-20の9層）で構築されている。煙道は崩落し、貼り天井部は潰れ気味であるがほぼ原形を保っていた。煙道内の堆積土の一部（図Ⅳ-1-20の1~3層）は閉塞のために充填されたもので、それらの由来は土色・土質・混入物より竈構築材土である。竈方位はS-18°50'-Wである。竈に向かって左側には浅い小土坑が付属しており、これは住居機能時に存在するので、出入口の構造物の可能性がある。

遺物出土状況 炭化材は住居の竈側半分に多く遺存していたこと、柱穴は引き抜かれた痕跡がなく腐朽していたこと、大量の焼土・灰は検出されなかったこと。以上より上層材のほとんどは腐朽し、一部が炭化したと考えてよい。堅穴は縄文・続縄文時代の包含層・掘り上げ土を掘削しているため土器片、石器類が包含されていた。床面からは擦文文化期の土器片・紡錘車・礫石器が出土し、竈周辺からは須恵器環・擦文土器甕の下半が出土した（図Ⅳ-2-7-17~22、14-84・87、2-17-49・50）。また、住居内遺物の接合が見られた。火床・煙道の土をフローテーションした結果、種子（カバノキ科・キク科・ヒエ属など）、焼魚獣骨片が得られている（表9）。

時期 床面から高台付須恵器環が出土しているので、その土器の暦年代より、住居の使用時期は9世紀前葉と考えられる。（鈴木）

ⅢH-9（図Ⅳ-1-24/表1~4/図版12）

確認・調査 I10・11、J10・11調査区のⅢ層上面において、長径約4.5m、短径約4mを測る隅丸長方形のくぼみを確認した。堆積状況・下端・壁面確認のため長軸と短軸にトレンチを入れたところ、炉跡（HF-1）と平坦な床面を検出したので、堅穴式住居跡であると判断した。堅穴は掘り込みが浅く、覆土とⅢ層の色調が同じであるため、明瞭な上端・下端は捉えられなかったが、隅丸長方形のくぼみの肩を上端、炉の高さを床面として調査した。炉跡と覆土より採取した木炭2点を試料として、放射性炭素年代測定（AMS法）を行ったところ、暦年較正年代でそれぞれ956±22yr B P（IAAA-112154）、890±23yr B P（IAAA-112155）という数値が得られた（Ⅵ章第1節参照）。

覆土 自然堆積である。

形態 平面形は上端・下端とも隅丸長方形、立ち上がりは皿状と推定される。床面は平坦であるが、緩斜面に掘り込まれているため、炉を境として斜面上方ではⅣ層中に、下方ではⅢ層中に設けられている。構築面はⅢ層上位とみられる。

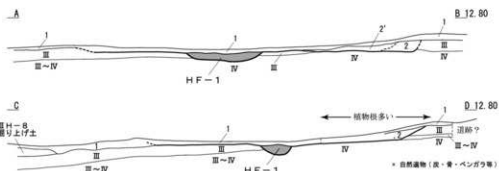
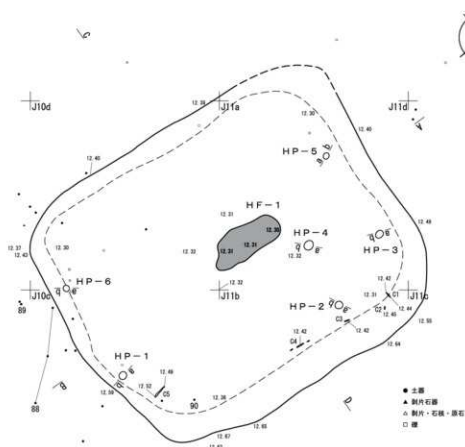
付属遺構 HF-1：住居跡中央のやや北側に楕円形の炉がある。長軸方向は住居跡とほぼ同じである。フローテーション処理により種子（マメ科・ブドウ属）が得られている（表9）。

HP-1~6：堅穴内部より杭の打ち込みによる柱穴が6基検出された。このうちHP-1・3・5・6の4基は長方形に配置されている。

遺物出土状況 覆土から甕群土器（図Ⅳ-2-14-88~91）、礫などが出土した。

時期 検出層位、放射性炭素年代測定の結果から、擦文文化期と推測される。（山中）

ⅢH-9



ⅢH-9

1 10YR1.7/1黒色埴土 しまり強 Ta-cが微量混じる

2 10YR1.7/1黒色砂質埴土 しまり強 Ta-cが少量混じる

HF-1

1 7.5YR4/4褐色土 しまり強 2mm程度の骨片がごく微量に混じる

HP-1・3・6

1 10YR1.7/1黒色砂質埴土 しまり弱～強 Ta-cが多量に混じる

HP-2

1 10YR1.7/1黒色砂質埴土 しまり弱～強 Ta-cが多量に混じる

En-aがごく微量に混じる

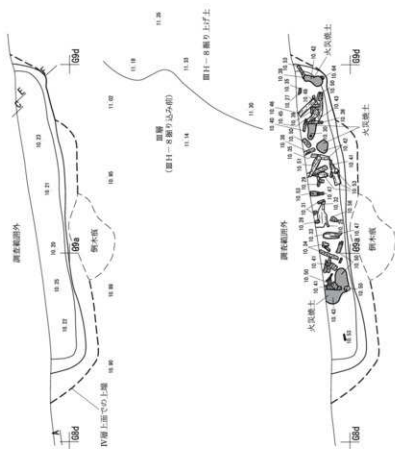
HP-4・5

1 10YR1.7/1黒色砂質埴土 しまり強 Ta-cが多量に混じる

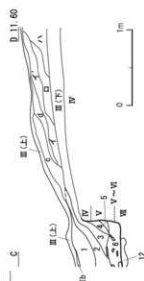
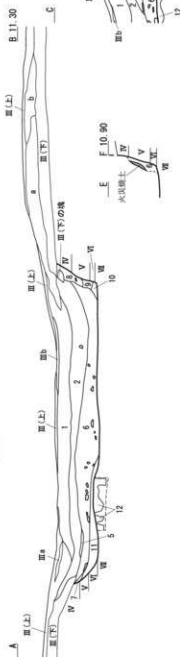
0 1m

図Ⅳ-1-24 ⅢH-9

Ⅲ H-10



- Ⅲ H-10 610a
- Ⅲ(上) 10YR1.7/1黒色砂質粘土 しまり強
- Ⅲa 10YR2/2黒褐色砂質粘土 しまり弱～強 2m間の層が礫層に属する
- Ⅲb 7.5YR4/3棕色砂質粘土 礫の最大径は5mmほど
- Ⅲ(下) 10YR1.7/1黒色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ がやや多量に属する
- 1 10YR1.7/1黒色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ がやや多量に属する
- 2 10YR2/1黒色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ が少量に属する 灰化層少量に属する
- 3 10YR2/1黒色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ が少量に属する 灰化層少量に属する
- 4 10YR2/2黒褐色砂質粘土 しまり弱～強 $Ta-c$ が少量に属する Em がごく微量に属する
- 5 10YR2/2黒褐色砂質粘土 しまり弱～強 $Ta-c$ 主体 Em が少量に属する
- 6 10YR2/2黒褐色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ 主体 Em が少量に属する 灰化層少量に属する
- 7 10YR3/3暗褐色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ 主体 面層・灰化層が微量に属する
- 8 10YR3/3暗褐色砂質粘土 しまり強 $Ta-c$ 主体 面層・灰化層が微量に属する
- 9 10YR1.7/1黒色砂質粘土 しまり強 V 層主体
- 10 10YR2/2暗褐色砂質粘土 しまり強 Em がごく微量に属する
- 11 10YR2/2暗褐色砂質粘土 しまり強 Em がごく微量に属する
- 12 10YR1.7/1黒色砂質粘土 しまり強 V 層に面層が微量に属する
- a 10YR2/2暗褐色砂質粘土 しまり弱～強 $Ta-c$ がやや多量に属する 礫り上り土
- b 10YR3/3暗褐色砂質粘土～粘土 しまり弱～強 V 層に面・ V 層が微量に属する 礫り上り土
- c 10YR3/3暗褐色砂質粘土～粘土 しまり弱～強 VI ・ V 層主体 Ⅲ H-10礫り上り土
- d 10YR3/1暗褐色砂質粘土 しまり弱～強 $Ta-c$ が少量に属する Ⅲ H-10礫り上り土
- e 10YR2/2暗褐色砂質粘土～粘土 しまり弱～強 V 層主体 Ⅲ H-10礫り上り土
- f 10YR2/2暗褐色砂質粘土 しまり弱～強 V 層主体 Ⅲ H-10礫り上り土
- g 10YR2/2暗褐色砂質粘土 しまり弱～強 Ⅲ H-10礫り上り土
- h Ⅲ H-10礫り上り土
- 大気塵土 7.5YR4/3棕色粘土 しまり強 $Ta-c$ が少量に属する



図Ⅳ-1-25 Ⅲ H-10

ⅢH-10 (図Ⅳ-1-25/表1~4/図版13)

確認・調査 F 8・9、G 8・9 調査区のⅢ層上面において、隅丸方形とみられるくぼみを確認した。堆積状況・下端・壁面確認のため調査区境界に沿ってトレンチを入れたところ、床面と壁を検出したので、竪穴式住居跡と判断した。竪穴の大部分は調査区域外にあり、検出した範囲は竪穴の東壁付近に限られる。

覆土 自然堆積と推測される。

形態 大半が調査区域外にあるが、平面形はおそらく隅丸方形であろう。床面は南側の高まりを除き平坦で、黒色土がつまった小さなくぼみが多数見られる。壁は垂直または外傾する。構築面はⅢ層上位とみられ、覆土下位からは多数の炭化材が出土したことから、焼失した住居と考えられる。この炭化材1点を試料として、放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、暦年較正年代で1272±23yr B P (IAAA-112156) という数値が得られた(Ⅵ章第2節参照)。調査区域内では、南側を除いて掘り上げ土が見られる。掘り上げ土の重複状況から、本住居跡がⅢH-7より新しい。

遺物出土状況 覆土からⅦ群土器(図Ⅳ-2-14-92~95)、礫が出土した。このほか、Ⅱ群b類・Ⅳ群b類・Ⅳ群c類・Ⅴ群c類土器も出土したが、これらは掘り上げ土の流れ込みによるものと考えられる。

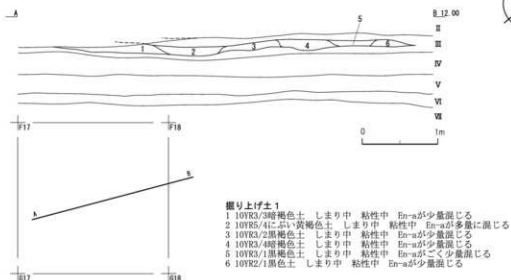
時期 検出された層位と住居の形態から、縄文文化期である。

(山中)

掘り上げ土 (図Ⅳ-1-26/図版13)

確認・調査 F 17調査区境界の断面において、掘り上げ土と考えられる堆積を確認した。Ⅲ層中にE n-aが混入した黒色土がブロック状に堆積する。厚さ10~15cmで約5mに渡って広がっていることから、調査範囲外のE 17調査区付近に縄文文化期の竪穴住居跡があることが推定される。(菊池)

掘り上げ土



図Ⅳ-1-26 掘り上げ土

(3) 土坑**ⅢP-1** (図Ⅳ-1-27/表1~4)

特徴 重機によるⅢ・Ⅳ層除去後、P・Q7グリッド付近を調査中、V層上面において黒色土の円形の拡がりを検出した。西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は6層に分層した。1~3層は流れ込み、4~6層は掘り上げ土の埋め戻しである。調査を進めると、重機による除去範囲の境でⅢ・Ⅳ層が残存していた南東側の一部では、Ⅲ層下位から土坑を構築していることが確認された。遺物は出土していない。

時期 構築面や周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-2 (図Ⅳ-1-27/表1~4/図版15)

特徴 重機によるⅢ・Ⅳ層除去後、P7・8グリッド付近を調査中、V層上面において黒色土が円弧状にあることを確認した。土坑の存在を推測し、東側のⅢ層を調査中に黒色土の円形の拡がりを出した。西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分層した。1層は流れ込み、2層は掘り上げ土の埋め戻しである。土坑はⅢ層下位から構築されている。遺物は覆土中からV群c類土器(図Ⅳ-2-12-62)が出土している。

時期 構築面や周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-3 (図Ⅳ-1-27/表1~4/図版15)

特徴 P7グリッドを調査中、IV層上面において黒色土の楕円形の拡がりを検出した。西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面は急角度に立ち上がる。覆土は4層に分層した。1層は流れ込み、2~4層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は、覆土3層と4層の層界から、V群c類土器(図Ⅳ-2-12-63)、礫が出土している。

時期 遺物や周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-4 (図Ⅳ-1-27/表1~4)

特徴 重機によるⅢ・Ⅳ層除去後、Q8グリッドを調査中、V層上面において黒色土の円形の拡がりを出した。南側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層した。掘り上げ土の埋め戻しである。覆土の状況からⅢ層の遺構と推定した。遺物は覆土中から剥片が出土している。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-5 (図Ⅳ-1-28/表1~4)

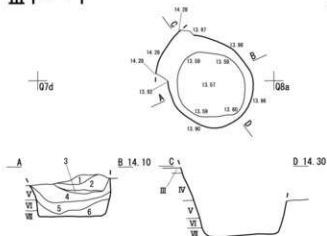
特徴 P7・8グリッドを調査中、IV層上面において黒色土の円形の拡がりを出した。北西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は5層に分層した。1~3層は流れ込み、4・5層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土5層からⅢ群b類土器が出土している。土坑の構築面はⅢ層なので、掘り上げた際の混入と考えられる。

時期 周囲の土坑と形状が類似することから縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-6 (図Ⅳ-1-28/表1~4)

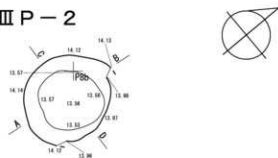
特徴 O8グリッドを調査中、IV層上面において暗褐色土の円形の拡がりを出した。北西側を半載

Ⅲ P-1

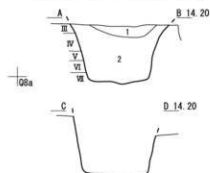


- Ⅲ P-1
- 1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性なし
Ta-c多く混入する Ⅲ層と同質
 - 2 7.5YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c多く混入する 埋め戻し土
 - 3 10YR4/4暗色砂土 Ta-c 域りでの混入
 - 4 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c多く含む 埋め戻し土
 - 5 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中
埋め戻し土
 - 6 10YR2/5黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c含む 埋め戻し土

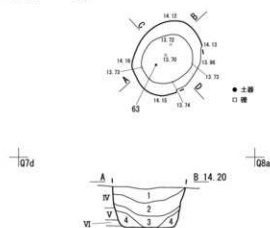
Ⅲ P-2



- Ⅲ P-2
- 1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む
 - 2 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く、IV層パミス少量含む 埋め戻し土

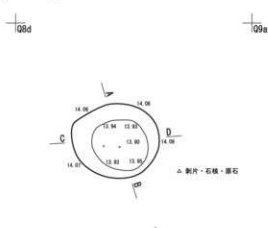


Ⅲ P-3



- Ⅲ P-3
- 1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む
 - 2 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む V層パミス微量含む
埋め戻し土
 - 3 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む 埋め戻し土
 - 4 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c少量含む V層パミス微量含む
埋め戻し土

Ⅲ P-4

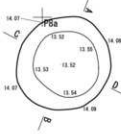


- Ⅲ P-4
- 1 10YR3/4暗褐色砂土 しまりなし 粘性なし
ほぼTa-cのみ 埋め戻しor崩落土
 - 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多量に含む 埋め戻し土



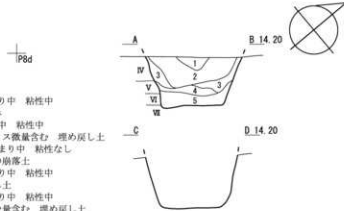
図Ⅳ-1-27 Ⅲ P-1~4

III P-5

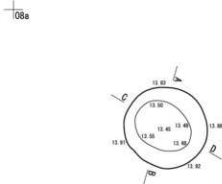


III P-5

- 1 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む 流れ込み
- 2 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む VII層バミス微量含む 埋め戻し土
- 3 10YR3/4暗褐色砂土 しまり中 粘性なし
Te-cとはほぼ同じ 壁面の剥落土
- 4 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む 埋め戻し土
- 5 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c含む VII層バミス少量含む 埋め戻し土



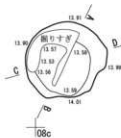
III P-6



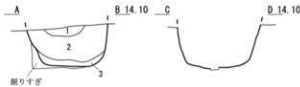
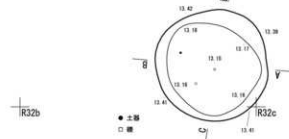
III P-6

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む
- 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c多く含む
- 3 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c含む VII層バミス少量含む 埋め戻し土

III P-7



III P-8



III P-7

- 1 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c多く含む
- 2 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-c多く含む
- 3 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-c含む



III P-8

- 1 2.5Y3/1黒褐色土 しまり微 粘性中
Et-a・Ta-cが多量に混じる



図IV-1-28 III P-5~8

したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面は急角度に立ち上がる。底面は楕円形。覆土は3層に分層した。1・2層は流れ込み、3層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。
時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-7 (図Ⅳ-1-28/表1~4)

特徴 O8グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒色土の円形の拡がりを検出した。北西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面は急角度に立ち上がる。覆土は3層に分層した。1層は流れ込み、2・3層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-8 (図Ⅳ-1-28/表1~4/図版15)

特徴 調査範囲中央東側の緩斜面に位置する。Ⅴ層調査後に黒褐色土の落ち込みを確認した。T a-cが多量に混入していることから、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土1層は埋め戻しである。覆土よりⅤ層の遺物が出土している。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-9 (図Ⅳ-1-29/表1~4/図版15)

特徴 調査範囲中央東側の緩斜面に位置する。Ⅴ層調査後に黒色土の落ち込みを確認した。T a-cが多量に混入していることから、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりはやや急である。坑底より炭化物集中が検出された。覆土2層は埋め戻し、1層は流れ込みである。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-10 (図Ⅳ-1-29/表1~4/図版15)

特徴 調査範囲中央東側の緩斜面に位置し、約1/2は調査範囲外に続く。調査区境界の断面でⅢ層中からの掘り込みを確認した。平面形は円形と推定される。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土6層は埋め戻し、5層は壁の崩落と流れ込み、1~4層は流れ込みである。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-11 (図Ⅳ-1-29/表1~4)

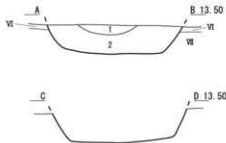
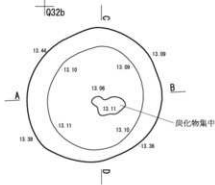
特徴 調査範囲中央東側の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面でT a-cが多量に混入した黒褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅥ層中で丸い。壁の立ち上がりはやや急である。覆土2・3層は崩落、1層は埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-12 (図Ⅳ-1-30/表1~4)

特徴 重機によるⅢ・Ⅳ層除去後、N・O9グリッド付近を調査中、Ⅴ層上面において黒色土の円形の拡がりを検出した。重機による除去範囲の境でⅣ層が残存していた所をa-b断面として西側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は3

III P-9

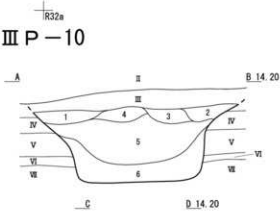


III P-9

1. 5Y2/1黒色土 しまり強 粘性中 En-a・Ta-cが少量混じる
2. 5Y3/1黒褐色土 しまり強 粘性中 En-a・Ta-cが多量に混じる



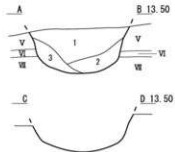
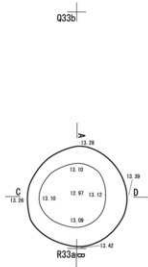
III P-10



III P-10

1. 10YR1.7/1黒色土 しまり強 粘性中 Ta-cが多量に混じる
2. 10YR3/1黒褐色土 しまり強 粘性中 Ta-cが多量に混じる
3. 10YR3/3暗褐色土 しまり強 粘性弱
4. 10YR9/3暗色土 しまり強 粘性弱
5. 10YR2/3黒褐色土 しまり強 粘性中 En-aが少量、Ta-cが多量に混じる
6. 10YR2/1黒色土 しまり強 En-a・Ta-cが多量に混じる

III P-11



III P-11

1. 10YR3/2黒褐色土 しまり強 粘性中 En-a・Ta-cが多量に混じる
2. 10YR2/1黒色土 しまり強 粘性中 En-a・Ta-cが少量混じる
3. 10YR2/2黒褐色土 しまり強 粘性中 Ta-cが少量混じる



図IV-1-29 III P-9~11

層に分層した。1～3層は掘り上げ土の埋め戻しである。南東側の一部を除きV層上面まで削平されている。遺物は出土していない。

時期 構築面や周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-13 (図IV-1-30/表1～4)

特徴 N・O 8グリッドを調査中、IV層上面において黒色土の円形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面は急角度に立ち上がる。南西側壁面は崩落があったようで緩やかに立ち上がる。覆土は4層に分層した。1～3層は流れ込み、4層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土からIV群c類土器が出土している。土坑の構築面はⅢ層なので、掘り上げた際の混入と考えられる。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-14 (図IV-1-30/表1～4)

特徴 N 9グリッドを調査中、IV層上面において黒褐色土の円形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認したので土坑とした。底面は平坦で壁面は急角度に立ち上がる。北東側は崩落があったようで上端が広がる。覆土は4層に分層した。1層は流れ込み、2・3層は壁面からの崩落、4層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-15 (図IV-1-30/表1～4)

特徴 N 9グリッドを調査中、IV層上面において黒褐色土の不整形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面は急角度に立ち上がる。壁面の崩落があったようで上端が不定形になっている。本来は円形をしていたと考えられる。覆土は5層に分層した。1層は流れ込み、2・4層は壁面からの崩落、3・5層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-16 (図IV-1-31/表1～4)

特徴 N 8グリッドを調査中、IV層上面において黒褐色土の円形の拡がりを検出した。南側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。壁面の崩落があったようで上端がさらに広がる。覆土は7層に分層した。1～3層は流れ込み、4・6層は壁面からの崩落、5・7層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

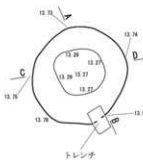
ⅢP-17 (図IV-1-31/表1～4)

特徴 N・O 8グリッドを調査中、IV層上面において暗褐色土の円形の拡がりを検出した。南側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。壁面の崩落があったようで上端は不定形である。覆土は4層に分層した。1層は流れ込み、2層は壁面からの崩落、3・4層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土から石鏃(図IV-2-17-51)、剥片が出土している。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

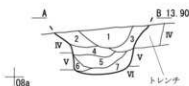
Ⅲ P-16

↑ NSb

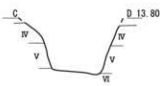


Ⅲ P-16

- 1 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下少量)多く含む
- 2 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下多量)多く含む
- 3 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下多量)多く含む
- 4 10YR4/4暗褐色土 しまりなし 粘性なし
Ta-cとほぼ同じ
- 5 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下少量)多く含む
- 6 10YR2/1黒色土 しまりなし 粘性なし
Ta-cとほぼ同じ
- 7 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c少量含む En-a微量含む

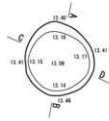


↑ 08a

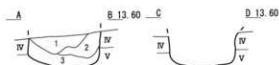


Ⅲ P-19

↑ M9a

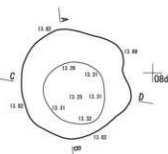


↑ M9b

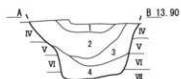


Ⅲ P-17

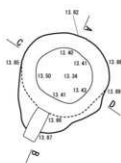
↑ 08a



Ⅲ P-18



↑ 08d



↑ NSb



↑ 08a



Ⅲ P-17

- 1 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c(φ5mm以下多量)多く含む
En-a微量を含む
- 2 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下多量)非常に多く含む
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c(φ5mm以下)多く含む En-a少量含む
- 4 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c少量含む En-a含む

Ⅲ P-18

- 1 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下)多く含む
- 2 10YR3/4暗褐色土 しまりなし 粘性なし
Ta-c(φ5mm以下)含む
- 3 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c(φ5mm以下)多く含む
- 4 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c・En-a少量含む



図Ⅳ-1-31 Ⅲ P-16~19

Ⅲ P-18 (図Ⅳ-1-31/表1~4)

特徴 N8グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒褐色土の不整形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面はやや開き気味に立ち上がる。南西側壁面の崩落のため上端は不定形であるが、本来は円形を呈していたと考えられる。覆土は4層に分層した。1層は流れ込み、2層は壁面からの崩落、3・4層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土からⅡ群b類土器、剥片が出土した。土坑の構築面はⅢ層なので、掘り上げた際の混入と考えられる。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

Ⅲ P-19 (図Ⅳ-1-31/表1~4)

特徴 M9グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒褐色土の円形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面は急角度に立ち上がる。覆土は3層に分層した。1・2層は流れ込み、3層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は底面から礫が出土している。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

Ⅲ P-20 (図Ⅳ-1-32/表1~4/図版15)

特徴 M9・10グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒褐色土の円形の拡がりを検出した。南東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は皿状で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は5層に分層した。1~4層は流れ込み、5層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土1・5層からⅢ群b類土器が出土している。土坑の構築面はⅢ層なので、掘り上げた際の混入と考えられる。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

Ⅲ P-21 (図Ⅳ-1-32/表1~4)

特徴 N8グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒褐色土の不整形の拡がりを検出した。東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。南側壁面の崩落のため上端は不定形であるが、本来は円形を呈していたと考えられる。覆土は5層に分層した。1層は流れ込み、2層は壁面からの崩落、3~5層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は覆土からV群c類土器が出土している。

時期 遺物や周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

Ⅲ P-22 (図Ⅳ-1-32/表1~4)

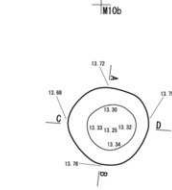
特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。V層上面でT a-c降下軽石の落ち込みとして検出した。平面形は円形を呈する。掘り込みは南~西側が緩斜度、北~東側が急斜度である。坑底面は平坦で、Ⅶ層上面まで達する。覆土は密着性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土にⅣ層が多量に混入することから、掘り込み面はⅢ層中である。遺物は出土していない。

時期 掘り込み面、周辺土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

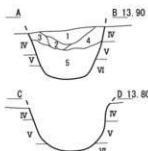
Ⅲ P-23 (図Ⅳ-1-32/表1~4)

特徴 N8・9グリッドを調査中、Ⅳ層上面において黒褐色土の円形の拡がりを検出した。東側を半載したところ、底面と壁面を確認した。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。南側壁面の崩落のため上端は不定形であるが、本来は円形を呈していたと考えられる。覆土は5層に分層した。1層は流れ

III P-20



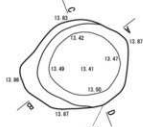
1010a



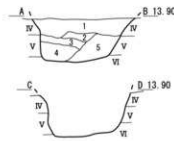
III P-20

- 1 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c (φ 5mm以下多量)を非常に多く含む
- 2 10YR4/6褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c (φ 5mm以下多量)を非常に多く含む
- 3 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c (φ 5mm以下少量)を非常に多く含む
- 4 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta-c (φ 5mm以下多量)を非常に多く含む
- 5 10YR1.7/1黒色土
Ta-c (φ 5mm以下多量)を非常に多く含む

III P-21



108d

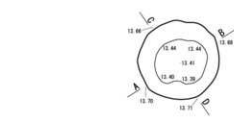


109a

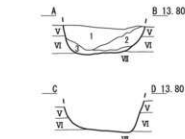
III P-21

- 1 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c (φ 5mm以下)非常に多く含む
En-a微量を含む
- 2 10YR4/6褐色土 しまりなし 粘性なし
Ta-cとほぼ同じ
- 3 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c (φ 5mm以下少量)含む En-a微量含む
- 4 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c・En-a少量含む
- 5 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c (φ 5mm以下多量)非常に多く含む
En-a微量を含む

III P-22



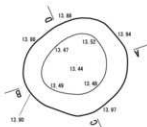
1010b



III P-22

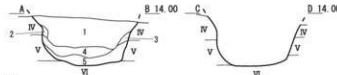
- 1 10YR3/2暗褐色砂土 しまり強 粘性なし
IV層主体 φ1~3mmのEn-aがごく稀かに混ざる
- 2 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 V>IV
φ1~10mmのEn-aがまばらに混ざる φ1~10mmの
Ta-dがごく少量混ざる
- 3 10YR3/4暗褐色壤土 しまり強 粘性強 VI>V>V
φ1~3mmのTa-cをまばらに含む

III P-23



108d

1010c



III P-23

- 1 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中
Ta-c (φ 5mm以下多量)非常に多く含む
En-a微量含む
- 2 7.5YR4/4褐色砂礫 しまりなし 粘性なし
Ta-c
- 3 7.5YR3/4褐色砂礫 しまりなし 粘性なし
Ta-c
- 4 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c (φ 5mm以下多量)非常に多く含む
En-a微量含む
- 5 10YR1.7/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-c少量含む En-a微量含む

0 1m

図IV-1-32 III P-20~23

込み、2・3層は壁面からの崩落、4・5層は掘り上げ土の埋め戻しである。遺物は出土していない。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

ⅢP-24 (図Ⅳ-1-33/表1~4/図版16)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形を呈する。掘り込みは急斜度である。坑底面は平坦で、Ⅵ層中まで達する。覆土はⅢ層の自然堆積である1層を除いて堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。坑底面から25cmほど上位でV群c類土器2個体(図Ⅳ-2-5-12、12-64)が上下に重なって出土した。口縁部を板状に分割して重ねた個体(12)の上に、大型破片の個体(64)が被さるように倒立していた。坑底面より採取した炭化材を試料として年代測定と樹種同定を行った。放射性炭素年代測定(AMS法)では、暦年較正年代で2403±34yr BP (IAAA-72178)という数値が得られた。また、樹種はコナラ属と同定された(Ⅵ章第1・3節参照)。

時期 出土遺物などから、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-25 (図Ⅳ-1-33/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形を呈する。掘り込みは急斜度である。坑底面は平坦で、Ⅵ層上位まで達する。覆土はⅢ層の自然堆積である1層を除いて堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土下位よりⅣ群b類土器の胴部片が出土した。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-26 (図Ⅳ-1-34/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は不整形円形を呈する。掘り込みは急斜度である。坑底面は平坦で、Ⅵ層上位まで達する。覆土はⅢ層の自然堆積である1層を除いて堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中より黒曜石製の剥片が出土した。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-27 (図Ⅳ-1-34/表1~4)

特徴 調査範囲南側中央の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面でT a-cが多量に混入した灰黄褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりはやや急である。覆土1~3層は崩落である。遺物は出土していない。

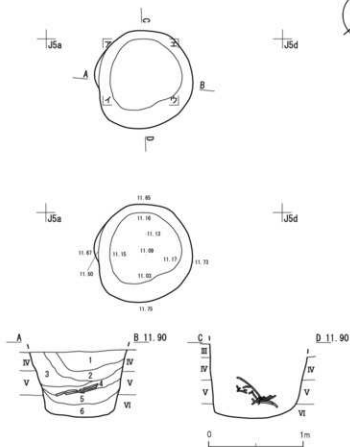
時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-28 (図Ⅳ-1-34/表1~4/図版16)

特徴 調査範囲南西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層上面でほぼ平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土5・6層は埋め戻し、3・4層は崩落、1・2層はⅢ層の流れ込みである。覆土~坑底よりV群c類土器(図Ⅳ-2-12-65)、石鏃(図Ⅳ-2-17-52)、スクレイパー(53)、剥片が出土した。

時期 出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

III P-24



III P-24

- 1 10YR2/1黒褐色壤土 しまり中 粘性弱 III>IV
- 2 10YR3/3暗褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
- 3 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 III>IV
- 4 10YR2/1黒色壤土 しまり強 粘性強 III>IV



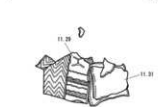
1 階目



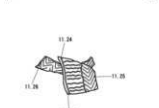
2 階目



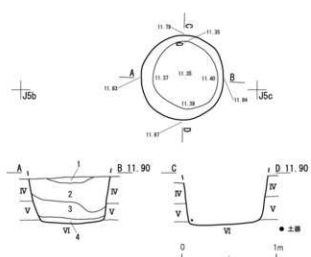
3 階目



4 階目



III P-25

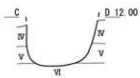
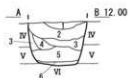
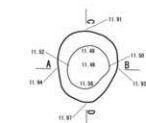


III P-25

- 1 10YR2/1黒色壤土 しまり中 粘性弱 III>IV
- 2 10YR3/3暗褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
- 3 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 III>IV
φ1~5mmのTa-cが全体に混じる
- 4 10YR2/1黒色壤土 しまり強 粘性強 III>IV
φ1~3mmのTa-cがまばらに混じる

図IV-1-33 III P-24・25

III P-26



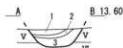
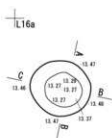
K5a

K5d

III P-26

- 1 10YR2/1黒褐色壤土 しまり中 粘性弱 III>IV
 - 2 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性中 III+IV
 - 3 10YR2/3黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
 - 4 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性中 III>IV
 - 5 10YR2/1黒褐色壤土 しまり強 粘性強 III>IV
 - 6 10YR2/1黒褐色壤土 しまり強 粘性強 III>IV
- φ1~2mmのTa-cがごくまばらに混ざる

III P-27

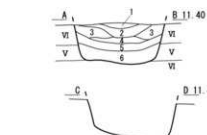
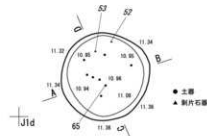


III P-27

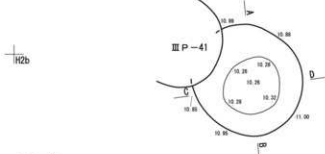
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体 黒色土が少量混ざる
- 2 10YR3/1黒褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体 黒色土が多量に混ざる
- 3 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体

L16a

III P-28



III P-29



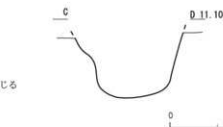
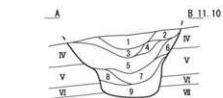
III P-29

- 1 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混ざる
- 2 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混ざる
- 3 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 4 7.5YR5/6明褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 5 1と同様
- 6 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 7 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混ざる
- 8 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体 黒色土ブロックが少量混ざる
- 9 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混ざる

L12a

III P-28

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混ざる
- 2 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混ざる
- 3 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混ざる
- 4 10YR4/6褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 5 2と同様
- 6 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混ざる



0 1m

図IV-1-34 III P-26~29

ⅢP-29 (図Ⅳ-1-34/表1~4)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。ⅢP-41に壊されている。Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形。坑底面はⅥ層中でほぼ平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土7~9層は埋め戻し、1~6層は壁の崩落と流れ込みである。覆土よりV群c類土器、石鏃(図Ⅳ-2-17-54)、剥片、礫が出土している。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-30 (図Ⅳ-1-35/表1~4/図版16)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりはやや緩い。覆土2・3層は埋め戻し、1層は流れ込みである。覆土より主としてV群c類土器(図Ⅳ-2-12-66)、他にV層の土器が出土している。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-31 (図Ⅳ-1-35/表1~4/図版16)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層上位ではほぼ平坦。壁の立ち上がりはやや急である。覆土5・6層は埋め戻し、2~4層は壁の崩落と流れ込み、1層はⅢ層。覆土より主としてV群c類土器(図Ⅳ-2-12-67~69)、他にV層の土器、石器は石槍(図Ⅳ-2-17-55)、スクレイパー、剥片が出土している。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-32 (図Ⅳ-1-35/表1~4)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。約1/2は試掘坑により壊されている。平面形は円形と推定される。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土7・8層は埋め戻し、5・6層は崩落、2~4層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土よりV群c類土器が出土している。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-33 (図Ⅳ-1-36/表1~4/図版16)

特徴 調査範囲南端の緩斜面に位置する。V層上面でT a - cが多量に混入した暗褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形はほぼ円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土4・5層は埋め戻し、2・3層は崩落、1層は流れ込みである。覆土からV群c類土器、スクレイパー(図Ⅳ-2-17-56)が出土している。

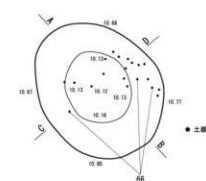
時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-34 (図Ⅳ-1-36/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形を呈する。掘り込みはやや緩斜度である。坑底面は平坦で、V層上位まで達する。覆土はⅢ層の自然堆積である1層を除いて緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりV群c類土器(図Ⅳ-2-13-70)、黒曜石製の剥片が出土した。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

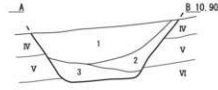
III P-30



III P-30

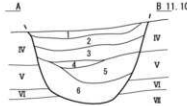
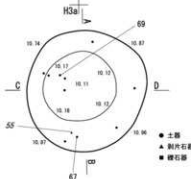
- 1 10YR2/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多量に含む
- 2 10YR2/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cを多量に含む
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cを少量含む

H3a



H3b

III P-31

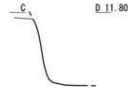
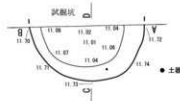


III P-31

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 7.5YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 3 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 4 10YR5/6黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 5 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 6 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cがごく少量混じる

H3b

III P-32



III P-32

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 2 7.5YR2/3暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 3 7.5YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 4 7.5YR3/2暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 5 10YR5/6黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 6 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 7 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量、En-aがごく少量混じる
- 8 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量混じる

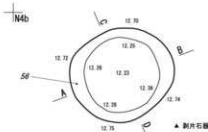
H3a

H3d

0 1m

図IV-1-35 III P-30~32

III P-33



▲ 観片石標



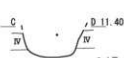
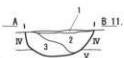
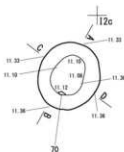
III P-33

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量、En-aがごく少量混じる
- 2 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 3 10YR4/6褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが少量、En-aがごく少量混じる
- 5 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性強 Ta-cが少量、En-aがごく少量混じる

III P-34

104a

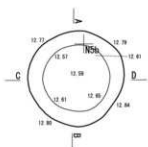
112b



III P-34

- 1 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性弱 III>IV
φ1~10mmのTa-cが多く混ざる
- 2 10YR3/4暗褐色砂壤土 しまり強 粘性なし IV>III
φ1~10mmのTa-c主体
- 3 10YR2/2黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
φ1~10mmのTa-c主体

III P-35



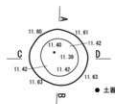
III P-35

- 1 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量、炭化物が少量混じる
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 3 2.5Y5/6黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体

III P-36

103a

103d



III P-36

- 1 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c・炭化物が少量混じる
- 2 10YR5/6黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体

0 1m

図IV-1-36 III P-33~36

ⅢP-35 (図IV-1-36/表1~4)

特徴 調査範囲南端の緩斜面に位置する。V層上面でT a - cが多量に混入した黒褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形で、坑底面はⅥ層中で平坦、壁の立ち上がりはやや内傾して緩い。覆土2・3層は崩落、1層は流れ込みである。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-36 (図IV-1-36/表1~4)

特徴 調査範囲南端の緩斜面に位置する。V層上面でT a - cの混入した黒褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅦ層上位でほぼ平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土1層は流れ込み、2層は崩落である。覆土よりV層の土器が出土している。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-37 (図IV-1-37/表1~4)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形。坑底面はV層中で南側に向かってやや上がる。壁の立ち上がりは急である。覆土4層は埋め戻し、1~3層は流れ込みである。覆土よりV群c類土器、剥片が出土した。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-38 (図IV-1-37/表1~4)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面でT a - cが多量に混入した暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形はほぼ円形。坑底面はV層中で丸い。壁の立ち上がりは急である。覆土3・4層は埋め戻し、2層は崩落、1層は流れ込みである。覆土から主としてV群c類、他はV層の土器が出土した。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-39 (図IV-1-37/表1~4/図版17)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形を呈する。掘り込みはやや緩斜度である。坑底面は平坦で、V層中まで達する。覆土は堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中および坑底よりⅣ群c類・V群c類土器(図IV-2-13-71・72)、黒曜石製のRフレイク・Uフレイク・剥片などが出土した。また、上部のⅢ層中より土器集中5が検出されたが、ⅢP-39が埋め戻された後に廃棄されたものである。

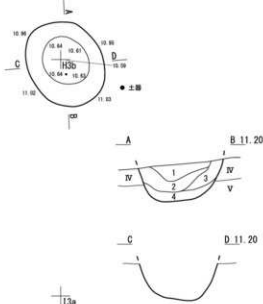
時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-40 (図IV-1-37/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。V層上面でT a - c降下軽石が多量に混在する暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は不整形円形を呈する。掘り込みは緩斜度である。坑底面はⅦ層上位まで達するが、木根による攪乱を受ける。覆土は堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は出土していない。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

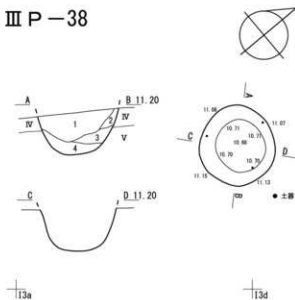
III P-37



III P-37

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 3 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c主体
- 4 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量、En-aがごく少量混じる

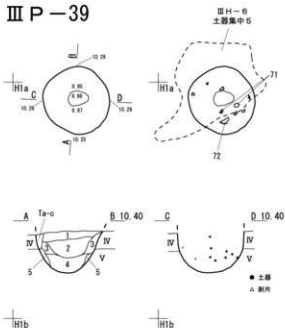
III P-38



III P-38

- 1 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 2 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 3 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 4 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる

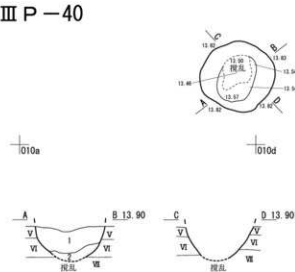
III P-39



III P-39

- 1 10YR3/3暗褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>V
φ1~5mmのTa-c主体
- 2 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 V>IV
φ1~3mmのTa-cが多く混ざる 下部にφ1~3mmの骨片をごくまばらに含む
- 3 10YR2/1黒色壤土 しまり中 粘性中 V>IV
- 4 10YR2/2黒褐色球壤土 しまり強 粘性強 V>IV
- 5 10YR2/1黒色壤土 しまり中 粘性強 V>IV
φ1~3mmのTa-cがごく少量まざる

III P-40



III P-40

- 1 10YR2/3黒褐色壤土 しまり強 粘性なし III>IV
φ1~30mmのEn-aがまばらに混ざる
- 2 10YR2/1黒褐色球壤土 しまり中 粘性弱 III>IV
φ1~5mmのEn-aがごくまばらに混ざる

0 1m

図IV-1-37 III P-37~40

ⅢP-41 (図IV-1-38/表1~4)

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。ⅢP-29を壊している。Ⅳ層上面でT a - c が多量に混入した暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅤ層中で丸い。壁の立ち上がりは急である。覆土1層は埋め戻し、2層は流れ込みである。覆土からⅤ群c類土器、Uフレイク、剥片が出土した。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-42 (図IV-1-38/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面でふい黄褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みはやや急斜度。坑底面は平坦で、Ⅴ層上位まで達する。覆土は緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。ⅢH-6北東側の床-壁面を壊している。坑底面にⅢH-6の柱穴HP-1が検出された。覆土中よりⅤ群c類土器(図IV-2-13-73)が出土した。

時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-43 (図IV-1-38/表1~4/図版17)

特徴 調査範囲南側中央の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面でT a - c 主体の褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅤ層中で平坦。壁の立ち上がりはやや急である。覆土2・3層は埋め戻し、1層は崩落である。覆土から主としてⅤ群c類、他はⅤ層の土器が出土した。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-44 (図IV-1-38/表1~4)

特徴 調査範囲南側中央の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面でT a - c が多量に混入した黄褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は楕円形。坑底面はⅤ層中で丸い。壁の立ち上がりはやや緩い。覆土1・2層は流れ込みである。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-45 (図IV-1-39/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅴ層上面でT a - c 主体の暗褐色土の落ち込みを確認し、Ⅲ層の遺構と判断した。平面形は円形。坑底面はⅤ層中で平坦。壁は北東側で急に、南側でやや内傾して緩く立ち上がる。覆土2層は埋め戻し、1層は流れ込みである。覆土よりⅤ層の遺物が出土した。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-46 (図IV-1-39/表1~4/図版17)

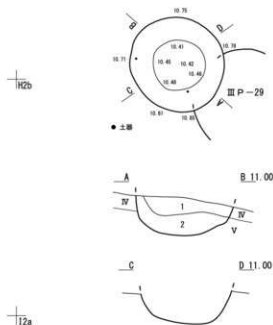
特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上位の攪乱層中に黒褐色土が円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込みはやや急斜度である。坑底面は平坦で、Ⅴ層上位まで達する。覆土は緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅢ群b類・Ⅳ群a類・Ⅳ群b類・Ⅳ群c類土器、黒曜石製のスクレイパー、礫が出土した。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-47 (図IV-1-39/表1~4/図版17)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面

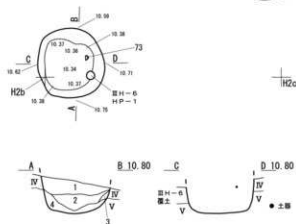
III P-41



III P-41

- 1 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c・炭化物が多量に混じる

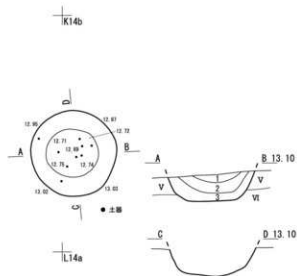
III P-42



III P-42

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂壤土 しまり強 粘性なし
φ1~10mmのTa-c主体
- 2 10YR2/2黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 V>IV
φ1~5mmのTa-cが全体に混ざる
- 3 10YR3/3暗褐色砂壤土 しまり弱 粘性なし
φ1~10mmのTa-c主体
- 4 10YR2/1黒色硬粘土 しまり強 粘性強 V>IV
φ1~5mmのTa-cが全体に混ざる

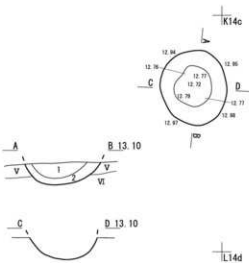
III P-43



III P-43

- 1 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 2 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-c・炭化物が少量混じる

III P-44



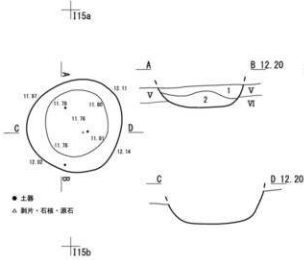
III P-44

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 2 10YR2/3黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる



図IV-1-38 III P-41~44

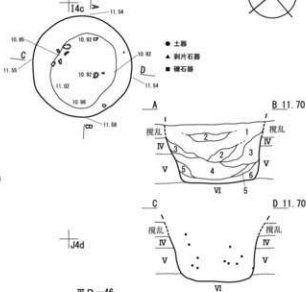
III P-45



III P-45

- 1 10YR2/4暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 2 10YR3/1黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる

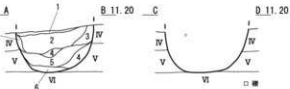
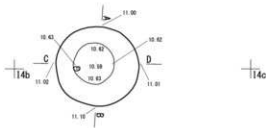
III P-46



III P-46

- 1 10YR2/3黒褐色壤土 しまり強 粘性強 III>IV
- 2 10YR3/3暗褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>面
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂土 しまり強 粘性なし IV層主体 わずかに面層混じる
- 4 10YR2/1黒色壤土 しまり強 粘性強 V>IV
- 5 面層とIV層がブロック状に混ざる
- 6 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性強 V>VI>IV

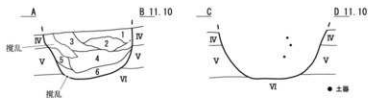
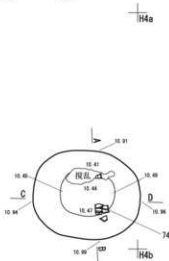
III P-47



III P-47

- 1 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性強 III>IV
- 2 10YR3/3暗褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>V
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV層主体
- 4 10YR3/4暗褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV層主体
- 5 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性強 V>IV
- 6 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性強 V>IV

III P-48



III P-48

- 1 10YR2/3黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
- 2 10YR4/6褐色砂土 しまり強 粘性なし IV層主体
- 3 10YR2/1黒色壤土 しまり強 粘性中 III>IV
- 4 10YR2/1黒色壤土 しまり中 粘性強 V>IV
- 5 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性弱 III>IV
- 6 10YR2/1黒色壤土 しまり弱 粘性強 V>VI

0 1m

図IV-1-39 III P-45~48

形は円形。掘り込みはやや緩斜度。坑底面は平坦で、Ⅵ層上面まで達する。覆土はⅢ層の自然堆積である1層を除いて堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土上位より礫が出土した。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-48 (図Ⅳ-1-39/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みはやや緩斜度。坑底面は平坦で、Ⅵ層上面まで達するが、北西側の壁際で木根により攪乱を受ける。覆土は堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅤ群c類土器(図Ⅳ-2-13-74)、黒曜石製の剥片が出土した。

時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-49 (図Ⅳ-1-40/表1~4/図版17)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みはやや緩斜度。坑底面は平坦で、Ⅶ層上面まで達する。覆土は堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅣ群a類・Ⅳ群b類・Ⅴ群c類土器(図Ⅳ-2-13-75)、石鏃(図Ⅳ-2-18-57)、スクレイパー(58)、Rフレイクが出土した。

時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-50 (図Ⅳ-1-40/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは緩斜度。坑底面は平坦で、Ⅴ層中に達する。覆土はⅢ~Ⅴ層の混成土がブロック状に堆積しており、埋め戻しによるものと考えられる。西側の壁の上位でⅢP-51を壊している。覆土中よりⅣ群b類・Ⅴ群c類土器、剥片が出土した。

時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-51 (図Ⅳ-1-40/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは急斜度。坑底面は平坦で、Ⅶ層上面に達する。覆土はⅢ~Ⅴ層の混成土がブロック状に堆積しており、埋め戻しによるものと考えられる。東側の壁の上位でⅢP-50に壊されている。覆土中よりⅤ群c類土器、礫が出土した。

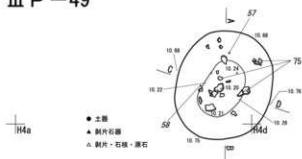
時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

ⅢP-52 (図Ⅳ-1-40/表1~4)

特徴 O4グリッドを調査中、Ⅴ層上面において暗褐色砂礫の円形の拡がりを確認した。東側を半載したところ、底面と壁面を確認したので土坑とした。底面は平坦で壁面はやや開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分層した。1層は流れ込み土、2層は掘り上げ土の埋め戻し土である。遺物は出土していない。Ⅴ層上面で検出したが、形状が周囲から検出されるⅢ層の土坑と類似していることや覆土の状況から、Ⅲ層の土坑とした。Ⅲ・Ⅳ層の部分は重機によって削平されている。

時期 周囲の状況から縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

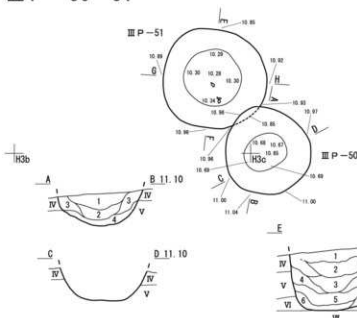
III P-49



III P-49

- 1 10YR2/3黒褐色埴壤土 しまり強 粘性中 III+VI
- 2 10YR3/4暗褐色埴壤土 しまり中 粘性弱 IV>III
- 3 10YR2/3黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 VI>III
- 4 10YR3/4暗褐色砂壤土 しまり強 粘性なし III+VI
ブロック状に混じる
- 5 10YR1/4褐色砂土 しまり弱 粘性なし VI層主体
- 6 10YR2/1黒色埴土 しまり中 粘性強 V層主体
- 7 10YR3/3暗褐色砂壤土 しまり弱 粘性強 VI+V
- 8 10YR2/2黒褐色埴壤土 しまり中 粘性強 V>IV
- 9 10YR2/1黒色埴土 しまり強 粘性強 V層主体
- 10 10YR3/3暗褐色埴土 しまり強 粘性強 V+VI
- 11 10YR3/4暗褐色埴壤土 しまり強 粘性強 VI>V, VI, VII

III P-50・51



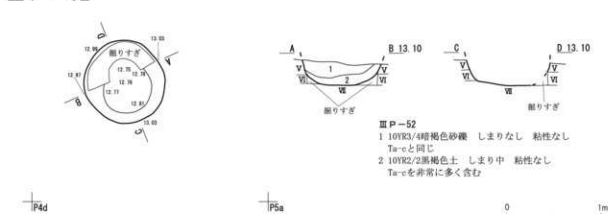
III P-50

- 1 10YR2/2黒褐色埴壤土 しまり中 粘性中 III>IV
- 2 10YR2/1黒色埴壤土 しまり中 粘性強 III>IV
- 3 10YR3/4暗褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV>III
ブロック状に混ざる
- 4 10YR2/2黒褐色埴土 しまり強 粘性強 V>IV

III P-51

- 1 10YR2/2黒褐色埴壤土 しまり中 粘性中 III>IV
- 2 10YR4/4褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV層主体
- 3 10YR2/1黒色埴壤土 しまり中 粘性強 III>IV
- 4 10YR3/4暗褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV>III
ブロック状に混ざる
- 5 10YR2/2黒褐色埴土 しまり強 粘性強 V>IV
- 6 10YR2/2黒褐色埴壤土 しまり弱 粘性強 V>IV

III P-52

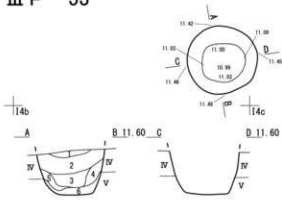


III P-52

- 1 10YR3/4暗褐色砂礫 しまりなし 粘性なし
Ta=vと同じ
- 2 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性なし
Ta=vを非常に多く含む

図IV-1-40 III P-49~52

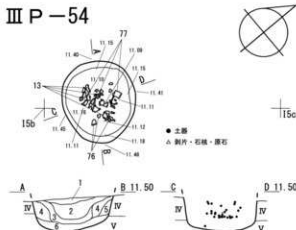
III P-53



III P-53

- 1 10YR2/1黒色埴土 しまり中 粘性中 III層主体
 - 2 10YR3/3暗褐色砂埴土 しまり強 粘性弱 IV>III
 - 3 10YR2/2黒褐色埴土 しまり強 粘性弱 IV>III
 - 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV層主体
 - 5 10YR4/4褐色砂土 しまり強 粘性なし IV>III
- ブロック状に混ざる
- 6 10YR2/2黒褐色埴土 しまり中 粘性強 V>IV

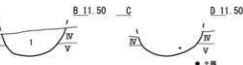
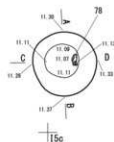
III P-54



III P-54

- 1 10YR2/1黒色埴土 しまり強 粘性中 III層主体
- 2 10YR2/2黒褐色埴土 しまり強 粘性中 III>IV
- 3 10YR2/3暗褐色砂埴土 しまり強 粘性弱 IV>IV
- 4 10YR3/4暗褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV層主体
- 5 10YR3/3暗褐色砂埴土 しまり強 粘性弱 III>IV
- 6 10YR2/2黒褐色埴土 しまり弱 粘性強 V>IV

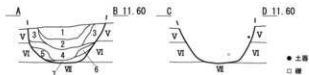
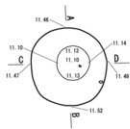
III P-55



III P-55

- 1 10YR3/3暗褐色砂埴土 しまり強 粘性弱 IV>III

III P-57



III P-57

- 1 10YR3/3暗褐色砂埴土 しまり強 粘性なし IV>III
- 2 10YR2/2黒褐色埴土 しまり強 粘性強 III>IV
- 3 10YR2/1黒色埴土 しまり中 粘性強 V層主体
- 4 10YR2/2黒褐色埴土 しまり中 粘性強 V>IV
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂土 しまり弱 粘性なし IV層主体
- 6 10YR4/2灰黄褐色埴土 しまり弱 粘性強 VI>V
- 7 10YR4/4褐色埴土 しまり弱 粘性強 VI>V

図IV-1-41 III P-53~55・57

Ⅲ P-53 (図Ⅳ-1-41/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは急斜度。坑底面は平坦で、Ⅴ層中に達する。覆土はⅢ~Ⅴ層の混成土がブロック状に堆積しており、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅣ群b類土器、Uフレイク、剥片が出土した。
時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

Ⅲ P-54 (図Ⅳ-1-41/表1~4/図版17)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは急斜度。坑底面は平坦で、Ⅴ層中に達する。覆土はⅢ~Ⅴ層の混成土がブロック状に堆積しており、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅣ群a類・Ⅳ群b類・Ⅴ群c類土器(図Ⅳ-2-6-13、13-76-77)、Uフレイク、剥片が出土した。
時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

Ⅲ P-55 (図Ⅳ-1-41/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは緩斜度。坑底面はやや丸みを帯び、Ⅴ層中に達する。覆土は緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅣ群b類・Ⅴ群c類土器(図Ⅳ-2-13-78)が出土した。
時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

Ⅲ P-56 (図Ⅳ-1-42~44/表1~4/図版18)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上面で極暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は楕円形。掘り込みはやや急斜度。坑底面には段が見られ、南側が深い。坑底の最下面は平坦で、Ⅵ層上位に達する。覆土は緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりほぼ完形の土器が倒立して出土した。Ⅴ群c類の大型壺である(図Ⅳ-2-6-14)。土器底外面は、検出面の覆土1層に露出していた。土器内部は上部の約2/3は空洞で、下部の約1/3は粒子が細かく、しまりの弱い黒色土が堆積していた。土器の肩部から頸部付近には大型の黒曜石裂Uフレイク6点(図Ⅳ-2-18-60~63、19-64・65)が重ねて納められていた。これらの剥片を試料として黒曜石原産地同定を行ったところ、すべて赤石山産(赤石山Ⅱ2点・赤石山Ⅲ4点)という結果が得られた(Ⅴ章第3節参照)。
時期 掘り込み面、出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

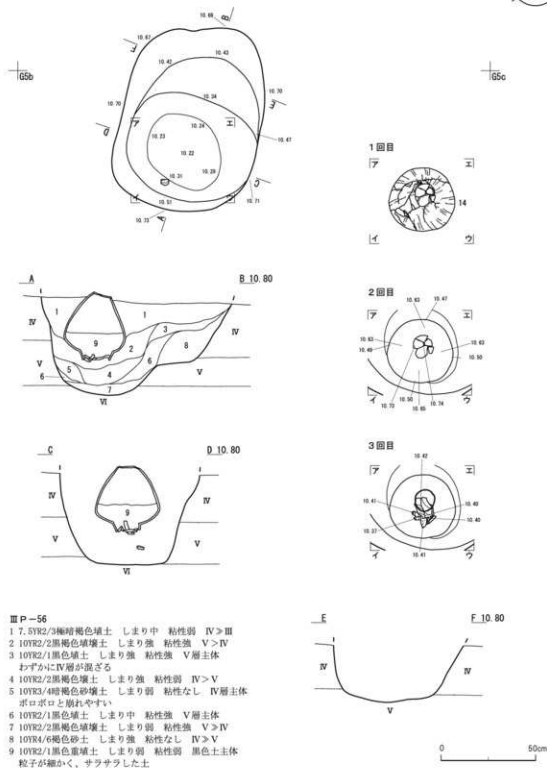
Ⅲ P-57 (図Ⅳ-1-41/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みは緩斜度。坑底面は平坦で、Ⅶ層上面に達する。覆土は緊密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅢ群b類・Ⅳ群b類土器、剥片が出土した。
時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。(芝田)

Ⅲ P-58 (図Ⅳ-1-45/表1~4)

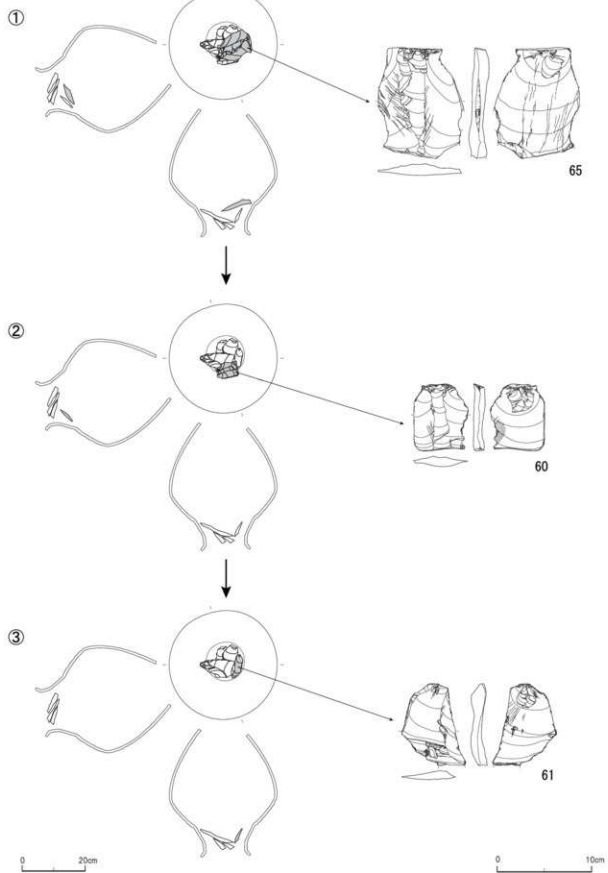
特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅴ層上面で黒~暗褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は円形。掘り込みはやや急斜度。坑底面は中央部が若干低く、Ⅶ層上位まで達する。覆土は自然堆積で、上位はⅢ層土の落ち込み、中~下位は掘り上げ土の流れ込みと壁際からの崩落土、坑底部には腐植

III P-56



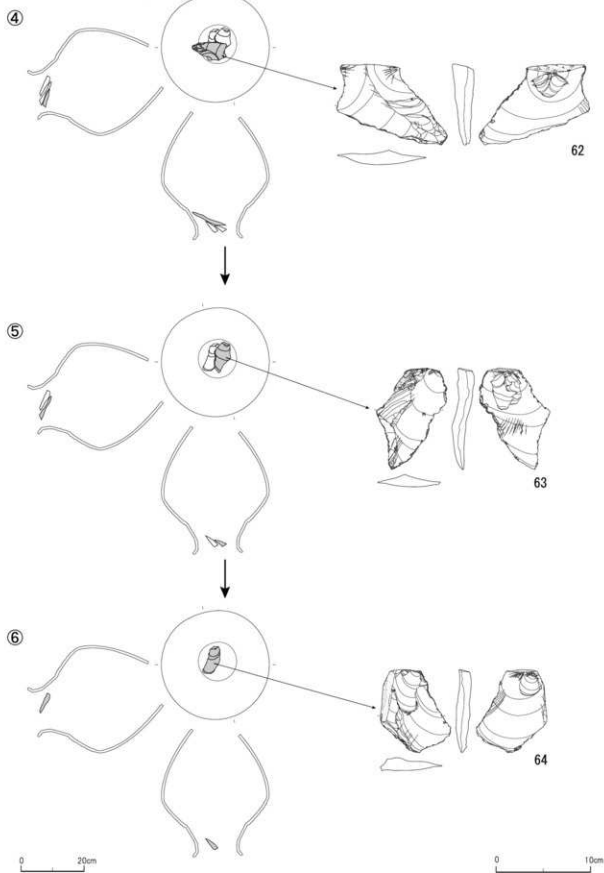
図IV-1-42 III P-56(1)

壺内部剥片出土状況図①



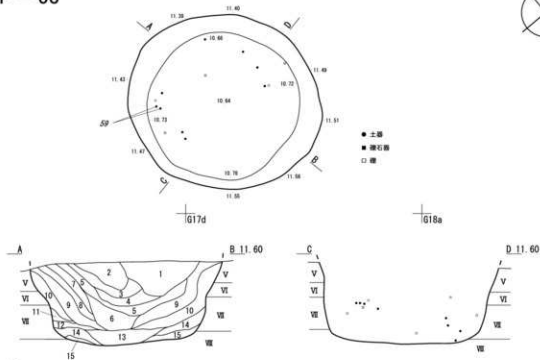
圖IV-1-43 III P-56(2)

壺内部剥片出土状況図②



図Ⅳ-1-44 ⅢP-56(3)

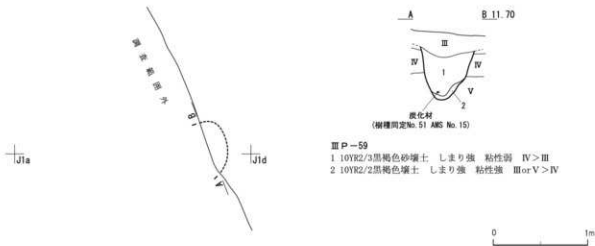
III P-58



III P-58

- 1 10YR2/1黒色土 しまり強 粘性強 III層主体 Ta-c($\phi \sim 5\text{mm}$)が少量混じる 自然堆積(腐植) 木根($\phi \sim 30\text{mm}$)2本あり
- 2 10YR2/3暗褐色土 しまり強 粘性弱 IV層(Ta-c火山灰)主体 III層が少量混入する 自然堆積(盛り上げ土)
- En-a($\phi \sim 5\text{mm}$)が微量に混じる
- 3 10YR2/2黒褐色土 \rightarrow 3/3暗褐色土 しまり強 粘性中 III+IV(混合) En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)が少量混じる 自然堆積(盛り上げ土) 固くしまる
- 4 10YR2/1黒色土 しまり弱 粘性弱 III層主体 Ta-c($\phi \sim 5\text{mm}$)が少量混じる 自然堆積(盛り上げ土) En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)が微量に混じる
- 5 10YR2/3 \sim 3/4暗褐色土 しまり強 粘性中 III+IV(混合) 3よりもIV(Ta-c)が多い 自然堆積(盛り上げ土) En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)が少量混じる
- 6 10YR2/2黒褐色土 しまり弱 粘性強 III \sim VIIの混合 En-a($\phi \sim 15\text{mm}$)が微量に混じる 自然堆積(盛り上げ土) ねっとりしている
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色土 しまり強 粘性強 VI \cdot VII+V(混合) En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)が微量に混じる 自然堆積(盛り上げ土)
- 8 10YR2/1黒褐色土 しまり強 粘性中 III層主体 Ta-c($\phi \sim 5\text{mm}$)が少量混じる 自然堆積(崩落土) 固くしまる
- 9 10YR1/4 \sim 4/6褐色土 しまり強 粘性弱 IV層(Ta-c火山灰)主体 腐植土ブロックあり 自然堆積(崩落土)
- 10 10YR1/7/1黒色土 しまり弱 粘性強 V層主体 Ta-cブロック($\phi \sim 30\text{mm}$)あり En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)が微量に混じる 自然堆積(崩落土)
- 11 10YR4/4褐色土 しまり弱 粘性強 VII層主体 自然堆積(崩落土) ねっとりしている
- 12 10YR1/7/1黒色土 しまり弱 粘性強 腐植土 En-a($\phi \sim 10\text{mm}$)少量混じる 自然堆積(腐植)
- 13 10YR1/7/1黒色土 しまり弱 粘性強 腐植土 ロームブロック($\phi \sim 50\text{mm}$)あり 自然堆積(腐植) ねっとりしている
- 14 10YR5/6黄褐色土 しまり弱 粘性強 VII層主体 自然堆積(崩落土) 部分的にしまっている
- 15 10YR2/2 \sim 2/3黒褐色土 しまり弱 粘性強 腐植土とEn-aの混合 自然堆積(腐植)

III P-59



III P-59

- 1 10YR2/3黒褐色砂壤土 しまり強 粘性弱 IV>III
- 2 10YR2/2黒褐色壤土 しまり強 粘性強 IIIorV>IV

図IV-1-45 III P-58・59

土が認められた。覆土中よりⅡ群b類・Ⅲ群b類土器、たたき石（図Ⅳ-2-18-59）、礫が出土した。
時期 掘り込み面がⅢ層中であることから、縄文時代晩期後葉～アイヌ文化期と考えられる。（芝田）

ⅢP-59（図Ⅳ-1-45/表1～4）

特徴 調査範囲南側断面のⅢ～Ⅴ層中で黒褐色土の落ち込みを確認した。調査範囲内の包含層調査において検出できず、土坑はすでに掘削してしまった。調査範囲内に位置していたのは全体の約1/3以下と推測され、平面形などの形状は不明である。掘り込み面はⅢ層下位である。覆土は堅密性が高く、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中よりⅤ群c類土器、スクレイパーが出土した。覆土1層より採取した炭化材1点を試料として、年代測定・樹種同定を行った。放射性炭素年代測定（AMS法）では、暦年校正年代で $2363 \pm 30\text{yrBP}$ （IAAA-72179）という数値が得られた（Ⅴ章第1節参照）。また、樹種はコナラ属と同定された（Ⅴ章第3節参照）。

時期 掘り込み面、周辺の土坑の出土遺物から、縄文時代晩期後葉である。（芝田）

ⅢP-60（図Ⅳ-1-46/表1～4/図版18）

特徴 調査範囲南側西端の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層上位で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土5層は埋め戻し、4層は崩落、2・3層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土から主としてⅤ群c類土器（図Ⅳ-2-13-79）が、他はⅤ層の土器が出土している。

時期 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代晩期後葉と考えられる。（菊池）

ⅢP-61（図Ⅳ-1-46/表1～4）

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層上位で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土6層は埋め戻し、4・5・7層は崩落、2・3層は流れ込み、1層はⅢ層。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。（菊池）

ⅢP-62（図Ⅳ-1-46/表1～4）

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層上位で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土6層は埋め戻し、4・5層は崩落、2・3層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土から主にⅤ層の土器が出土した。

時期 周辺の遺構・出土遺物より縄文時代晩期後葉と考えられる。（菊池）

ⅢP-63（図Ⅳ-1-47/表1～4）

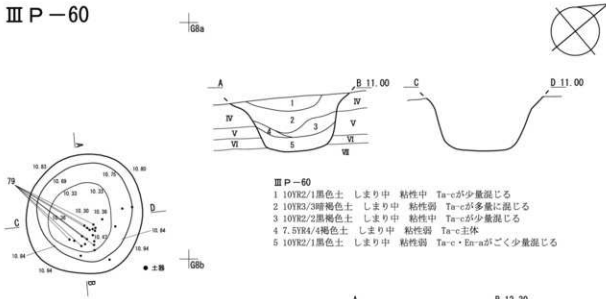
特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅥ層中で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土7層は埋め戻し、3～6層は壁の崩落と流れ込み、2層は流れ込み、1層はⅢ層。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物より縄文時代晩期後葉と考えられる。（菊池）

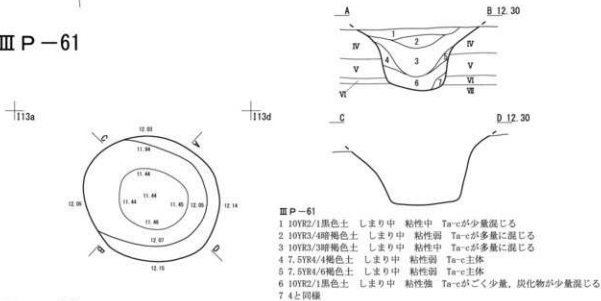
ⅢP-64（図Ⅳ-1-47/表1～4）

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。

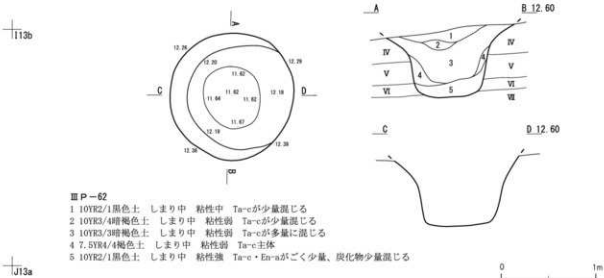
III P-60



III P-61

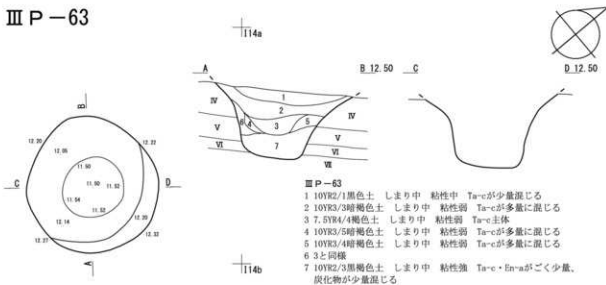


III P-62

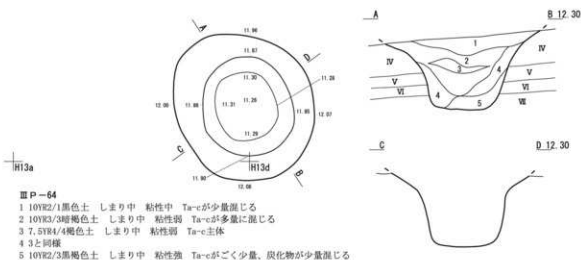


図IV-1-46 III P-60~62

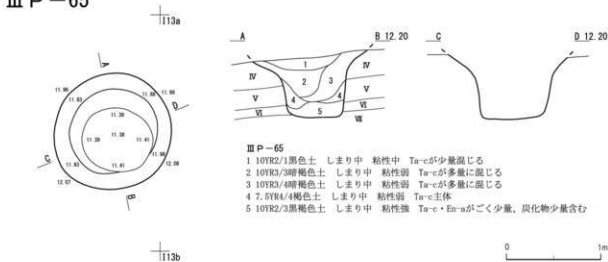
III P-63



III P-64



III P-65



図IV-1-47 III P-63~65

坑底面はⅦ層中で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土6・7層は埋め戻し、3～5層は壁の崩落と流れ込み、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土から礫が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-65 (図IV-1-47/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅦ層上位で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土5層は埋め戻し、4層は崩落、2・3層は壁の崩落と流れ込み、1層はⅢ層。覆土からⅤ層の土器が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-66 (図IV-1-48/表1~4/図版18)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。南側に隣接するⅢP-67を壊している。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅦ層上面で平坦。壁は南側でほぼ垂直に、北側はやや急に立ち上がる。坑口部は崩落のため開いている。覆土7層は埋め戻し、3～6層は崩落、2層は流れ込み、1層はⅢ層。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-67 (図IV-1-48/表1~4/図版18)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。北側の壁面の一部をⅢP-66に壊されている。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅦ層中で丸い。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土5層は埋め戻し、3・4層は崩落、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土からⅤ層の土器が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-68 (図IV-1-48/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。東側が攪乱を受ける。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形はほぼ円形。坑底面はⅦ層上面で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土5層は埋め戻し、4・5層は崩落、2・3層は流れ込み、1層はⅢ層。遺物は出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-69 (図IV-1-49/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形はほぼ円形。坑底面はⅦ層上面で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土5層は埋め戻し、3・4層は崩落、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土からⅤ層の遺物が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

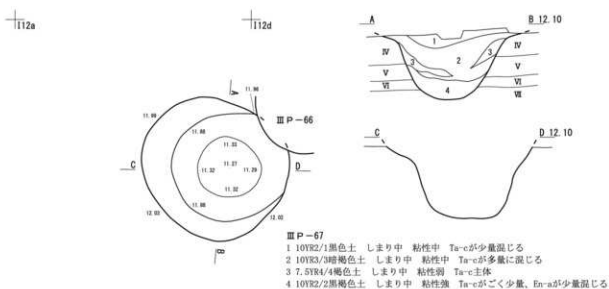
ⅢP-70 (図IV-1-49/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は不整形円形。坑底面はⅦ層中で平坦。壁は南西側でほぼ垂直に、北東側でやや急に立ち上がる。坑口部は崩落のため開いている。覆土6層は埋め戻し、4・5層は崩落、2・3層は流れ込み、1層はⅢ層。

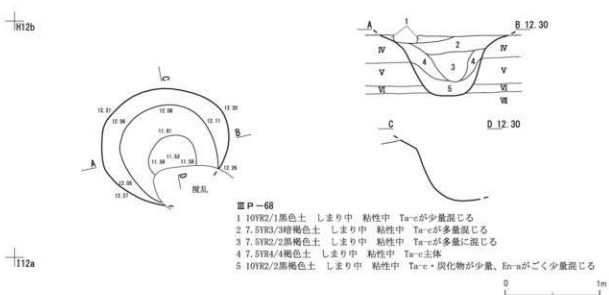
III P-66



III P-67

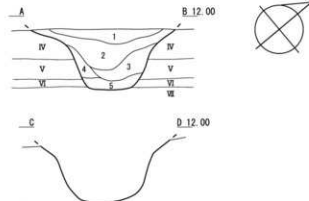
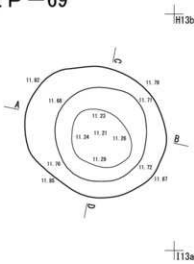


III P-68



図IV-1-48 III P-66~68

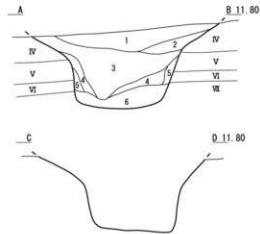
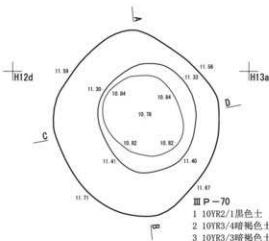
III P-69



III P-69

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 3 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 4 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 5 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる

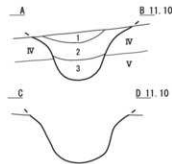
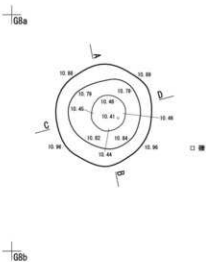
III P-70



III P-70

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 10YR3/4暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 3 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 4 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 5 10YR2/2黒褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 6 10YR4/4褐色土 しまり中 粘性中 Ta-c・炭化物が少量、En-aごく少量、En-Lが多量に混じる

III P-71



III P-71

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが多量に混じる

図IV-1-49 III P-69~71

覆土からV層の遺物が出土している。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-71 (図Ⅳ-1-49/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はV層中で丸い。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土3層は埋め戻し、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土より主にV層の土器が出土している。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-72 (図Ⅳ-1-50/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅤ層上位で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土9層は埋め戻し、3~8層は壁の崩落と流れ込み、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土よりV層の遺物が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-73 (図Ⅳ-1-50/表1~4/図版18)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はⅤ層中で平坦。壁の立ち上がりは急で、坑口部が崩落のため開いている。覆土7層は埋め戻し、3~6層は壁の崩落と流れ込み、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土よりV層の土器が出土した。

時期 周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-74 (図Ⅳ-1-50/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形で、坑底面はⅤ層中で平坦。壁の立ち上がりは急であり、坑口部が崩落のため開いている。覆土6層は埋め戻し、5層は崩落、2~4層は流れ込み、1層はⅢ層である。遺物は覆土よりV群c類土器が出土した。

時期 出土遺物と周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-75 (図Ⅳ-1-51/表1~4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面に位置する。IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形。坑底面はV層中で平坦。壁の立ち上がりは急である。覆土4層は埋め戻し、3層は崩落、2層は流れ込み、1層はⅢ層。覆土よりV群c類土器、石斧が出土している。

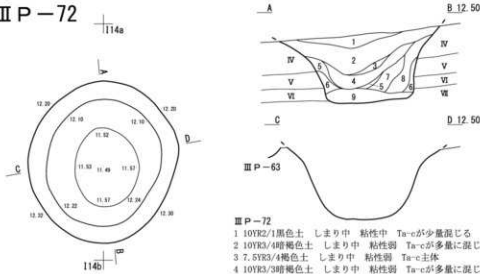
時期 出土遺物と周辺の遺構より縄文時代晩期後葉と考えられる。(菊池)

ⅢP-76 (図Ⅳ-1-51/表1~4)

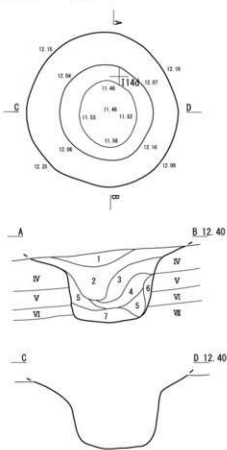
特徴 T a - c 上面において長軸約12mの黒色土を呈する円形の拡がりを検出した。堆積状況・下端・壁面確認のため、拡がり中央に試掘坑を設定した。断面を確認したところ、黒色土を最下層埋土とする土坑墓と判断し、平面形・断面形確定後に坑内の調査を開始した。覆土からは黒曜石製剥片1点が出土した。下端平面形は楕円形、坑底面は平坦、立ち上がりは内弯気味、壁は直線的に外上方へたちあがる。構築面はⅢ層。覆土は6層が埋め戻し土、5層が壁の崩落土、4~2層が流れ込み土、1層がⅢ層の流れ込み土。

時期 縄文時代晩期後葉である。(鈴木)

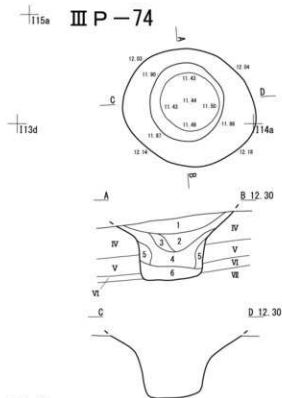
III P-72



III P-73

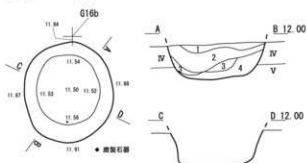


III P-74



IV-1-50 III P-72~74

Ⅲ P-75

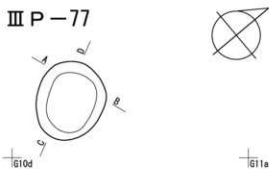


Ⅲ P-75

- 1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 Ta-cが少量混じる
- 2 10YR3/3暗褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-cが多量に混じる
- 3 7.5YR4/4褐色土 しまり中 粘性弱 Ta-c主体
- 4 1と同様

↑H16a

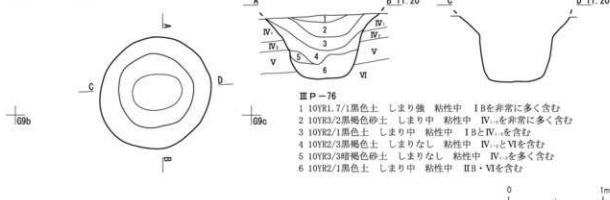
Ⅲ P-77



Ⅲ P-77

- 1 10YR1.7/1黒色土 しまり中 IBを非常に多く含む
- 2 10YR3/2黒褐色砂土 しまり中 粘性中 IV..を多く含む
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 II Bを多く含む

Ⅲ P-76



Ⅲ P-76

- 1 10YR1.7/1黒色土 しまり強 粘性中 IBを非常に多く含む
- 2 10YR3/2黒褐色砂土 しまり中 粘性中 IV..を非常に多く含む
- 3 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 IBとIV..を含む
- 4 10YR2/3黒褐色土 しまりなし 粘性中 IV..とVIを含む
- 5 10YR3/3暗褐色砂土 しまりなし 粘性中 IV..を多く含む
- 6 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中 II B・VIを含む

図Ⅳ-1-51 Ⅲ P-75~77

Ⅲ P-77 (図Ⅳ-1-51/表1~4)

特徴 Ta-c上面において長軸約0.8mの黒色土を呈する楕円形の拡がりを検出した。堆積状況・下端・壁面確認のため、拡がり中央に試掘坑を設定した。断面を確認したところ、黒色土を最下層埋土とする土坑墓と判断し、平面形・断面形確定後に坑内の調査を開始した。下端平面形は楕円形、坑底面は平坦、立ち上がりはやや角ばる、壁は直線的に上方へたちあがる。構築面はⅢ層。覆土は3層が埋め戻し土、2層が流れ込み土、1層がⅢ層の流れ込み土。

時期 縄文時代晩期後葉である。

(鈴木)

(4) 小ピット**ⅢSP-1～132** (図Ⅳ-1-52～55/表1～4/図版19)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上において、径25cm未満の小ピットが疎らに検出された。これらの大部分は断面が柱穴状であるが、複数基が円形や方形の配列を成して建物跡の外形が想定できるものはない。また、周辺のⅢ層で検出された縄文時代晩期、弥生文化期、近世アイヌ文化期の住居跡からは離れており、付属する遺構ではないと考えられる。Ⅲ層中の焼土や灰集中、集石なども関連しない。しかし、Ⅳ層で検出されたものが大半であることから、周辺のⅢ層中に検出できなかった小ピットが存在し、これらとともに掘立柱建物を構成していた可能性がある。

いずれも掘り方などは見られないため、打ち込みによるものと推測される。先端(坑底部)はⅣ層中までのものが大半である。Ⅴ層まで達するものは、断面が垂直ではなく、傾斜あるいは湾曲するという特徴がある。坑底部の形状は尖るものが多いが、角形(ⅢSP-32)や丸みを帯びるもの(ⅢSP-116・117・125・126)もある。遺物は、ⅢSP-54より出土した礫1点のみである。ⅢSP-82・117はⅤ層以下の調査で検出され、覆土などからⅢ層の遺構と判断されたものである。

調査の進捗により、ⅢSP-1～5・7～9・11・12は近世アイヌ文化期の平地式住居ⅢH-1のHP-1～10に、ⅢSP-17・18・39～42・49・50・57～65・67・68・81は同じくⅢH-2のHP-1～20へ変更した。また、ⅢSP-6・10・15・16・20・22～28・30・31・37・38・43～48・51・53・66・69・72・74・76～78・80・85・87・88・90・91・97～99・102～108・113は、土層断面の観察により、木根や小動物の巣穴、近現代の攪乱などと判明したため、欠番とした。

時期 Ⅲ層中より打ち込まれたものと推測されること、周辺のⅢ層で検出された遺構・遺物から、縄文時代晩期後葉、弥生文化期、近世アイヌ文化期のいずれかの時期である。(芝田)

(5) 焼土**ⅢF-1** (図Ⅳ-1-56/表1～4/図版20)

特徴 N5グリッドを調査中、Ⅲ層上面において明褐色～極暗褐色の焼土を検出した。断面はレンズ状でよく焼けている。遺物は出土していない。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

ⅢF-2 (図Ⅳ-1-56/表1～4)

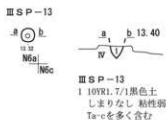
特徴 O5グリッドを調査中、Ⅲ層上面において褐色の焼土を検出した。断面はレンズ状でよく焼けている。遺物は出土していない。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

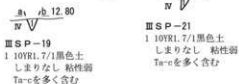
(6) 灰集中**ⅢA-1** (図Ⅳ-1-56/表1～4)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅲ層中で灰と焼土粒、炭化材を含む灰黄褐色土の広がりを検出した。土層断面を観察したところ、被熱層は形成されておらず、単一の灰層を確認したことから灰集中と判断した。下部のⅢ層との層界は明瞭であることから、廃棄されたものと考えられる。灰層の平面形は不整形で、最大厚は約8cmを測る。周辺の包含層からはⅤ群c類・Ⅶ群土器、剥片、加工痕のある礫、礫などが、灰層よりもやや下位で出土している。このほか、土壌フローテーション処理により、サケ科歯・歯骨・上顎鎖骨・骨盤・椎骨、コイ科方骨・椎骨、マイマイ殻、種子(コナラ

III SP-13・14



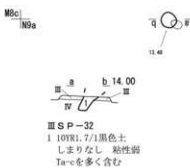
III SP-19・21



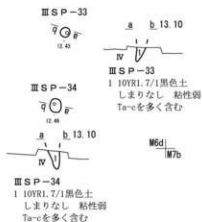
III SP-29



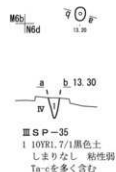
III SP-32



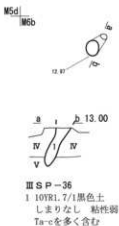
III SP-33・34



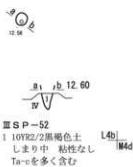
III SP-35



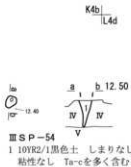
III SP-36



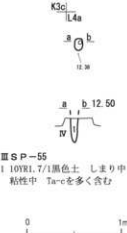
III SP-52



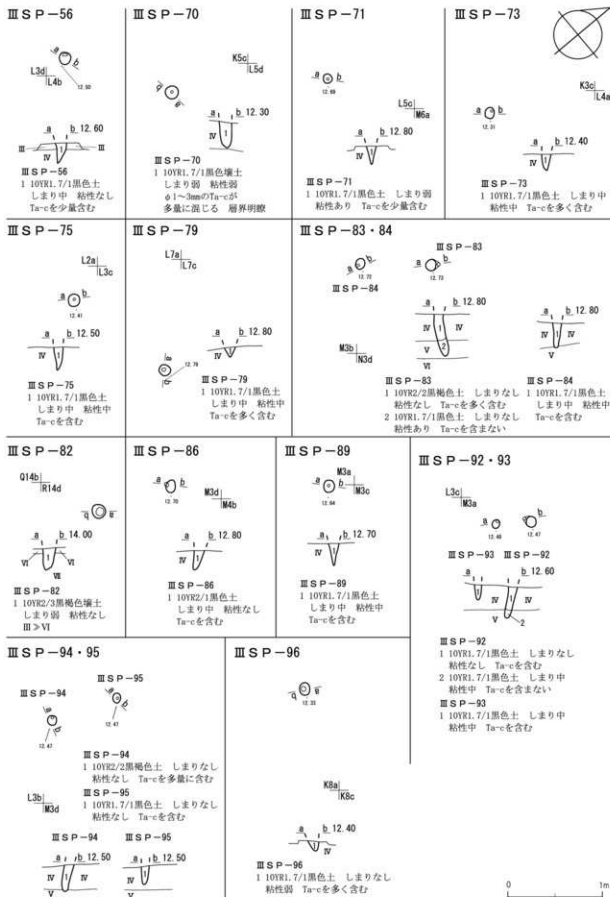
III SP-54



III SP-55

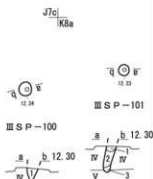


図IV-1-52 III SP-13・14・19・21・29・32~36・52・54・55



図IV-1-53 III SP-56・70・71・73・75・79・82-84・86・89・92-96

Ⅲ SP-100・101



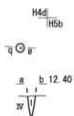
Ⅲ SP-100

1 10YR1.7/1黒色土 しまりなし
粘性弱 Ta-cを多く含む

Ⅲ SP-101

1 10YR1.7/1黒色土 しまりなし
粘性弱 Ta-cを多く含む
2 10YR2/3黒褐色土 しまり弱
粘性弱 Ta-cを多量に含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂土
しまり弱 粘性弱
Ta-cを多量に含む

Ⅲ SP-115



Ⅲ SP-115

1 10YR1.7/1黒色土 しまり弱
粘性弱 φ1~3mmのTa-cが多量
に混じる 層界明瞭

Ⅲ SP-119

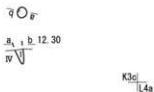


K4c
L5a

Ⅲ SP-119

1 10YR1.7/1黒色土
しまり弱 粘性弱
φ1~3mmのTa-cが
多量に混じる 層界明瞭

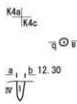
Ⅲ SP-109



Ⅲ SP-109

1 10YR1.7/1黒色土 しまり弱
粘性弱 φ1~3mmのTa-cが多量
に混じる 層界明瞭

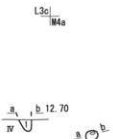
Ⅲ SP-112



Ⅲ SP-112

1 10YR1.7/1黒色土
しまり弱 粘性弱
φ1~3mmのTa-cが
多量に混じる 層界明瞭

Ⅲ SP-116



Ⅲ SP-116

1 10YR2/1黒色土
しまり中 粘性なし
Ta-cを含む

Ⅲ SP-120・121



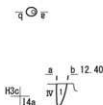
Ⅲ SP-121

1 10YR3/1黒褐色土 しまり中
粘性弱 Ta-cが多量に混じる

Ⅲ SP-120

1 10YR3/1黒褐色土 しまり中
粘性弱 Ta-cが多量に混じる

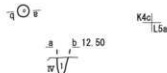
Ⅲ SP-110



Ⅲ SP-110

1 10YR1.7/1黒色土
しまり弱 粘性弱
φ1~3mmのTa-cが
多量に混じる 層界明瞭

Ⅲ SP-114



Ⅲ SP-114

1 10YR1.7/1黒色土 しまり弱
粘性弱 φ1~3mmのTa-cが多量
に混じる 層界明瞭

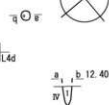
Ⅲ SP-117



Ⅲ SP-117

1 7.5YR3/2黒褐色土
しまり弱 粘性弱
Ta-cが多量に混じる

Ⅲ SP-111



Ⅲ SP-111

1 10YR1.7/1黒色土
しまり弱 粘性弱
φ1~3mmのTa-cが
多量に混じる 層界明瞭

Ⅲ SP-118



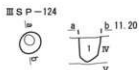
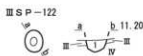
Ⅲ SP-118

1 10YR1.7/1黒色土
しまり弱 粘性弱
φ1~3mmのTa-cが
多量に混じる 層界明瞭
2 10YR2/1黒色土
しまり弱 粘性強
φ1~3mmのTa-cを
まばらに含む 層界明瞭



図N-1-54 Ⅲ SP-100・101・109~112・114~121

III SP-122・123・124

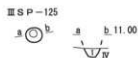
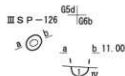


III SP-122
1 10YR2/1黒色土 しまり弱 粘性弱
Ta-cが多量に混じる

III SP-123
1 10YR2/1黒色土 しまり弱 粘性弱
Ta-cが多量に混じる

III SP-124
1 10YR3/2黒褐色土 しまり中 粘性弱
Ta-cが多量に混じる

III SP-125・126



III SP-125
1 7.5YR2/2黒褐色土 しまり弱
粘性弱 Ta-cが多量に混じる

III SP-126
1 7.5YR2/2黒褐色土 しまり弱
粘性弱 Ta-cが多量に混じる

III SP-127・128



111d
112b



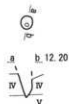
III SP-127
1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-cが多量に混じる



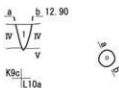
III SP-128
1 10YR2/1黒色土 しまり中 粘性中
Ta-cが多量に混じる

III SP-129

112d
113b



III SP-130



III SP-130
1 10YR2/1黒色土 しまり中
粘性中 Ta-cが多量に混じる

III SP-131・132



H8c
119a



III SP-132
1 10YR3/1黒褐色砂礫
しまり弱 Ta-cが
多量に混じる
2 10YR2/1黒色砂質壤土
しまり弱



III SP-131
1 10YR2/1黒色砂質壤土
しまり強
2 10YR1.7/1黒色壤土
しまり強

0 1m

図IV-1-55 III SP-122~132

亜属子葉・コナラ亜属果皮・堅果・堅果子葉・キイチゴ属・マメ科・シソ科・イネ科など)が得られた。このうちイネ科種子はイネ、堅果子葉はクリの可能性(表9)。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(芝田)

ⅢA-2 (図Ⅳ-1-56/表1~4/図版20)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅲ層中で明褐色の灰のまとまりを検出した。土層断面を観察したところ、被熱層は形成されておらず、灰層を確認したことから灰集中と判断した。下部のⅢ層との層界は明瞭であることから、廃棄されたものと考えられる。灰層の平面形は不整楕円形で、最大厚は約3cmを測る。焼土粒や炭化材、自然遺物は混在していない。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(芝田)

(7) 集石

ⅢS-1 (図Ⅳ-1-57/表1~4/図版20)

特徴 M3グリッドを調査中、Ⅲ層上面においてややまとまった状態で礫が検出された。Ⅲ層中から複数の礫が近接して出土することが非常に少ないため、集石として調査を行った。下部に掘り込み等は確認されなかった。遺物は、礫が23点出土している。転石で、扁平な棒状礫や楕円礫が多い。石材は凝灰岩(78%)、泥岩(17%)、砂岩(5%)である。大きさは長さ4.5~10.0cm、幅3.1~5.5cm、厚さ1.0~3.5cm、重さ17.1~140.3g。平均は、長さ6.7cm、幅4.0cm、厚さ2.3cm、重さ31.2gとなる。総重量は717.3g。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

ⅢS-2 (図Ⅳ-1-58/表1~4/図版20)

特徴 L・M3グリッドを調査中、Ⅲ層上面において礫がやや散乱した状態で検出された。Ⅲ層中から複数の礫が近接して出土することが非常に少ないため、集石として調査を行った。下部に掘り込み等は確認されなかった。遺物は剥片2点、礫125点が出土している。礫は転石で、扁平な棒状礫や楕円礫が多い。石材は凝灰岩(47%)、泥岩(28%)、砂岩(9%)、その他(16%)である。大きさは長さ4.0~12.4cm、幅2.5~6.5cm、厚さ0.7~3.6cm、重さ17.7~158.1gである。平均は、長さ6.2cm、幅4.1cm、厚さ2.1cm、重さ46.9gとなる。総重量は5862.2g。ⅢS-3と接合する遺物もあることから、これらは同時期に形成されたと考えられる。

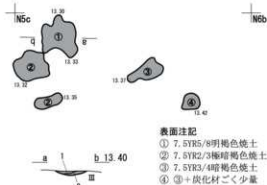
時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

ⅢS-3 (図Ⅳ-1-57/表1~4/図版20)

特徴 L5グリッドを調査中、Ⅲ層上面において礫がやや散乱した状態で検出された。Ⅲ層中から複数の礫が近接して出土することが非常に少ないため、集石として調査を行った。下部に掘り込み等は確認されなかった。遺物は剥片1点、石斧片1点、礫20点が出土している。礫は転石で、扁平な棒状礫や楕円礫が多い。石材は凝灰岩(38%)、泥岩(38%)、その他(24%)である。大きさは長さ2.6~14.5cm、幅1.8~5.7cm、厚さ0.9~3.2cm、重さ5.9~142.7gである。平均は、長さ6.8cm、幅4.3cm、厚さ2.1cm、重さ60.8gとなる。総重量は1215.7g。ⅢS-2と接合する遺物もあることから、これらは同時期に形成されたと考えられる。周辺の土壌をフローテーション処理した結果、種子(マメ科)が得られている。

時期 検出層位から1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

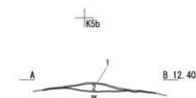
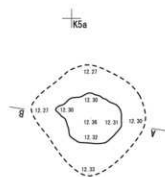
III F-1



III F-2

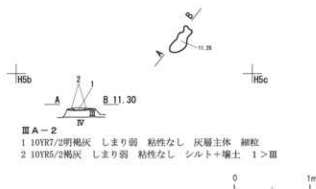


III A-1

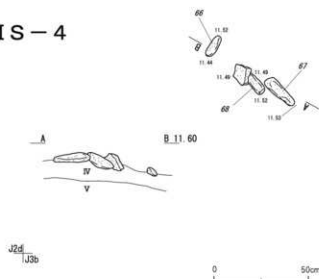


- III A-1
 1 10YR4/2灰黄褐色焼土 しまり中 粘性弱
 φ1~3mmの焼土粒(10YR6/6褐色)をまばらに含む
 層との層界は不明瞭だが、焼土粒の有無で区分できる
 層主体
 2 10YR7/4にぶい黄褐色焼土 しまり中 粘性弱
 φ1~30mmの炭化物を多く含む
 部分的にブロック状の灰(10YR5/2灰色)を含む
 φ1~3mmの焼土粒(10YR6/6褐色)をまばらに含む
 層界は明瞭 灰層主体

III A-2

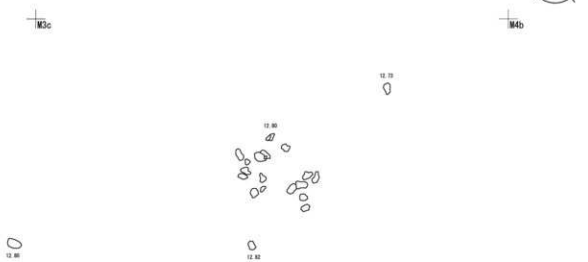


III S-4

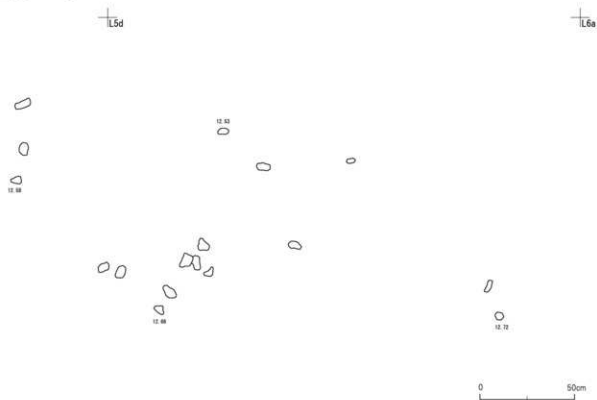


図IV-1-56 III F-1・2、III A-1・2、III S-4

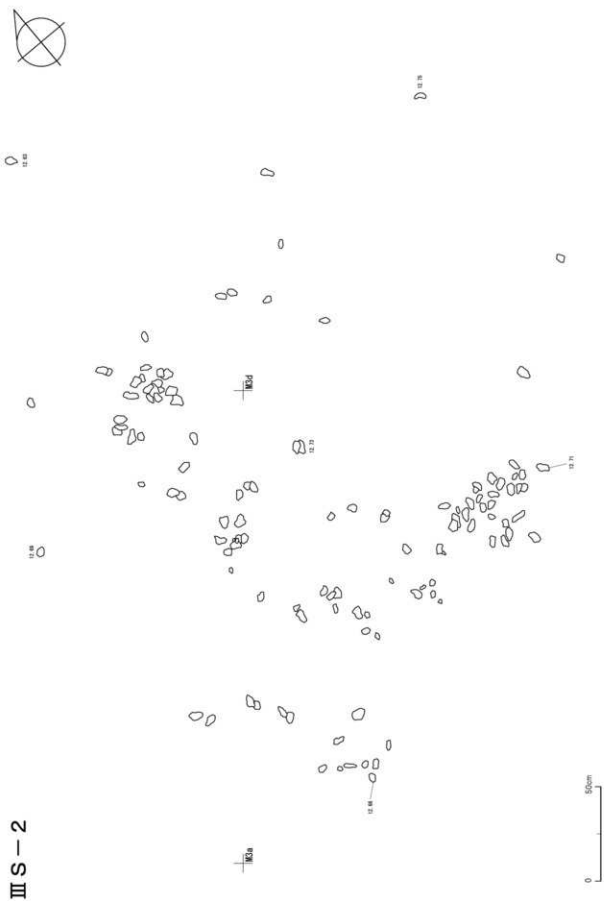
III S - 1



III S - 3



图IV-1-57 III S-1·3



Ⅲ S-4 (図Ⅳ-1-56/表1~4/図版20)

特徴 調査範囲南西側の緩斜面上に立地する。Ⅳ層上位で検出された。ほぼ原位置と判断されることから、T a - c 降下中に形成されたと推測される。0.55m×0.15mほどの範囲に礫4点が連なるように並ぶ。礫の内訳は、たたき石2点(図Ⅳ-2-19-66・67)、すり石1点(68)、自然礫1点である。

時期 検出層位から縄文時代晩期後葉と考えられる。(芝田)

(8) 道跡

Ⅲ R-1 (図Ⅳ-1-59/表1~4/図版20)

特徴 調査範囲東南側、祝梅川右岸の標高11~12m付近の緩斜面にある。Ⅲ層上面を調査中、幅50cmほどの帯状の硬化面を確認した。調査範囲南端からはほぼ等高線に沿って北へ40mほど進み、縄文文化期の堅穴住居跡ⅢH-8・9を西から北側へ迂回して祝梅川へ向かっている。断面を確認すると浅く凹んでいるが、人為的な掘り込みなどは確認されなかった。深さは1~4cmほどである。凹みの直下は周辺の包含層に比べてしまりが強い。これらのことからこの帯状の範囲を踏み分けにより形成された道跡と判断した。

時期 遺物などを伴っておらず、直接的に判断できるものはない。しかし、①検出層位がⅢ層上面であり、T a - a 降下よりもそれほど時間が遡らないと推測される、②ⅢH-8の掘り上げ土よりも上位で形成されており、あえて住居のくぼみ避けるように迂回している、③近世アイヌ文化期の平地住居跡ⅢH-1・2の前小屋部分が道跡の方を向いている、④隣接する梅川4遺跡でも類似の遺構が検出されており、多量の近世アイヌ文化期の遺物を伴っている(千歳市教委2002、北埋調報未報告・次年度以降報告予定)、などの理由により、1739年以前の近世アイヌ文化期と考えられる。(酒井)

2 遺構出土の遺物

(1) 土器等

① 掲載基準

本報告書では、分類→接合状況→器種→施文→製作技術→使用痕を基準として掲載した。

接合状況 接合の結果、器形を復元できたものを「復元資料」、できなかったものを「破片資料」とした。復元資料は実測図、破片資料は拓影図として掲載している。同一個体の口縁→胴部と底部が接合せず、実測図上で器形を復元したものが一部ある。

器種 V群c類は、倒円錐台形の器形のもを器高と口径の比率によって分けた。すなわち、器高が口径の4/5以上のものを「深鉢」、4/5未満2/3以上のものを「鉢」、2/3未満1/3以上のものを「浅鉢」、1/3未満のものを「皿」と呼称する。また、胴部に比して著しく窄まる頸部を有するものを「壺」、上面観が楕円形で長軸の両端に突起や貼付を有するものを「舟形」と呼称する。

V群には「甕」「坏」「高坏」「鉢」「甌」「壺」などの器種がある。本遺跡では、甕・坏が主体であり、甌や壺は出土していない。また、須恵器の高台付坏が1個体出土している。

施文 V群c類は、「江別市対雁2遺跡(8)」(北埋調報231)における形態分類および文様名称を参考にした。基本的に口唇装飾→下地調整→背景文様→上描き・直描き文様→付加要素の順に記述する。破片資料については特徴的な文様のみ略述する。口唇装飾は口縁部端面に施される施文のことで、回転縄文、縄側面圧痕、棒側面圧痕、指頭圧痕、縄端圧痕などがある。下地調整とは、文様のある土器の施文以前の状態を示し、「無文(ナデのまま)」「回転縄文」などがある。背景文様とは、複数の文様が重複・分断して描かれる場合、口縁部を廻るように展開し、上描き文様の下敷きとなる単純な文様のことで、「横位縄側面圧痕」「横位沈線」「櫛目状沈線」などがある。上描き文様とは、背景文様の上に描かれる文様、直描き文様とは、背景文様がなく下地に直接描かれる文様である。主に沈線による「斜位・縦位線文」「蛇行線文」「括弧文」「断続・連続山形文」などがある。付加要素は、主たる上描き・直描き文様の内部または周縁に付け加えられる文様で、貼付帯、刺突(列)、ナデ消し凹帯などがある。底部が残存するものについては、「平底」「丸底」「凸底」「凸平底」などに形態分類した。凸底は、底部円盤のやや内側より胴部の粘土紐を立ち上げたもので、底縁外周が肥厚する。丸底と凸底はいずれも底外面が丸みを帯び自立できないが、凸底には底縁に稜が見られる。凸平底は底部円盤の底外面周縁に輪状の粘土紐を接合したもので、内側が凹む。

浅鉢については、「千歳市キウス5遺跡(5)」(北埋調報125)における鉢形土器3類の部位名称を参考にした。すなわち、口縁部端面の最も装飾性に富んだ突起を前部分と見なして「前突起」、これと対面する後部分の突起を「後突起」、左右部分に相当する突起をそれぞれ「左突起」「右突起」とする。また、前突起から左・右突起までの端面に施文頻度が高い部分を「主飾部」、後突起から左・右突起の手前までの端面に施文頻度が低い部分を「副飾部」と呼ぶ。

V群は、口唇装飾や背景文様・上描き文様が施されないものが多い。内外面の下地調整は「ナデ」「ハケメ」「ミガキ」などがある。直描き文様は大半が沈線によるもので、付加要素である刺突列、短刺刺、貼付帯などと組み合わせる。底部は、甕・坏では平底が大部分である。

製作技術 胎土は、粘土に含まれる岩石・軽石の粒径・密度により以下のように分類した。「緻密」：細粒以下の岩石・軽石を含む、「やや粗」：中粒以上の岩石・軽石を含む、「粗」：中粒以上の岩石・軽石を多く含む。このほか混和材として砂・土器片・繊維などが確認される。土器片は2~5mm大に砕かれたもので、V群c類土器に含まれる例が見られる。器面・破断面の内眼観察により以下のように分類した。「少量」：器面ではまれで、破断面で多く確認される。「中量」：器面でもやや少なく、破断面で多く

確認される。「多量」：器面・破断面ともに多く確認される。

土器の内外面に露呈する破断面のうち、割れ口が水平で、表面がナデられたように滑らかなものを接合面と見なした。外面側が高く、内面側が低くなるものを「内傾接合」、内面側が高く、外面側が低くなるものを「外傾接合」と表現する。このほか内外両面に傾斜する「両傾接合」があるが、本遺跡では出土していない。V群c類土器の接合面の大部分は加工されていないが、地文と同じ回転縄文が施されていた例がある。VII群は接合面が露呈しないが、器面に輪積み痕が残るものがある。

内面の調整は、V群c類の深鉢・鉢・浅鉢の場合、ほぼ水平方向に横ナデされるものが大部分である。工具による条痕を残すものは見られない。主に深鉢の口縁部と底部付近には、指頭による浅い凹みが確認される。壺の内面は口縁部を除き調整が粗く、凹凸が残る。

使用痕 土器の内外面に炭化物が付着する例がある。V群c類は、深鉢に多く、鉢・浅鉢・壺・舟形では少ない。VII群は、甕に多く、坏には見られない。また、深鉢と甕には、煮こぼれによる汁垂れの痕跡と推測される黒色付着物が口縁部を垂下するものがある。

②住居跡

ⅢH-3 (図Ⅳ-2-7-15・16、14-80・81/表5/図版25・32)

15・16・80・81はVII群。15は小型の甕で底部を欠く。口径14.7cm、底径6.2cm、器高14.2cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁部がわずかに外反し、胴部の膨らみは顕著ではない。口縁端面は内湾する。頸部には横位沈線2条が巡り、胴部との間が段状になる。底部は平底で、底縁がやや張り出す。外面は、口縁～頸部と底部がヨコナデ、胴部がタテハケ→タテミガキ。底外面にもハケス。内面は、口縁～頸部がヨコナデ、胴部がヨコハケ→ヨコミガキ。底内面は無調整。胎土は緻密で、細粒砂が少量混和する。口縁部に補修孔が1か所確認される。

16は甕で口縁部を欠く。底径7.7cm、残存器高16.1cmを測る。平底で、底縁がやや張り出す。外面は、胴部がタテハケ、底部がタテハケ→ヨコナデ(工具痕あり)。底外面に葉脈痕。内面は、ヨコハケ。底内面は無調整。内外面に粘土紐の輪積み痕が見られる。胎土は緻密で、細粒砂が微量混和する。

80・81は破片資料。80は坏の胴～底部。外面はヨコミガキ、内面はタテミガキ。底外面にもミガキ。81は高坏の脚部。脚根部を欠損する。外面に段状の横位沈線。

ⅢH-4 (図Ⅳ-2-14-82・83/表5/図版32)

82・83はVII群。82は坏の底部。外面はヨコミガキ、内面は黒色処理が施される。底外面にもミガキ。83は甕の口縁部。口縁端面は内傾。口縁端面・外面・内面はいずれもヨコナデ。

ⅢH-6 (図Ⅳ-2-1-3・8・9/表5/図版22・23・27・28)

1～8・23～46はV群c類。1は鉢で口縁部を欠く。残存する最大径は21.3cm、器高は12.9cmを測る。外面は横位回転R L斜走縄文→やや粗雑な工字状沈線文。2孔1対の補修孔が確認される。底部は凸平底。内面は横ナデ調整で、底内面には擦痕も見られる。胎土はやや粗く、土器片少量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

2は深鉢。推定口径16.1cm、器高21.1cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁端面は水平で、縦位の縄側面により刻まれる。口縁部は小波状。外面は横位回転R L斜走縄文。底部は凸底で、底外面にもL R縄が回転施文される。内面は横ナデ調整で、擦痕が残る。底内面には指頭痕が確認される。胎土はやや粗く、土器片中量と細粒砂・軽石が混和する。内傾の接合面が3段露呈する。

3は深鉢。推定口径21.3cm、器高27.0cmを測る。口縁部がやや内傾する器形で、胴上部での最大径は23.1cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁部には2個1対の山形突起が設けられ(推定4か所)、それぞ

れの突起間は凹む。口縁端面は水平で、L R 縄が回転施文されるが、山形突起部分はナデのまま無文である。外面は横位回転 L R 斜走縄文→屈曲部分に 2 個 1 対のボタン状突起（横位沈線で連結）→口縁部に横位沈線 4 条→口唇直下に上向き連続弧沈線→底縁直上に横位沈線 2 条。底部は凸底で、底外面にも L R 縄が回転施文される。内面は横ナデ調整で、擦痕が残る。屈曲部には段が見られる。底内面には指頭痕が確認され、中央が凹む。胎土はやや粗く、土器片中量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

4 は浅鉢。口径 39.5cm、器高 16.0cm を測る。上面観は楕円形。口縁部には前後左右の突起が設けられる。口縁端面は外傾し、内面にかけて施文される。突起はいずれも台形で、後突起がやや低い。前突起は中央と両端の 3 か所、他の突起は両端の 2 か所に小突起を有する。小突起は頂部が棒側面により刻まれ、その周縁に細い竹管状施文による刺突列が施される。小突起間は前突起が縦位の縄側面圧痕、左突起・右突起は棒側面圧痕、後突起は横位の縄側面圧痕 3 条に 2 個 1 対の棒側面が「八」の字状に圧痕される。前突起の中央、左突起・右突起の後部、後突起の両端の小突起の周縁は半同心円状の縄側面圧痕が施される。主飾部・副飾部は横位の縄側面圧痕 3 ないし 4 条が巡る。主飾部には山形または「八」の字状、副飾部には縦位の棒側面圧痕が上書きされる。副飾部の棒側面圧痕は、小突起と同様に細い竹管状施文による刺突列が施される。また、これら内面の文様帯の下部には竹管状施文による刺突列が巡るが、右突起側の副飾部の一部で途切れる。外面は横位回転 L R 斜走縄文で、網維が著しい。底部は凸底で、回転縄文が施される。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片少量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

5 は深鉢。推定口径 29.0cm、器高 29.8cm を測る。上面観は楕円形に近い。口縁部は平縁。口縁端面は内傾し、L R 回転縄文→棒側面圧痕。外面は横位回転 L R 斜走縄文→横位沈線 3 条。底部は凸底で、底外面にも L R 縄が疎らに回転施文される。内面は横ナデ調整で、指頭痕が残る。胎土は粗く、土器片多量と中粒砂・軽石・繊維が混和する。内傾の接合面が 2 段露呈する。

6 は浅鉢。推定口径 10.2cm、器高 4.6cm を測る。上面観はほぼ円形。口縁部は平縁。口縁端面はやや内傾し、棒側面により刻まれる。外面は無文で、指頭による凹凸が残る。底部は凸底。底縁に棒側面による刺突列、その内側に細い沈線が巡る。底外面には短沈線により「S」字状文が描かれる。内面はナデ調整され、外面同様に指頭による凹凸が残る。胎土は密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

7 は深鉢で底部を欠く。推定口径 23.1cm、残存器高 13.5cm を測る。上面観はほぼ円形。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕が連続して施される。口縁部は緩い小波状で、単峰の山形突起 1 か所が設けられる。外面は横位回転 L R 斜走縄文→横位沈線 4 条→沈線下に竹管状施文による横向きの刺突列→口唇直下に縦位の縄側面圧痕。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

8 は舟形土器で底部を欠く。口径 18.5cm、残存器高 17.8cm を測る。上面観は楕円形。口縁部の長軸両端に双峰の山形突起が設けられる。口縁端面は内傾し（突起部分では外傾）、L R 回転縄文。突起の頂部に棒側面圧痕。外面は横位回転 L R 斜走縄文→長軸両端の突起下部に円形刺突孔→胴中部に幅広いナデ消し凹帯（非平行）→凹帯の短軸上で上方貫入。一部に赤彩の痕跡が見られる。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、土器片少量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

23～46は破片資料。23～31は深鉢の口縁部。23は単峰の山形突起が設けられ、頂部に棒側面圧痕。口縁端面は内傾し、R L 縄文が回転施文される。外面は横位回転 R L 斜走縄文→竹管状施文による刺突列（上下 2 列）で文様帯を区画→内部にやや粗雑な横位沈線 4 条。24は口縁部が緩い小波状、ま

たは低い山形突起を有すると考えられる。口縁端面は水平で、縦位の縄側面圧痕。外面は横位回転R L斜走縄文が施され、口唇直下より横位沈線4条→ナデ消し凹帯+竹管状施工具による刺突列(上下2列)→横位沈線3条→竹管状施工具による刺突列。内外面に炭化物が付着する。25は口縁端面が内傾し、R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕。外面はR L斜走縄文→横位沈線2条+波状沈線。26は口縁端面がやや内傾し、内縁にR L回転縄文→棒側面圧痕。外面はR L斜走縄文→やや粗雑な横位沈線2ないし3条。27は口縁端面が内傾し、R L回転縄文。外面はR L斜走縄文→横位沈線2条(現存)。28は単峰の山形突起を有する。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕。外面は口唇直下ナデのまま→縦位の棒側面圧痕→横位回転R L斜走縄文→波状沈線4条。2孔1対の補修孔が確認される。29は口縁端面が内傾し、R L回転縄文→棒側面圧痕。外面は縦位の櫛歯状細沈線→横位沈線4条→竹管状施工具による横向きの刺突列。30は口縁部が平縁で、胴上部がやや膨らむ器形。口縁端面はやや内傾し、L R回転縄文。外面は横位回転R L斜走縄文が施される。破断面に内側の接合面が露呈する。31は無文で、口縁端面に棒側面圧痕。32~34・37~40は浅鉢の口縁部。32は双峰の山形突起を有する。口縁端面は内傾し、R L回転縄文が施されるが、突起頂部はナデのままである。外面は斜位回転R L横→斜走縄文。内面は口唇直下に沿って1段捲りL縄の側面圧痕が2条巡る。33は突起の一部で、円形刺突孔の位置から4つの小突起が設けられていたと推測される(現存3つ)。小突起の頂部は棒状施工具の先端により刺突される。口縁端面および内外面の口唇直下を跨ぐように縦位の縄側面圧痕が連続して施され、これに直交する横位の縄側面圧痕が上書きされる。外面は横位回転R L斜走縄文(ナデにより不鮮明)。内面は口唇直下に沿って1段捲りR縄の側面圧痕が2条巡る。34は低い台形を呈することから後突起の一部と推測される。口縁端面から内面にかけて、縦位の縄側面圧痕→指頭圧痕による凹み→波状の縄側面圧痕→縦位の棒側面圧痕→同心円状の縄側面圧痕→竹管状施工具による刺突列。外面は横位回転R L斜走縄文。37は山形突起を有する。口縁端面は内傾し、R L回転縄文→内縁の一部に竹管状施工具による刺突列。突起の頂部と両側縁に縦位の棒側面圧痕→突起下部に円形刺突孔。外面は横位回転R L斜走縄文。38は突起の一部で、内面が肥厚する。内面は縦位の縄側面圧痕→凹線による文様。外面はL R斜走縄文(ナデにより不鮮明)。39は小突起の前後で、口縁端面が水平と内傾する部分に分かれる。いずれも口縁端面は縦位の縄側面圧痕が施されるが、突起頂部はナデのままである。内面は無筋L縄の側面圧痕1ないし2条→竹管状施工具による刺突列。外面は横位回転R L斜走縄文。40は外面が剥落により欠失する。口縁端面は内傾し、R L回転縄文→縦位の棒側面圧痕→内縁の一部に竹管状施工具による刺突列。円形刺突孔が1孔確認される。35・36は浅鉢の底部。35は凸底、36は凸平底で、いずれも底外面にも回転縄文が施される。41は広口壺の口縁部。口縁端面は尖り、口唇直下の内外面に縦位の縄側面圧痕。頸部は無文のナデ消し凹帯で、下部に縄端による刺突列が巡る。肩→胴部はR L斜走縄文。42・43は壺の頸→胴部。42は頸部無文帯の下部に瘤状突起が貼り付けられる。肩→胴部はR L斜走縄文が施される。肩部には断面がV字状となる細い沈線が3条巡る。43は頸部無文帯の下部に2個1対の瘤状突起が貼り付けられ、短沈線により結ばれる。肩部には横位沈線4条が回り、その下部に竹管状施工具による刺突列。胴部はL R斜走縄文。内面の剥離が著しい。44は土器集中3より出土した深鉢の口縁→胴上部。上面観は楕円形で、長軸と短軸の両端に山形突起を有していたと推測される。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕。突起の頂部はナデにより凹み、両側縁も指頭により圧痕される。外面は口唇直下ナデのまま→波状沈線4~6条→沈線に沿って竹管状施工具による刺突列→突起下に円形刺突孔→胴部に横位回転R L斜走縄文。内外面ともに剥離が著しい。45は土器集中4より出土した鉢または浅鉢の口縁部。口縁端面は内傾し、R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕。外面は横位回転R L斜走縄文。補修孔が1孔確認される。46は土器集中5より出土し

た浅鉢の口縁→胴中部。やや大きめの山形突起を有しており、前後左右の突起のいずれかに該当すると推測される。口縁端面は内傾し、R L回転縄文→内縁に棒側面圧痕。内面は横位の縄側面圧痕3条→縦位の縄側面圧痕(3条1組)→突起下に指頭圧痕とその周縁に竹管状施工具による刺突列→横位縄側面圧痕の下部に刺突列が2列。外面は横→斜位回転R L斜走縄文。

Ⅲ H-7 (図IV-2-4・10・11/表5/図版24・28~30)

9~11・47~61はV群c類。9は深鉢。口径27.1cm、器高33.6cmを測る。上面観は楕円形に近い。口縁部は平縁。口縁端面は内傾し、L R回転縄文。外面は横位回転L R斜走縄文→縄端による刺突列(上下2列)で口縁部文様帯を区画→3~5条1組の蛇行線文(内部の縄文をナデ消し)→底部は縄端による刺突列(上下2列)でナデ消し凹帯を区画。底部は凸底で、底外面にもL R縄が疎らに回転施工される。内面は横ナデ調整で、擦痕が残る。胎土はやや粗く、土器片少量と中粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

10は鉢。推定口径16.4cm、器高13.0cmを測る。口縁部が直上し、胴部が少し膨らむ器形。上面観は楕円形。口縁部の長軸両端に3連峰の山形突起、側面にやや小さめの山形突起(4か所)を有すると推測される。口縁端面は内傾し、R L回転縄文。外面は横位回転R L斜走縄文→口縁部に4条、胴部に7条の横位沈線→長軸両端の突起下部に円形刺突孔3か所。底部は凸底で、底外面にもR L縄が回転施工される。内面は横ナデ調整で、擦痕が残る。胎土はやや粗く、土器片多量と粗粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

11は浅鉢。推定口径12.9cm、器高4.1cmを測る。上面観は歪んだ円形。口縁部は平縁。口縁端面は内傾する。外面はナデのままで、無文。底部は凸底。内面もナデられており、指頭痕が見られる。胎土はやや粗く、土器片少量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

47~61は破片資料。47~52は深鉢の口縁部。47は口縁部が屈曲する器形で、内面に段が見られる。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕。口縁部文様帯はナデ消し凹帯で区画され、内部は無文(ナデのまま)→蹄歯状細沈線による連続山形文とこれに直交する短沈線→ナデ消し凹帯と連続山形文の周縁に竹管状施工具による刺突列。胴部は横位回転R L斜走縄文。48は口縁部がやや外反する器形で、鉢の可能性もある。口縁端面は内傾し、L R回転縄文。外面はL R斜走縄文→ナデによる浅い沈線→瘤状突起。内面の口唇直下にも浅い沈線1条が巡る。内面に炭化物が付着する。49は平縁。口縁端面は内傾し、内外縁に縦位の縄側面圧痕→指頭圧痕。外面は横位回転R L斜走縄文→ナデ消し凹帯+上下に竹管状施工具による刺突列。50はR L、51・52はL Rの斜走縄文が外面に施される。いずれも口縁端面は内傾し、50・51は縦位の縄側面圧痕、52はL R回転縄文。51は口縁端面内縁に棒側面圧痕、内面の口唇直下に疎らな横位の1段摺りL縄側面圧痕。64(ⅢP-24出土)と同一個体の可能性がある。52は口縁端面外縁が指頭により圧痕される。53・54は深鉢の胴部。いずれも横位回転R L斜走縄文。54は破断面に外傾の接合面が露呈する。55~59は浅鉢の口縁部。いずれも突起部分で、55・57・59はL R、56・58はR Lの斜走縄文が外面に施される。55は頂部に縦位の縄側面圧痕→内面の突起下部に下向き弧状の縄側面圧痕。56は頂部に指頭圧痕→内面に下向き弧状の縄側面圧痕→横位の縄側面圧痕3条に縦位の縄側面圧痕を上書き。57は口縁端面および内面に横位の縄側面圧痕→縦位の棒側面圧痕。58はR L回転縄文→縦位の棒側面圧痕。59は低い台形を呈することから後突起と推測される。中央が指頭により深く弧状に凹む。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕→縦位の棒側面圧痕。内面は1段摺りRの縄側面圧痕が突起下は2条、副胴部は1条巡る。胴部に補修孔が1か所確認される。60・61は浅鉢の底部。60は凸底、61は丸底で、いずれも外面にR L回転縄文が施される。

ⅢH-8 (図Ⅳ-2-7-17~22, 14-84~87/表5/図版25・26・32)

17~21・84~87はⅦ群。17は小型の甕。口径14.2cm、底径6.4cm、器高13.0cmを測る。上面観は歪んだ円形。口縁部の外反はごくわずかで、胴部もほとんど膨らまない器形。口縁端面は丸く、外縁の一部が斜めに刻まれる。口唇直下に微隆起線1条が巡る。口縁部と胴部の間にナデによる段が見られる。底部は平底。外面は、口縁部がヨコナデ、胴上部がヨコハケ→タテミガキ(一部ヨコミガキ)、胴中~底部がタテハケ→タテミガキ。底外面はナデ。内面は、口縁部がヨコナデ、胴上部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴中~底部はヨコハケ→タテミガキ。底内面は無調整。胎土は緻密で、細粒砂が少量混和する。外面に汁垂れ痕が見られる。

18は口縁~胴部と底部が接合しなかった。口径23.7cm、底径8.1cm、推定器高31.4cmを測る。上面観は楕円形。口縁部がやや外反し、胴上部が緩やかに膨らむ器形。口縁端面は内湾する。口縁~頸部には段状の横位沈線。底部は平底。外面は、口縁~頸部がヨコナデ、胴上部がヨコハケ、胴中~底部がタテハケ。底外面はハケメ→ナデ。内面は、口縁~頸部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴~底部はヨコハケ。底内面は無調整。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が少量混和する。内外面に炭化物が付着する。

19は甕で口縁部を欠く。胴部の最大径22.4cm、底径8.3cm、残存器高30.0cmを測る。上面観は楕円形と推測される。頸部には横位沈線が多段に巡り、胴部との間に刺突列。底部は平底。外面は、胴部がタテハケ→タテミガキ(光沢あり)、底部はヨコナデ。底外面にもミガキ(磨滅)。内面は、頸~胴上部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴中~底部がヨコハケ→タテミガキ。底内面は無調整。胎土は緻密で、細粒砂(長石が多い)が少量混和する。内外面に炭化物が付着する。

20は小型の坏で、口唇を欠損する。底径4.4cm、残存器高5.1cmを測る。口縁部が直上ぎみに立ち上がる器形と推測される。底部は平底。外面は、口縁部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴部がタテハケ→ヨコミガキ、底部がタテハケ→ナナメミガキ。底外面はナデ。内面は、ヨコミガキあるいはナナメミガキ。胎土は緻密で、細粒砂が少量混和する。

21は須恵器の高台付坏。口縁の一部を欠損する。口径13.1cm、底径6.3cm、器高7.5cmを測る。体部は下半から上半にかけて外反せず、緩やかに立ち上がる。高台はやや外へ踏ん張る。甕付きは丸みを帯びる。内外面に、轆轤回転によるヨコナデの調整痕。底外面には回転糸切り痕。

22は紡錘車。上面観は円形、側面観は台形で、上辺・側辺が凹む形状。上辺の最大径4.9cm、下辺の最大径6.1cm、厚さ2.2cmを測る。外面は丁寧なミガキが施される。中央の貫通孔は楕円形を呈する。胎土は緻密で、細粒砂(長石が多い)・軽石が混和する。

84~87は破片資料。いずれも掘り上げ土出土。84は甕の口縁部。口縁端面は水平。口唇直下にヨコナデにより段が設けられる。外面はヨコハケ→ヨコミガキ。内面はヨコナデ。85は甕の口縁~頸部で、口唇を欠損する。外面は、口縁部がヨコナデ、頸部が横位の櫛歯状沈線。内面はヨコハケ。86は坏の口縁~胴部。口縁部が直上ぎみに立ち上がる器形と考えられる。口縁端面は丸みを帯びる。外面はヨコミガキ、内面は黒色処理が施される。87は甕の胴部。外面はタテハケ、内面はヨコハケ。

ⅢH-9 (図Ⅳ-2-14-88~91/表5/図版32)

88~90はⅦ群。88は甕の口縁~頸部。外面は、口縁部がヨコナデ、頸部がヨコハケ→横位沈線。内面はヨコナデ。89は坏の胴部。内外面ともにヨコハケ→ヨコミガキ。90は甕の底部。平底で、底縁が張り出す。外面はタテハケ、内面はヨコ~ナナメハケ。底内面は無調整。

ⅢH-10 (図Ⅳ-2-14-92~95/表5/図版32)

91~94はⅦ群。91・92は甕の口縁~頸部。91は、外面がヨコナデ→口唇直下に短刺線列→ナデにより頸部に段を作出→疎らな横位沈線、内面がヨコナデ。92は、口縁端面が内湾し、外面がヨコナデ→

横位沈線、内面がヘラナデ。93・94は甕の頸～胴部。外面は、頸部がヨコハケ→横位沈線、胴上部がヨコハケ→タテミガキ。内面は、ヨコハケ→ヨコナデ。94は、外面タテハケ、内面ヨコハケ。

③土坑

Ⅲ P-2 (図IV-2-12-62/表5/図版30)

62はV群c類。浅鉢の口縁部。口縁端面は尖り、内縁に縦位の縄側面圧痕、外縁に縄端圧痕。台形の突起の中央と両端には小突起が設けられ、その頂部にも縦位の縄側面圧痕。外面はL R斜走縄文。

Ⅲ P-3 (図IV-2-12-63/表5/図版30)

63はV群c類。浅鉢の口縁部。口縁端面は内傾し、R L回転縄文が施される。低い台形突起の両端には小突起が設けられ、これらを横位の縄側面圧痕2条が結ぶ。内面の口唇直下には、不整な横位沈線1条が巡る。外面はR L斜走縄文(ナデにより不鮮明)。

Ⅲ P-24 (図IV-2-5-12、12-64/表5/図版24・30)

12-64はV群c類。12は深鉢で底部を欠く。口径40.4cm、残存器高24.9cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁部には山形突起が2連峰2か所、3連峰2か所の計4か所設けられる。口縁端面は内傾し、R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕(突起頂部はナデのまま)。外面は、横位回転のL R・R L斜走縄文を交互に施し、羽状としている。口縁部は、波状沈線で区画した内部の縄文をナデ消し、斜位の櫛目状沈線をやや粗雑に施す。口唇直下には、2ないし3条1組の1段折りR縄圧痕が巡り、山形突起の両側で垂下する。山形突起下には5条1組の蛇行沈線、突起間には連結括弧沈線。内面は横ナデ調整で、指頭痕が見られる。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

64は破片資料で、大型深鉢の口縁～胴中部。上面観は不明。口縁端面は水平で、縦位の縄側面圧痕→内縁に棒側面圧痕。円形刺突孔の上部の口唇が欠損しており、ここに突起が設けられていた可能性がある。内面の口唇直下に横位の1段折りL縄側面圧痕2条が巡る。外面は横位回転のL R斜走縄文(ナデにより不鮮明)。内面はナデ調整され、指頭痕が残る。胎土は緻密で、細粒砂(石英が多い)・軽石が混和する。接合面は露呈していない。外面に汁垂れ痕が見られる。内面に炭化物が付着する。51(ⅢH-7出土)と同一個体の可能性がある。

Ⅲ P-28 (図IV-2-12-65/表5/図版30)

65はV群c類。深鉢の口縁部。口縁端面は内傾し、R L回転縄文。外面は横位回転R L斜走縄文が施される(ナデにより不鮮明)。

Ⅲ P-30 (図IV-2-12-66/表5/図版31)

66はV群c類。浅鉢の底部。凸底で、外面にR L回転縄文。

Ⅲ P-31 (図IV-2-13-67~69/表5/図版31)

67~69はV群c類。67・68は深鉢の口縁部。67は口縁端面水平。端面と外面に疎らな無筋L縄文。68は口縁端面内傾。外面はL R斜走縄文→波状沈線。円形刺突孔の一部が確認される。69は浅鉢の口縁部。口縁端面はやや内傾し、縦位の縄側面圧痕→指頭圧痕により周縁が肥厚する。外面はL R斜走縄文(ナデにより不鮮明)。円形刺突孔が1孔確認される。内面に炭化物が付着する。

Ⅲ P-34 (図IV-2-13-70/表5/図版31)

70はV群c類。深鉢の口縁部。口縁端面は内傾し、縦位の縄側面圧痕。外面はR L斜走縄文。

Ⅲ P-39 (図IV-2-13-71・72/表5/図版31)

71-72はV群c類。71は深鉢の口縁部。口縁端面は内傾。山形突起を有するが、頂部を欠損する。外面はL R斜走縄文。72は深鉢の胴部で、R L斜走縄文。内面に炭化物が付着する。

ⅢP-42 (図Ⅳ-2-13-73/表5/図版31)

73はV群c類。浅鉢の突起部分。頂部および側縁に棒側面圧痕。内面に下向き弧状の繩側面圧痕→その下部に竹管状施文具による刺突列。外面はL R斜走繩文。

ⅢP-48 (図Ⅳ-2-13-74/表5/図版31)

74はV群c類。深鉢の胴部。外面にL R斜走繩文。破断面に内傾の接合面が露呈する。

ⅢP-49 (図Ⅳ-2-13-75/表5/図版31)

75はV群c類。深鉢の胴部。外面にR L斜走繩文が施される。

ⅢP-54 (図Ⅳ-2-6-13, 13-76・77/表5/図版31)

13・76・77はV群c類。13は深鉢で底部を欠く。推定口径30.4cm、残存器高22.0cmを測る。上面観は不明。口縁部には単峰の山形突起が2か所残存する。口唇直下は内外面ともに肥厚し、内面には爪痕が残る。口縁端面は内傾し、R L回転繩文→外縁に指頭圧痕。外面は、斜位回転R L斜走繩文→横位沈線4条。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、中粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。口縁部に2孔1対の補修孔が1か所見られる。内外面に炭化物が付着する。

76・77は破片資料。76は浅鉢の口縁部。口縁端面は内傾し、縦位の繩側面圧痕。山形突起の両端に小突起を有するが、頂部を欠損する。外面はR L斜走繩文が施されるが、突起部分はナデのままである。77は深鉢の胴部。外面にL R斜走繩文。破断面に内傾の接合面が露呈する。

ⅢP-55 (図Ⅳ-2-13-78/表5/図版31)

78はV群c類。深鉢の底部。凸底で、外面にL R回転繩文が施される。内面が著しく剥落する。

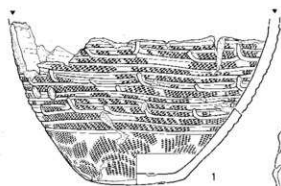
ⅢP-56 (図Ⅳ-2-6-14/表5/図版24)

14はV群c類の壺。口径14.1cm、胴部の最大径33.1cm、底径11.0cm、器高42.5cmを測る。上面観は円形。肩部の最大径がほぼ水平で、均整がとれている。底部は平底。口縁～底部には、頸部無文帯を除き、斜位回転R L縦走繩文が施される。口縁部に山形突起4か所が設けられていたと推測されるが、2か所を欠損する。突起頂部および口唇は棒状施文具によって刺まれる。山形突起の内面は肥厚し、R L繩が回転施文される。口縁部外面には、山形突起間に4か所のボタン状突起が貼り付けられ、横位沈線によって連結される。また、山形突起を単位として、対向する三角形あるいは半月形の凹部が削られている。頸部無文帯との間には、4条の深い横位沈線が廻っている。頸部は丁寧に磨かれ、幅広い無文帯となっている。頸部の幅は一定ではなく(5.2~6.2cm)、やや傾いている。肩上部には、竹管状施文具により横向きに刺突された瘤状突起が、横位沈線によって連結されている。肩中央部は、横位沈線を交互に連結することで、幅の狭い横位連続工字文を上下4段に施している。肩下部の横位沈線3条は連結されていない。胴部外面は削り、磨きによって丁寧に調整されており、滑らかである。R L縦走繩文は明瞭で、ナデや使用による摩滅はほとんど見られない。また、器外面に使用痕や赤色顔料は確認されなかった。底面は無文で、繩文は見られない。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が少量混和する。接合面は露呈していない。

ⅢP-60 (図Ⅳ-2-13-79/表5/図版31)

79はV群c類。大型の深鉢の口縁～胴中部。口縁部が内屈する器形。口縁端面は内傾し、R L回転繩文→指頭圧痕。外面は横位回転R L斜走繩文→屈曲部に瘤状突起とこれらを連結する横位沈線→その下部に横位沈線2条。内面はナデ調整され、指頭痕が残る。胎土はやや粗く、土器片・細粒砂・軽石・繊維が混和する。接合面は露呈していない。内面に炭化物が付着する。(芝田)

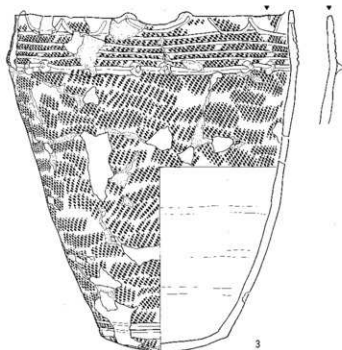
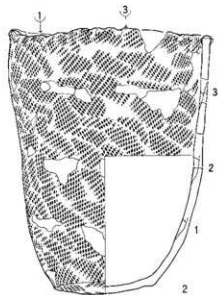
ⅢH-6 (土器集中2)



(土器集中4)

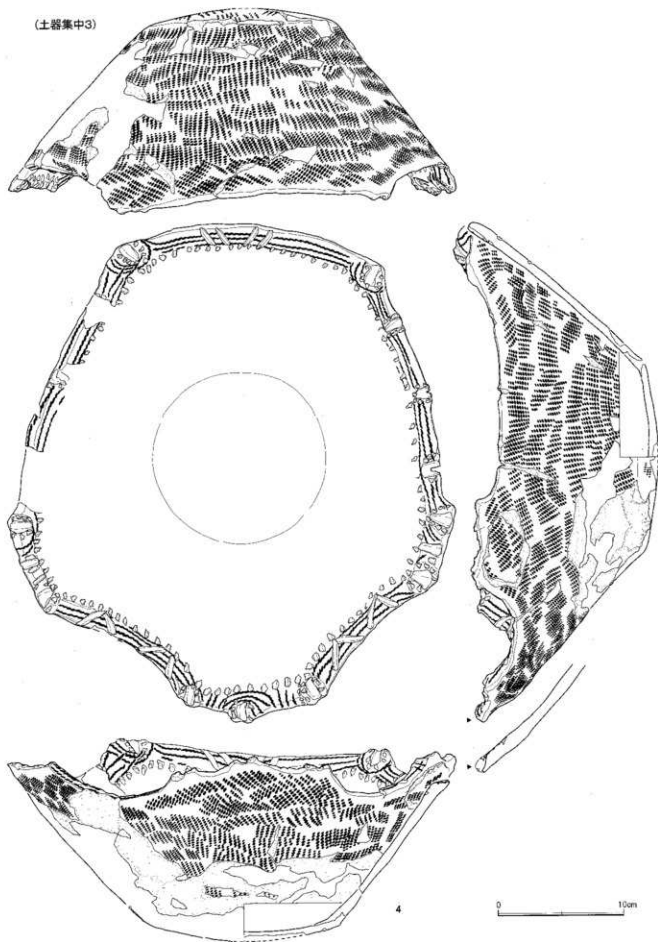


(土器集中3)

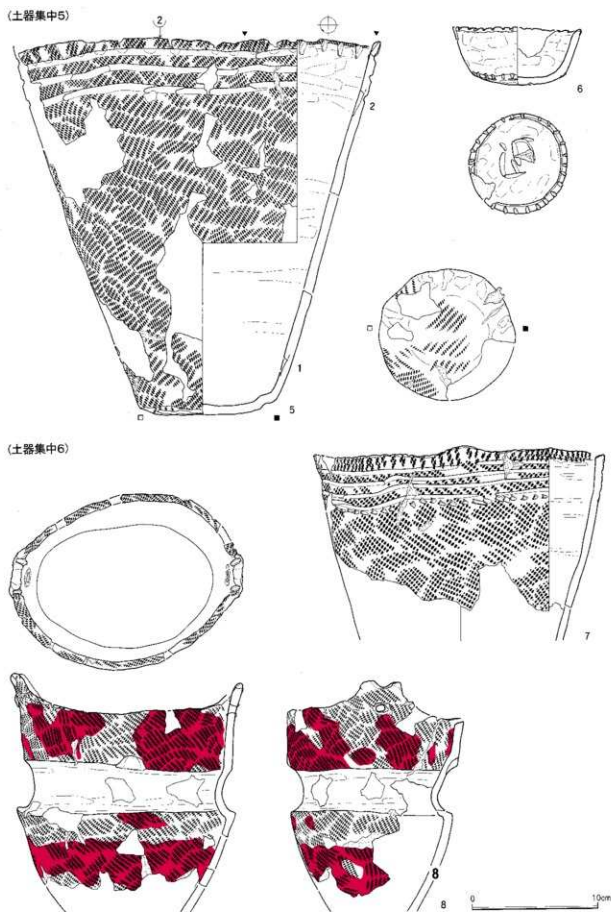


図Ⅳ-2-1 遺構の土器等(1)

(土器集中3)

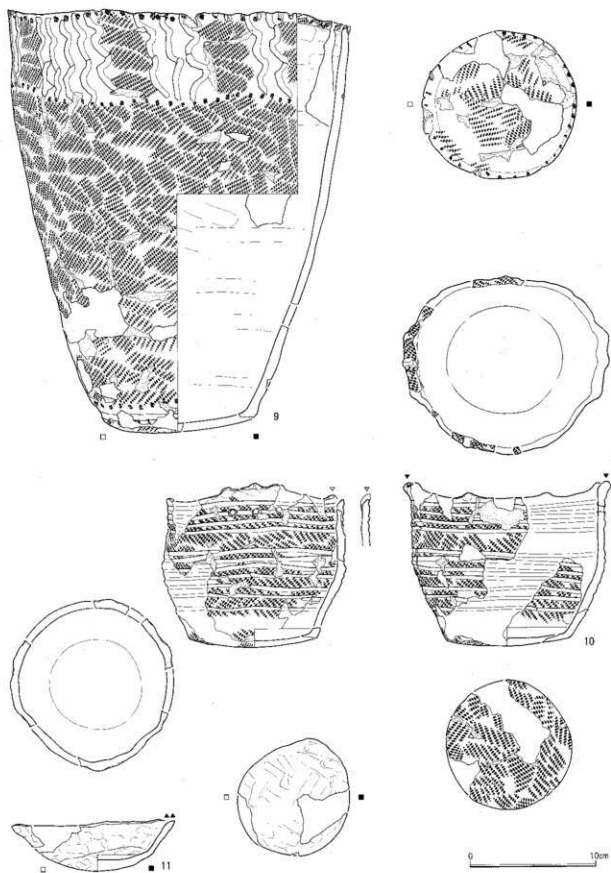


図Ⅳ-2-2 遺構の土器等(2)



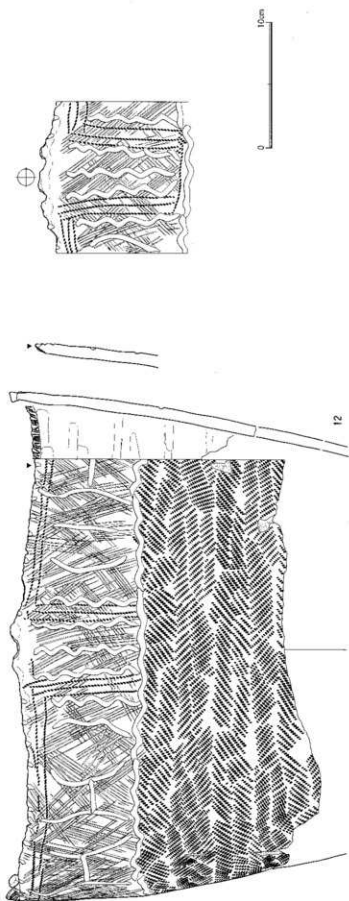
図IV-2-3 遺構の土器等(3)

ⅢH-7



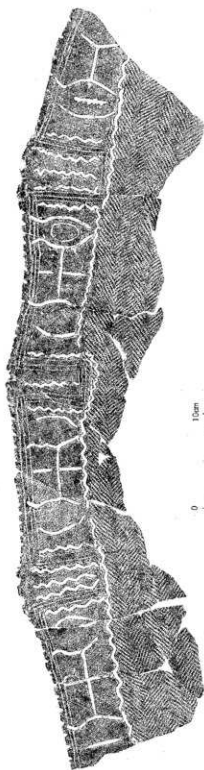
図Ⅳ-2-4 遺構の土器等(4)

III P-24



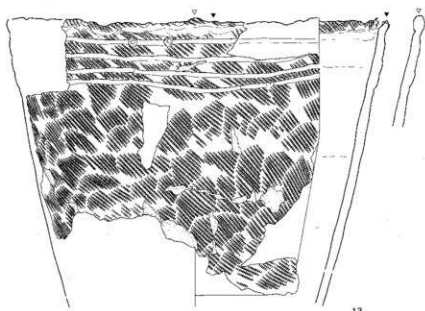
12

IV 祝梅川小野遺跡

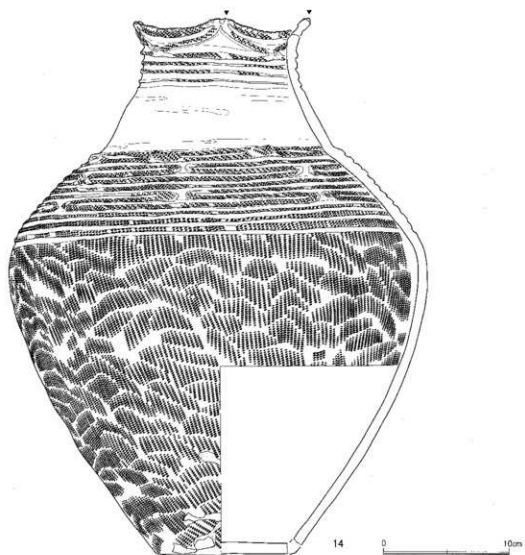


図IV-2-5 遺構の土器等(5)

III P-54



III P-56



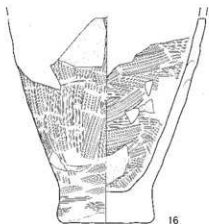
図Ⅳ-2-6 遺構の土器等(6)

ⅢH-3

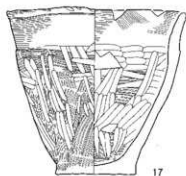


15

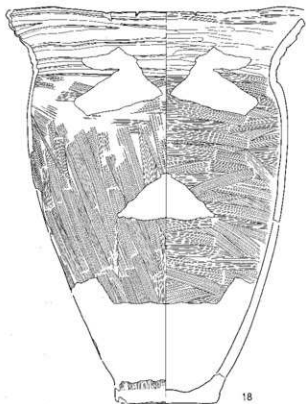
ⅢH-8



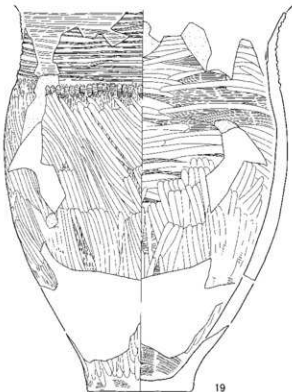
16



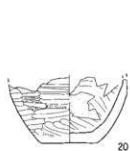
17



18



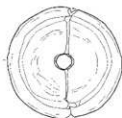
19



20



21



22

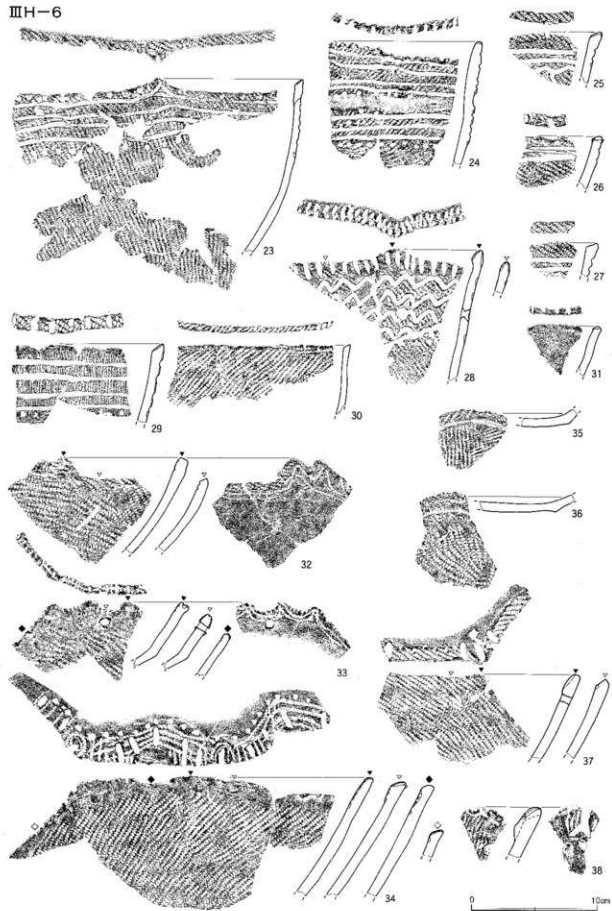


0 10cm

0 5cm

図Ⅳ-2-7 遺構の土器等(7)

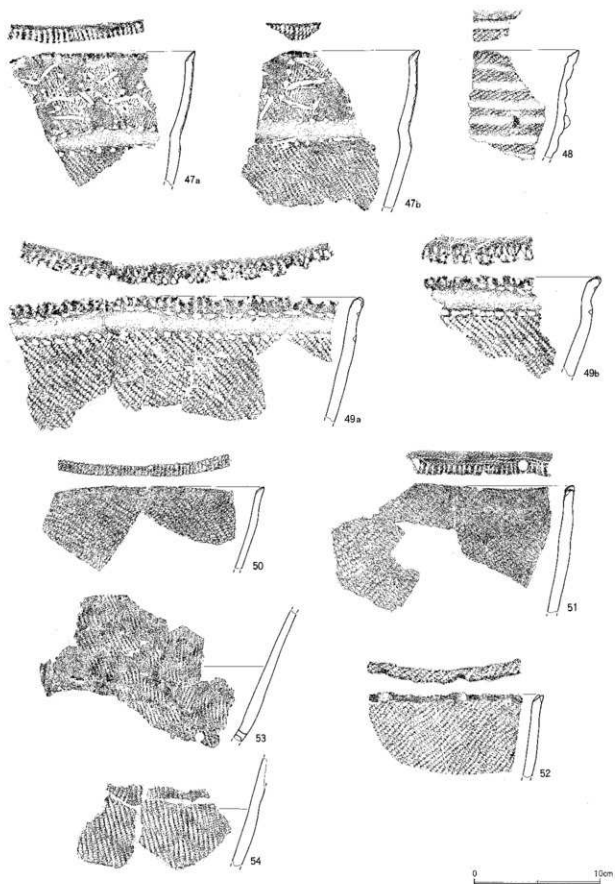
IIIH-6



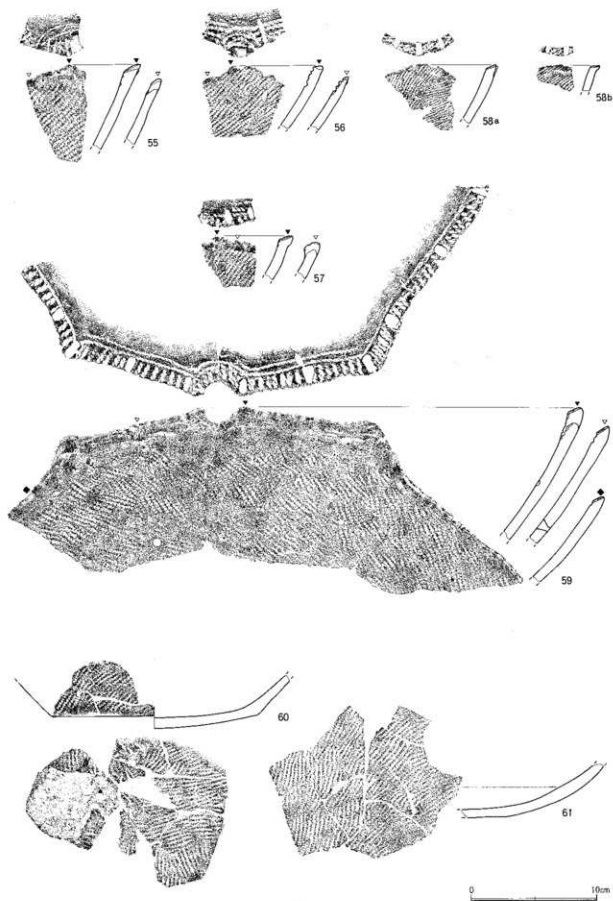
図IV-2-8 遺構の土器等(8)



図IV-2-9 遺構の土器等(9)



図IV-2-10 遺構の土器等(10)

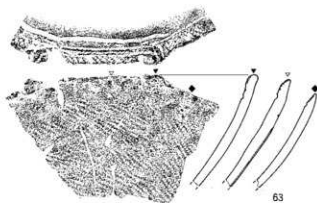


図IV-2-11 遺構の土器等(11)

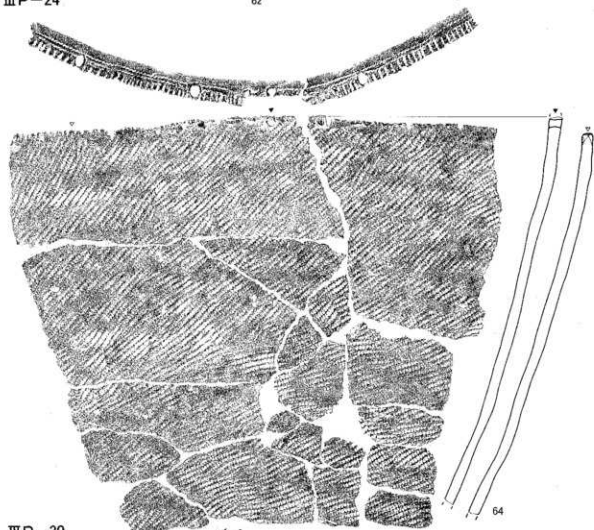
ⅢP-2



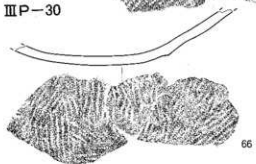
ⅢP-3



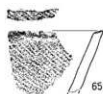
ⅢP-24



ⅢP-30

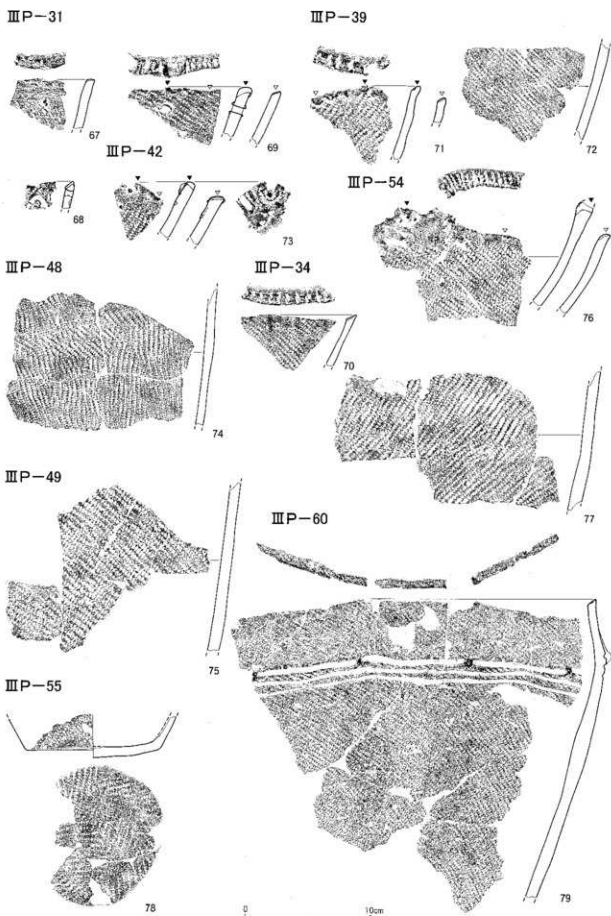


ⅢP-28



0 10cm

図Ⅳ-2-12 遺構の土器等(12)



図IV-2-13 遺構の土器等(13)

ⅢH-3



80

ⅢH-4



81



82



83

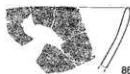
ⅢH-8



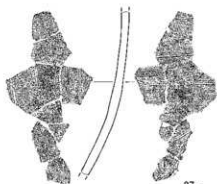
84



85



86



87a



87b

ⅢH-9



88a



88b



89



90a



90b

ⅢH-10



91



92



93



94a



94b

0 10cm

図Ⅳ-2-14 遺構の土器等(14)

(2) 石器等

遺構からは剥片石器118点、剥片613点、礫石器37点、原石・礫・礫片411点、合計1,179点が出土した。遺構出土石器等一覧は表4、掲載石器等一覧は表6に掲載している。

「1 遺構」の概要で述べたように、Ⅲ層で検出された住居跡・土坑の内部には、V層中の遺物が流れ込んでいる例が多く見られる。土器は分類（Ⅰ～Ⅶ群）により時期がわかるため、ある程度V層由来のもの（縄文時代晩期後葉以前）は分別される。石器等の場合、縄文時代前・中期の北海道式石冠のようにある程度時期が限定される器種を除くと、その由来がⅢ層あるいはV層かを特定するのは難しい。近世アイヌ文化期の平地住居跡であるⅢH-5に付属する集石HS-1より出土した1～7、櫛文文化期の竪穴住居跡であるⅢH-8の床面から出土した49・50、縄文時代晩期後葉の土坑であるⅢP-56に埋設された壺形土器より出土した60～65などは、その出土状況から遺構に伴うものと判断される。しかし、縄文時代晩期後葉の竪穴住居跡と推測されるⅢH-6・7や円形の土坑群であるⅢP-1～77は、覆土が埋め戻しによるものと考えられており、V層中より掘り上げられた縄文時代前～後期の石器等が混入している可能性がある。

ここでは、遺構より出土した石器のうち、前述のように遺構に伴うと考えられるもの、由来は不明であるが器種の特徴がよく表れているものを掲載した。以下、遺構ごとに述べる。

①住居跡

ⅢH-5（図IV-2-15-1～7／表6／図版33）

1～6はたたき石。1・2は棒状礫の両端部に使用痕がある。3～5は扁平礫の平坦面に使用痕がある。6は断面三角形の礫の平坦面に使用痕がある。7は砥石片。断面が正方形の四面砥石。使用により四面の平坦な擦り面がある。被熱により赤色化している。

ⅢH-6（図IV-2-15-8～23、16-24～36／表6／図版33・34）

8～16は石鏃。すべて有茎鏃。基部先端は尖る。8～15はかえしが明瞭である。基部は10・12・14が平基、8・9・11・13・15は凸基である。16は菱形である。10・15・16は被熱により表面が曇っている。17～34はスクレイパー。17～20は剥片背面の周縁に円弧状の刃部がある。21～26は剥片の側縁に直線状の刃部がある。24の左刃部と25の刃部はやや内湾する。27～31は錯向状に刃部がつけられている。表裏両面の側縁に刃部が作出されて断面が平行四辺形になる。31は三角形剥片の二辺が表側、一辺は裏側から刃部をつけている。32～34は剥片の周縁に刃部をつけている。34は玄武岩の剥片を利用したもの。35は石斧片。基部を折損している。剥離と敲打による整形後、研磨している。両刃で円刃である。刃部は13度傾いている。36はたたき石。棒状礫の側縁に使用痕がある。

ⅢH-7（図IV-2-17-37～48／表6／図版34）

37～43は石鏃。すべて有茎鏃。基部先端は尖る。37～42はかえしが明瞭である。基部は37・38・40・42が平基、39・41が凸基である。43は菱形である。44は石鏃。剥片の先端部に機能部をつけている。使用による磨耗痕がみられる。45～47はスクレイパー。45は寛状のもの。剥片背面の両側面・下端に直線的な刃部をつけている。46は剥片背面の周縁に円弧状や内湾する刃部をつけている。47は剥片背面の側縁に刃部をつけている。48はたたき石。扁平礫の長軸両端に使用痕がある。

ⅢH-8（図IV-2-17-49・50／表6／図版34）

49はたたき石。棒状礫の平坦面に使用痕がある。50は石皿。方形の扁平礫の腹背部平坦面に使用痕がある。裏面の一部には敲打痕がある。

②土坑

Ⅲ P-17 (図Ⅳ-2-17-51/表6/図版34)

51は石鏃。三角形鏃。基部は平基である。

Ⅲ P-28 (図Ⅳ-2-17-52・53/表6/図版34)

52は石鏃。有茎鏃。菱形で基部先端は尖る。53はスクレイパー。黒曜石の棒状原石の側縁の一部に刃部をつけている。

Ⅲ P-29 (図Ⅳ-2-17-54/表6/図版34)

54は石鏃。有茎鏃。基部先端は欠損している。かえしが明瞭である。基部は平基である。

Ⅲ P-31 (図Ⅳ-2-17-55/表6/図版34)

55は石槍。厚みがあることから石槍とした。有茎。基部先端は尖る。かえしは明瞭である。基部は凸基である。

Ⅲ P-33 (図Ⅳ-2-17-56/表6/図版34)

56はスクレイパー。剥片の側縁に刃部をつけている。

Ⅲ P-49 (図Ⅳ-2-18-57・58/表6/図版34)

57は石鏃。有茎鏃。基部先端は尖る。かえしが明瞭である。基部は平基である。58はスクレイパー。縦長剥片の左側縁に刃部をつけている。

Ⅲ P-56 (図Ⅳ-2-18-60~63、19-64・65/表6/図版35)

60~65はUフレイク。大型剥片の周縁に使用痕とみられる微細剥離がある。黒曜石原産地同定試料である。60は打面部と下端部・左側縁に原石面を残し、右側縁を利用している。61は打面部以外の周縁を利用している。62・63は打面部に原石面を残し、打面部以外の周縁を利用している。64は打面部と右側縁に原石面を残し、それ以外の周縁を利用している。65は打面部と下端部・右側縁の一部に原石面を残し、それ以外を利用している。黒曜石原産地同定では、60・61・62・65は赤石山Ⅲ、63・64は赤石山Ⅱであることが報告されている(Ⅵ章第2節参照)。

Ⅲ P-58 (図Ⅳ-2-18-59/表6/図版35)

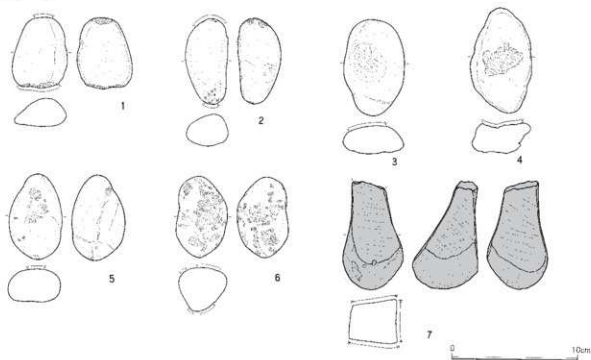
59はたたき石。扁平礫の長軸下端部に使用痕がある。

③集石

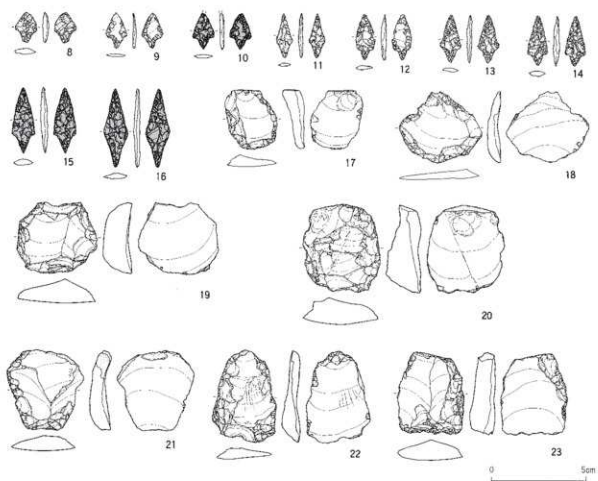
Ⅲ S-4 (図Ⅳ-2-19-66~68/表6/図版35)

66・67はたたき石。棒状礫の腹背部に使用痕がある。66は棒状礫の下半部に敲打による調整があり、掘部と考えられる。68はすり石。棒状礫の下端部に擦り面がある。(酒井)

ⅢH-5

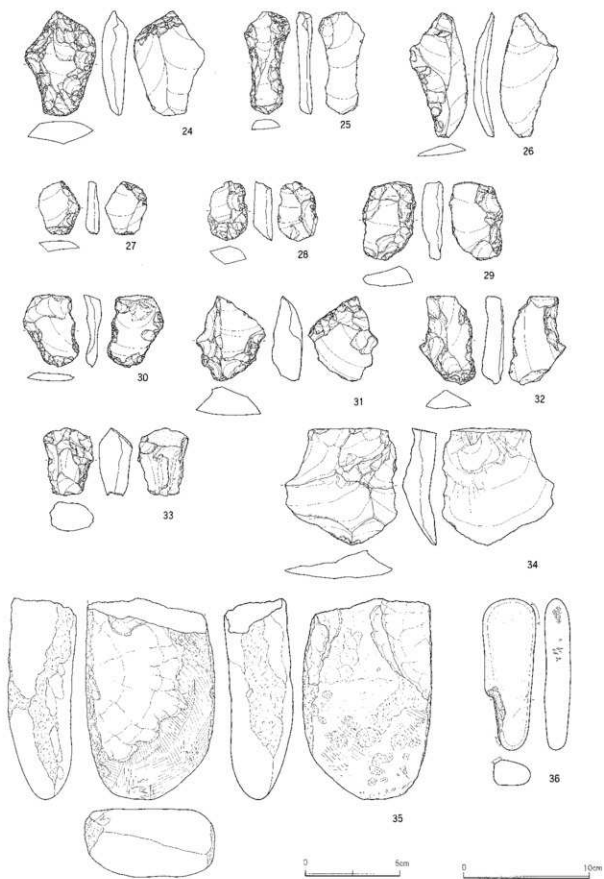


ⅢH-6



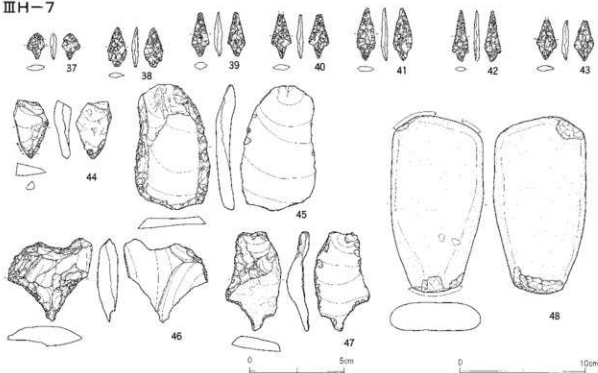
図Ⅳ-2-15 遺構の石器等(1)

ⅢH-6

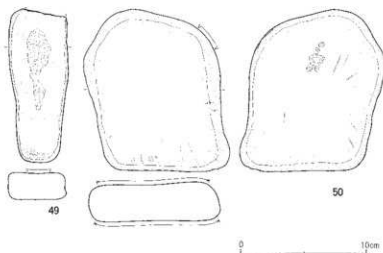


図Ⅳ-2-16 遺構の石器等(2)

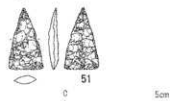
III H-7



III H-8



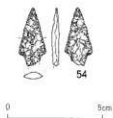
III P-17



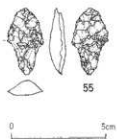
III P-28



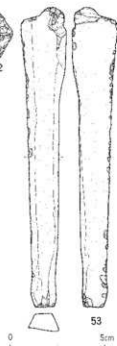
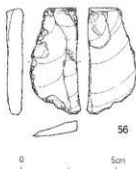
III P-29



III P-31

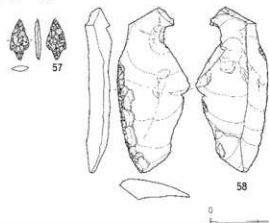


III P-33

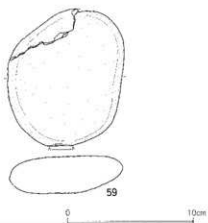


図IV-2-17 遺構の石器等(3)

III P-49



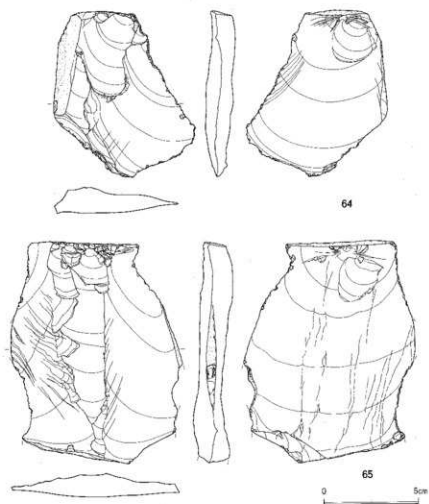
III P-58



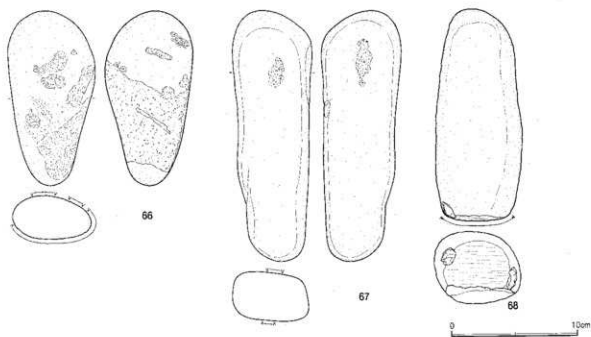
III P-56



図IV-2-18 遺構の石器等(4)



III S-4



図IV-2-19 遺構の石器等(5)

3 包含層出土の遺物

(1) 土器等

平成19・20年度、2か年の調査で、Ⅲ層より土器・土製品は15,080点出土した(表I-2)。縄文時代晩期後葉(V群c類)の土器が11,948点(79.2%)と最も多く、縄文文化期の土器(Ⅶ群)が2,714点(20.0%)でこれに次ぐ。このほか、縄文時代前～後期の土器がⅢ層や遺構の覆土中より少量出土している。これらは本来下位のV層に包含されるべき時期のものであり、遺構の掘り上げ土や凍上現象などの攪乱により混入したと考えられる。

土器の出土分布は遺構とはほぼ一致しており、調査範囲南側の段丘面から祝梅川へ降りる斜面上に集中し、北側の低地部分および梅川1遺跡は希薄である(図V-3-26・27)。

V群c類はいわゆるタンネットウL式(空知地方史研究協議会1979)である。V群c類はV層でもやや古手のママチⅡ群またはⅡ類(北埋調報9・36)に相当するものが出土している(北埋調報285)。Ⅲ層出土のものは後続するママチⅢ～V群またはⅢ・Ⅳ類のいずれかに相当すると考えられるが、格子文や蛇行線文など新旧の要素が混在しており、時期幅が想定される。津軽海峡周辺から搬入されたと断定できる「大洞式」土器は出土していないが、器形や文様が影響を受けたと推測される在地の「大洞系」(類大洞式)土器はごく少量見られる。また、江別市対雁2遺跡における近年の調査成果から、「ママチ編年」の修正・補完が提唱されている(北埋調報177・226・231・240)。隣接する梅川4遺跡では当該期の土坑群やV群c類土器が大量に検出され、同一の遺跡面を形成すると見なされることから、この成果と合わせて検討する必要がある。

V群は主に擦文文化期中葉および後葉に属するものが出土している。中葉は千歳市美々8遺跡での佐藤和雄分類(北埋調報89)のV・VI類に相当し、調査範囲南側の緩斜面上の堅穴住居跡周辺にややまとまる。後葉は同分類のIX類に相当し、北側の低地部分に多い。

土製品は大半が焼成粘土塊であるが、Ⅶ群に伴うと考えられる紡錘車が2個体出土した。

①V群c類

a 深鉢(図IV-3-1～4、17～21/表7/図版36・37・42～46)

横位沈線文を主体とするもの(1・30～38)

1は口径22.2cm、底径7.0cm、器高27.4cmを測る(いずれも推定)。上面観は楕円形。口縁部は平縁。口縁端面は丸く、外縁に縄目の刺突列。内面の口唇直下にR L回転縄文を施し、その下部に竹管状施文具の先端による刺突列。外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線7条→4～8条を単位とする縦位・蛇行沈線(一部斜位沈線により格子状)→竹管状施文具の先端による刺突列。底部は凸底と推測される。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片少量と中粒砂・軽石が混和する。胴上部には、R L回転縄文が施された外傾の接合面が露呈している。口縁部に補修孔が1か所確認される。

30～38は破片資料。30は口縁端面内傾→L R回転縄文→指頭圧痕、外面は横位回転L R斜走縄文→横位沈線4条。31は口縁端面内傾→R L回転縄文、外面は横位回転R L斜走縄文→口唇直下に横位沈線4条+やや下位に横位沈線3条(現存)。32は口縁端面やや内傾→L R回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面は横位回転L R斜走縄文→横位沈線2条(現存)、底部は凸平底→底外面にL R回転縄文。33は口縁端面水平→R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線2条。34は口縁端面内傾→L R回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線2条(現存)。35は口縁端面水平→指頭圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線3条(現存)。36は双峰山形突起→頂部に指頭圧痕、口縁端面水平→L R回転縄文、外面はL R・R L縄を交互に回転施す

て羽状縄文→突起外面に下向き弧状沈線+口縁部に横位沈線4条(1条目に瘤状突起)+胴上部に横位沈線5条(3条目に瘤状突起)。37は口唇を欠損する。外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線3条(現存)。38は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線5条(1-2条間と3-4条間に竹管状施工具による刺突列)。

横位沈線に縦位の短沈線・弧沈線などが上描きされるもの(39~44)

39~43は破片資料。39は口縁部が内屈する器形。口縁端面水平→R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位沈線4条→斜位沈線1条(現存)→屈曲部に竹管状施工具による刺突列。40は口縁端面内傾→R L回転縄文、外面は横→斜位回転R L斜走縄文→横位沈線4条→括弧状沈線+縦位沈線→竹管状施工具による刺突列、底部は凸平底→底外面にR L回転縄文。41は口縁端面内傾→L R回転縄文→棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文→横位沈線2条(現存)→縦位弧状沈線あるいは蛇行沈線→円形刺突孔1孔。42は口縁端面内傾、外面はR L斜走縄文→横位沈線4条(現存)→括弧状沈線。43は口唇を欠損する。口縁部が内屈する器形。外面は横位回転R L斜走縄文→斜位あるいは山形沈線(横位沈線は現存せず)→屈曲部に縄端による刺突列。44は口縁端面水平→R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文(ナデにより不鮮明)→横位沈線3条→口唇より垂下する縦位貼付帯が並列(それぞれの両側縁に外面よりの円形刺突孔)。

波状沈線文が施されるもの(45~50)

45~50は破片資料。45は口縁端面内傾→L R回転縄文→棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文→波状沈線3条(現存)。46は口縁端面内傾→L R回転縄文、外面はL R斜走縄文→波状沈線4条+横位沈線1条(現存)。47は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面はL R斜走縄文→口唇直下に棒側面圧痕→波状沈線2条(現存)。48は口縁端面内傾→R L回転縄文→「八」の字状棒側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→横位断続沈線1条+横位沈線2条+波状沈線1条→沈線の周縁に竹管状施工具による刺突列。49は口縁端面を欠損する。外面は横位回転R L斜走縄文→波状沈線2条とその間に横位沈線1条、底部は平底。50は口縁端面内傾→R L回転縄文、外面はR L斜走縄文→波状沈線1条+横位沈線2条(現存)+ナデ消し凹帯(下部に竹管状施工具による刺突列)+波状沈線2条(現存)+蛇行沈線1条(現存)。

蛇行沈線文が施されるもの(51)

51は口縁端面やや内傾→縦位縄側面圧痕、外面は横位回転R L斜走縄文→蛇行沈線4条→横位沈線6条→竹管状施工具による刺突列、底部は凸底→R L回転縄文。

ナデ消し凹帯またはナデ消し帯が見られるもの(2・3・52~60)

2は底部を欠く。推定口径33.8cm、残存器高25.9cmを測る。上面観は不明。口縁端面はやや内傾し、R L回転縄文→外縁に指頭圧痕。口縁部は、2個1対の山形突起が4か所設けられる(推定)。外面は横位回転R L斜走縄文→突起下に縦位連結括弧沈線(周縁および内部に竹管状施工具による刺突列)→突起間の口縁部は横位沈線4条と縦位の短沈線→ナデ消し凹帯(上下に竹管状施工具による刺突列)→横位沈線3条。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、土器片多量と中粒砂・軽石・繊維が混和する。接合面は露呈していない。口縁→胴部内面の一部に炭化物が付着する。

3は推定口径30.2cm、底径10.1cm、器高35.2cmを測る。上面観は歪んだ円形。口縁部は平縁。口縁端面は内傾し、L R回転縄文→棒側面圧痕。外面は斜位回転R L斜走縄文(胴中部では横走みとなる)→口唇直下に連続山形沈線→山形貼付帯(外面に回転縄文+棒側面圧痕)→横位沈線2条(沈線間および上下に竹管状施工具による刺突列)→上方へ貫入するナデ消し凹帯(上下に竹管状施工具による刺突列)。底部は凸底。底外面にもL R回転縄文。底縁の縄文はナデ消され、竹管状施工具による刺突

列が巡る。内面は横ナデ調整され、底内面には指頭痕が残る。胎土はやや粗く、土器片少量と細粒砂・繊維が混和する。接合面は露呈していない。内外面ともに剥離が著しい。底部外面の一部に炭化物が付着する。

52～60は破片資料。52は口縁端面丸く、外面はL R斜走縄文→ナデ消し凹帯→横位沈線3条(現存)。53は口縁部がやや外反する器形。口縁端面は外傾→棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文→ナデ消し帯(上下部に竹管状施文具による刺突列)。54は双峰山形突起→頂部に縄側面圧痕、口縁端面内傾→外縁に棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文→ナデ消し帯→内部に横位沈線2条+縄端による刺突列。55は口縁端面やや内傾→縦位縄側面圧痕、外面はL R斜走縄文→口唇直下に縦位の短沈線→ナデによる波状凹線(上下部に竹管状施文具による刺突列)。56は単峰山形突起(外面が肥厚する)→頂部および外面に竹管状施文具の先端による円形刺突、口縁端面外傾→R L回転縄文、外面はR L斜走縄文→口唇直下にナデによる弧状凹線→弧状沈線3条→竹管状施文具による横向きの刺突列。57は単峰山形突起、口縁端面内傾→L R回転縄文→縦位棒側面圧痕、外面は横位回転L R斜走縄文→突起部分に縦位凹線(周縁に竹管状施文具による刺突列)→口唇直下に横位沈線1条→ナデ消し帯(上下部に竹管状施文具による刺突列)→横位沈線2条。53・54・56は内傾の接合面が露呈する。58～60は口唇を欠損する。58は外面がR L斜走縄文→ナデ消し帯(下部に竹管状施文具による刺突列)→内部に2条1組の沈線による文様。59は外面がL R斜走縄文→ナデ消し帯3段(上下部に竹管状施文具の先端による円形刺突列)。60は口縁部が内屈する器形と推測される。外面はR L斜走縄文→ナデ消し凹帯(下部に竹管状施文具による横向きの刺突2列、一部重複)→内部にも竹管状施文具による刺突列。

縄文のもの(4・5・61～73)

4は推定口径28.9cm、底径7.7cm、器高30.1cmを測る。上面観は楕円形。口縁部は平縁。口縁端面は水平で、L R回転縄文→内縁に棒側面圧痕。外面は口唇直下ナデのまま→口縁→胴部は横位回転L R斜走縄文→底部は異なる原体によるR L斜走縄文。底部は凸底。底外面にもR L回転縄文。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、土器片多量と粗粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。外面は剥離が著しい。底部内面の一部に炭化物が付着する。

5は口縁→胴部と底部が接合しなかった。口径25.3cm、底径12.1cm、器高21.9cmを測る(いずれも推定)。上面観は不明。口縁部は平縁。口縁端面は内傾し、L R回転縄文→外縁に指頭圧痕(爪痕が残る)。内面の口唇直下がやや肥厚する。外面は横位回転L R斜走縄文。底部は凸底と推測され、底外面にもL R回転縄文。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、土器片中量と中粒砂(石英が多い)が混和する。接合面は露呈していない。胴部内面の一部に炭化物が付着する。

61～73は破片資料。61は単峰山形突起、口縁端面やや内傾→R L回転縄文、外面は横位回転R L斜走縄文→底部は凸平底。62は口縁端面やや内傾→R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。63は単峰山形突起→頂部に縦位縄側面圧痕、口縁端面やや内傾→R L回転縄文→外縁に指頭圧痕、外面はR L斜走縄文。65は口縁端面やや内傾→R L回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。66は単峰山形突起、口縁端面水平→縦位棒側面圧痕、外面は口唇直下ナデのまま→L R斜走縄文。67は単峰山形突起→頂部に縦位棒側面圧痕、口縁端面やや内傾→L R回転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文。68は単峰山形突起部分、頂部はR L回転縄文→縦位棒側面圧痕、外面は環状または上向き弧状の貼付帯(剥落により不明)→竹管状施文具による刺突列→内部はナデにより無文→円形刺突孔。69は単峰山形突起、口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面は無筋L斜走縄文。70は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面はL R斜走縄文。71は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕→外縁に縄側面圧痕、外面はL R縦走縄文。72は単峰山形突起、口縁端面内傾→外縁に指頭圧痕、外面はR L

斜走縄文。73は口縁端面丸い→ナデのまま、外面はRL斜走縄文、底部は平底→底外面にもRL回転縄文。

口縁部を欠くまたは底部のみのもの(6・7・74~87)

6は底部。推定底径10.3cm、残存器高6.9cmを測る。外面は横位回転RL斜走縄文。凸底で、底外面にもRL回転縄文。内面はナデ調整される。胎土はやや粗く、土器片少量と細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

7は胴下～底部。底径14.4cm、残存器高10.0cmを測る。外面は、横位回転のLR・RL斜走縄文を交互に施し、羽状としている。底縁直上は竹管状施文具による刺突列で区画されたナデ消し凹帯→縦位細沈線(条痕文)。底部は凸底。底外面にはRL縄が渦巻状に回転施文される。内面は横ナデ調整。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。内面の一部に炭化物が付着する。

74・75は胴部破片。74はLR、75はRL斜走縄文。76~87は胴下～底部破片。76~86は凸底、87は平底。いずれも外面に斜走縄文が施されるが、凸底のものは底外面にも回転縄文。76は外面にLR・RL縄を交互に回転施文して羽状縄文→底縁直上にナデ消し凹帯(上下部に竹管状施文具による刺突列)。82は外面にR縄の燃糸文→胴下部に横位沈線2条。

b 鉢(図IV-3-4-8/表7/図版37)

8は推定口径10.0cm、底径3.6cm、器高8.0cmを測る。上面観は楕円形。口縁部は緩い小波状を呈する。口縁端面はやや外傾し、竹管状施文具の先端により斜めに刻まれる。外面は横位回転LR斜走縄文。底部は揚げ底。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、中粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。底部の形態からVI群a類の可能性もある。

c 浅鉢(図IV-3-5-14、22・23/表7/図版37~39・47・48)

顕著な突起や内面に文様が見られるもの(9~15・88~99)

9は長軸口径34.7cm、短軸口径32.5cm(推定)、器高15.2cmを測る。上面観は楕円形。口縁部には前・後・左・右の突起が設けられていたと推測されるが、右突起が欠失する。いずれも突起は台形で、前突起は両端に各2個1対、左突起は中央と両端(副飾部側を欠失)、後突起は両端に小突起を有する。小突起の頂部は棒側面圧痕。突起の内面は、RL回転縄文(前・左)／縄側面圧痕2条(後)→横位・縦位の短沈線(前・左)／円形刺突孔(後)→竹管状施文具による刺突列(前・後)。口縁端面はやや外傾し、後突起・主飾部・副飾部にRL回転縄文。口縁部内面は、主飾部2条、副飾部3条の縄側面圧痕が巡る。外面は横位回転RL斜走縄文。底部は丸底で、疎らなRL回転縄文。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片中量と粗粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

10は底部を欠く。長軸口径52.4cm、短軸口径48.0cm、残存器高16.4cmを測る。上面観は楕円形。口縁部には前・後・左・右の大突起のほか、左・右の主飾部にやや小さめの突起が各1か所設けられる。口縁端面は内傾し、内面にかけて施文される。前突起・左突起・右突起および主飾部の小突起が山形で、後突起はやや低めの台形。後突起は両端に小突起を有する。前突起・左突起・右突起は指頭、その他の小突起は棒側面が圧痕される。前突起・左突起・右突起の周縁は半同心円状の縄側面圧痕、細い竹管状施文具による刺突列が施される。前突起はさらに棒側面が縦位に圧痕され、周縁が浅い沈線により縁取られる。後突起は、両端の小突起間に横位の縄側面圧痕3条が巡り、縦位・斜位の棒側面圧痕が上書きされる。主飾部は、横位の縄側面圧痕4ないし5条が巡り、指頭圧痕や縦位の棒側面圧痕が上書きされる。副飾部の大部分はナデのままであるが、後突起に近い部分では縦位の縄側面圧痕が連続して施される。これら内面の文様帯の下部には竹管状施文具による刺突列が巡るが、副飾部の一部で途切れる。外面は横位回転RL斜走縄文が施されるが、突起部分はナデのままである。内面は

横ナデ調整。胎土はやや粗く、土器片少量と中粒砂（石英が多い）が混和する。接合面は胴部に内傾の接合面が露呈する。口縁部に補修孔が2孔1対×2か所、単孔×1か所の計5か所確認される。胴部外面の一部、口縁～胴部内面の一部に炭化物が付着する。

11は長軸口径44.7cm、短軸口径43.1cm、器高15.8cmを測る。上面観は卵形。口縁部には前後左右の突起が設けられる。口縁端面は内傾し、内面にかけて施文される。突起はいずれも台形で、左突起・右突起・後突起は指頭により中央部がくぼむ。前突起は3か所、右突起は4か所、左突起は2か所に小突起を有する。小突起は、頂部が縄端圧痕され、その周縁に細い1段摺り縄側面圧痕。小突起間および主飾部・副飾部・後突起は縄側面と棒側面が縦位に圧痕される。左右の主飾部のほぼ中央に指頭圧痕。左右の副飾部のほぼ中央はナデのままである。前突起の内面には十字形、左突起・右突起の内面には楕円形の凹線文が棒状施文の先端により描かれる。これら内面の文様帯の下部には竹管状施文具による刺突列が巡るが、副飾部の一部で途切れる。突起や口唇の文様の一部に赤彩の痕跡が残る。外面は横位回転R斜走縄文が施されるが、突起部分はナデのままである。底部は丸底で、L/R回転縄文が施される。内面はナデ調整により平滑になっている。胎土はやや粗く、中粒砂（石英が多い）が混和する。接合面は露呈していない。口縁～胴部内外面の一部に炭化物が付着する。

12は短軸口径19.2cm、底径10.4cm、器高7.1cmを測る。上面観は楕円形と推測される。口縁部には長軸上に1か所、短軸上に2か所の突起部分が残存する。突起部分はいずれも2個1対の山形突起から成るが、片方あるいは両方が欠失する。突起部分の内面には上向き弧状の1段摺り縄側面圧痕。長軸上の突起部分には、山形突起下に円形刺突孔が内面より穿たれる（2か所）。口縁端面は水平で、突起間にはL/R回転縄文。外面は横位回転R斜走縄文。底部は凸底で、底外面にもL/R回転縄文。内面は横ナデ調整。胎土は緻密で、細粒砂（石英が多い）が混和する。接合面は露呈していない。

13は推定口径24.6cm、底径13.5cm、残存器高8.7cmを測る。上面観は楕円形。口縁部に設けられていた突起のうち、左突起、後突起の一部のみが残存する。左突起は台形で、両端に小突起が付属する。小突起の頂部は棒側面圧痕。左突起の内面は横位短沈線2条。後突起の形状は不明で、頂部に縦位の縄側面圧痕が確認される。口縁端面はやや外傾し、L/R回転縄文。口縁部内面には1段摺りL縄側面圧痕3ないし4条が巡る。外面は横位回転R斜走縄文→底縁直上に横位沈線1条。底部は凸平底で、菱形を呈する。底外面は、L/R回転縄文→背反する三角形沈線。内面は横ナデ調整されるが、剥落が著しい。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

14は長軸口径28.5cm（推定）、短軸口径24.8cm、底径10.7cm、器高13.5cmを測る。上面観は菱形と推測される。口縁部には長軸上に1か所、短軸上に2か所の山形突起が残存する。山形突起の頂部は棒側面圧痕が確認される。短軸上の突起外面に縦位貼付帯→横位棒側面圧痕。口縁端面はやや外傾し、L/R回転縄文→外縁に縄側面圧痕。外面は横位回転R斜走縄文が施される。底部は平底で、底外面にもL/R回転縄文。内面は横ナデ調整で、擦痕・指頭痕が残る。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

15は長軸口径17.9cm、底径8.7cm、器高7.0cmを測る。上面観はほぼ円形と推測される。口縁部は緩い小波状で、山形突起の中央を指頭でくぼませて双峰としている。突起内面は肥厚帯が貼り付けられ、上向き弧状の縄側面圧痕。口縁端面は内傾し、L/R回転縄文→外縁に縄側面圧痕。外面は横位回転R斜走縄文。底部は凸底で、底外面にもL/R回転縄文。内面は横ナデ調整で、擦痕が残る。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。内面の一部に炭化物が付着する。

88は後突起と推測される台形突起→端部に2個1対の小突起→頂部に竹管状施文具の先端による円形刺突とその周縁に同心円状の1段摺りR縄側面圧痕→横位の1段摺りR縄側面圧痕3条+竹管状施

文具の先端による円形刺突、副飾部は口縁端面水平→R L回転縄文、外面はR L斜走縄文、底部は凸底。89は山形突起→頂部外縁および両側縁に指頭圧痕（双峰の小突起を作出）→頂部に弧状の凹縁→頂部内縁および両端に縄端面圧痕、外面はL R斜走縄文→円形刺突孔2孔。90は山形突起（外面が肥厚する）、口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文。91は単峰山形突起、口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面は無節L斜走縄文（ナデにより不鮮明）、補修孔1孔。92は台形突起、口縁端面やや外傾→R L回転縄文→縦位棒側面圧痕→竹管状施文具の先端による円形刺突、内面は指頭圧痕→周縁に竹管状施文具による刺突列→縦位・横位の縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文。93は左突起と推測される単峰山形突起、口縁端面内傾→主飾部はR L回転縄文・副飾部はナデのまま→縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。94は双峰山形突起→内面に縦位縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文。95は単峰山形突起、口縁端面やや内傾→横位細沈線→縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。96は右突起と推測される単峰山形突起（頂部を欠損）→横位の1段撚りL縄側面圧痕→縦位の1段撚りL縄側面圧痕→竹管状施文具の先端による円形刺突列、外面はR L斜走縄文、底部は凸底→底外面にもR L回転縄文。97は単峰山形突起、口縁端面水平→やや外傾→外縁にR L回転縄文、内面はナデ消し凹帯、外面はR L斜走縄文、底部は凸底。98は単峰山形突起、口縁端面内傾→L R回転縄文→縦位棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文→突起下→内面からの円形刺突孔。99は単峰山形突起、口縁端面丸い→ナデのまま、内面は1段撚りL縄の横位側面圧痕3条→縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。

顕著な突起や文様が見られないもの（16・100～110）

16は推定口径21.2cm、底径11.5cm、器高7.6cmを測る。上面観は楕円形と推測される。口縁部は緩い小波状で、顕著な突起は見られない。口縁端面は内傾し、L R回転縄文→縦位の棒側面圧痕。外面は横位回転L R斜走縄文。底部は凸底で、底外面にもL R回転縄文。内面は横ナデ調整で、擦痕・指頭痕が残る。胎土はやや粗く、土器片少量・中粒砂・軽石・繊維が混和する。接合面は露呈していない。外面の剥落が著しい。

100～110は破片資料。100は緩い小波状の口縁部、口縁端面内傾→R L回転縄文→縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文。101は口縁端面内傾→L R回転縄文→縦位棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文。102は口縁端面内傾→R L回転縄文→外縁に指頭圧痕→縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文、外傾1段・内傾1段の接合面が露呈する。103は口縁端面内傾→R L回転縄文→内縁に横位縄側面圧痕1条（断続）、外面はR L斜走縄文。104は口縁端面内傾→R L回転縄文、内面は口唇直下に1段撚りL縄の横位側面圧痕2条、外面はR L斜走縄文。105は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文→口唇直下にへら状施文具の先端による刺突列、2孔1対の補修孔。106は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面は口唇直下ナデのまま→R L横走縄文。107は口縁端面口唇内傾→縦位縄側面圧痕→縦位棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文。108は単峰山形突起、口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文。109は口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕、内面は1段撚りL縄の横位側面圧痕2条→竹管状施文具の先端による円形刺突列、外面はL R横走縄文（ナデにより不鮮明）。110は口縁端面やや内傾→縦位縄側面圧痕、外面はL R斜走縄文。

外面に文様が見られるもの（17・111）

17は推定口径29.3cm、底径10.0cm、器高16.3cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁部には双峰の山形突起が4か所設けられていたと推測される。山形突起の頂部は縄端が圧痕される。口縁端面は内傾し、R L回転縄文。外面は横位回転R L斜走縄文→ナデ消し凹帯→竹管状施文具による刺突列→横位沈線2条。底部は平底。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片多量と粗粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。口縁部に2孔1対の補修孔が2か所確認される。内面の一部に炭化物が付着する。

111は破片資料。台形と推測される突起（欠損）、口縁端面内傾→L R回転縄文、外面はL R斜走縄文→口縁部に横位沈線2条→胴部と底部にそれぞれ連結弧沈線文。底部は丸底。

d 壺 (図IV-3-24/表7/図版49)

112~116は破片資料。112は口縁~頸部(a)と肩部(b)。口縁部は肥厚し、内面には段と凸帯が見られる。口縁端面および外面はR L回転縄文。山形突起および瘤状突起を単位として、対向する三日月形の凹帯が刻まれている。頸部は無文。肩部に横位沈線3条。113は口縁~頸部。口縁部は肥厚し、外面にボタン状突起→縦位棒錘面圧痕、内面に凸帯。口縁部は無文で、上端(口唇直下)に縄錘面圧痕、下端に竹管状施工具による横向き刺突列。頸部も無文で、よく磨かれている。114は口縁~頸部。口縁端面および口縁肥厚帯外面はR L回転縄文。内面は剥落している。頸部は無文。115は頸~肩部。頸部は無文。肩部はR L斜走縄文→横位沈線3条。116は頸~肩部。頸部は無文。肩部はR L斜走縄文→上部は瘤状突起が断続する横位沈線により連結され、下部は横位沈線3条。

e 舟形土器 (図IV-3-14/表7/図版39)

18は長軸口径12.3cm(推定)、胴部最大径16.1cm、器高12.4cmを測る。上面観は楕円形。口縁部は緩い小波状で、長軸両端が高くなっていたと推測される(剥落)。口縁端面はやや内傾し、突起の頂部付近に棒錘面圧痕。口縁部外面はナデのまま→横位条痕文→背反弧沈線(内部ナデ消し)と縦位短沈線→長軸両端に突起(剥落)と円形刺突孔。胴部外面は横位回転R L斜走縄文→上部に幅広いナデ消し凹帯。底部は平底で、疎らなR L回転縄文。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片多量と粗粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。

f 大洞系土器 (図IV-3-24-117~120/表7/図版49)

117~120は破片資料。津軽海峡周辺の大洞式に影響を受けたと考えられる在地の土器。壺の112・115・116は施文の特徴からここに含まれる可能性がある。117は小型の鉢の口縁部(a)と胴部(b)で、器厚が非常に薄い。口縁端面は丸く、ナデのまま。外面は口唇直下にL R斜走縄文→浅い横位沈線3条(現存)→2個1対の瘤状突起(1個は欠損)と工字沈線。118は鉢の口縁~胴中部。台形突起の内面にY字状の貼付帯(両端に小突起)。口縁端面は内傾し、ナデのまま。外面は口縁部がR L斜走縄文、胴部がR L縦走縄文→口縁に沿って横位沈線1条+ナデ消し凹帯(突起下で上方貫入)→瘤状突起を断続する横位沈線により連結→横位沈線2条。119は鉢の口縁~胴下部で、器厚が非常に薄い。口縁端面は丸く、ナデのまま。外面はL R斜走縄文→浅い沈線による横位連続工字文→瘤状突起を断続する横位沈線により連結→横位沈線。内面の口唇直下に浅い横位沈線1条。120は鉢の口縁~胴中部。口縁部が内屈する器形。双峰山形突起(一方を欠損する)→突起間がナデにより凹む。外面はL R斜走縄文→口縁に沿って横位沈線1条+ナデ消し凹帯(上下部に竹管状施工具による刺突列)→やや複雑な沈線による横位連続工字文。

②Ⅵ群

a 甕 (図IV-3-15・16・25/表7/図版39~41・49・50)

19は口縁~胴下部と底部が接合しなかった。口径20.6cm、推定器高20.9cmを測る。上面観は楕円形。口縁端面は内湾する。頸部と胴部の間に段が見られる。外面は、口唇直下がヨコナデ、口縁~胴上部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴中~底部がヨコハケ→タテミガキ、底面もハケメ→ハラミガキ。内面は、口縁~胴中部がヨコハケ→ヨコミガキで、胴下~底部がヨコハケ→タテミガキと推測される。胎土は緻密で、細粒砂が混和する。内面に炭化物が付着する。

20は口径25.2cm、器高31.5cmを測る。上面観は円形。口縁端面は内湾し、外縁が刻まれる。外面は、

口縁部がヨコハケ→ヨコナデ、頸部は多段の横位沈線、胴～底部は上位よりヨコハケ→ナナメハケ→タテハケへと変化する。内面は、口縁部がヨコナデ、頸～底部はヨコハケあるいはナナメハケ。胎土は緻密で、細粒砂が混和する（石英が多い）。内外面に炭化物が付着する。

21は口縁～胴下部と底部が接合しなかった。口径18.3cm、推定器高21.5cmを測る。上面観は円形。口縁端面は外傾。外面は、口縁～頸部がヨコナデ→横走沈線、胴部がタテハケ→タテミガキ（胴下部～底部は磨滅により不鮮明）。内面は、ヨコミガキ（黒色化）。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。内面に炭化物が付着する。

23は口縁～胴上部、胴中～下部、底部が接合しなかった。口唇の大部分を欠損する。口径26.8cm、器高32.6cmを測る（いずれも推定）。上面観は不明。外面は、口縁～胴上部がタテハケ、胴中～下部がタテハケとナナメハケ、底部がタテハケ。口縁部は横位沈線→短刻線列、頸部と胴上部に籬状貼付帯→馬蹄形圧痕文、胴上部に縦位細沈線2条→内部に刺突列。外面は剥落が著しく文様は不鮮明な部分が多い。内面は、口縁～頸部がナナメハケ→ヨコミガキ、胴上～底部はタテミガキ（黒色化）。胎土は緻密で、細粒砂が混和する。

24は底部を欠く。口径22.5cm、残存器高17.5cmを測る。上面観は円形。外面はタテハケ、内面はヨコハケ→ヨコミガキ（黒色化）。口縁部文様帯は狭く、口唇直下に横位沈線→短刻線列による矢羽状文（一部は棒の先端による刺突列となる）。頸部と胴中部に籬状、胴上部にボタン状の貼付帯→馬蹄形圧痕文。胴上部は櫛目状沈線による菱形文が多段に施される。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。内外面ともに剥離が著しい。口縁部に2孔1対の補修孔が2か所確認される。

25は底部を欠く。推定口径19.6cm、残存器高22.4cmを測る。上面観は円形。口縁端面は外傾。外面は、口縁～頸部が多段の横位沈線→刺突列、胴部がタテハケ→タテミガキ。胴上部に連続山形沈線・縦位沈線、その下部に籬状貼付帯（上下ヨコナデ）→馬蹄形圧痕文。外面は剥落・磨滅が著しく調整・文様は不鮮明な部分が多い。内面は、口縁～頸部がヨコミガキ、胴部はタテミガキ（黒色化）。胎土はやや粗く、中粒砂（石英・長石が多い）・軽石が混和する。内外面に炭化物が付着する。

26は底部を欠く。口径25.8cm、残存器高22.3cmを測る。上面観は円形。口縁端面は外傾。外面は、口縁部がヨコミガキ→短沈線による矢羽状文、頸～胴上部がタテハケ→タテミガキ→疎らな横位沈線・断続山形沈線、胴中部に籬状貼付帯→馬蹄形圧痕文。外面は剥落・磨滅が著しく調整・文様は不鮮明な部分が多い。内面は口縁～胴上部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴中～下部はヨコハケ→タテミガキ（黒色化）。胎土はやや粗く、中粒砂（石英・長石が多い）・軽石が混和する。補修孔が口縁部に4か所（2孔1対×2）、胴部に3か所確認される。内面に炭化物が付着する。

27は底部を欠く。口径22.8cm、残存器高18.1cmを測る。上面観は歪んだ円形。口縁端面は丸い。外面は、口縁～頸部がヨコナデ、胴上～中部がタテミガキ。口縁部はナデにより段状の横位沈線→短刻線列による矢羽状文、頸部は無文、胴上部は格子状・斜格子状沈線による文様と疎らな横位沈線。外面は剥落・磨滅が著しく調整・文様は不鮮明な部分が多い。内面は、口縁～頸部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴上～中部はタテミガキ（一部黒色化）。胎土は粗く、中粒砂（長石が多い）・軽石・繊維が混和する。内外面に炭化物が付着する。

121～136・139・141は破片資料。121～131は口縁部。121・122は外面・内面ともにヨコナデ。121は補修孔が1孔確認される。123は外面ヨコナデ、内面剥落。124は外面が口唇直下ヨコナデ→ヨコミガキ→頸部に浅い横位沈線1条、内面がヨコミガキ。125は外面ヨコナデ→横位沈線→口唇直下に刷毛状工具の先端による刺突列、内面ヨコミガキ。126は外面に段→ヨコナデ→口唇直下に刺突列、内面はヨコナデ。127は口縁部に矢羽状の短刻線列、頸部に横位沈線1条、胴部に4条1組の断続または連続山

形沈線とその側縁に刺突列。内面は口縁～頸部ヨコミガキ、胴部タテミガキ。口縁部に補修孔が1孔確認される。128は外面に横位沈線→矢羽状の短刻線列→ボタン状の貼付帯→馬蹄形狂痕文→傘状の細沈線（綾杉文の一部か）、内面ヨコナデ。129は外面に矢羽状の短刻線列、内面にヨコミガキ。130・131は口唇を欠損する。130は外面に矢羽状の短沈線、内面ヨコミガキ。131は外面に刺突列・短沈線、ヨコナデ。132は頸部。外面は段状の横位沈線、内面はヨコミガキ。133～136・138は胴部。133は外面タテミガキ、内面ヨコミガキ（髑による条痕が残る）。134は外面タテハケ、内面剥落。135は外面タテ～ナメハケ、内面タテミガキ。136は外面タテハケ、内面ヨコハケ。139は外面タテミガキ（頸部付近の横位沈線を潰している）、内面ヨコミガキ。141は底部。平底で、底縁が外側へ張り出す。外面はヨコナデ、底外面はハケメ、内面はヨコミガキ。

b 鉢 (図Ⅳ-3-15/表7/図版41)

22は全体の約1/3が残存する。推定口径14.8cm、器高12.6cmを測る。上面観は不明。口縁端面は水平。底部は上げ底。外面は、口縁～胴上部と底部がヨコミガキ、胴下部がタテミガキ。内面は、口縁～胴上部がヨコハケ→ヨコミガキ、胴下部～底部がタテハケ→ヨコミガキで、剥落が著しい。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。

c 坏 (図Ⅳ-3-16・25/表7/図版41・50)

28は全体の約1/2が残存する。推定口径13.5cm、器高6.7cmを測る。上面観は不明。口縁端面は丸い。底部は平底。外面はヨコミガキ（光沢あり）。内面は、口縁～胴上部がヨコミガキ、胴下部～底部がナメミガキ（一部黒色化）。胎土は緻密で、細粒砂が混和する。

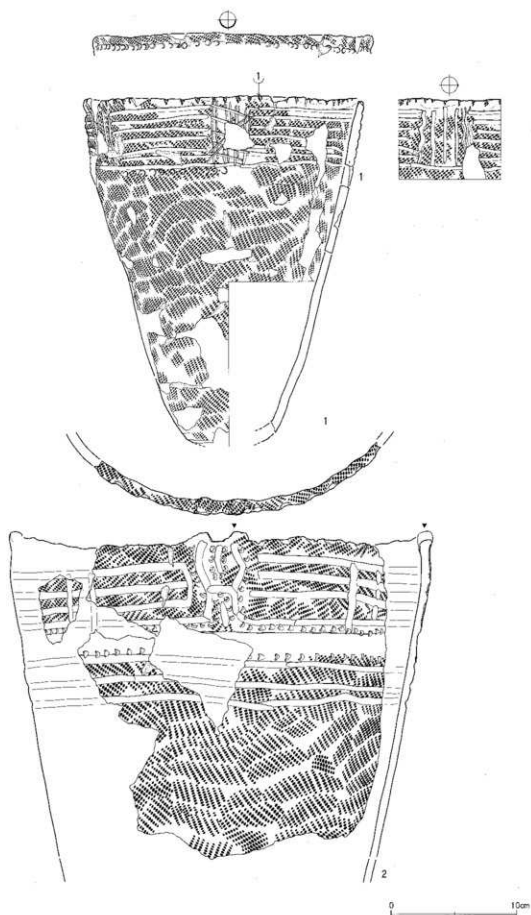
29は全体の約4/5が残存する。推定口径13.5cm、器高6.7cmを測る。上面観は楕円形。口縁端面は水平。底部は上げ底で、底面中央が凹む。外面はヨコミガキ→横位細沈線1条。内面はヨコミガキ。内外面ともに剥落が著しいため判断としないが、内面に黒色処理が施された可能性がある。胎土はやや粗く、中粒砂・軽石が混和する。

137・138・140は破片資料。137は口縁～胴部。口縁部がやや内屈する器形。外面はヨコミガキ、内面はタテミガキ→黒色処理。138はミニチュア。口縁部と底部が接合せず、図上復元。口縁部が直上ぎみに立ち上がる器形と推測される。底部は平底。内外面ともにヨコミガキ。140は平底の底部。外面はヨコミガキ、内面はミガキ（大部分が剥落）→黒色処理。底外面にもミガキ。

③土製品

紡錘車 (図Ⅳ-3-25/表7/図版50)

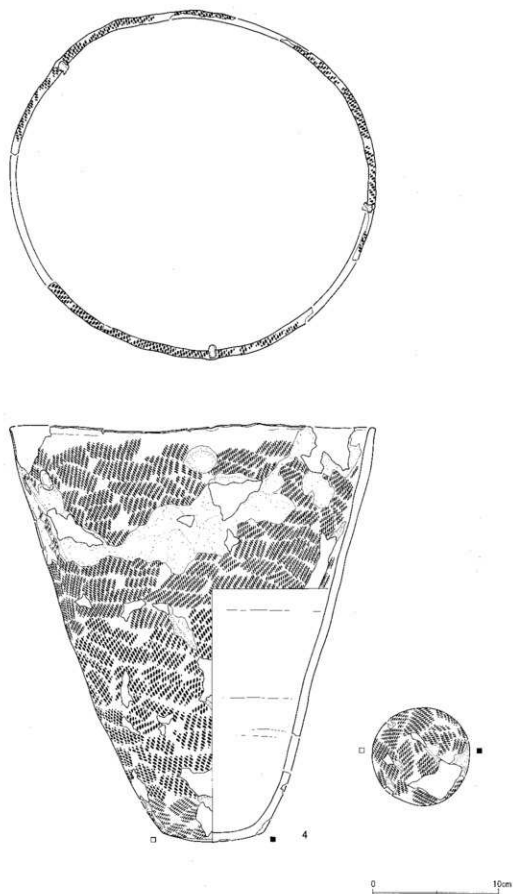
142・143は紡錘車。142は上面観が円形、側面観が台形で、上辺・側辺が凹む形状。上辺の最大径5.0cm、下辺の最大径6.1cm、厚さ2.1cmを測る。外面は丁寧なミガキが施される。中央の貫通孔は破損しているが、楕円形を呈すると推測される。胎土は緻密で、細粒砂・軽石が混和する。ⅢH-8出土のもの（図Ⅳ-2-7-22）と形状・規格がほぼ同一である。143は上面観が円形、側面観が台形。上辺は142よりも深く凹むが、側辺はより直線的である。下辺の約1/3を欠失する。上辺の最大径5.5cm、下辺の最大径6.7cm、厚さ2.3cmを測る。外面は丁寧なミガキが施される。中央の貫通孔は楕円形を呈し、上辺側のマクレから下辺側より穿孔したと考えられる。胎土はやや粗く、中粒砂（長石・石英が多い）・繊維が混和する。（芝田）



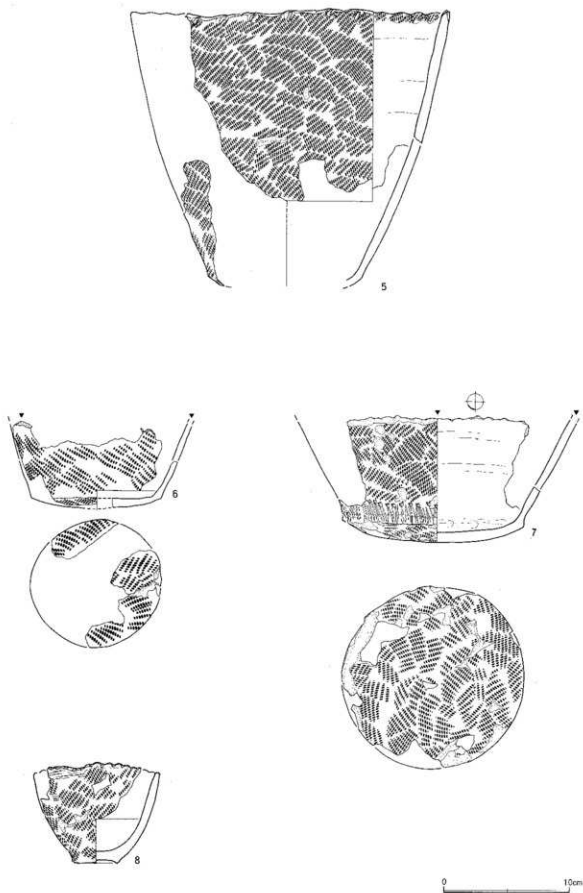
図IV-3-1 包含層の土器等(1)



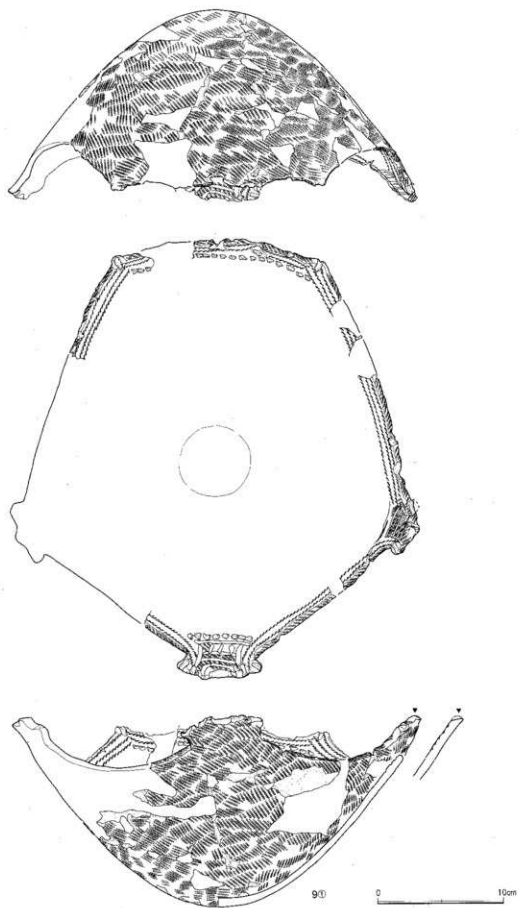
図Ⅳ-3-2 包含層の土器等(2)



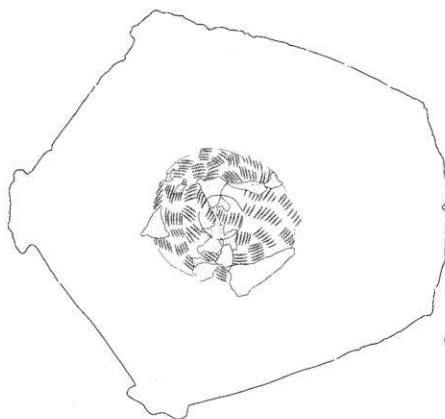
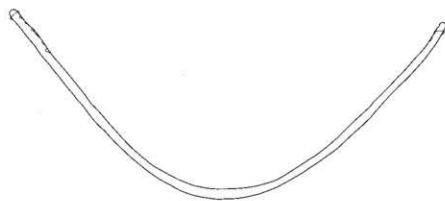
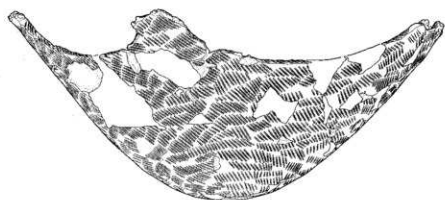
図IV-3-3 包含層の土器等(3)



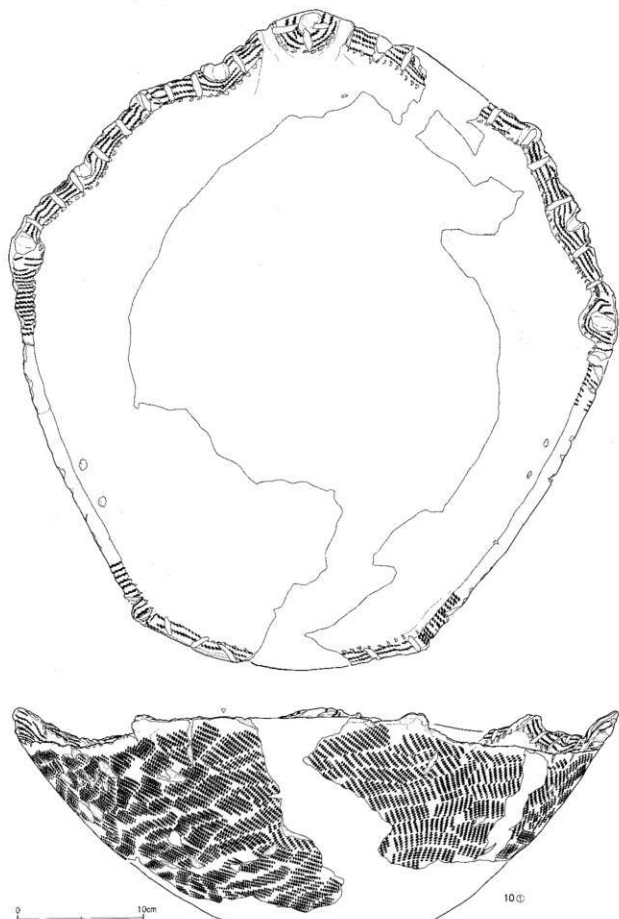
図Ⅳ-3-4 包含層の土器等(4)



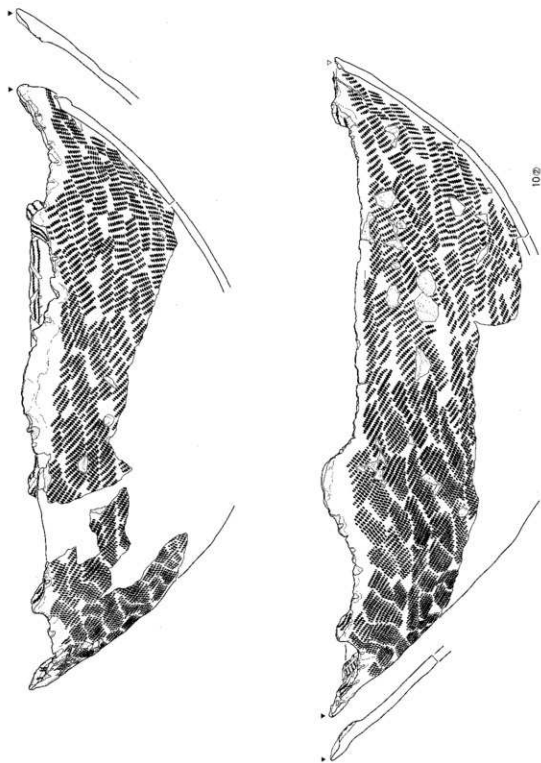
図IV-3-5 包含層の土器等(5)



図Ⅳ-3-6 包含層の土器等(6)



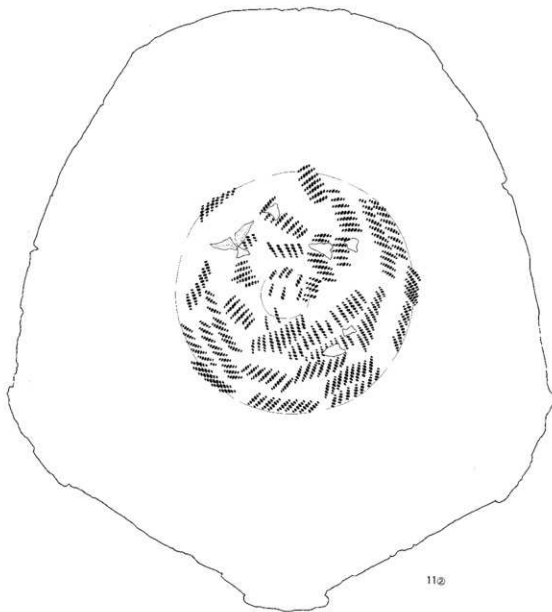
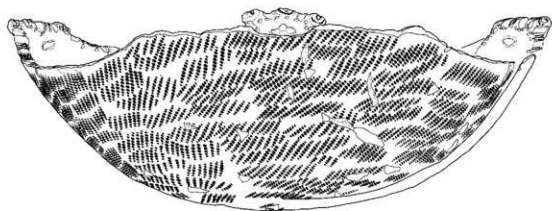
図IV-3-7 包含層の土器等(7)



図IV-3-8 包含層の土路等(8)



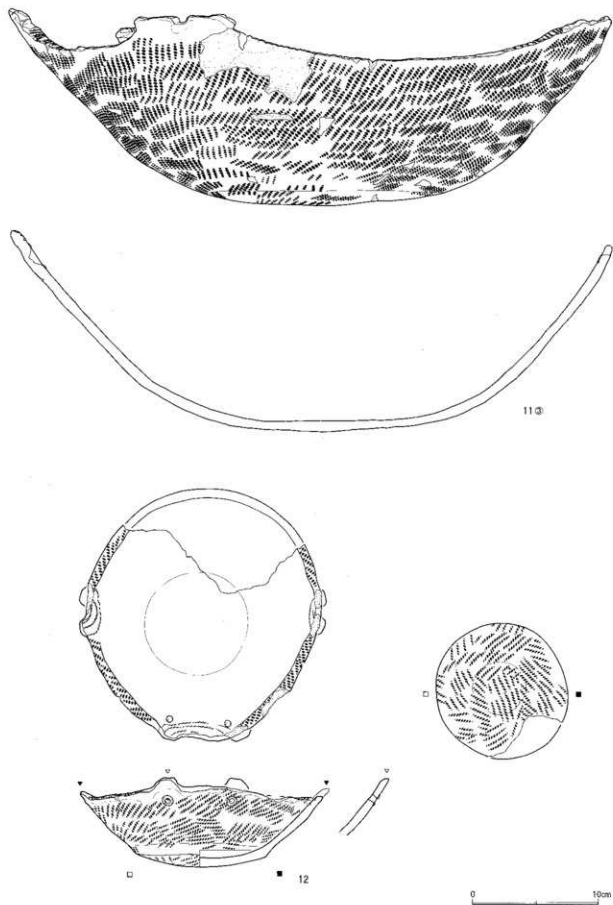
図IV-3-9 包含層の土器等(9)



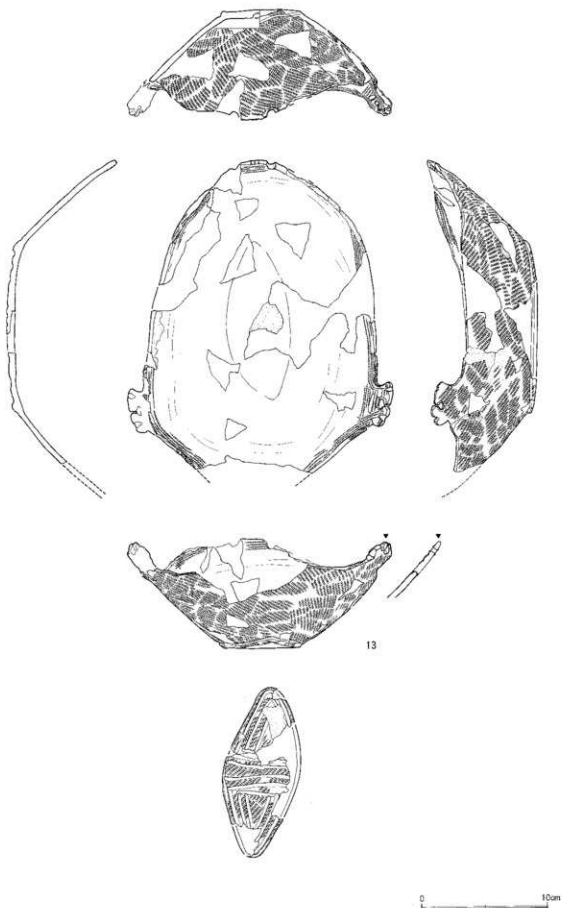
11②



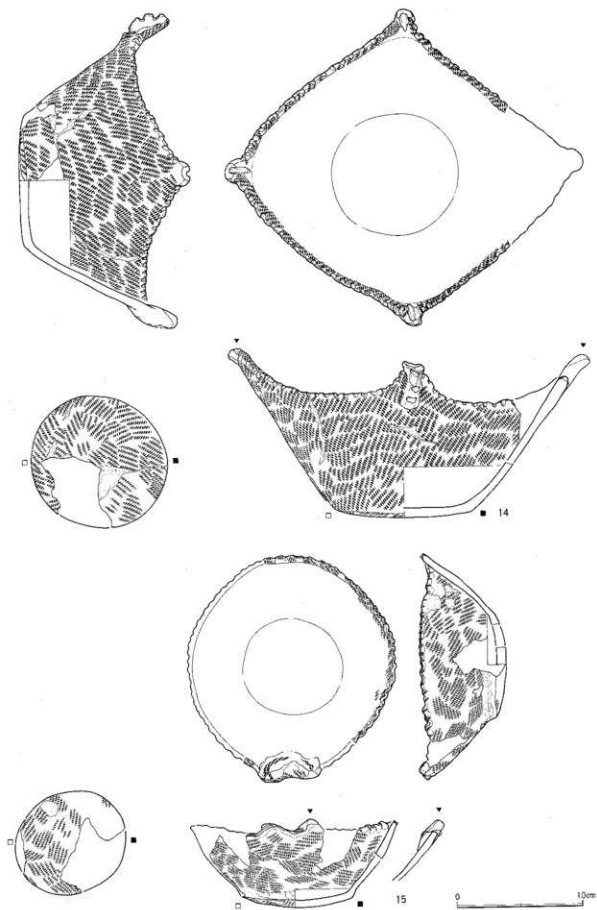
図IV-3-10 包含層の土器等(10)



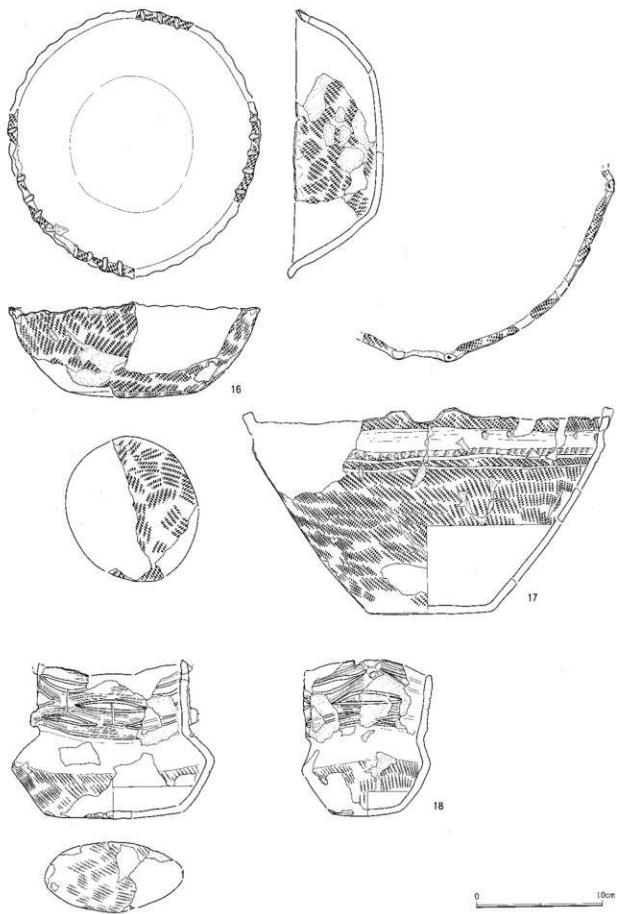
図IV-3-11 包含層の土器等(11)



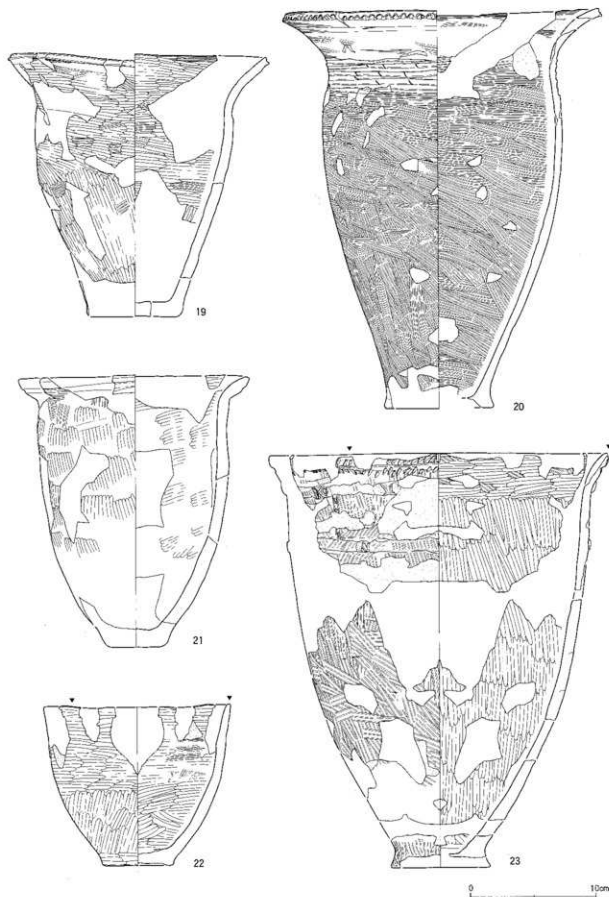
図Ⅳ-3-12 包含層の土器等(12)



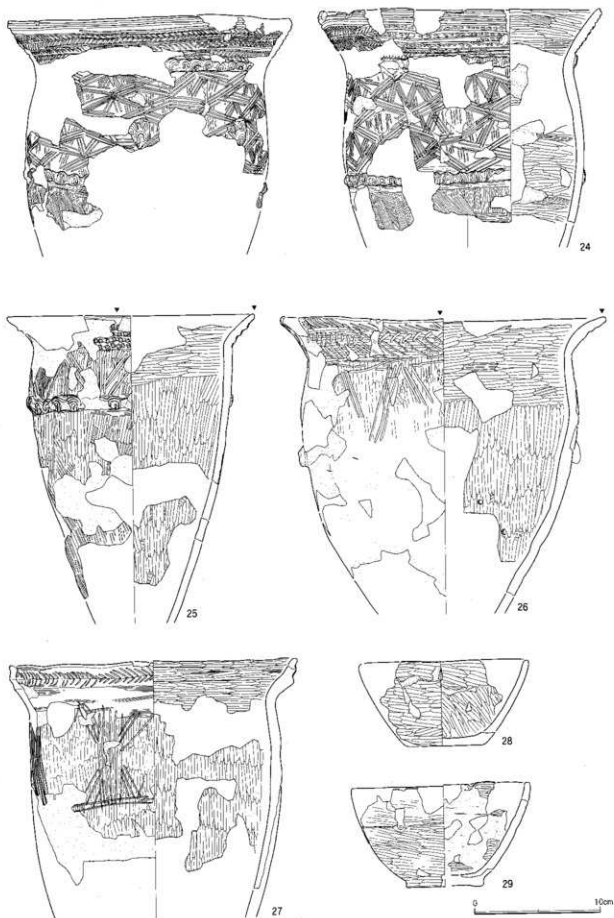
図IV-3-13 包含層の土器等(13)



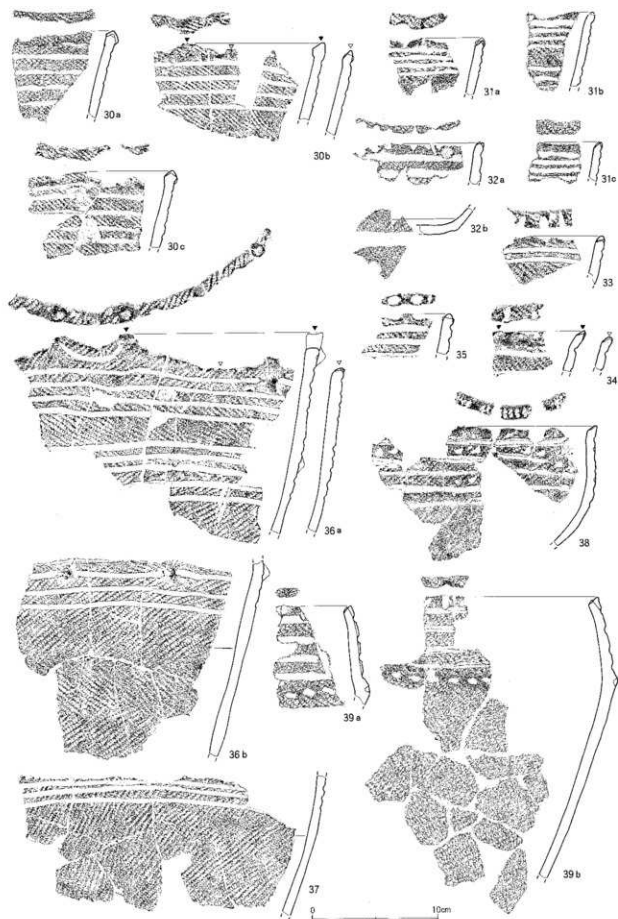
図Ⅳ-3-14 包含層の土器等(14)



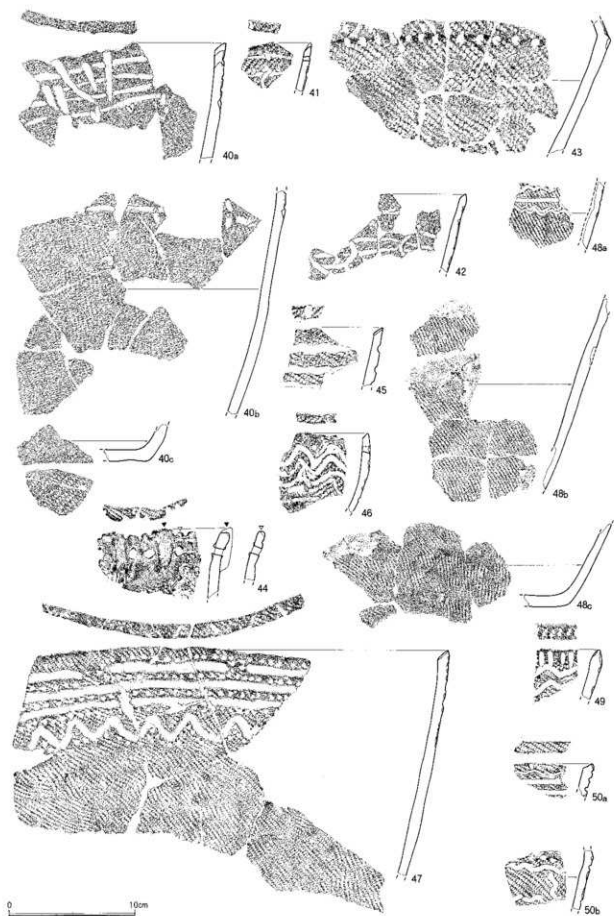
図IV-3-15 包含層の土器等(15)



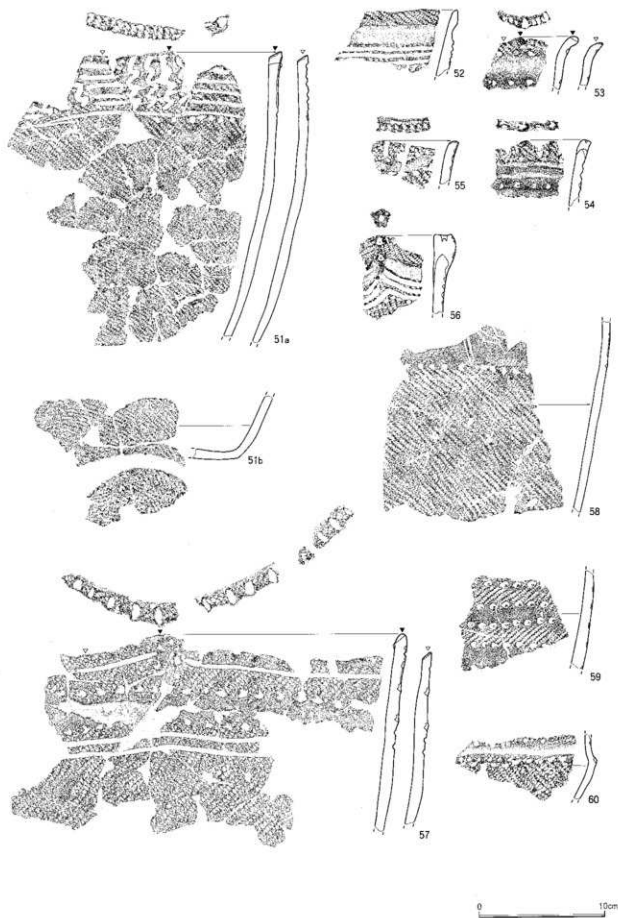
図Ⅳ-3-16 包含層の土器等(16)



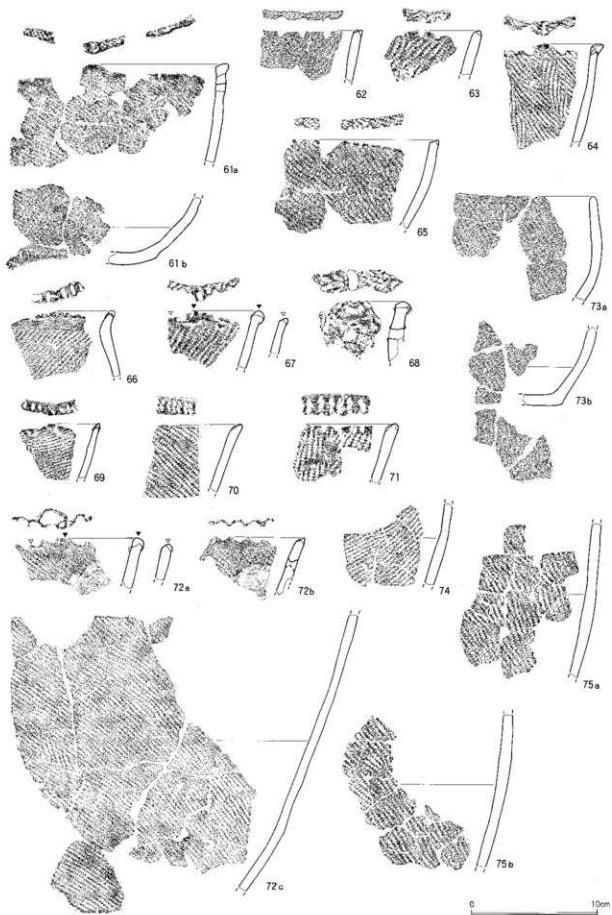
図IV-3-17 包含層の土器等(17)



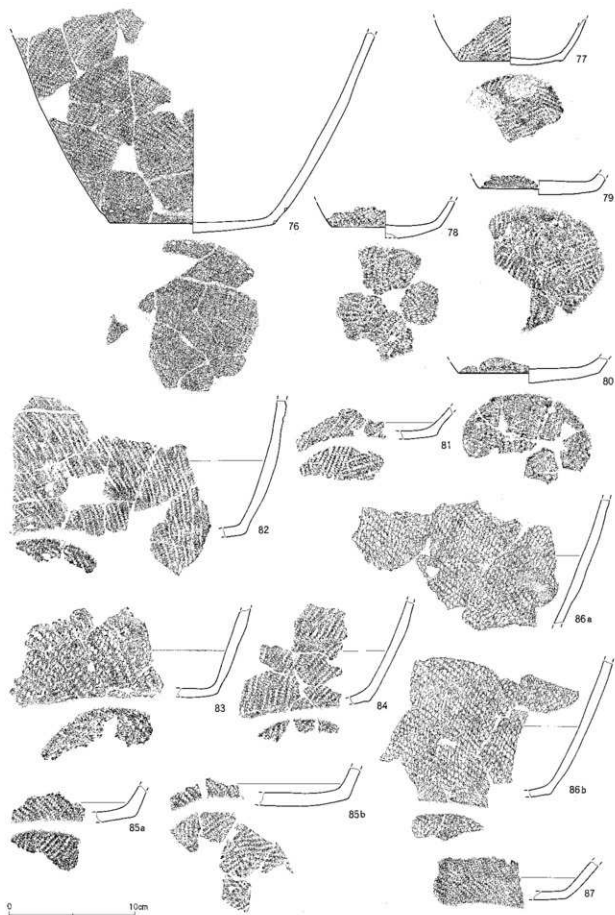
図IV-3-18 包含層の土器等(18)



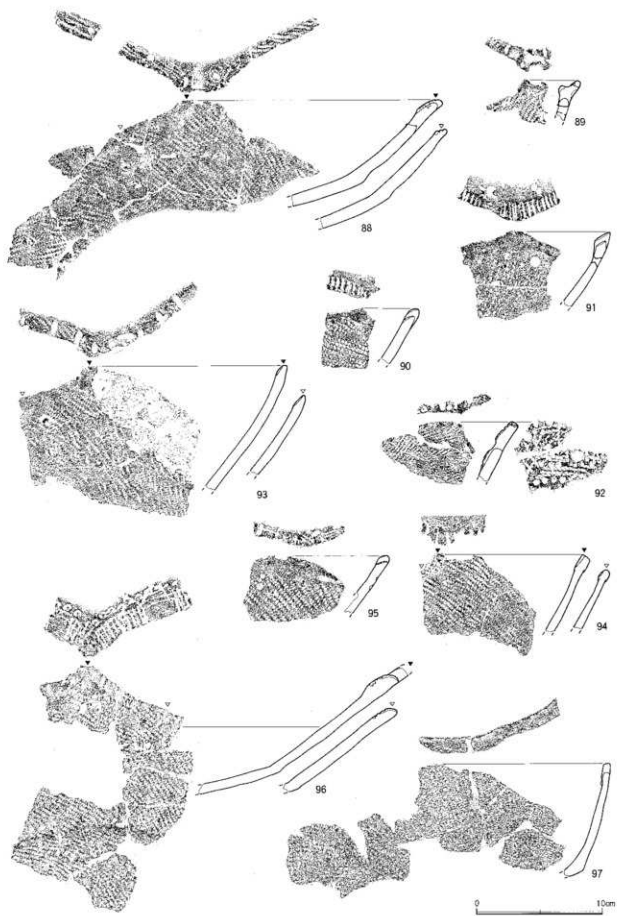
図IV-3-19 包含層の土器等(19)



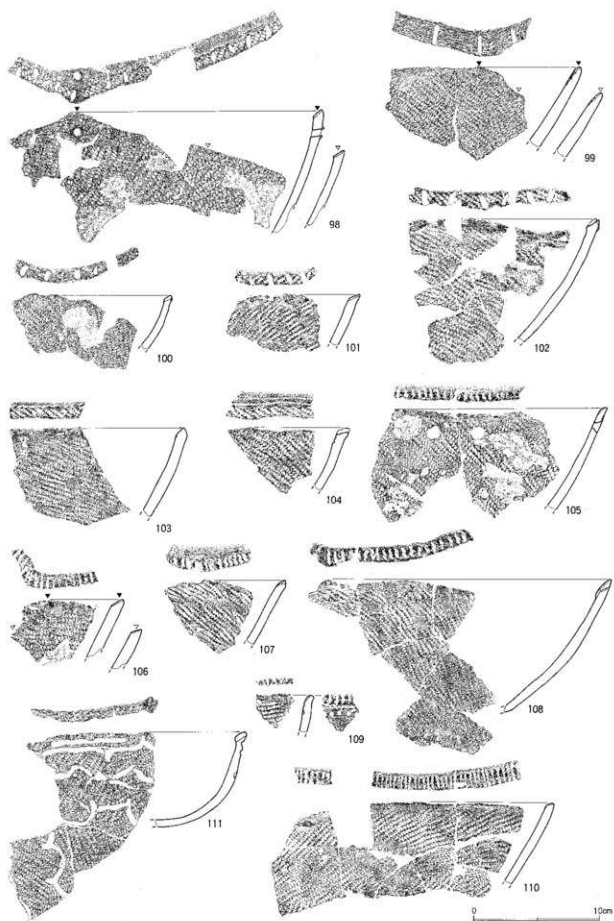
図Ⅳ-3-20 包含層の土器等(20)



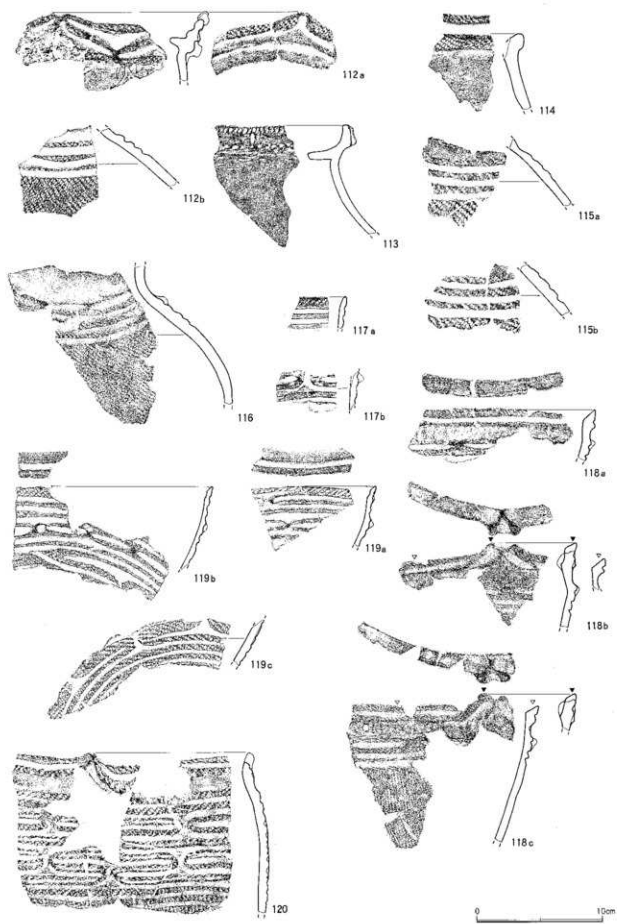
図IV-3-21 包含層の土器等(21)



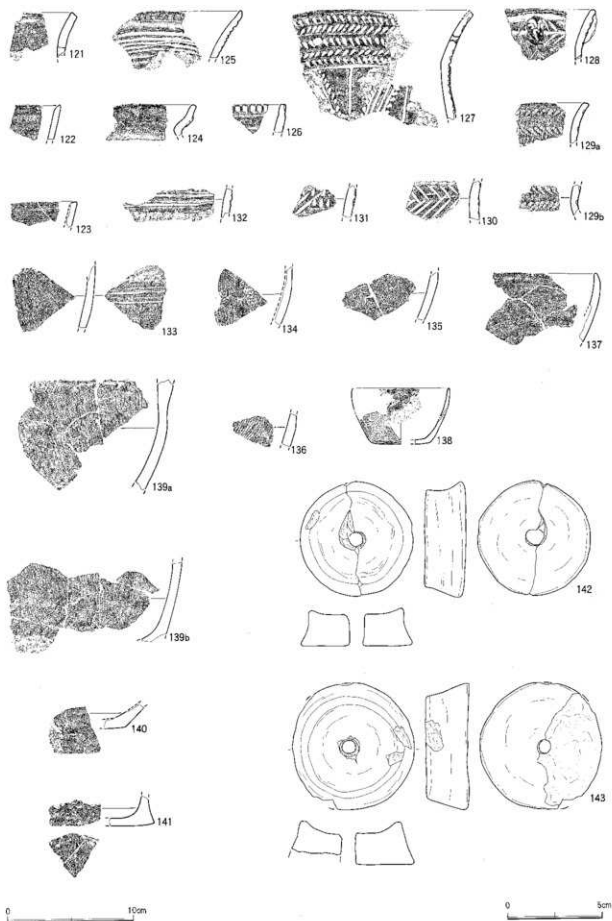
図IV-3-22 包含層の土器等(22)



図IV-3-23 包含層の土器等(23)

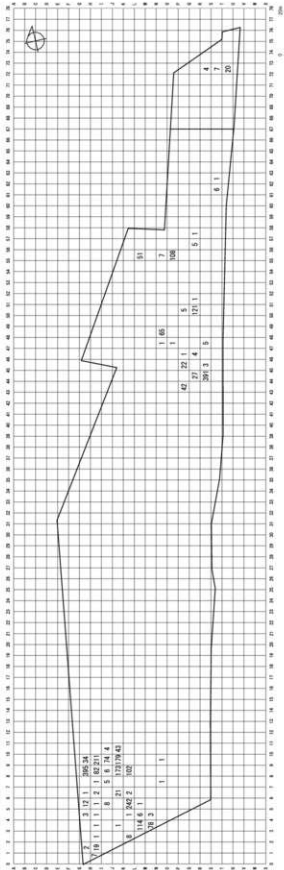


図Ⅳ-3-24 包含層の土器等(24)

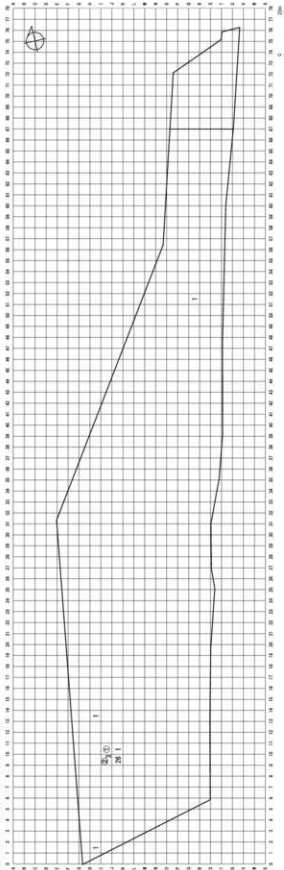


図IV-3-25 包含層の土器等(25)

層群 2, 745点から梅川遺跡(31点)



新築庫・修成粘土塊 35点 ①→新築庫



図IV-3-27 土器等の分布(2)

(2) 石器等

視梅川小野遺跡のⅢ層からは剥片石器329点、剥片2,373点、礫石器66点、原石・礫・礫片454点、石製品5点の合計3,227点が出土している。この中から定型的で完形のものを中心に抽出し掲載した。利用する石材は、剥片石器では黒曜石が占める割合は96%となり、他の石材と比べて非常に高い。剥片もほとんどが黒曜石である。礫石器では、石斧が緑色泥岩を利用する割合が高い。傾向としては、砂岩(31%)、泥岩・緑色泥岩(26%)・安山岩(14%)・その他(29%)が利用されている。礫では長さ6cm、幅4cmほどの楕円形のもが235点出している。石材は凝灰岩(28%)・砂岩(28%)・安山岩(19%)・泥岩(14%)・その他(11%)である。火打石とみられる石英やメノウの礫も出している。楕円礫を含めた礫・礫片の石材は、砂岩(24%)・凝灰岩(24%)・安山岩(18%)・泥岩(14%)・その他(20%)である。石器等の分布については、梅川1遺跡とあわせて図Ⅳ-3-31~38に掲載している。また、出土石器等点数一覧は表Ⅰ-3、包含層掲載石器等一覧は表Ⅱに掲載している。

石鏃 (図Ⅳ-3-28-1~16/表8/図版51)

石鏃は90点出している。形態では三角形鏃が15点、有茎鏃59点、柳葉形1点、破片等15点である。石材は黒曜石が87点を占め、頁岩や片岩が3点である。三角形鏃は凹基がほとんどである。有茎鏃は基部先端が突り、かえしが明瞭なものが多い。基部は凸基が多く、平基は少ない。凹基は無い。

1~6は三角形。1は平基、2~6は凹基。2・3は挟りが非常に浅い。3は流紋岩球類が非常に多く含まれる。7~15は有茎。7・8は基部先端を折損している。9~15は基部先端が突る。かえしは10を除き明瞭である。基部は7・8が平基、9~15が凸基である。12は刃部が内湾する。16は柳葉形。基部先端を折損する。1・13・15は裏面に主剥離面を残す。

石鏃 (図Ⅳ-3-28-17・18/表8/図版51)

石鏃は2点出している。2点とも掲載した。石材は黒曜石とメノウ質頁岩である。

17は棒状剥片の先端部に機能部を作出している。18は両面加工により棒状にした両端に機能部を作出している。被然により曇っている。

つまみ付きナイフ (図Ⅳ-3-28-19~21/表8/図版51)

つまみ付きナイフは5点出している。石材は黒曜石3点、頁岩1点、チャート1点である。

19・20は縦型で両面加工のもの。刃部は摩滅している。21は縦型で片面加工のもの。背面右側縁に急角度の刃部を作出している。先端部は切り出し形の形状である。背面右側縁に浅い剥離を施す。

スクレイパー (図Ⅳ-3-28-22~31、29-32~38/表8/図版51・52)

スクレイパーは99点出している。石材は黒曜石92点、頁岩・泥岩等7点である。背面の周縁・側縁に刃部をつけているものが多数を占める。このほかに錯向状に刃部をつけるものや棒状原石を利用するものがある。

22~26は背面の全周または打面を除く周縁に刃部をつけている。腹面には加工していない。27~29は錯向状に刃部をつけている。29は縦長剥片の背面右側縁、腹面右側縁と下端に直線状の刃部がある。30は剥片の下端部に円弧状の刃部をつけている。刃部は使用痕によって曇っている。31~34は縦長剥片の側縁に直線状の刃部をつけている。31は背面左側縁と下端、32は背面左側縁、33は背面右側縁に刃部がある。33の背面左側縁下部には挟り状の刃部がある。34は棒状原石の側縁を利用して刃部をつけている。被然によって曇っている。35~37はV字状の刃部がある。37は背面左側縁を両面加工により刃部をつけている。38は剥片周縁の一部に刃部をつけている。玄武岩の剥片を利用している。

石斧 (図IV-3-29-39/表8/図版52)

石斧は17点出土している。すべて破片である。石材は緑色泥岩7点、砂岩3点、橄欖岩3点、片岩3点、泥岩1点である。

39は短冊形で刃部は片刃で直刃。全面を研磨によって整形している。折損部の一部を敲打によって再加工している。

砥石 (図IV-3-29-40・41/表8/図版52)

砥石は8点出土している。すべて破片である。石材は砂岩5点、スコリア3点である。

40は扁平礫の平坦面を利用したもの。両面を使用している。41は四面砥石。棒状礫を使用して、四面の平坦な使用面のあるもの。断面が方形である。

たたき石 (図IV-3-30-42~46/表8/図版52)

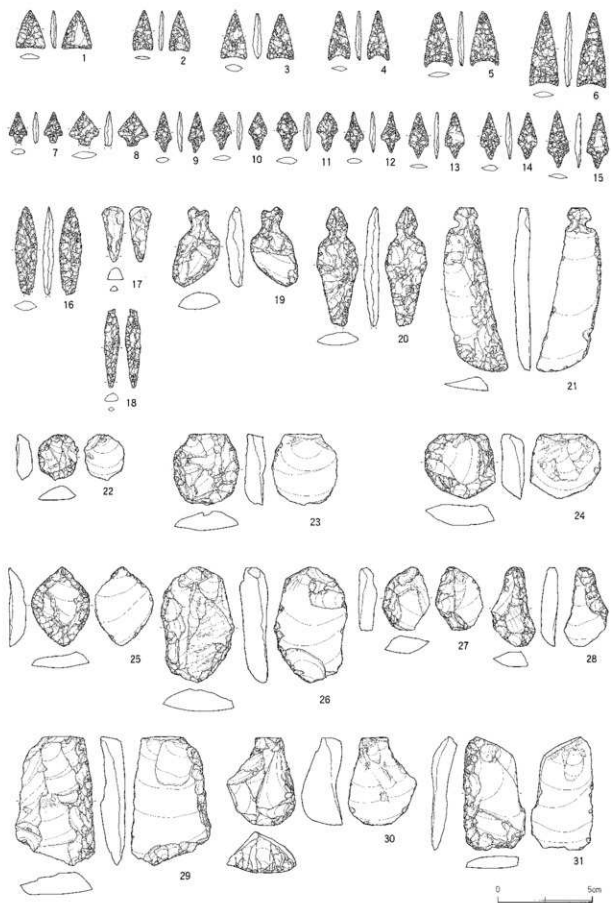
たたき石は21点出土している。石材は砂岩9点、安山岩7点、その他5点である。

42は扁平な楕円礫の腹背部と側縁の一部を使用している。43は扁平な棒状礫の腹背部を使用している。44は扁平な棒状礫の両端部・側縁部・背部を使用している。45は棒状礫の端部を使用している。46は扁平な棒状礫の側縁を使用している。腹背部と左側縁には研磨痕がみられ、すり石としての使用も考えられる。

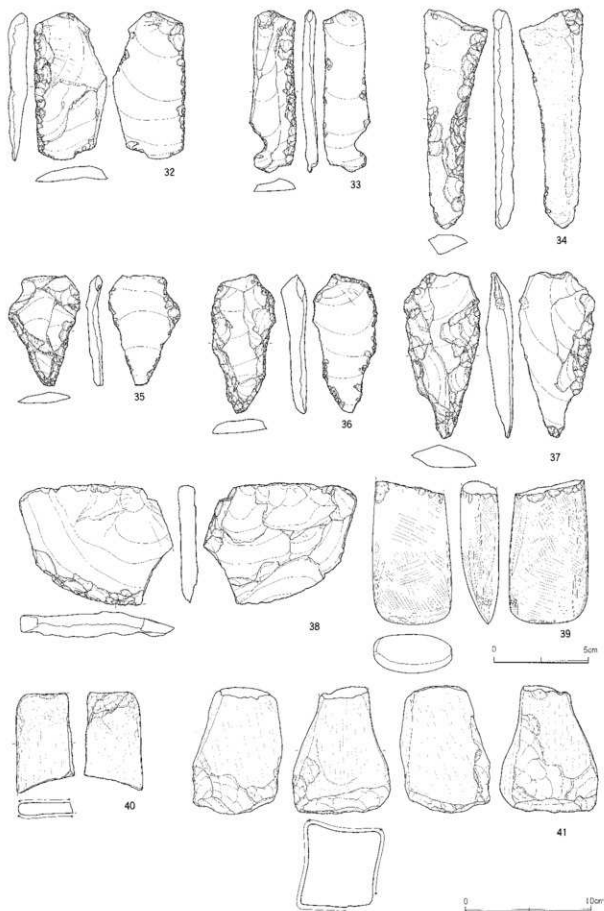
石製品 (図IV-3-30-47~51/表8/図版52)

石製品は5点出土している。すべて掲載した。黒曜石製石製品1点と有孔石製品3点、玉類1点である。

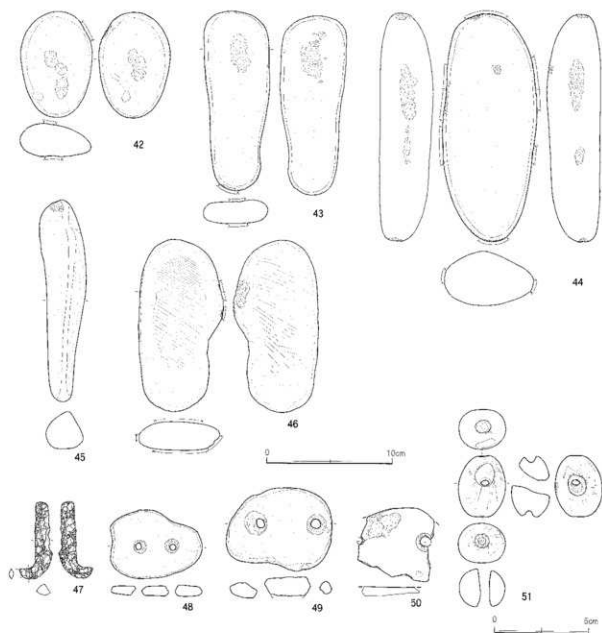
47は黒曜石製の石製品。黒曜石を細かい剥離によって棒状に加工し、J字状の形状を作り出している。基部先端には原石面が残る。先端部は折損している。48~50は有孔石製品。凝灰岩の薄く扁平な楕円礫の長軸方向2カ所に穿孔を施したもの。穿孔は両面から行われている。糸ずれ痕は確認できない。50は破片。長軸両端と下部および背面を欠失している。51は蛇紋岩製の玉。卵形に整形し、全面を研磨している。表面は非常に丁寧な研磨を施され、研磨痕はほとんど確認できない。貫通孔は、背面の長軸や上寄りからと腹面のほぼ中央から穿孔が行われている。糸ずれによる磨耗により、孔の上方が広がっている。貫通孔の内面には穿孔痕を確認できるが、貫通孔上部は糸ずれによる磨耗によって研磨され、穿孔痕は確認できない。長軸両端には穿孔を試みた痕跡が残っている。おおよそ径6mm、深さ4mmほどの窪みとなっている。当初は長軸方向に貫通孔を穿孔する予定だったものを途中で断念し、短軸方向から穿孔したと考えられる。(酒井)



図Ⅳ-3-28 包含層の石器等(1)

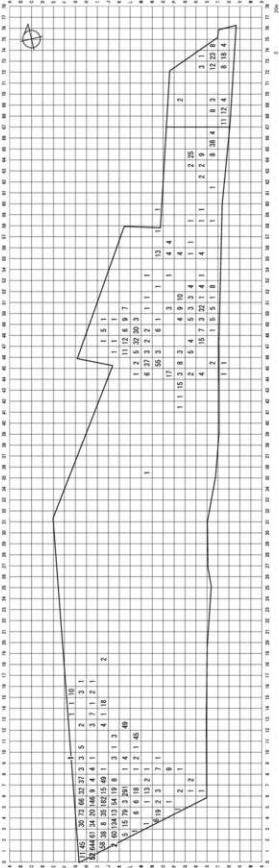


図IV-3-29 包含層の石器等(2)

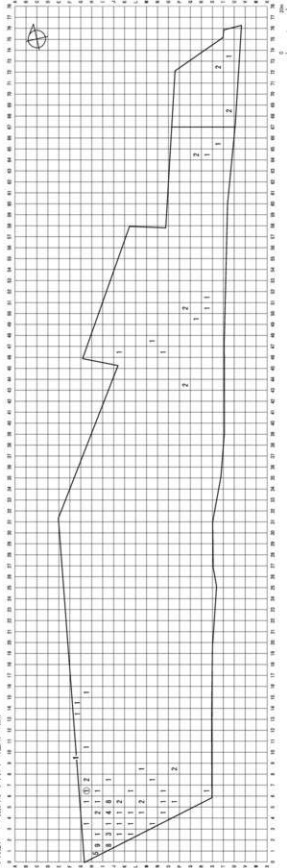


図N-3-30 包含層の石器等(3)

石器総合計 3,344点(うち梅川1遺跡117点)

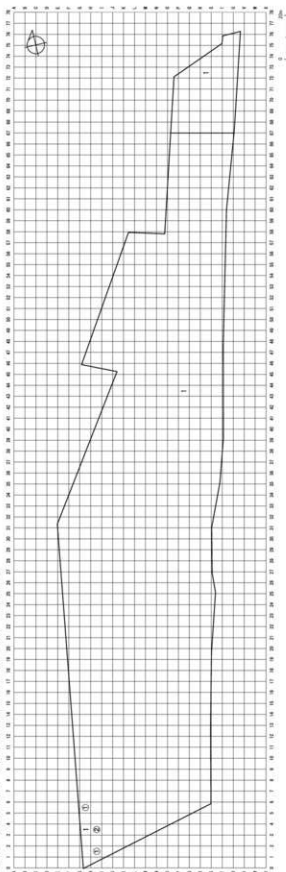


石鏃 95点(うち梅川1遺跡5点)

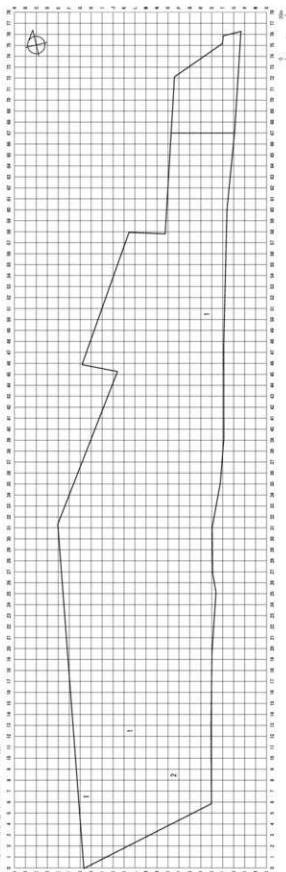


図IV-3-31 石器等の分布(1)

石籠・砂防石籠 4点 (うち南川1箇所1点)・4点 照野川(2) ①

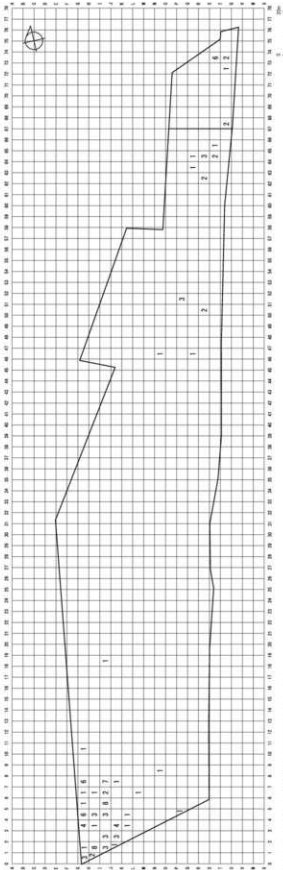


つまみ付きナイフ 5点

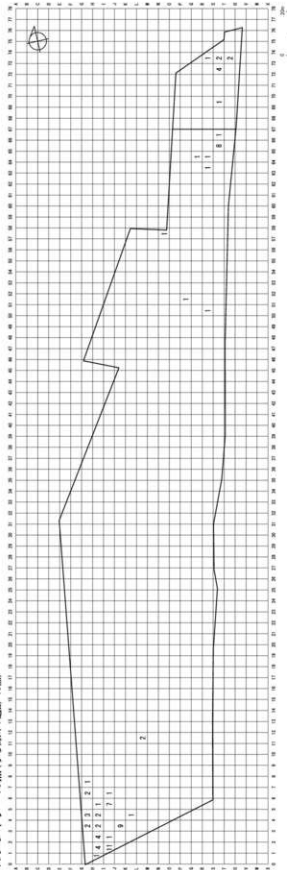


図IV-3-32 石籠等の分布(2)

スケレイバー 110点(うち梅川1遺跡 11点)

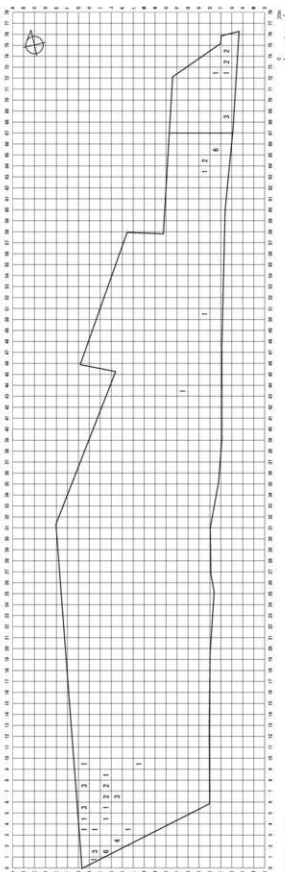


Rフレイク 79点(うち梅川1遺跡 10点)

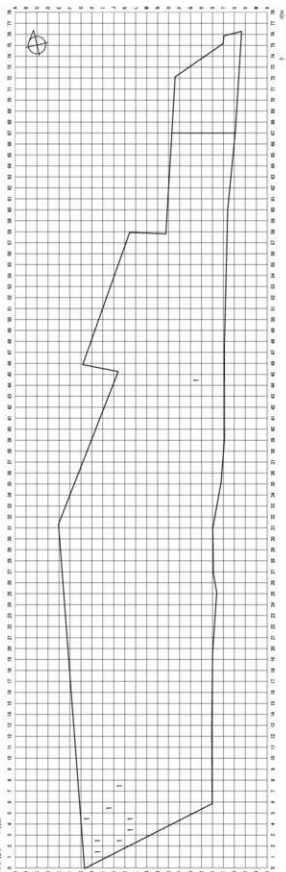


図IV-3-33 石器等の分布(3)

ウフレイク 59点 (うち堀川1遺跡 9点)

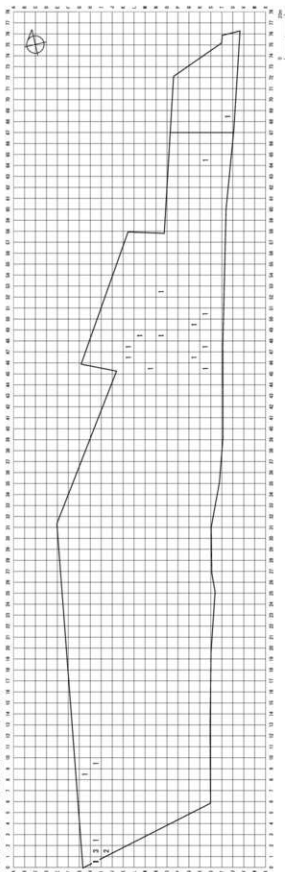


石椀 9点

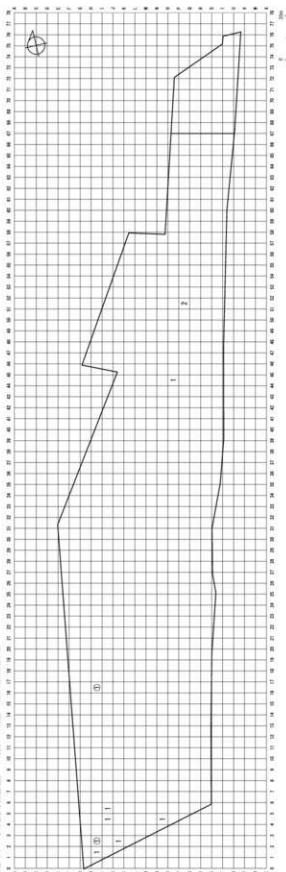


図V-3-34 石器等の分布(4)

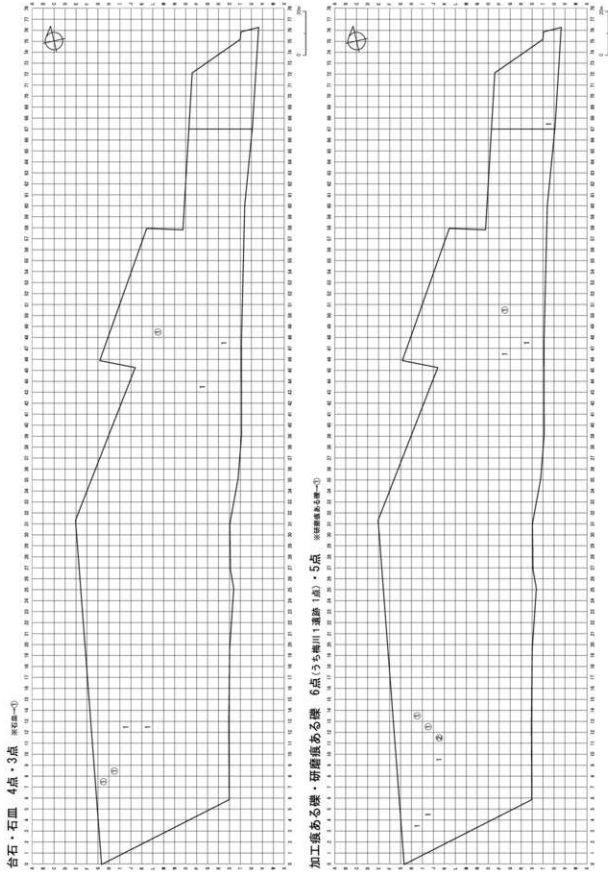
たたき石 22点(うち柳川1遺跡 1点)



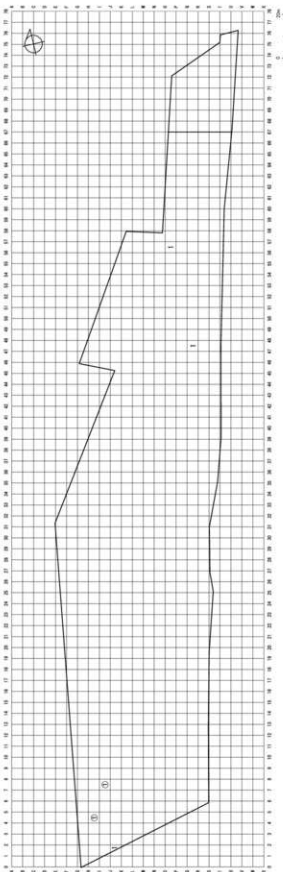
砥石・矢柄研磨器 8点・2点



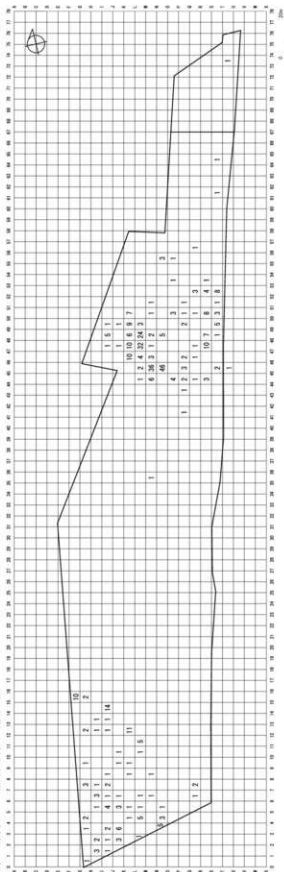
図IV-3-36 石器等の分布(6)



原石・棒状原石 3点・2点 無標原石-①



礫・礫片 450点(うち南川1運跡1点)



図V-3-38 石器等の分布(8)

表1 検出遺構規模一覧

遺構 種別	遺構名	調査区	規模 (m)				時期	特徴	図番号	図版番号						
			上端		下端											
			長軸	短軸	長軸	短軸										
ⅡH-1	HP-1	M7 a	0.12	0.10	0.04	0.02	0.25	アイヌ文化期	前小艇が付属	図IV-1-4	図版2					
	HP-2	M7 a・b	0.12	0.10	0.04	0.03	0.26									
	HP-3	M7 b	0.14	0.08	0.02	0.02	0.19									
	HP-4	N7 a	0.19	0.08	0.02	0.02	0.14									
	HP-5	N7 d	0.14	0.14	0.04	0.04	0.26									
	HP-6	M7 c N7 d	0.12	0.10	0.04	0.04	0.16									
	HP-7	M8 b	0.12	0.11	0.02	0.02	0.27									
	HP-8	M7 d	0.11	0.10	0.03	0.03	0.07									
	HP-9	M7 b	0.12	0.10	0.02	0.02	0.35									
	HP-10	M7 d	0.10	0.10	0.02	0.02	0.15									
	HP-11	M7 b・c	0.39	0.29	—	—	0.09									
		[L・M・4・5]	—	—	—	—	—									
	ⅡH-2	HP-1	L4 c	0.16	0.14	0.04	0.04					0.28	アイヌ文化期	前小艇が付属	図IV-1-5	図版3
		HP-2	L4 b・c	0.12	0.11	0.02	0.02					0.40				
		HP-3	M4 a	0.12	0.10	0.03	0.03					0.18				
		HP-4	M4 a	0.10	0.10	0.04	0.03					0.22				
		HP-5	M4 c	0.11	0.10	0.04	0.03					0.30				
		HP-6	M4 c	0.12	0.10	0.04	0.03					0.28				
		HP-7	M5 a	0.14	0.12	0.04	0.04					0.32				
HP-8		M5 a	0.10	0.09	0.04	0.03	0.17									
HP-9		L5 b	0.12	0.10	0.03	0.02	0.18									
HP-10		L5 b	0.14	0.12	0.04	0.02	0.42									
HP-11		L5 a	0.12	0.11	0.04	0.03	0.29									
HP-12		L5 b	0.13	0.11	0.04	0.03	0.20									
HP-13		L5 c	0.12	0.10	0.06	0.04	0.24									
HP-14		L5 b	0.14	0.12	0.04	0.04	0.37									
HP-15		L5 b	0.12	0.10	0.03	0.02	0.18									
HP-16		L5 b	0.14	0.12	0.04	0.03	0.20									
HP-17		L5 c	0.10	0.09	0.03	0.02	0.18									
HP-18		L5 a	0.12	0.09	0.04	0.02	0.23									
HP-19		M5 a	0.14	0.09	0.03	0.02	0.11									
HP-20		M4 d	0.12	0.09	0.04	0.03	0.20									
HP-1	M4 d	0.38	0.30	—	—	0.10										
住居跡		H6-7	(6.17)	(2.72)	(5.60)	(2.66)	0.76	縄文文化期	約1/2が範囲外 海側に壁 土柱穴2基 盛り上げ土	図IV-1-6-9	図版4・5					
	HP-1	G6 d	0.32	0.30	0.13	0.05	0.39									
	HP-2	G7 a	0.42	0.36	0.23	0.12	0.44									
	HP-3	G6 b	0.13	0.12	0.06	0.05	0.12									
	HP-4	G6 c	0.12	0.12	0.08	0.06	0.10									
	HP-5	G6 c	0.10	0.09	0.05	0.04	0.10									
	HP-6	G7 b	0.10	0.10	0.04	0.03	0.20									
	HP-7	G7 a	0.11	0.10	0.07	0.05	0.11									
	HP-8	G7 a	0.10	0.09	0.07	0.06	0.12									
	HP-9	G7 a	0.11	0.10	0.05	0.05	0.10									
	HP-10	G6 b	0.10	0.09	0.04	0.03	0.15									
	HP-11	G6 b	0.14	0.13	0.06	0.05	0.26									
	HP-12	G6 b	0.13	0.12	0.04	0.03	0.14									
	HP-13	G6 a	0.11	0.10	0.04	0.03	0.08									
	HP-14	G6 a・b・d	0.22	0.18	0.07	0.06	0.08									
	HP-15	G6 b	0.12	0.11	0.04	0.03	0.09									
	HP-16	G6 b	0.10	0.10	0.04	0.03	0.06									
	HP-17	G6 c	0.10	0.09	0.04	0.03	0.09									
	HP-18	G6 d・G7 a	(0.75)	(0.56)	0.51	0.45	0.10									
	H4-6 I5	4.81	3.49	4.61	3.22	0.20										
ⅡH-4	HP-1	H4 c	0.09	0.09	0.03	0.03	0.24	縄文文化期	盛り込み残い 壁なし 盛り上げ土	図IV-1-10-12	図版6					
	HP-2	I5 a	0.08	0.08	0.02	0.02	(0.08)									
	HP-3	H6 b	0.13	0.12	0.03	0.03	0.41									
	HP-4	H6 b	0.06	0.06	0.02	0.02	0.17									
	HP-5	H5 d	0.10	0.09	0.03	0.03	0.24									
	HP-6	H5 c	0.11	0.09	0.03	0.02	0.19									
	HP-7	H5 c	0.06	0.06	0.02	0.02	0.16									
	HP-8	H5 c	0.07	0.07	0.03	0.03	0.11									
	(I・J2)	—	—	—	—	—										
ⅡH-5	HP-1	I2 d	0.11	0.09	0.03	0.03	0.20	アイヌ文化期	集石を伴う	図IV-1-13	図版7					
	HP-2	I2 c	0.09	0.08	0.04	0.04	0.18									
	HP-3	I2 c	0.10	0.10	0.02	0.02	0.17									
	HP-4	I2 d	0.11	0.11	0.04	0.03	0.08									
	HP-5	I2 d	0.11	0.09	0.03	0.02	0.23									
	HP-6	I2 d	0.08	0.09	0.02	0.01	0.22									
	HP-7	I2 a	0.13	0.13	0.03	0.02	0.18									
	HP-8	I2 a	0.11	0.10	0.05	0.04	0.06									
	HP-9	I2 a	0.14	0.13	0.04	0.04	0.10									
	HP-10	I2 a・b	0.10	0.08	0.02	0.02	0.21									
	HP-11	I2 b	0.11	0.11	0.02	0.02	0.33									

遺構 種別	遺構名	調査区	規模 (m)				深さ	時期	特徴	図番号	図説番号	
			上端		下端							
			長軸	短軸	長軸	短軸						
住居跡	ⅢH-5	HP-12	1 2 b	0.08	0.08	0.04	0.03	0.12	アイヌ文化層	ⅢIV-1-13	図版7	
		HP-13	1 2 a	0.10	0.09	0.03	0.02	0.20				
		HP-14	1 2 b・c	0.70	0.50	—	—	0.09				
		HS-1	1 2 c・d	1.23	0.50	—	—	—				
		G・H・1・2	6.94	3.29	6.33	2.74	0.60					
	HP-1	H 2 a・b	0.09	0.08	0.09	0.07	0.27					
	HP-2	H 1 d H 2 a	0.19	0.16	0.05	0.04	0.35					
	HP-3	H 1 d	0.13	0.11	0.13	0.12	0.17					
	HP-4	H 2 a	0.72	0.62	0.46	0.45	0.25					
	HP-5	H 2 a	0.54	0.49	0.30	0.29	0.23					
	HP-6	G 2 b	0.55	0.53	0.34	0.30	0.38					
	HP-7	H 1 d	1.11	0.50	0.98	0.37	0.23					
	HP-8	H 1 d	0.78	0.62	0.63	0.44	0.23					
	HP-9	H 1 a	0.50	0.49	0.27	0.24	0.31					
	HP-10	H 1 a	0.24	0.18	0.09	0.09	0.38					
	HP-11	H 1 a	0.84	0.48	0.72	0.28	0.15					
	HP-12	H 1 d	0.49	0.45	0.31	0.30	0.21					
HP-13	H 1 a	0.45	0.41	0.29	0.25	0.15						
HP-14	H 1 a	0.21	0.18	0.14	0.13	0.15						
HP-15	G 1 b	0.18	0.16	0.08	0.07	0.20						
HP-16	G 1 b H 1 a	0.11	0.11	0.09	0.08	0.14						
HP-17	H 1 d	0.13	0.11	0.08	0.07	0.10						
ⅢH-7	ⅢH-7	G・H・3・4	(6.21)	(2.57)	4.98	2.45	0.52	縄文晩期後葉	約1/2-2/3は範囲外 目P-49に埋される	ⅢIV-1-17-18	図版9	
		HP-1	G 3 b・c	0.78	0.62	0.41	0.27					0.35
		HP-2	G 3 c	0.85	0.60	0.52	0.28					0.32
		HP-3	G 3 c	0.85	0.60	0.52	0.28					0.32
		HP-4	G 4 b	1.01	0.56	0.79	0.36					0.25
ⅢH-8	ⅢH-8	G・H9-11 110・11	9.25	7.65	7.60	7.15	0.73	縄文文化層	青銅に鑑 主柱穴4基 掘り上げ土	ⅢIV-1-19-23	図版10・11	
		HP-1	H10 b・c	0.28	0.25	0.23	0.18					0.33
		HP-2	G10 b	0.27	0.27	0.18	0.18					0.60
		HP-3	G11 b	0.30	0.28	0.23	0.18					0.43
HP-4	H11 b	0.30	0.28	0.20	0.18	0.50						
ⅢH-9	ⅢH-9	I・J・10・11 (4.77)	4.03	(4.28)	(3.32)	0.30	縄文文化層	掘り込み浅い 部あり	ⅢIV-1-24	図版12		
		HP-1	J10 c	0.12	0.10	—					—	0.37
		HP-2	J11 b	0.08	0.10	—					—	0.28
		HP-3	J11 a	0.08	0.10	—					—	0.15
		HP-4	J11 a	0.12	0.13	—					—	0.17
		HP-5	J11 a	0.08	0.07	—					—	0.14
HP-6	J10 c・d	0.08	0.08	—	—	0.36						
土坑	ⅢP-10 ⅢP-1 ⅢP-2 ⅢP-3 ⅢP-4 ⅢP-5 ⅢP-6 ⅢP-7 ⅢP-8 ⅢP-9 ⅢP-10 ⅢP-11 ⅢP-12 ⅢP-13 ⅢP-14 ⅢP-15 ⅢP-16 ⅢP-17 ⅢP-18 ⅢP-19 ⅢP-20 ⅢP-21 ⅢP-22 ⅢP-23 ⅢP-24 ⅢP-25 ⅢP-26 ⅢP-27 ⅢP-28 ⅢP-29 ⅢP-30 ⅢP-31 ⅢP-32 ⅢP-33 ⅢP-34 ⅢP-35	F・G・8・9 (4.14)	(0.40)	(3.86)	(0.34)	0.56	縄文文化層	大部分が範囲外	ⅢIV-1-25	図版13		
		P 7 c Q 7 d	1.08	0.96	0.78	0.70	0.71	縄文晩期後葉		ⅢIV-1-27	図版15 図版15	
		P 7 c P 8 a b	1.06	0.90	0.88	0.64	0.56	縄文晩期後葉				
		P 7 c	0.80	0.68	0.56	0.50	0.46	縄文晩期後葉				
		Q 8 d	0.96	0.77	0.62	0.54	0.19	縄文晩期後葉				
		P 7 d P 8 a	1.04	0.98	0.72	0.68	0.57	縄文晩期後葉				
		O 8 a	0.88	0.84	0.68	0.48	0.47	縄文晩期後葉		ⅢIV-1-28	図版15	
		O 8 a・d	0.88	0.80	0.60	—	0.48	縄文晩期後葉				
		R 32 a・b・d	1.21	1.20	1.02	0.90	0.25	縄文晩期後葉		ⅢIV-1-29	図版15 図版15	
		Q 31 c Q 32 b	1.47	1.35	1.09	1.02	0.31	縄文晩期後葉	墳底に炭化物集中			
		S 32 d	1.43	(0.84)	1.25	(0.65)	0.81	縄文晩期後葉	約1/3は範囲外			
		Q 32 c Q 33 b	1.06	1.06	0.70	0.68	0.49	縄文晩期後葉		ⅢIV-1-30	図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16 図版16	
		N 9 c O 9 d	1.06	0.96	0.62	0.60	0.68	縄文晩期後葉				
		N 8 c O 8 d	1.22	1.04	0.60	0.55	0.63	縄文晩期後葉				
		N 9 b	1.04	0.92	0.56	0.56	0.57	縄文晩期後葉				
		N 9 a	1.60	1.20	0.66	0.62	0.70	縄文晩期後葉				
		N 8 a・b	1.04	1.04	0.50	0.50	0.54	縄文晩期後葉				
		N 8 b O 8 a	1.16	1.16	0.64	0.66	0.67	縄文晩期後葉				
		N 8 c	1.14	0.94	0.56	0.62	0.55	縄文晩期後葉				
		M 9 c	0.78	0.74	0.62	0.65	0.37	縄文晩期後葉				
		M 9 c M10 b	0.82	0.82	0.50	0.48	0.53	縄文晩期後葉				
		N 8 c	1.18	0.96	0.76	0.68	0.46	縄文晩期後葉				
		N10 a	0.87	0.84	0.54	0.44	0.31	縄文晩期後葉				
		N 8 c N 9 b	1.16	0.98	0.72	0.64	0.53	縄文晩期後葉				
		1 5 b J 5 a	1.09	1.02	0.79	0.73	0.61	縄文晩期後葉	埋葬2個体出土			
		J 5 a・b	0.91	0.89	0.67	0.70	0.50	縄文晩期後葉				
		J 5 b	0.75	0.62	0.47	0.39	0.52	縄文晩期後葉				
		L 16 a	0.65	0.59	0.40	0.35	0.19	縄文晩期後葉				
		I 1 c J 1 d	0.96	0.93	0.81	0.83	0.43	縄文晩期後葉				
		H 2 a・d	1.19	1.17	0.60	0.60	0.73	縄文晩期後葉				
		H 2 d	1.55	1.24	0.79	0.68	0.64	縄文晩期後葉				
		H 2 d H 3 a	1.28	1.27	0.73	0.78	0.86	縄文晩期後葉				
		1 7 b・c	1.22	(0.58)	0.88	(0.44)	0.69	縄文晩期後葉				
		N 4 b	1.11	0.98	0.79	0.79	0.50	縄文晩期後葉				
		1 2 b・c	0.73	0.65	0.43	0.33	0.28	縄文晩期後葉				
N 4 c・d N 5 a・b	1.02	1.02	0.71	0.70	0.28	縄文晩期後葉						

遺構 類別	遺構名	調査区	規模 (m)				時期	特徴	図番号	図版番号
			上端		下端					
			長軸	短軸	長軸	短軸				
土坑	遺P-36	K3a	0.61	0.57	0.40	0.38	0.24	縄文晩期後葉		図N-1-36
	遺P-37	H2c・d H13a・b	0.95	0.38	0.54	0.44	0.44	縄文晩期後葉		
	遺P-38	H3b・c	0.86	0.81	0.56	0.54	0.49	縄文晩期後葉		
	遺P-39	G1b H1a	0.72	0.69	0.22	0.15	0.44	縄文晩期後葉	上部に土器集中区	図N-1-37
	遺P-40	N10b・c	0.81	0.75	0.51	0.37	0.38	縄文晩期後葉		
	遺P-41	H2a・b	1.04	0.96	0.56	0.55	0.42	縄文晩期後葉		
	遺P-42	H1c・d H12a・b	0.78	0.73	0.58	0.57	0.37	縄文晩期後葉		図N-1-38
	遺P-43	K13c K14b	0.92	0.92	0.50	0.50	0.31	縄文晩期後葉		
	遺P-44	K14b・c	0.90	0.70	0.44	0.40	0.24	縄文晩期後葉		
	遺P-45	H14d H15a	1.04	0.98	0.72	0.68	0.25	縄文晩期後葉		
	遺P-46	I4b・c	(1.06)(1.04)	0.78	0.64	0.64		縄文晩期後葉		図N-1-39
	遺P-47	I4a・b	0.89	0.83	0.44	0.42	0.50	縄文晩期後葉		
	遺P-48	H3d H4a	1.13	0.94	0.57	0.48	0.54	縄文晩期後葉		図N-1-40
	遺P-49	G13c・H9a・d	1.17	1.01	0.61	0.42	0.55	縄文晩期後葉	遺H-7を挟す	
	遺P-50	H3a・d	0.95	0.92	0.46	0.36	0.38	縄文晩期後葉	遺P-51を挟す	図N-1-41
	遺P-51	H3a・d	(1.10)	1.10	0.61	0.59	0.68	縄文晩期後葉	遺P-50に隣接する	
	遺P-52	O4c	0.88	0.86	—	0.54	0.28	縄文晩期後葉		
	遺P-53	I4a・d	0.75	0.73	0.46	0.40	0.48	縄文晩期後葉		
	遺P-54	I5a・b	0.88	0.78	0.72	0.68	0.38	縄文晩期後葉		図N-1-41
	遺P-55	I5a・d	0.68	0.66	0.36	0.35	0.29	縄文晩期後葉		
	遺P-56	G5a・b	1.12	0.74	0.44	0.37	0.52	縄文晩期後葉	審判土器出土	図N-1-42-44
	遺P-57	I7b	0.82	0.82	0.35	0.35	0.42	縄文晩期後葉		
	遺P-58	F17b・c	2.06	1.92	1.60	1.54	0.90	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-43
	遺P-59	I1b J1a	(0.58)(0.021)	—	—	—	0.56	縄文晩期後葉	大部分が範囲外	
	遺P-60	G1c	1.27	1.28	0.74	0.66	0.62	縄文晩期後葉		図N-1-44
	遺P-61	I13a	1.48	1.32	0.75	0.62	0.68	縄文晩期後葉		
	遺P-62	I3b・c	1.35	1.31	0.66	0.60	0.78	縄文晩期後葉		図N-1-46
	遺P-63	I13d	1.45	1.39	0.62	0.68	0.82	縄文晩期後葉		
	遺P-64	G13b・c H13a・d	1.65	1.45	0.74	0.67	0.84	縄文晩期後葉		図N-1-47
	遺P-65	I12d	1.26	1.22	0.75	0.67	0.71	縄文晩期後葉		
	遺P-66	I2d	1.29	1.28	0.70	0.70	0.65	縄文晩期後葉		図N-1-48
	遺P-67	I12a・d	1.54	1.42	0.66	0.63	0.76	縄文晩期後葉		
	遺P-68	H12b	1.39	(0.86)	0.51	(0.35)	0.65	縄文晩期後葉		図N-1-49
	遺P-69	H12c	1.53	1.36	0.69	0.57	0.64	縄文晩期後葉		
	遺P-70	G12c H12d	1.98	1.76	0.88	0.79	0.88	縄文晩期後葉		図N-1-50
	遺P-71	G1a	1.08	1.04	0.38	0.38	0.57	縄文晩期後葉		
	遺P-72	H14d H14a	1.72	1.62	0.84	0.68	0.82	縄文晩期後葉		図N-1-51
	遺P-73	H10c・c H14a・d	1.64	1.62	0.71	0.60	0.81	縄文晩期後葉		
	遺P-74	H13c H14b H13d H14a	1.42	1.22	0.63	0.59	0.73	縄文晩期後葉		図N-1-52
	遺P-75	G15c G16b	1.07	0.95	0.74	0.67	0.40	縄文晩期後葉		
	遺P-76	G9a・b	1.19	1.15	0.38	0.53	0.68	縄文晩期後葉		図N-1-53
	遺P-77	F10c	0.84	0.72	0.65	0.50	0.43	縄文晩期後葉		
	遺S P-13	N6a	0.14	0.14	0.04	0.04	0.13	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-54
	遺S P-14	N6a・d	0.12	0.12	0.04	0.04	0.06	晩期後葉～アイヌ文化期		
	遺S P-19	M5a	0.14	0.12	0.04	0.03	0.12	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-55
遺S P-21	M3d	0.11	0.09	0.02	0.02	0.13	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-29	N6b	0.11	0.10	0.04	0.03	0.12	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-56	
遺S P-32	M9b N9a	0.16	0.15	0.10	0.08	0.15	晩期後葉～アイヌ文化期	先端角形		
遺S P-33	M6d	0.10	0.09	0.04	0.04	0.16	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-34	M6d	0.14	0.06	0.03	0.03	0.20	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-57	
遺S P-35	M6c	0.14	0.10	0.04	0.04	0.23	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-36	M6b	0.16	0.13	0.08	0.05	0.41	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-58	
遺S P-52	L4d	0.13	0.12	0.04	0.04	0.17	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-54	L4a	0.14	0.11	0.04	0.04	0.28	晩期後葉～アイヌ文化期	層出土	図N-1-59	
遺S P-55	L4a	0.13	0.08	0.04	0.04	0.25	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-56	L4a	0.13	0.12	0.03	0.05	0.22	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-60	
遺S P-70	L5a	0.14	0.13	0.03	0.02	0.28	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-71	L5c	0.10	0.10	0.02	0.02	0.20	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-61	
遺S P-73	L3d	0.12	0.09	0.03	0.03	0.17	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-75	L3b	0.13	0.13	0.02	0.02	0.24	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-62	
遺S P-79	L7b	0.12	0.11	0.05	0.04	0.11	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-82	R14d	0.15	0.14	0.08	0.08	0.23	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-63	
遺S P-83	M3c	0.12	0.11	0.04	0.03	0.44	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-84	M3c	0.12	0.10	0.04	0.02	0.27	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-64	
遺S P-86	M3d	0.14	0.10	0.05	0.04	0.20	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-89	M3a・b	0.13	0.12	0.04	0.03	0.23	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-65	
遺S P-92	M3a	0.12	0.10	0.02	0.02	0.34	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-93	M3a	0.10	0.08	0.04	0.04	0.17	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-66	
遺S P-94	L3c	0.10	0.09	0.04	0.02	0.27	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-95	L3c	0.10	0.08	0.03	0.03	0.20	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-67	
遺S P-96	K8a	0.13	0.11	0.05	0.05	0.11	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-100	K8a	0.12	0.12	0.04	0.04	0.16	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-68	
遺S P-101	K7d	0.15	0.13	0.04	0.04	0.28	晩期後葉～アイヌ文化期			
遺S P-109	K3c	0.11	0.10	0.03	0.02	0.16	晩期後葉～アイヌ文化期		図N-1-69	
遺S P-110	H4b	0.11	0.09	0.04	0.04	0.23	晩期後葉～アイヌ文化期			

遺構名	層位又は付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	層位又は付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数													
ⅢH-5	ⅢS-1	合計			合計	63	ⅢH-5	ⅢS-1	合計			265												
		総計			合計	63			ⅢS-1			合計	265											
ⅢH-5	ⅢS-1	礎土	土器	Ⅴ群b類		9	ⅢS-1	ⅢS-1	礎土	Ⅴ群c類		71												
			Ⅴ群c類		672	ⅢS-1			Ⅴ群c類		1													
		網片石葺	石籠	黒曜石		3		ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	網片	黒曜石		1										
			コアミ付ホトタイプ	黒曜石		1				網片石葺	網片	黒曜石		1										
			スタレイバー	頁岩		1				礎石	礎	黒炭岩		1										
			Ⅰフレイク	黒曜石		23				礎石	礎	黒炭岩		1										
			Ⅱフレイク	黒曜石		4				礎石	礎	黒炭岩		1										
		礎石葺	網片	頁岩		1		ⅢS-1	ⅢS-1	礎石葺	網片	黒曜石		229										
			網片	黒曜石		1				礎石葺	網片	黒曜石		1										
			礎	黒炭岩		1				礎石葺	礎	黒炭岩		1										
	礎		黒炭岩		1	礎石葺	礎			黒炭岩		1												
	礎		砂岩		1	礎石葺	礎			砂岩		1												
	合計			合計	945	ⅢS-1			合計	合計	19													
	ⅢH-5	ⅢS-1	礎土	Ⅴ群c類		39	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群c類		39	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群c類		1								
				Ⅴ群		1			Ⅴ群		1			Ⅴ群		1								
			網片石葺	石籠	黒曜石			2	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺		網片	黒曜石		1								
				スタレイバー	黒曜石			9			網片石葺		網片	黒曜石		1								
				網片	黒曜石			2			礎石葺		礎	黒炭岩		1								
	礎石葺	石葺	片岩		1	礎石葺	礎	黒炭岩		1														
	合計			合計	54	ⅢS-1			合計	合計	54													
ⅢH-6	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		1	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		12	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		1									
			Ⅴ群c類		73			Ⅴ群c類		73			Ⅴ群c類		1									
		網片石葺	石籠	黒曜石			4	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺		網片	黒曜石		3									
			スタレイバー	黒曜石			4			網片石葺		網片	黒曜石		2									
			Ⅰフレイク	頁岩			1			網片石葺		網片	黒曜石		1									
			Ⅱフレイク	黒曜石			1			礎石葺		礎	黒炭岩		5									
			網片	頁岩			1			礎石葺		礎	砂岩		1									
		合計			合計		124	ⅢS-1				合計	合計	124										
		ⅢH-6	ⅢS-1	ⅢH-6	Ⅴ群b類			1	ⅢS-1	ⅢH-6		Ⅴ群b類		1	ⅢS-1	ⅢH-6	Ⅴ群b類		1					
					Ⅴ群c類			4				Ⅴ群c類		4			Ⅴ群c類		1					
網片石葺	Ⅰフレイク			黒曜石		1	ⅢS-1	ⅢH-6		網片石葺	Ⅰフレイク	黒曜石		1										
	Ⅴ群c類				2	網片石葺				Ⅴ群c類		2												
	網片石葺			網片	黒曜石					1	網片石葺	網片	黒曜石			1								
合計				合計	6	ⅢH-6				合計	合計	6												
ⅢH-6	ⅢS-1			ⅢH-8	Ⅴ群b類		7	ⅢS-1		ⅢH-8	Ⅴ群b類		7	ⅢS-1		ⅢH-8	Ⅴ群b類		1					
					Ⅴ群不明		2				Ⅴ群不明		2				Ⅴ群不明		1					
				網片石葺	スタレイバー	玄武岩				1	ⅢS-1	ⅢH-8	網片石葺			スタレイバー	玄武岩		1					
					網片	黒曜石				2			網片			黒曜石		2						
		合計			合計	12	ⅢH-8			合計	合計	12												
		ⅢH-6	ⅢS-1	ⅢH-9	Ⅴ群b類		1		ⅢS-1	ⅢH-9	Ⅴ群b類		1		ⅢS-1	ⅢH-9	Ⅴ群b類		1					
					Ⅴ群c類		1				Ⅴ群c類		1				Ⅴ群c類		1					
				網片石葺	Ⅴ群c類		40			ⅢS-1	ⅢH-9	網片石葺	Ⅴ群c類				40	ⅢS-1	ⅢH-9	網片石葺	Ⅴ群c類		1	
					石籠	黒曜石						1	石籠			黒曜石				1	石籠	黒曜石		1
					網片	黒曜石						5	網片			黒曜石				5	網片	黒曜石		1
合計				合計	59	ⅢH-9				合計	合計	59												
ⅢH-6	ⅢS-1			ⅢH-11	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1		ⅢH-11	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1		ⅢH-11	Ⅴ群b類		1					
					Ⅴ群不明		1				Ⅴ群不明		1				Ⅴ群不明		1					
				網片石葺	Ⅴ群c類		8			ⅢS-1	ⅢH-11	網片石葺	Ⅴ群c類				8	ⅢS-1	ⅢH-11	網片石葺	Ⅴ群c類		2	
					スタレイバー	黒曜石						1	スタレイバー			黒曜石				1	スタレイバー	黒曜石		1
		網片	黒曜石			2	網片		黒曜石				2		網片	黒曜石				1				
		合計			合計	16	ⅢH-11			合計	合計	16												
		ⅢH-6	ⅢS-1	ⅢH-12	Ⅴ群c類		1		ⅢS-1	ⅢH-12	Ⅴ群c類		1		ⅢS-1	ⅢH-12	Ⅴ群c類		1					
					Ⅴ群不明		1				Ⅴ群不明		1				Ⅴ群不明		1					
				網片石葺	Ⅰフレイク	黒曜石				1	ⅢS-1	ⅢH-12	網片石葺			Ⅰフレイク	黒曜石		1					
					Ⅴ群c類		6			Ⅴ群c類						6	Ⅴ群c類		6					
礎石葺	礎				黒炭岩		1	礎石葺		礎			黒炭岩			1								
合計				合計	16	ⅢH-12				合計	合計	16												
ⅢH-6	ⅢS-1			ⅢH-13	Ⅴ群b類		1	ⅢS-1		ⅢH-13	Ⅴ群b類		1	ⅢS-1		ⅢH-13	Ⅴ群b類		1					
					Ⅴ群c類		1				Ⅴ群c類		1				Ⅴ群c類		1					
				網片石葺	Ⅴ群c類		3			ⅢS-1	ⅢH-13	網片石葺	Ⅴ群c類				3	ⅢS-1	ⅢH-13	網片石葺	Ⅴ群c類		6	
					Ⅴ群不明		1					Ⅴ群不明				1	Ⅴ群不明				1			
		礎石葺	礎		黒炭岩		1		礎石葺			礎	黒炭岩			1								
		合計			合計	12	ⅢH-13			合計	合計	12												
		ⅢH-7	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群c類		4		ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群c類		2		ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群c類		1					
					Ⅴ群		1				Ⅴ群		1				Ⅴ群		1					
				網片石葺	石籠	黒曜石				2	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺			石籠	黒曜石		2					
					スタレイバー	黒曜石				2			網片石葺			スタレイバー	黒曜石		2					
Ⅰフレイク	黒曜石					1	Ⅰフレイク	黒曜石					1											
Ⅱフレイク	頁岩					3	Ⅱフレイク	頁岩					3											
網片	黒曜石					1	網片	黒曜石					1											
礎石葺	たたき石			黒曜石		1	ⅢS-1	ⅢS-1		礎石葺	たたき石	黒曜石		1										
	礎			黒炭岩		1				礎	黒炭岩		1											
	礎			砂岩		1				礎	砂岩		1											
	礎	黒炭岩		1	礎	黒炭岩				1														
	礎	黒炭岩		1	礎	黒炭岩				1														
合計			合計	12	ⅢS-1			合計	合計	12														
ⅢH-7	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4									
			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2									
		網片石葺	Ⅴ群		1		ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群			1	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群		1					
			石籠	黒曜石					2	石籠		黒曜石				2	石籠	黒曜石		2				
			スタレイバー	黒曜石					2	スタレイバー		黒曜石				2	スタレイバー	黒曜石		2				
			Ⅰフレイク	黒曜石					1	Ⅰフレイク		黒曜石				1	Ⅰフレイク	黒曜石		1				
			Ⅱフレイク	頁岩					3	Ⅱフレイク		頁岩				3	Ⅱフレイク	頁岩		3				
		礎石葺	網片	黒曜石			1	ⅢS-1	ⅢS-1	礎石葺		網片	黒曜石		1									
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
礎	砂岩			1	礎	砂岩				1	礎	砂岩		1										
礎	黒炭岩			1	礎	黒炭岩				1	礎	黒炭岩		1										
合計			合計	12	ⅢS-1			合計	合計	12														
ⅢH-7	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4									
			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2									
		網片石葺	Ⅴ群		1		ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群			1	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群		1					
			石籠	黒曜石					2	石籠		黒曜石				2	石籠	黒曜石		2				
			スタレイバー	黒曜石					2	スタレイバー		黒曜石				2	スタレイバー	黒曜石		2				
			Ⅰフレイク	黒曜石					1	Ⅰフレイク		黒曜石				1	Ⅰフレイク	黒曜石		1				
			Ⅱフレイク	頁岩					3	Ⅱフレイク		頁岩				3	Ⅱフレイク	頁岩		3				
		礎石葺	網片	黒曜石			1	ⅢS-1	ⅢS-1	礎石葺		網片	黒曜石		1									
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
礎	砂岩			1	礎	砂岩				1	礎	砂岩		1										
礎	黒炭岩			1	礎	黒炭岩				1	礎	黒炭岩		1										
合計			合計	12	ⅢS-1			合計	合計	12														
ⅢH-7	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4	ⅢS-1	ⅢS-1	Ⅴ群b類		4									
			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2			Ⅴ群c類		2									
		網片石葺	Ⅴ群		1		ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群			1	ⅢS-1	ⅢS-1	網片石葺	Ⅴ群		1					
			石籠	黒曜石					2	石籠		黒曜石				2	石籠	黒曜石		2				
			スタレイバー	黒曜石					2	スタレイバー		黒曜石				2	スタレイバー	黒曜石		2				
			Ⅰフレイク	黒曜石					1	Ⅰフレイク		黒曜石				1	Ⅰフレイク	黒曜石		1				
			Ⅱフレイク	頁岩					3	Ⅱフレイク		頁岩				3	Ⅱフレイク	頁岩		3				
		礎石葺	網片	黒曜石			1	ⅢS-1	ⅢS-1	礎石葺		網片	黒曜石		1									
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
			礎	黒炭岩			1			礎		黒炭岩		1	礎	黒炭岩		1						
礎	砂岩			1	礎	砂岩				1	礎	砂岩		1										
礎	黒炭岩			1	礎	黒炭岩				1	礎	黒炭岩		1										
合計			合計	12	ⅢS-1			合計	合計	12														

遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数
ⅡP-32	覆土	総計		合計	1	ⅡP-53	覆土	網片石器	1/フレイク	黒曜石	1
		土器	V器<類		3			網片	黒曜石	1	
ⅡP-33	覆土	土器	V器<類		3			総計		合計	3
		網片石器	スタレイバー	黒曜石	1						
ⅡP-34	覆土	総計		合計	4	ⅡP-54	覆土	土器	IV器<類		1
		土器	V器<類		1			IV器<類		2	
ⅡP-35	覆土	土器	V器<類		1			V器<類		119	
		網片石器	網片	黒曜石	3			網片石器	1/フレイク	黒曜石	1
ⅡP-36	覆土	土器	IV器<類		1			網片	黒曜石	1	
		網片石器	網片		4			総計	合計	124	
ⅡP-37	覆土	土器	IV器<類		1	ⅡP-55	覆土	土器	IV器<類		1
		網片石器	網片		4			IV器<類		36	
ⅡP-38	覆土	土器	V器<類		1			V器<類		37	
		網片石器	網片	黒曜石	3			総計	合計	37	
ⅡP-39	覆土	土器	V器<類		4	ⅡP-56	覆土	土器	V器<類		1
		網片石器	網片		4			網片石器	網片	黒曜石	6
ⅡP-40	覆土	土器	IV器<類		10			網片		合計	7
		網片石器	網片		3			総計	合計	7	
ⅡP-41	瓦風	土器	IV器<類		11	ⅡP-57	覆土	土器	IV器<類		2
		V器<類		3	IV器<類				2		
ⅡP-42	覆土	土器	V器<類		4			網片石器	網片	黒曜石	1
		IV器<類		11	総計			合計	5		
ⅡP-43	覆土	土器	IV器<類		4	ⅡP-58	覆土	土器	IV器<類		5
		V器<類		14	IV器<類				1		
ⅡP-44	覆土	土器	IV器<類		1			黒石器	たまた石	片断	2
		網片石器	1/フレイク	黒曜石	1			黒石器	安山岩	2	
ⅡP-45	覆土	土器	V器<類		5			網片	黒曜石	1	
		網片石器	網片		5			黒石器	黒炭石	1	
ⅡP-46	覆土	土器	V器<類		5			砂岩		合計	13
		網片石器	1/フレイク	黒曜石	3			総計	合計	13	
ⅡP-47	覆土	土器	V器<類		12	ⅡP-59	覆土	土器	V器<類		1
		網片石器	網片	緑色泥岩	1			網片石器	スタレイバー	黒曜石	1
ⅡP-48	覆土	土器	V器<類		20			網片		合計	2
		網片石器	網片		2			総計	合計	2	
ⅡP-49	覆土	土器	V器<類		1	ⅡP-60	覆土	土器	IV器<類		5
		V器<類		31	V器<類				36		
ⅡP-50	覆土	土器	V器<類		1			総計	合計	36	
		IV器<類		2	土器			IV器<類		2	
ⅡP-51	覆土	土器	IV器<類		1	ⅡP-61	覆土	土器	IV器<類		2
		V器<類		5	IV器<類				2		
ⅡP-52	覆土	土器	V器<類		30			V器<類		1	
		IV器<類		2	IV器<類				1		
ⅡP-53	覆土	土器	IV器<類		1	ⅡP-62	覆土	土器	IV器<類		2
		V器<類		1	IV器<類				2		
ⅡP-54	覆土	土器	IV器<類		1			V器<類		1	
		V器<類		5	V器<類				5		
ⅡP-55	覆土	土器	V器<類		4	ⅡP-63	覆土	土器	IV器<類		1
		IV器<類		1	黒石器			砂	黒炭石	合計	1
ⅡP-56	覆土	土器	IV器<類		1	ⅡP-64	覆土	土器	V器<類		1
		V器<類		1	土器			IV器<類		合計	1
ⅡP-57	覆土	土器	V器<類		6	ⅡP-65	覆土	土器	V器<類		6
		IV器<類		1	土器			IV器<類		合計	6
ⅡP-58	覆土	土器	V器<類		6	ⅡP-66	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			IV器<類		合計	1
ⅡP-59	覆土	土器	V器<類		1	ⅡP-67	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		3	土器			IV器<類		合計	1
ⅡP-60	覆土	土器	V器<類		1	ⅡP-68	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			IV器<類		合計	2
ⅡP-61	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-69	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			IV器<類		合計	2
ⅡP-62	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-70	覆土	土器	IV器<類		1
		IV器<類		1	黒石器			すり石	砂岩	合計	2
ⅡP-63	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-71	覆土	土器	V器<類		4
		IV器<類		1	土器			IV器<類		合計	4
ⅡP-64	覆土	土器	V器<類		12	ⅡP-72	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	黒石器			砂	黒炭石	合計	3
ⅡP-65	覆土	土器	V器<類		6			土器	IV器<類		5
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	8
ⅡP-66	覆土	土器	V器<類		1	ⅡP-73	覆土	土器	IV器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	5
ⅡP-67	覆土	土器	V器<類		1			V器<類		3	
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	5
ⅡP-68	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-74	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-69	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-75	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	2
ⅡP-70	覆土	土器	V器<類		11			土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	2
ⅡP-71	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-76	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-72	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-77	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-73	覆土	土器	V器<類		11			土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-74	覆土	土器	V器<類		11	ⅡP-78	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-75	覆土	土器	V器<類		11			土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	2
ⅡP-76	覆土	土器	V器<類		2	ⅡP-79	覆土	土器	V器<類		1
		IV器<類		1	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-77	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		1
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	1
ⅡP-78	覆土	土器	V器<類		3	ⅡP-80	覆土	土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-79	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-80	覆土	土器	V器<類		3	ⅡP-81	覆土	土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-81	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-82	覆土	土器	V器<類		3	ⅡP-82B	覆土	土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-83	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-84	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-85	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-86	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-87	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-88	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-89	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-90	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-91	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-92	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-93	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-94	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-95	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-96	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-97	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-98	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-99	覆土	土器	V器<類		3			土器	V器<類		3
		IV器<類		3	土器			V器<類		合計	3
ⅡP-100											

遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	層位又は 付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数						
ⅡSP-54			総計		1	ⅡS-2			総計		122						
					1						122						
ⅡS-1	Ⅱ	礫石部	礫	凝灰岩	18	ⅡS-3	Ⅱ	礫石部	礫片	黒曜石	1						
				砂岩	1					礫石部	石片	黒色泥岩	1				
				泥岩	3							礫	礫	灰山岩	1		
				緑色泥岩	1											凝灰岩	8
				チャート	2												
						炭質	1										
								片岩	1								
										片岩	1						
												緑色泥岩	1				
												凝灰岩	4				
												総計	22				
												ⅡS-4	Ⅱ	礫石部	礫片	黒曜石	1
								礫石部	礫			安山岩				1	
										凝灰岩	軽石	7					
		チャート	片岩									2					
				緑色泥岩	凝灰岩							13					
						凝灰岩											
												総計	4				
												総計	4				

表3 遺構出土土器等一覧

遺構種別	遺構名	分類											合計				
		Ⅱ群a類	Ⅱ群b類	Ⅱ群c類	Ⅱ群d類	Ⅱ群e類	Ⅱ群f類	Ⅱ群g類	Ⅱ群h類	Ⅱ群i類	Ⅱ群j類	不明		土製品			
住居跡	ⅡH-2															3	
	ⅡH-3		1	2	54	15	78	138							2	288	
	ⅡH-4				1	2	56	9								70	
	ⅡH-6			1	41	1	3	824	1							871	
	ⅡH-7					1	4	614	1							620	
	ⅡH-8	2	33		12	167	46	82	271	9	7					629	
	ⅡH-9			2				17	4	27	93	1	144				27
	ⅡH-10			2				17	4	27	93	1	144				27
	計	2	36	3	12	281	72	3	1682	530	9	13	2632				2632
	土坑	ⅡP-2															53
ⅡP-3																8	
ⅡP-5				1												1	
ⅡP-8			1													1	
ⅡP-13									2							2	
ⅡP-18				1												1	
ⅡP-20					4											4	
ⅡP-21																7	
ⅡP-24																69	
ⅡP-25								1								1	
ⅡP-28											17	1				18	
ⅡP-29											11					11	
ⅡP-30											2	3				28	
ⅡP-31											19					21	
ⅡP-32											1					1	
ⅡP-33											3					3	
ⅡP-34											1					1	
ⅡP-36											1					1	
ⅡP-37											1					1	
ⅡP-38											1	10				11	
ⅡP-39											1					1	
ⅡP-41											5					5	
ⅡP-42											1					1	
ⅡP-43					2			1	1	1	5					10	
ⅡP-45				4												5	
ⅡP-46						1	1	3	4							9	
ⅡP-48											11					11	
ⅡP-49							1	1			50					52	
ⅡP-50											2					3	
ⅡP-51											2					2	
ⅡP-53											3					3	
ⅡP-54							1	2			119					122	
ⅡP-55								1			36					37	
ⅡP-56											1					1	
ⅡP-57										2					4		
ⅡP-58			5	1											6		
ⅡP-59										1					1		
ⅡP-60										31					36		
ⅡP-62			2							2	1				5		
ⅡP-65										6					6		
ⅡP-67										1					1		
ⅡP-69										1					1		
ⅡP-70				1											1		
ⅡP-71										4					4		
ⅡP-72					3										3		
ⅡP-73					5										5		
ⅡP-74										1					1		

合計/点数	遺構種別	遺構名	分類										合計			
			I群a類	I群b類	II群b類	II群a類	II群b類	III群c類	IV群不明	V群c類	VI群	不明		土製品		
	土坑	群P-75										1				1
	土		0	22	11	3	19	33	1	506	2	0	0	0	587	
	灰土	群P-5										1			1	
	灰土		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1		
	合計		2	58	14	15	300	105	4	2188	542	9	13	3250		

表4 遺構出土石器等一覧

遺構名	遺物名													総計								
	石器	石器	石器・ナイフ	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Lフレイク	石核	断片	石屑	石のみ	すり石	たたまき石		砥石	石皿	加工痕ある礫	厚石	線状厚石	網・鱗片		
群H-1													1							3	4	
群H-2																					1	1
群H-3	1				8	1			29	2		2						1		4	48	
群H-4					2				44									1		26	73	
群H-5										1			7	1						54	63	
群H-6	9			1	32	5	6		280	1			1							10	345	
群H-7	7	1			5	1			65				1						1	2	83	
群H-8	5	1	1	1	3	2	1	1	109	1	1	2	5		2	1				80	216	
群H-9	1								3											9	13	
群H-10	1	1							10											31	43	
群P-3																				2	2	
群P-4									2											2	2	
群P-8																				2	2	
群P-17		1							1											2	2	
群P-18																				2	2	
群P-19																				1	1	
群P-26									3											3	3	
群P-28	1				2				3											6	6	
群P-29	1								6											1	8	
群P-31			1		1				11											13	13	
群P-33					1															1	1	
群P-34									3											3	3	
群P-37									3											3	3	
群P-39						1	1		5											7	7	
群P-41							3		13											16	16	
群P-45									1											1	1	
群P-46				1																1	2	
群P-47																				1	1	
群P-48									1											1	1	
群P-49	1				2	1														4	4	
群P-50									2											2	2	
群P-51																				1	1	
群P-53							1		1											2	2	
群P-54							1		1											2	2	
群P-56									6											6	6	
群P-57									1											1	1	
群P-58														2						5	7	
群P-59				1																1	1	
群P-64																				1	1	
群P-69																				1	1	
群P-70												1								1	1	
群P-71																				1	1	
群P-72									4											1	5	
群P-75										1										1	1	
群P-76									1											1	1	
群S-1																				23	23	
群S-2									2											125	127	
群S-3									1	1										20	22	
群S-4												1	2							1	4	
群SP-54																				1	1	
総計	28	3	2	2	38	11	13	1	613	7	1	6	19	1	2	1	2	1	408	1,179		

表5 遺構出土掲載土器等一覧

図番号	遺構名	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	分類	図番番号	備考
図N-2-1-1	ⅡH-6	G1・1×22	Ⅱ	復元胴体(胴部~底部)	Vc		土器集中2
図N-2-1-2	ⅡH-6	H1・4×73	Ⅱ	復元胴体(口縁~底部)	Vc		土器集中3
図N-2-1-3	ⅡH-6	H1・5×127		復元胴体(口縁~底部)	Vc	図取22	土器集中4
図N-2-2-4	ⅡH-6	H1・4×58, H1・10×5	計63	復元胴体(口縁~底部)	Vc		土器集中3
図N-2-3-5	ⅡH-6	H1・6×54, H1・8×2, H1・10×2, H1・12×13	計71	復元胴体(口縁~底部)	Vc	図取23	土器集中5
図N-2-3-6	ⅡH-6	ⅡH-6・19×1, H1・6×1, H1・10×2	計3	復元胴体(口縁~底部)	Vc	図取22	土器集中5
図N-2-3-7	ⅡH-6	ⅡH-6・228A×15 H1・4×2		復元胴体(口縁~胴部)	Vc		
図N-2-3-8	ⅡH-6	H1・10×11, H2・4×2	計13	Ⅱ		図取23	
図N-2-3-8	ⅡH-6	ⅡH-6・286×1 H1・21×55		復元胴体(口縁~胴部)	Vc		土器集中6
図N-2-4-9	ⅡH-7	ⅡH-7・H P-3・94×108 ⅡH-7・103×8		復元胴体(口縁~底部)	Vc		H P-3
図N-2-4-10	ⅡH-7	ⅡH-7・78×3 J4・1×8, J4・4×1, J5・1×1, K4・2×4, K4・3×3	計19	Ⅱ			
図N-2-4-11	ⅡH-7	ⅡH-7・122×1, ⅡP-49・3×1, ⅡP-49・14×1, ⅡP-49・18×2	計7	Ⅱ	復元胴体(口縁~底部)	Vc	
図N-2-5-12	ⅡP-24	ⅡP-24・4×1, ⅡP-24・5×1, ⅡP-24・12×1, ⅡP-24・13×1, ⅡP-24・14×1, ⅡP-24・15×1, ⅡP-24・16×1, ⅡP-24・17×1, ⅡP-24・18×1, ⅡP-24・19×1, ⅡP-24・20×1, ⅡP-24・21×1, ⅡP-24・22×1, ⅡP-24・24×1, ⅡP-24・25×2, ⅡP-24・26×1, ⅡP-24・27×1, ⅡP-24・28×1, ⅡP-24・29×1	計20	Ⅱ	復元胴体(口縁~胴部)	Vc	図取24
図N-2-6-13	ⅡP-54	ⅡH-6・33×1, ⅡP-54・5×1, ⅡP-54・6×2, ⅡP-54・8×1, ⅡP-54・19×4, ⅡP-54・20×1, ⅡP-54・22×1, ⅡP-54・23×1, ⅡP-54・30×2	計14	Ⅱ	復元胴体(口縁~胴部)	Vc	図取25
図N-2-6-14	ⅡP-56	ⅡH-6・230×1 I4・2×3, I4・3×3, I5・3×1, I5・6×3	計10	Ⅱ			
図N-2-7-15	ⅡH-3	ⅡP-56・1×1		Ⅱ	復元胴体(口縁~底部)	Vc	図取24
図N-2-7-16	ⅡH-3	ⅡH-3・157×9, ⅡH-3・149×25 ⅡH-3・150×23, ⅡH-3・151×24, ⅡH-3・156×3	計34 計50	Ⅱ	復元胴体(口縁~底部)	Vc	
図N-2-7-17	ⅡH-8	ⅡH-8・46×14 I10・3×2, J9・8×2, J9・9×2, J9・10×1	計7	Ⅱ	復元胴体(口縁~底部)	Vc	
図N-2-7-18	ⅡH-8	ⅡH-8・175×1, ⅡH-8・192×2 ⅡH-8・2×1, ⅡH-8・26×1, ⅡH-8・27×4, ⅡH-8・28×2, ⅡH-8・29×2, ⅡH-8・30×1, ⅡH-8・31×2, ⅡH-8・34×2, ⅡH-8・36×1 ⅡH-8・50×1, ⅡH-8・52×1, ⅡH-8・301×1 ⅡH-8・58×5, ⅡH-8・302×1, ⅡH-8・303×1, ⅡH-8・304×1, ⅡH-8・305×2, ⅡH-8・306A×1, ⅡH-8・307×2, ⅡH-8・308×1, ⅡH-8・310×2 ⅡH-8・59×1, ⅡH-8・60×6	計16 計3 計16 計7	Ⅱ 床 床面	復元胴体(口縁~底部)	Vc	図取25 図取26
図N-2-7-19	ⅡH-8	H9・20×16 H9・16×1, H9・17×1, I9・14B×5, J9・8×1, J9・9×10, J9・10×3, J9・11×3, J10・10×2	計26	Ⅱ Ⅱ	復元胴体(胴部~底部)	Vc	
図N-2-7-19	ⅡH-8	ⅡH-8・23×10 ⅡH-8・245×1, ⅡH-8・283×3 ⅡH-8・114×2 ⅡH-8・118×1 ⅡH-8・38×3, ⅡH-8・39×2, ⅡH-8・41×1 ⅡH-8・5×1, ⅡH-8・6×20, ⅡH-8・7×9, ⅡH-8・8B×1, ⅡH-8・9×1, ⅡH-8・10×2	計4 計6	Ⅱ Ⅱ Ⅱ 床	復元胴体(胴部~底部)	Vc	

図番号	道筋名	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	分類	図版番号	備考
IKN-2-7-19	ⅡH-8	ⅡH-8・13×2, ⅡH-8・35×1, ⅡH-8・36×3, ⅡH-8・37×1, ⅡH-8・40×2, ⅡH-8・45×1, 計44	床	復元躯体(側部-底部)	Ⅴ	I版26	
		ⅡH-8・53×1, ⅡH-8・54×1, ⅡH-8・55×2	床面				
		ⅡH-8・57×3	大床				
		H 8・12×1, H 9・19×15, I 9・15×4, J 9・9×2, J 9・10×1, J 10・11×1 計24	Ⅲ				
IKN-2-7-20	ⅡH-8	ⅡH-8・16×8	床	復元躯体(側部-底部)	Ⅴ		
IKN-2-7-21	ⅡH-8	ⅡH-8・23×3	床	復元躯体(口縁-底部)	Ⅴ	須磨器	
IKN-2-7-22	ⅡH-8	ⅡH-8・32×1, ⅡH-8・33×1 計2	床	土製品	Ⅴ	紡績率	
IKN-2-8-23	ⅡH-6	ⅡH-6・23×3, ⅡH-6・191×16, ⅡH-6・254×2 計21	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-8-24	ⅡH-6	ⅡH-6・9×2	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-8-25	ⅡH-6	ⅡH-6・84×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-8-26	ⅡH-6	ⅡH-6・56×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-8-27	ⅡH-6	ⅡH-6・240×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-8-28	ⅡH-6	ⅡH-6・2×3, ⅡH-6・3×1, ⅡH-6・103×1, ⅡH-6・104×1 計6	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-8-29	ⅡH-6	ⅡH-6・229×1	床	口縁部	Vc	I版27	
		I 5・4×1 H 1・49×1	Ⅲ				
IKN-2-8-30	ⅡH-6	ⅡH-6・130×4	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-8-31	ⅡH-6	ⅡH-6・100×1	床表面	口縁部	Vc		
IKN-2-8-32	ⅡH-6	ⅡH-6・32×4	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-8-33	ⅡH-6	ⅡH-6・57×1	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-8-34	ⅡH-6	ⅡH-6・111×1, ⅡH-6・142×1 計2	床表面	口縁-側部	Vc	I版28	
		ⅡH-6・6×1, ⅡH-6・226×1 計2	床				
IKN-2-8-35	ⅡH-6	ⅡH-6・260×1	覆土	底部	Vc		
IKN-2-8-36	ⅡH-6	ⅡH-6・28×2	覆土	底部	Vc		
IKN-2-8-37	ⅡH-6	ⅡH-6・115×2	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-8-38	ⅡH-6	ⅡH-6・99×1	床	口縁部	Vc		
IKN-2-9-39	ⅡH-6	ⅡH-6・247×2, ⅡH-6・254×1 計3	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-9-40	ⅡH-6	ⅡH-6・126×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-9-41	ⅡH-6	ⅡH-6・180×1	覆土	口縁部	Vc	I版29	
		ⅡH-6・92×1	床表面				
		ⅡH-6・231×1	床				
IKN-2-9-42	a	ⅡH-6・186A×1, ⅡH-6・186B×1, ⅡH-6・228A×1 計3	Ⅲ	側部	Vc	同一側面	
		ⅡH-6・123×1	床				
	b	ⅡH-6・183A×1, ⅡH-6・223A×4 計5	覆土				
		H 2・4×3, H 2・5×1 計4	Ⅲ				
IKN-2-9-43	ⅡH-6	ⅡH-6・47×1	床	側部	Vc		
IKN-2-9-44	ⅡH-6	H 0・2×1	Ⅲ	口縁-側部	Vc	土器集中3	
IKN-2-9-45	ⅡH-6	H 1・4×17	Ⅲ	口縁部	Vc	土器集中4	
IKN-2-9-46	ⅡH-6	H 1・5×2	Ⅲ	口縁部	Vc	土器集中5	
IKN-2-9-46	ⅡH-6	H 1・6×8, H 1・12×3 計11	Ⅲ	口縁-側部	Vc	同一側面	
IKN-2-9-46	ⅡH-6	ⅡH-6・33×1	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-10-47	a	ⅡH-7・11×3, ⅡH-7・12×1 計4	床	口縁-側部	Vc	同一側面	
		ⅡH-7・17×2, ⅡH-7・18×3 計5	覆土				
IKN-2-10-48	ⅡH-7	ⅡH-7・55×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-10-49	a	ⅡH-7・10A×12, ⅡH-7・48×1, ⅡH-7・38×2×1 計14	Ⅲ	側部	Vc	同一側面	
		b	ⅡH-7・10A×2, ⅡH-7・48×1, ⅡH-7・122×2 計5				覆土
	ⅡH-7・39×1, ⅡH-7・93×1 計2		覆土				
IKN-2-10-50	ⅡH-7	ⅡH-7・31×1	床	口縁部	Vc		
IKN-2-10-51	ⅡH-7	ⅡH-7・61×1, ⅡH-7・74×1, ⅡH-7・70×1, ⅡH-7・79×1 計4	覆土	口縁-側部	Vc	HP-1	
IKN-2-10-52	ⅡH-7	ⅡH-7・55×1, ⅡH-7・93×1 計2	覆土	口縁部	Vc	HP-3	
IKN-2-10-53	ⅡH-7	ⅡH-7・62×2, ⅡH-7・73×1, ⅡH-7・113×1, ⅡH-7・117×1 計5	覆土	側部	Vc	HP-1	
IKN-2-10-54	ⅡH-7	ⅡH-7・92×4	覆土上面	側部	Vc	HP-3	
IKN-2-11-55	ⅡH-7	ⅡH-7・92×1	覆土	口縁部	Vc	HP-3	
IKN-2-11-56	ⅡH-7	ⅡH-7・55×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-11-57	ⅡH-7	ⅡH-7・32×1	覆土	口縁部	Vc		
IKN-2-11-58	a	ⅡH-7・48×1, ⅡH-7・104×1 計2	覆土	口縁部	Vc	同一側面	
		b	ⅡH-7・2×1				床表面
IKN-2-11-59	ⅡH-7	ⅡH-7・29×4	床	口縁-側部	Vc		
IKN-2-11-60	ⅡH-7	ⅡH-7・92×8	覆土上面	側部-底部	Vc	HP-3	
IKN-2-11-61	ⅡH-7	ⅡH-7・36×9	床表面	底部	Vc		
IKN-2-12-62	ⅡP-2	ⅡP-2・1×2	覆土	口縁部	Vc	I版30	
IKN-2-12-63	ⅡP-3	ⅡP-3・1×4	覆土	口縁-側部	Vc		
IKN-2-12-64	ⅡP-24	ⅡP-24・2×1, ⅡP-24・3×8, ⅡP-24・6×2, ⅡP-24・7×1, 計12	覆土	口縁-側部	Vc		

図番号	遺構名	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	分類	図原番号	備考
図原-2-12-64	ⅢP-24	ⅢP-24-8×1, ⅢP-24-9×1,	計19	Ⅲ土	口縁~胴部	Vc	図原30
		ⅢP-24-10×1, ⅢP-24-11×1,					
		ⅢP-24-22×1, ⅢP-24-不明×2					
		ⅢP-24-5×1					
		ⅢP-30					
		ⅢP-30-8×1, ⅢP-30-12×1,					
		ⅢP-30-17×1					
		ⅢP-31					
		ⅢP-31-1×1					
		ⅢP-31-13×1					
図原-2-12-65	ⅢP-28	ⅢP-28-5×1	計3	Ⅲ土	口縁部	Vc	
		ⅢP-30					
図原-2-12-66	ⅢP-30	ⅢP-30-8×1, ⅢP-30-12×1,	計3	Ⅲ土	胴部~底部	Vc	
		ⅢP-30-17×1					
図原-2-13-67	ⅢP-31	ⅢP-31-1×1		Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-68	ⅢP-31	ⅢP-31-13×1		Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-69	ⅢP-31	ⅢP-31-3×1		Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-70	ⅢP-34	ⅢP-34-1×1		Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-71	ⅢP-39	ⅢP-39-2×1, ⅢP-39-3×2	計3	Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-72	ⅢP-39	ⅢP-39-8×2		灰底	胴部	Vc	
図原-2-13-73	ⅢP-42	ⅢP-42-1×1		Ⅲ土	口縁部	Vc	
図原-2-13-74	ⅢP-48	ⅢP-48-2×7		Ⅲ土	胴部	Vc	
図原-2-13-75	ⅢP-49	ⅢP-49-6×1, ⅢP-49-17×4,	計7	Ⅲ土	胴部	Vc	図原31
図原-2-13-76	ⅢP-54	ⅢP-54-4×1, ⅢP-54-7×1,	計3	Ⅲ土	口縁部	Vc	
		ⅢP-54-9×1					
図原-2-13-77	ⅢP-54	ⅢP-54-3×1, ⅢP-54-12×1,	計3	Ⅲ土	胴部	Vc	
図原-2-13-78	ⅢP-55	ⅢP-55-1×3, ⅢP-55-3×4	計7	Ⅲ土	胴部~底部	Vc	
		ⅢP-60-6×1, ⅢP-60-8×1,					
図原-2-13-79	ⅢP-60	ⅢP-60-10×1, ⅢP-60-11×1,	計13	Ⅲ土	口縁~胴部	Vc	
		ⅢP-60-12×1, ⅢP-60-14×2,					
		ⅢP-60-15×1, ⅢP-60-17×1,					
		ⅢP-60-19×1, ⅢP-60-20×1,					
		ⅢP-60-21×1, ⅢP-60-24×1					
		ⅢH-3-139×1					
図原-2-14-80	ⅢH-3	ⅢH-3-4×4×1		掘り上り土	胴部~底部	Ⅲ	
		ⅢH-3-65×1		Ⅲ土			
		ⅢH-3-65×1		Ⅲ土			
図原-2-14-81	ⅢH-3	ⅢH-3-148×1		カマド	底部	Ⅲ	
図原-2-14-82	ⅢH-4	ⅢH-4-6×1		Ⅲ土	底部	Ⅲ	
図原-2-14-83	ⅢH-4	ⅢH-4-47×1		Ⅲ土	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-84	ⅢH-8	ⅢH-8-192×1, ⅢH-8-243×1	計2	Ⅲ(掘り上り土)	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-85	ⅢH-8	ⅢH-8-192×4		Ⅲ(掘り上り土)	胴部	Ⅲ	
図原-2-14-86	ⅢH-8	ⅢH-8-192×5		Ⅲ(掘り上り土)	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-87	ⅢH-8	ⅢH-8-148×1	計7	Ⅲ	胴部	Ⅲ	同一個体
		ⅢH-8-192×1					
		ⅢH-8-192×2					
		ⅢH-8-192×2					
		ⅢH-8-192×2					
		ⅢH-8-192×2					
図原-2-14-88	ⅢH-9	ⅢH-9-19×1, ⅢH-9-20×1	計2	Ⅲ土2	口縁部	Ⅲ	同一個体
		ⅢH-9-2×1		Ⅲ土2	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-89	ⅢH-9	ⅢH-9-16×1, ⅢH-9-27×1	計2	Ⅲ土2	底部	Ⅲ	同一個体
図原-2-14-90	ⅢH-9	ⅢH-9-12×1		Ⅲ土2	底部	Ⅲ	同一個体
図原-2-14-91	ⅢH-10	ⅢH-10-35×1		Ⅲ土2	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-92	ⅢH-10	ⅢH-10-33×1		Ⅲ土2	口縁部	Ⅲ	
図原-2-14-93	ⅢH-10	ⅢH-10-1×3, ⅢH-10-15×1	計4	Ⅲ(掘り上り土)	胴部	Ⅲ	
図原-2-14-94	ⅢH-10	ⅢH-10-22×1, ⅢH-10-33×1,	計3	Ⅲ土2	胴部	Ⅲ	同一個体
		ⅢH-10-36×1					
		G 8-2×1					
		ⅢH-10-33×1					
図原-2-15-9	ⅢH-6	ⅢH-6-64		Ⅲ土2	胴部	Ⅲ	有茶
		ⅢP-9		Ⅲ土2			
図原-2-15-9	ⅢH-9	289		Ⅲ土2	胴部	Ⅲ	有茶

表6 遺構出土埋藏石器一覧

図番号	遺構名	遺物番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	図原番号	備考
図原-2-15-1	ⅢH-5	13	Ⅲ	たたく石	5.56	4.32	2.18	74.45	安山岩		
図原-2-15-2	ⅢH-5	15	Ⅲ	たたく石	6.73	3.37	2.69	83.54	砂岩		
図原-2-15-3	ⅢH-5	16	Ⅲ	たたく石	7.52	4.76	2.30	116.00	砂岩		
図原-2-15-4	ⅢH-5	14	Ⅲ	たたく石	8.22	4.91	2.37	96.60	凝灰岩		
図原-2-15-5	ⅢH-5	17	Ⅲ	たたく石	6.66	4.19	2.70	114.00	泥岩	図原33	
図原-2-15-6	ⅢH-5	18	Ⅲ	たたく石	6.32	3.97	3.45	118.00	泥岩		
図原-2-15-7	ⅢH-5	4	Ⅲ	砥石片	(8.72)	4.61	5.21	133.00	凝灰岩		被熱・四面砥石
図原-2-15-8	ⅢH-6	64	Ⅲ底直	石蔵	1.58	1.13	0.31	0.43	黒曜石		有茶
図原-2-15-9	ⅢH-9	289	Ⅲ土	石蔵	1.84	1.11	0.15	0.23	黒曜石		有茶

図番号	遺構名	遺物番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	図番号	備考
図P-2-15-10	ⅡH-6	214	床	石織	1180	110	019	035	黒曜石		焼熱・有茶
図P-2-15-11	ⅡH-6	45	覆土	石織	229	084	022	028	黒曜石		有茶
図P-2-15-12	ⅡH-6	223	床	石織	237	101	025	049	黒曜石		有茶
図P-2-15-13	ⅡH-6	241	覆土	石織	251	108	025	047	黒曜石		有茶
図P-2-15-14	ⅡH-6	217	覆土	石織	259	106	029	062	黒曜石		有茶
図P-2-15-15	ⅡH-6	62	床直	石織	344	118	035	110	黒曜石		焼熱・有茶
図P-2-15-16	ⅡH-6	60	床	石織	406	121	029	102	黒曜石		焼熱・有茶
図P-2-15-17	ⅡH-6	138	床	スタレイバー	325	258	071	613	黒曜石		
図P-2-15-18	ⅡH-6	228b	覆土	スタレイバー	392	355	066	829	黒曜石		
図P-2-15-19	ⅡH-6	119	覆土	スタレイバー	364	418	142	2290	黒曜石		
図P-2-15-20	ⅡH-6	39	覆土	スタレイバー	467	403	192	3226	黒曜石		
図P-2-15-21	ⅡH-6	34	覆土	スタレイバー	428	406	106	1554	黒曜石		
図P-2-15-22	ⅡH-6	40	床	スタレイバー	474	341	085	1115	黒曜石		
図P-2-15-23	ⅡH-6	46	覆土	スタレイバー	430	345	132	2023	黒曜石		
図P-2-16-24	ⅡH-6	135	覆土	スタレイバー	498	363	131	2125	黒曜石		
図P-2-16-25	ⅡH-6	188	覆土	スタレイバー	506	300	081	903	黒曜石		
図P-2-16-26	ⅡH-6	213	覆土	スタレイバー	649	295	082	881	貫岩		
図P-2-16-27	ⅡH-6	242	覆土	スタレイバー	284	223	069	406	黒曜石		
図P-2-16-28	ⅡH-6	306	覆土	スタレイバー	301	220	091	622	黒曜石		
図P-2-16-29	ⅡH-6	106b	覆土	スタレイバー	403	274	109	1505	黒曜石		
図P-2-16-30	ⅡH-6	130a	床直	スタレイバー	375	277	083	686	黒曜石		
図P-2-16-31	ⅡH-6	201	床	スタレイバー	394	377	154	1860	黒曜石		
図P-2-16-32	ⅡH-6	53	床	スタレイバー	488	291	115	1218	黒曜石		
図P-2-16-33	ⅡH-6	130b	床直	スタレイバー	348	255	172	1479	黒曜石		
図P-2-16-34	ⅡH-6	276	覆土	スタレイバー	617	609	147	4621	玄武岩		
図P-2-16-35	ⅡH-6	89	床直	石斧	(1048)	678	332	43000	片岩		
図P-2-16-36	ⅡH-6	20	覆土	たたく石	1193	422	200	18000	緑色泥岩		
図P-2-17-37	ⅡH-7	56	覆土	石織	136	094	032	632	黒曜石		有茶
図P-2-17-38	ⅡH-7	37	床	石織	208	097	030	650	黒曜石		有茶
図P-2-17-39	ⅡH-7	49	覆土	石織	231	090	040	656	黒曜石		有茶
図P-2-17-40	ⅡH-7	16	床	石織	(231)	101	031	650	黒曜石		有茶
図P-2-17-41	ⅡH-7	4	床	石織	277	097	030	663	黒曜石		有茶
図P-2-17-42	ⅡH-7	15	床	石織	268	082	026	642	黒曜石		有茶
図P-2-17-43	ⅡH-7	44	床	石織	210	103	031	651	黒曜石		有茶
図P-2-17-44	ⅡH-7	57	覆土	石織	309	172	076	368	貫岩		
図P-2-17-45	ⅡH-7	47	床	スタレイバー	660	396	060	1941	黒曜石		
図P-2-17-46	ⅡH-7	27	床	スタレイバー	426	448	104	1506	黒曜石		
図P-2-17-47	ⅡH-7	132	覆土	スタレイバー	524	289	080	843	黒曜石		焼熱
図P-2-17-48	ⅡH-7	19	覆土	たたく石	1386	721	238	38900	砂岩		
図P-2-17-49	ⅡH-8	309	火床	たたく石	1212	467	215	22100	砂岩		
図P-2-17-50	ⅡH-8	11	床	石皿	1280	1180	323	84700	安山岩		
図P-2-17-51	ⅡP-17	2	覆土	石織	326	176	048	197	黒曜石		三角形平基
図P-2-17-52	ⅡP-28	10	坑底	石織	242	155	040	094	黒曜石		有茶
図P-2-17-53	ⅡP-28	1	覆土	スタレイバー	1577	239	127	4477	黒曜石		棒状原石
図P-2-17-54	ⅡP-29	1	覆土	石織	(302)	142	039	139	黒曜石		有茶
図P-2-17-55	ⅡP-31	7	覆土	石織	345	190	087	386	黒曜石		有茶
図P-2-17-56	ⅡP-33	2	覆土	スタレイバー	555	255	080	1083	黒曜石		
図P-2-18-57	ⅡP-49	20	覆土	石織	215	100	029	046	黒曜石		有茶
図P-2-18-58	ⅡP-49	11	覆土	スタレイバー	870	382	142	3068	貫岩		
図P-2-18-59	ⅡP-58	5・6	覆土	たたく石	1088	891	288	46100	片岩		接合
図P-2-18-60	ⅡP-56	2	覆土	Uフレイク	705	575	120	5180	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 1
図P-2-18-61	ⅡP-56	3	覆土	Uフレイク	860	675	175	5000	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 2
図P-2-18-62	ⅡP-56	4	覆土	Uフレイク	860	1180	230	11580	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 3
図P-2-18-63	ⅡP-56	5	覆土	Uフレイク	1070	740	230	8350	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 4
図P-2-19-64	ⅡP-56	6	覆土	Uフレイク	875	750	160	7380	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 5
図P-2-19-65	ⅡP-56	7	覆土	Uフレイク	1170	900	190	16070	黒曜石		黒曜石原産地同定試料 6
図P-2-19-66	ⅡS-4	1	IV	たたく石	1368	685	368	50900	砂岩		
図P-2-19-67	ⅡS-4	4	IV	たたく石	1980	619	390	75700	砂岩		
図P-2-19-68	ⅡS-4	3	IV	すり石	1670	674	563	103900	砂岩		

表7 包含層出土掲載土器等一覧

図番号	調査区、遺物番号×点数	層位	部位	分類	図区番号	備考
図N-3-1-1	P60・1×2, Q59・1×54, Q60・1×15	#783	Ⅱ-3	復元銅体(口縁-胴部)	図版36	自調査 出土群集中1
図N-3-1-2	S.P400・L30(G7)×19	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-2-3	O8・7×101, O8・8×55, O8・9×24	#180	Ⅱ	Vc		
図N-3-3-4	F16・2×135	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-4-5	J2・1×1, J2・2×10, J2・3×7, J2・8×1, 11・1×3, 11・2×3, 13・3×1, 14・1×1 計27	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-4-6	G5・3×2	Ⅱ	Ⅱ	Vc	図版37	
図N-3-4-7	Q7・2×26	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-4-8	N8・1×14	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-5-6-9	P60・1×37, Q60・1×24	#161	Ⅱ-3	復元銅体(口縁-底部)	出土群集中1	
図N-3-7-8-10	O8・3×1, O8・7×27, O8・9×50	#78	Ⅱ	Vc		
図N-3-9-10-11	M5・1×55, M5・2×18, M5・3×5	#78	Ⅱ	Vc		
図N-3-11-12	I5・6×3, I5・24×3, J5・2×2	#18	Ⅱ	Vc	図版38	
図N-3-12-13	P60・1×9, Q60・1×21	#130	Ⅱ-3	Vc		
図N-3-13-14	F16・2×21	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-13-15	J3・32×2, J3・36×1, J3・37×6, J3・38×3, J3・39×1	#13	Ⅱ	Vc	図版39	
図N-3-14-16	I7・2×6, J7・1×10	#16	Ⅱ	Vc		
図N-3-14-17	H8・2×87, H8・5×16	#103	Ⅱ	Vc		
図N-3-14-18	F16・2×24	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-15-19	K5・23×55, J6・2×7	#162	Ⅱ	Vc	図版40	
図N-3-15-20	G8・28×126	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-15-21	N48・1×19, N48・2×4, N48・3×22	#145	Ⅱ	Vc		
図N-3-15-22	K5・23×15	#115	Ⅱ	Vc	図版41	
図N-3-15-23	Q44・1×9, Q44・2×2, R44・1×3, R44・3×78	#192	Ⅱ	Vc		
	ⅡH-2・3×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-16-24	ⅡH-3・79×1 H3・5×1, J3・1×1, K2・1×1, K5・23×2, L3・2×37, L3・5×1, L4・1×1, M3・1×22, M3・3×4, M4・1×1	#171	Ⅱ Ⅱ(顔り上付土)	Vc	図版41	
図N-3-16-25	P43・8×17 P43・9×13	Ⅱ Ⅱ	Ⅱ Ⅱ	Vc		
図N-3-16-26	O55・1×70	Ⅱ-2	Ⅱ	Vc		
図N-3-16-27	N55・1×4	Ⅱ	Ⅱ	Vc	図版41	
図N-3-16-28	Q50・1×1, Q50・2×9, Q51・4×1, R50・17×3	#196	Ⅱ Ⅱ(顔り上付土)	Vc		
図N-3-16-28	ⅡH-10・1×2, ⅡH-10・15×5	#17	Ⅱ	Vc		
図N-3-16-29	G8・24×2, G8・25×7 L55・2×12 不明×3	#19	Ⅱ-3 不明	Vc		
図N-3-17-30	a I5・6×1 b I5・24×4 c I5・24×3	Ⅱ	Ⅱ	Vc	同一個体	
図N-3-17-31	a K4・1×1, K4・2×1 b K4・2×2 c ⅡH-7・103×1	#12	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-32	a J7・1×4 b J7・1×2	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-33	H1・3×2	Ⅱ	Ⅱ	Vc	同一個体	
図N-3-17-34	G7・4×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-35	H7・1×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-36	a G3・2×20 b H3・3×6, H3・4×3	#19	Ⅱ	Vc	同一個体	
図N-3-17-37	H2・2×7, H2・4×2	#19	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-38	J7・1×8	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-17-39	a I2・2×2 b J3・2×2, J3・3×1, J3・4×1, J3・6×3, J3・22×1, J3・31×5, J3・3×8	#21	Ⅱ	Vc	同一個体	
図N-3-18-40	a S56・1×3, S64・2×1 b S56・1×6, S64・1×1, S64・2×4, S66・1×1 c S56・1×1, S66・1×1	#14 #112	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-41	O8・8×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-42	O8・7×8	Ⅱ	Ⅱ	Vc	出土群集中1	
図N-3-18-43	J3・29×13	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-44	G7・4×2	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-45	H0・6×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-46	H2・4×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-47	H1・3×9 ⅡH-6・116×1	Ⅱ Ⅱ	Ⅱ Ⅱ	Vc		
図N-3-18-48	a I1・2×1 b I1・1×3, I1・2×3 c I1・1×3, I1・2×2	#16 #15	Ⅱ	Vc	図版44 同一個体	
図N-3-18-49	G1・7×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		
図N-3-18-50	a H1・10×1 b H1・10×1	Ⅱ	Ⅱ	Vc		

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	分類	図版番号	備考
図N-3-19-51	a J 3・6×37	Ⅱ	口縁～胴部	Vc	図版44	同一個体
	b J 3・6×7		胴部～底部			
図N-3-19-52	H 2・2×1, H 2・4×1	Ⅱ2	口縁部	Vc		
図N-3-19-53	I 3・3×2	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-19-54	H 0・2×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-19-55	H 0・1×3	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-19-56	H 3・2×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-19-57	N 4・4×25, N 4・5×1	Ⅱ33	口縁～胴部	Vc		
図N-3-19-58	O 8・6×5	Ⅱ	胴部	Vc		
図N-3-19-59	F 7・1×3	Ⅱ	胴部	Vc		
図N-3-19-60	K 2・2×3	Ⅱ	胴部	Vc		
図N-3-20-61	a J 3・6×6, J 3・7×1, J 3・9×5, J 3・33×1	Ⅱ13	口縁部	Vc	図版45	同一個体
	b J 3・6×2, J 3・33×2	Ⅱ4	胴部～底部			
図N-3-20-62	S 66・1×1, S 64・2×1	Ⅱ2	口縁部	Vc		
図N-3-20-63	I 5・6×3	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-64	H 1・40×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-65	O 8・7×6	Ⅱ	口縁部	Vc		粘土部集中1
図N-3-20-66	G 4・3×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-67	I 5・6×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-68	J 3・6×3	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-69	J 7・1×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-70	I 5・6×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-20-71	a O 7・2×2	Ⅱ	口縁部	Vc	図版46	粘土部集中1 同一個体
	b O 8・7×2		胴部			
	c O 8・7×13, O 8・9×9		口縁～胴部			
図N-3-20-72	a S 64・2×5	Ⅱ	口縁～胴部	Vc	図版47	同一個体
	b S 64・2×8		胴部～底部			
図N-3-20-73	J 3・37×4	Ⅱ	胴部	Vc		
図N-3-20-74	a P 7・4×10	Ⅱ	胴部	Vc	図版48	同一個体
	b P 7・4×11		胴部			
図N-3-21-76	Q 7・2×20, Q 17・7×8	Ⅱ28	胴部～底部	Vc		
図N-3-21-77	H 1・10×1	Ⅱ	胴部～底部	Vc		
図N-3-21-78	H 2・4×4	Ⅱ	底部	Vc		
図N-3-21-79	H 2・4×2	Ⅱ	底部	Vc		
図N-3-21-80	J 2・3×7	Ⅱ	底部	Vc		
図N-3-21-81	I 5・3×3	Ⅱ	底部	Vc		
図N-3-21-82	H 6・5×3, I 6・3×4, I 6・4×3	Ⅱ10	胴部～底部	Vc		
図N-3-21-83	I 6・2×6	Ⅱ	胴部～底部	Vc		
図N-3-21-84	I 5・6×6	Ⅱ	胴部～底部	Vc		
図N-3-21-85	a I 3×3	Ⅱ	底部	Vc	図版49	同一個体
	b I 3・3×6		底部			
図N-3-21-86	a 量H-4・70×1	Ⅱ4	胴部	Vc	図版50	同一個体
	b I 5・3×3, I 5・24×1, I 5・4×5, H 5・4×1, I 5・1×1, I 5・6×1		胴部～底部			
図N-3-21-87	H 1・10×1	Ⅱ	底部	Vc		
図N-3-22-88	I 5・6×12	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-22-89	I 1・1×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-22-90	I 4・3×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-22-91	G 5・7×2	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-22-92	H 0・2×2	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-22-93	G 2・6×3	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-22-94	I 2・1×2	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-22-95	O 8・9×1	Ⅱ	胴部	Vc		
図N-3-22-96	J 1・4×19	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		粘土部集中1
図N-3-22-97	F 16・2×9	Ⅱ	口縁～底部	Vc		
図N-3-23-98	P 7・4×14	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-23-99	G 3・1×3	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-100	J 1・1×3, J 1・3×1	Ⅱ4	口縁部	Vc		
図N-3-23-101	I 7・2×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-102	H 4・1×9	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-23-103	H 4・2×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-104	H 1・10×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-105	I 4・1×1, I 5・24×2	Ⅱ3	口縁～胴部	Vc		
図N-3-23-106	I 5・6×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-107	I 4・2×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-108	I 2・1×8	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-23-109	I 1・1×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-110	G 7・19×12	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-23-111	J 6・1×1, J 7・1×1, K 6・3×5	Ⅱ7	口縁～底部	Vc		
図N-3-24-112	a H 1・3×2	Ⅱ	胴部	Vc	図版51	同一個体
	b H 1・3×1		胴部			
図N-3-24-113	G 1・8×2	Ⅱ	口縁～胴部	Vc		
図N-3-24-114	H 3・1×1	Ⅱ	口縁部	Vc		
図N-3-24-115	a G 7・9×3	Ⅱ	胴部	Vc	図版52	同一個体
	b G 7・4×1, G 7・5×1, G 7・9×1		胴部			
図N-3-24-116	H 2・2×1, H 2・4×3, H 2・9×3	Ⅱ7	胴部	Vc		

図番号	調査区	遺物番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	図録番号	備考
図Ⅳ-3-28-30	R50	10	Ⅲ	黒無砂	472	352	212	2737	黒曜石	図録51	焼熱
図Ⅳ-3-28-31	R64	6	Ⅲ-3	スクレイパー	602	328	104	1955	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-32	I 5	14	Ⅲ	スクレイパー	781	381	083	2469	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-33	H 4	1	Ⅲ	スクレイパー	857	247	069	1544	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-34	G 7	11	Ⅲ	スクレイパー	1160	334	107	3138	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-35	H 4	5	Ⅲ	スクレイパー	580	375	074	1088	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-36	I 7	6	Ⅲ	スクレイパー	730	337	117	2353	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-37	S 65	1	Ⅲ	スクレイパー	876	404	132	3868	黒曜石		
図Ⅳ-3-29-38	I 2	6	Ⅲ	スクレイパー	624	818	119	6658	玄武岩		
図Ⅳ-3-29-39	Q 46	2	Ⅲ	石斧	(756)	421	199	11400	緑色泥岩		
図Ⅳ-3-29-40	O 45	29	Ⅲ	砥石	(769)	(456)	099	5508	砂岩		
図Ⅳ-3-29-41	P 51	5	Ⅲ	黒無砂	(987)	688	743	6120	砂岩		
図Ⅳ-3-30-42	R 47	1	Ⅲ	たたき石	551	374	176	4772	砂岩	図録52	四面砥石
図Ⅳ-3-30-43	I 1	9	Ⅲ	たたき石	1408	504	193	22900	砂岩		
図Ⅳ-3-30-44	H 1	19	Ⅲ	たたき石	1800	734	422	73600	珪岩		
図Ⅳ-3-30-45	R 64	7	Ⅲ	たたき石	1586	352	283	21000	片岩		
図Ⅳ-3-30-46	Q 46	1	Ⅲ	たたき石	1350	654	238	37600	片岩		
図Ⅳ-3-30-47	O 55	2	Ⅲ-3	石製品	407	167	068	242	黒曜石		
図Ⅳ-3-30-48	I 5	19	Ⅲ	石製品	365	490	060	946	凝灰岩		
図Ⅳ-3-30-49	I 7	4	Ⅲ	石製品	440	560	105	3077	凝灰岩		
図Ⅳ-3-30-50	H 2	3	Ⅲ	石製品	(390)	(380)	(0.36)	7.30	凝灰岩		
図Ⅳ-3-30-51	I 5	18	Ⅲ	石製品	325	250	210	3075	蛇紋岩		

表9 土壌フローテーション成果一覧

遺物名	処理番号	遺物土層 深層層 g	灰化物質重量 g				種子	骨						照片点数 高解0.5mm その他	その他点数・ 重量 点/g	備考	
			2.0mm	0.425 mm	残流	魚骨 重量 g		土器 重量 g	土器 点数	土製品 重量 g	石製品 重量 g	石製品 点数	高解石 重量 g				
遺Ⅱ-1・HF-1	19-1	765	125	109	36	00	主に魚骨244	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1	高解小解0.7g	ヤケ料・魚骨・種子 コナラ実属子葉 (2)燻炭(1)ツメ科 (13)ウレシ風(1) シソ科(1)不明(2)
遺Ⅱ-1・HF-1	19-2	150	01	02	00	なし	魚骨06	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ペンダラ0.0g	ヤケ料・燻炭・マ イマイ、種子にニ属 (1)
遺Ⅱ-1・HF-1	19-3	313	00	00	00	なし	魚骨34	なし	なし	なし	なし	0.0	1	なし	なし	ヤケ料・燻炭・マ イマイ	
遺Ⅱ-1・HF-1	19-4	085	00	01	01	なし	魚骨10	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ヤケ料燻炭、昆布	
遺Ⅱ-2・HF-1	19-5	467	101	08	42	なし	主に魚骨28	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ヤケ料・燻炭・種 子・コナラ実属子葉 (3)燻炭(1)ツメ科 (13)ウレシ風(1) シソ科(1)不明(4)	
遺Ⅱ-2・HF-1	19-6	231	11	07	12	なし	主に魚骨40	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ヤケ料・燻炭・種 子・コナラ実属子葉 (10)不明(9)	
遺Ⅱ-2・HF-1	19-7	236	00	00	00	なし	主に魚骨40	なし	なし	なし	なし	0.0	4	なし	なし	ヤケ料・燻炭・種 子・コナラ実属子 葉(5)	
遺Ⅱ-2・HF-1	19-8	270	00	01	02	なし	主に魚骨43	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	ヤケ料・燻炭・種 子・コナラ実属子葉 (4)	
遺Ⅱ-3	19-9	091	00	00	00	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.0	1	なし	なし		
遺Ⅱ-3	19-10	215	07	05	00	なし	00	07	1	なし	なし	なし	なし	1	なし	種子サルナシ(1)	
遺Ⅱ-5・HF-1	19-11	165	01	00	02	なし	00	なし	なし	なし	なし	0.0	1	なし	なし		
遺Ⅱ-5・HF-1	19-12	122	00	00	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
遺Ⅱ-7・HP-3	19-13	127	1.8	07	00	なし	なし	25	2	なし	なし	0.0	3	1	ペンダラ0.0g		
遺Ⅱ-7・HP-3	19-14	380	3.3	12	09	なし	00	35.1	58	なし	なし	0.2	7	なし	なし		

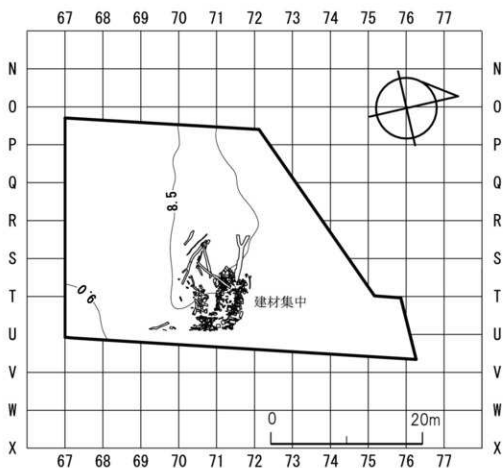
産地名	船積番号	風乾土塊重量kg	炭化物重量g		種子	骨						割片点数		その他点数・重量	備考		
			2.0mm	0.425mm		重量g	土類点数	土類重量g	土部品重量g	石部品重量g	黒曜石重量g	黒曜石	その他				
■H-8	20-10	0.10	224	27	0.5	なし	なし	なし	なし	なし	0.1	なし	なし	なし	なし	なし	種子 不明(1)
■H-8	20-11	0.42	24	04	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	2.2	4	なし	なし	0.0	1	なし
■H-8	20-12	0.13	1.8	0.6	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	種子 未炭化カパノキ科(5)未炭化ヤナギ科(1)
■H-8	20-13	0.86	1.8	0.5	0.0	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.0	2	なし	
■H-8	20-14	1.86	169	72	0.3	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.1	7	なし	種子 ヒメ属(1)不明(1)
■H-8	20-15	1.89	75	21	0.5	0.0	0.0	27.6	37	なし	なし	なし	なし	0.0	6	なし	種子 未炭化カパノキ科(5)
■H-8	20-16	0.33	1.3	0.4	0.0	なし	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.0	2	なし	
■H-8	20-17	0.67	152	07	0.1	なし	なし	57.2	97	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	種子 未炭化カパノキ科(5)ヒメ属(3)不明(1)
■H-8	20-18	3.90	95	5.0	0.4	0.0	なし	5.4	5	8.8	なし	0	3	なし	なし	なし	種子 未炭化カパノキ科(1)ヒメ属(2)不明(14)
■H-8	20-19	0.02	83	0.3	0.0	なし	なし	0.8	8	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
■H-8	20-20	0.06	90	0.0	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	種子 ヒメ属(1)
■H-8	20-21	0.40	25	3.1	0.1	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.0	2	なし	なし	種子 ヒメ属(1)
■H-9	20-22	0.31	60	0.0	0.1	なし	なし	0.1	1	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
■H-9	20-23	0.11	60	0.1	なし	なし	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
■H-9	20-24	0.34	03	0.1	0.1	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	種子 マメ科(1)
■H-9	20-25	0.26	00	0.2	0.0	なし	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	種子 フドウ属(1)
■H-9	20-26	0.10	01	0.2	0.1	なし	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
■P-9	19-16	0.50	133	2.1	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	0.0	1	なし			
■P-24	19-17	17.74	189	14.9	1.6	0.0	なし	3.4	19	なし	なし	0.1	10	なし			ペンガラ0.0g
■P-29	19-49	4.10	22	1.5	0.2	0.0	0.75	0.4	1	なし	0	0.9	4.8	3			種子 ナハヅ(3)、植物0.00
■A-1	19-18	5.80	177	6.4	6.2	0.5	※に魚骨117	0.3	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし		サナギ属：椎骨コイ科椎骨、マイマイ、種子 コナラ亜属子葉(6)コナラ亜属果皮(2)類葉(2)キイチブ属(2)マメ科(6)ソノ科(2)イネ科(1)不明(30)
■A-1	19-19	1.55	26	1.0	0.4	なし	※に魚骨111	0.7	2	なし	なし	なし	なし	なし	なし		サナギ属：椎骨、椎骨、マイマイ、種子 コナラ亜属子葉(4)類葉(2)不明(1)
■A-1	19-20	0.95	16	0.8	0.5	なし	魚骨19	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		サナギ属：椎骨、マイマイ、種子 狸参子葉(1)
■A-1	19-21	5.67	74	4.2	3.0	なし	※に魚骨412	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		サナギ属：椎骨、上肢椎骨、骨椎骨、椎骨、コイ科椎骨(3)、椎骨、マイマイ、種子 コナラ亜属子葉(3)類葉(2)
■S-3	19-15	0.32	17	1.0	0.0	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		種子 マメ科(4)不明(2)

※船積番号19-18のイネ科種子はイネの、19-20の狸参子葉はナリの可能性あり。

V 梅川1遺跡

1 遺構

Ⅲ層の調査では、梅川の旧河道から建材集中1か所を検出した。T a - a 降下軽石（Ⅱ層）直下の泥炭層（Ⅲ - 1層）より出土しており、近世アイヌ文化期の所産と考えられる。大部分は10~20cm角ほどの切片であるが、長さ約6mの丸太の先端を加工したものも見られる。約40,000点が出土した。この建材集中については、隣接する祝梅川小野遺跡の低湿地の遺構と同様に、木製遺物の保存処理・整理作業を継続中であるため、次年度以降に報告する。（菊池）



図V-1-1 遺構位置図

2 包含層出土の遺物

(1) 土器等

Ⅲ層より土器等は445点出土している(表I-4)。このうちV群c類が414点(93.0%)と大半を占める。このほかⅦ群が31点(7.0%)と少量出土している。いずれも透水の影響で器面が剥落するなど残存状態がよくない。V群c類はⅣ層(Ta-c)上面より3~5cm上位から出土する。Ⅶ群はB-Tmよりやや下位で出土する。遺物分布図は、祝梅川小野遺跡と合わせて記載した(図Ⅳ-3-47~52)。梅川1遺跡と祝梅川小野遺跡の低地部分は、祝梅川旧河道右岸の同じ段丘面に立地しており、埋蔵文化財包蔵地としては一連のものともみなせる。縄文時代晩期後葉および権文文化期の遺構は検出されておらず、これは祝梅川小野遺跡の低地部分北側から続く傾向である。V群c類は、梅川旧河道の右岸(72~75ライン)に集中城があり、北側の調査範囲外へと続くと思される。

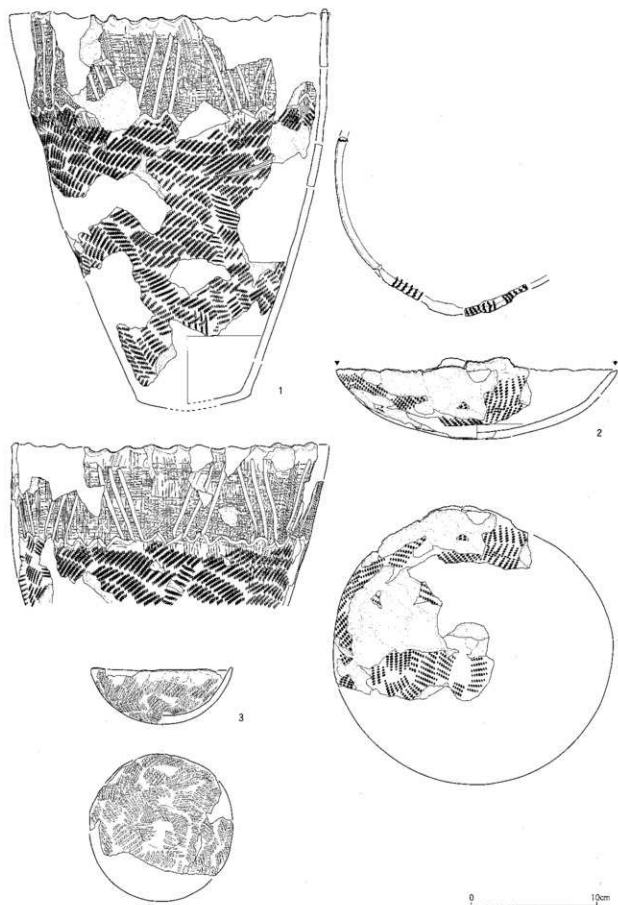
① V群c類 (図Ⅴ-2-1・2-4~18/表1/図版53)

1は深鉢。口縁~胴部と底部が接しなかった。口径25.3cm、底径9.0cm、器高31.8cmを測る(いずれも推定)。上面観は楕円形。口縁部は指頭圧痕により小波状。口縁端面は水平で、ナデのまま。外面は、横~斜位回転R L斜走縄文→波状沈線1条により口縁部と胴部を区画→口縁部文様帯内部の縄文をナデ消し→柳目状細沈線を横位・縦位に重複させて格子状にする(一部は胴部まで及ぶ)→3条1組の断続山形沈線。底部は凸底で、L R回転縄文。内面は横ナデ調整。内外面が著しく剥離する。胎土はやや粗く、土器片少量と中粒砂・軽石・繊維が混和する。接合面は露呈していない。口縁内面の一部に炭化物が付着する。

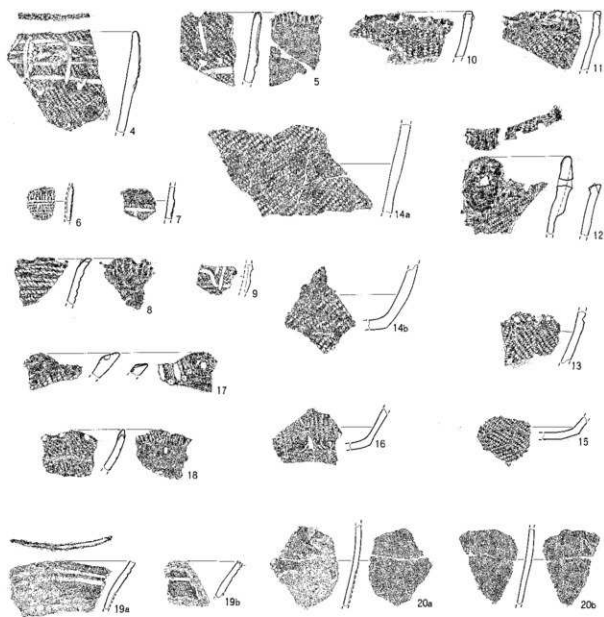
2は浅鉢。推定口径22.2cm、残存器高6.5cmを測る。上面観は不明。口縁部に突起部分が1か所残存する。突起部分は台形で、両端に小突起を有していたと推測されるが、片方を欠失する。突起およびその両側の口唇は縄側面圧痕。小突起の頂部は棒側面圧痕。口縁端面は内傾し、突起部分以外はナデのみである。外面は横位回転R L斜~縦走縄文が施されるが、剥落が著しい。底部は丸底。内面は横ナデ調整。胎土は粗く、土器片多量と粗粒砂・軽石・繊維が混和する。接合面は露呈していない。

3は小型の浅鉢。推定口径11.2cm、器高4.6cmを測る。上面観はほぼ円形。口縁部は平縁と推測される。口縁端面は丸く、ナデのみである。外面は無筋L斜走縄文。底部は丸底。内面は横ナデ調整。胎土はやや粗く、細粒砂・軽石が混和する。接合面は露呈していない。口縁部に補修孔が1か所確認される。

4~18は破片資料。4~12は深鉢の口縁部。4~7は主に沈線により文様が描かれるもの。4は口縁端面水平→R L回転縄文、外面はR L斜走縄文→横位沈線4条→括弧状沈線を上描き→竹管状施文具による上向きの刺突列。5は口縁端面水平→外縁に指頭圧痕、内面は口唇直下に縦位の1段摺りL縄側面圧痕、外面はR L斜走縄文→縦位沈線・弧沈線→竹管状施文具による横向きの刺突列→横位沈線1条(残存)。6・7は口唇を欠損する。6は外面に格子状の細沈線、内面剥落。7は外面にナデ消しの無文帯→横位沈線1条とその上下部に短刻線列、赤彩の痕跡が見られる。8・9は外面に縄側面圧痕が施されるもの。8は口縁端面水平→外縁に指頭圧痕、内面は口唇直下に縦位縄側面圧痕、外面は横位縄側面圧痕。9は口唇を欠損する。外面は縦位・斜位細沈線→横位縄側面圧痕→波状・縦位沈線、内面剥落。10は口縁端面水平→指頭圧痕(内外面の口唇直下が肥厚する)、外面はR L縦走縄文→口唇直下の縄文を横ナデ消し→無文帯の下部に細い棒状施文具の先端による刺突列。破断面に内傾の接合面が露呈する。11は口縁端面水平→指頭圧痕(外面の口唇直下が肥厚する)、外面はR L斜走縄文→口唇直下の縄文を横ナデ消し。12は単峰山形突起→頂部に縦位縄側面圧痕、口縁端面内傾→L R回



図V-2-1 包含層の土器(1)



図V-2-2 包含層の土器(2)

転縄文→外縁に棒側面圧痕、外面はL R斜走縄文→突起下に楕円形の貼付帯→内面からの円形刺突孔。13は深鉢の胴部。外面はR L斜走縄文→竹管状施工具による上向きの刺突列。破断面に内傾の接合面が露呈する。14は深鉢の胴部（a）と底部（b）。外面はL R斜走縄文（ナデにより不鮮明）、底部は平底で底外面にもL R回転縄文。15・16は深鉢の底部。いずれも凸底で、外面～底外面にR L回転縄文。17・18は浅鉢の口縁部。17は山形突起の一部→頂部に竹管状施工具の先端による円形刺突→渦巻状の1段撚りR縄側面圧痕、口縁端面やや内傾→縦位縄側面圧痕→縦位棒側面圧痕、内面の口唇直下に円形刺突、外面はR L斜走縄文。18は低い台形突起の一部、口縁端面内傾→縦位縄側面圧痕→外縁に縦位棒側面圧痕、外面はR L斜走縄文→ナデ消し凹帯（上下部に細い棒状施工具の先端による刺突列）。

②Ⅶ群（図V-2-2-19・20／表1／図版53）

19は甕の口縁部。口縁端面が内湾する。外面ヨコナデ→横位沈線2条（剥落により不明瞭）、内面ヨコナデ。20は甕の胴部。外面タテハケ（剥落により不明瞭）、内面ヨコハケ。（芝田）

（2）石器等

Ⅲ層からは剥片石器36点、剥片78点、礫石器2点、礫1点の合計117点が出土している（表I-5）。この中から定型的で完形のものを中心に抽出し掲載した。利用する石材は、剥片石器ではほとんどが黒曜石である。祝梅川へ向かう旧河川跡の両岸から出土している。石器等の分布については、祝梅川小野遺跡と合わせて図IV-3-31～38に掲載した。

石鏃（図V-2-3-1～4／表2／図版54）

石鏃は5点出土している。形態では三角形鏃が1点、有茎鏃4点である。石材はすべて黒曜石である。有茎鏃の1点を除き掲載した。

1は三角形で基部は平基。基部が10°ほど傾いている。2～4は有茎。2・3は基部先端を折損している。かえしは明瞭である。基部は凸基で先端が尖る。3は裏面に主剥離面を残す。

石錐（図V-2-3-5／表2／図版54）

5は縦長剥片の先端部に機能部を作出している。石材は片岩である。

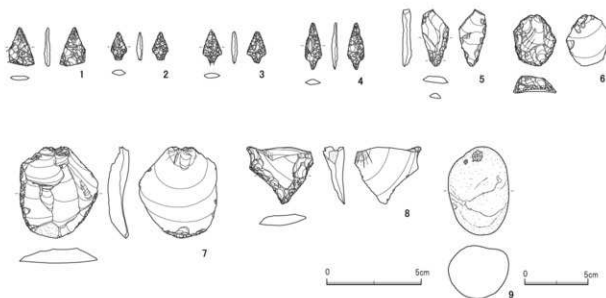
スクレイパー（図V-2-3-6～8／表2／図版54）

スクレイパーは11点出土している。石材はすべて黒曜石である。背面の周縁・側縁に円弧状や直線状の刃部をつけているものが多数を占める。

6・7は背面の打面を除く周縁に刃部をつけている。6は腹面の加工をしていない。7は下端部のみ腹面に刃部をつけている。8はV字状の刃部がある。上半は欠損している。

たたき石（図V-2-3-9／表2／図版54）

9は楕円礫の上端部に使用痕がある。石材は砂岩である。（酒井）



図V-2-3 包含層の石器

表1 包含層出土掲載土器一覧

図番号	調査区・遺物番号×点数	層位	部位	分類	図録番号	備考
図V-2-1-1	R73・1×11, S72・1×5, S72・5×19, S73・1×15, T72・1×11, T73・1×3 計64	Ⅲ	復元胴体(口縁~底部)	Vc	図録53	
図V-2-1-2	T73・1×11	Ⅲ	復元胴体(口縁~底部)	Vc		
図V-2-1-3	R72・3×6	Ⅲ	復元胴体(口縁~底部)	Vc		
図V-2-2-4	T67・2×2	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-5	R72・1×2	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-6	S72・1×1	Ⅲ	胴部	Vc		
図V-2-2-7	S72・1×1	Ⅲ	胴部	Vc		赤彩
図V-2-2-8	R72・1×1	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-9	S72・1×1	Ⅲ	胴部	Vc		
図V-2-2-10	R72・3×1, S72・5×1 計2	Ⅲ	口縁部	Vc		内縁接合
図V-2-2-11	T73・1×1	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-12	T67・6×1	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-13	S72・5×2	Ⅲ	胴部	Vc		内縁接合
図V-2-2-14	a T67・1×4 b T67・1×1	Ⅲ	胴部 胴部~底部	Vc	同一胴体	
図V-2-2-15	S72・5×1	Ⅲ	底部	Vc		
図V-2-2-16	S72・5×2	Ⅲ	底部	Vc		
図V-2-2-17	S73・1×1	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-18	S73・1×1	Ⅲ	口縁部	Vc		
図V-2-2-19	a T72・2×1 b T72・3×1	Ⅲ	口縁部 口縁部	Ⅳ	同一胴体	
図V-2-2-20	a R72・2×2 b R72・2×2	Ⅲ	胴部 胴部	Ⅳ	同一胴体	

表2 包含層出土掲載石器一覧

図番号	調査区	遺物番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	図録番号	備考
図V-2-3-1	S72	1	Ⅲ	石鏃	21	(1.5)	0.3	0.6	黒曜石	図録54	三角形平基
図V-2-3-2	T68	7	Ⅲ-3	石鏃	(14)	0.8	0.3	0.3	黒曜石		有茎
図V-2-3-3	S72	2	Ⅲ	石鏃	(16)	1.0	0.3	0.4	黒曜石		有茎
図V-2-3-4	T73	1	Ⅲ	石鏃	(24)	(0.9)	0.3	0.5	黒曜石		有茎
図V-2-3-5	R72	1	Ⅲ	石鏃	30	1.4	0.4	1.9	片岩		
図V-2-3-6	S73	3	Ⅲ	スクレイパー	27	2.2	0.8	5.1	黒曜石		
図V-2-3-7	T72	1	Ⅲ	スクレイパー	48	4.2	0.9	17.1	黒曜石		
図V-2-3-8	T67	3	Ⅲ	スクレイパー	(34)	(3.3)	0.9	6.9	黒曜石		
図V-2-3-9	T68	9	Ⅲ-3	たたき石	71	4.8	4.4	188.0	砂岩		

VI 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定結果

平成19・23年度に当財団が株式会社加速器分析研究所に委託し、年代測定の成果として提出された「祝梅川小野遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）①」と「同②」を掲載する。①中のV層出土試料9点（IAAA-72173～72177・72180～72182・72184）の測定結果は、昨年度報告済みである（北埋調報285）。各遺構の年代を把握することを目的として測定を依頼した。

(1) 測定結果について

縄文時代晩期後葉

ⅢP-24が $2,403 \pm 34$ yrBP、ⅢP-59が $2,363 \pm 30$ yrBPと近接した年代測定値が得られている。千歳市キウス4遺跡のT a - c₁とT a - c₂間の泥炭層の放射性炭素年代が $2,550 \pm 50$ yrBPと測定されており（北埋調報134）、Ⅲ層中の遺構の年代としては矛盾しない。ⅢP-24出土の深鉢（図IV-2-5-12）は、口縁部文様帯に連結括弧文と蛇行線文が複合して描かれている。連結括弧文はママチⅡ群の主要素で、V層より出土するV群c類に見られる文様である。また、蛇行線文はママチⅣ群の主要素で、Ⅲ層より出土するV群c類に見られる文様である。新旧の文様要素を併せ持つ過渡期的な個体であることから、T a - c₁降下直後の所産と推測される。しかし、キウス4遺跡の泥炭層と比較するとⅢP-24の放射性炭素年代は、150年ほど新しくなっており、土器型式上の編年の位置とは矛盾する。縄文時代晩期後葉の年代測定値は、2,500～2,400yrBPに集中し、いわゆる「2400年問題」として指摘されてきた。これはB C 750～B C 400年に相当する期間では¹⁴C濃度がほぼ一定で、暦年較正曲線が横ばい状態になることが原因と考えられている（今村2001）。ⅢP-24の放射性炭素年代測定値もこの影響を受けている可能性がある。

擦文文化期

住居跡の形態は、①ⅢH-3・8・10：方形で掘り込みが深く、南側に竈を設ける（ⅢH-10は調査範囲内に竈が検出されていないが、形状・長軸方向が類似することからここに含めた）、②ⅢH-9：隅丸長方形で掘り込みが浅く、床面中央に炬を設ける、③ⅢH-4：隅丸長方形で掘り込みが浅く、炬を設けない、に分かれる。①はⅢH-3が $1,069 \pm 30 \sim 1,156 \pm 32$ yrBP、ⅢH-8が $1,263 \pm 22 \sim 1,315 \pm 23$ yrBP、ⅢH-10が $1,272 \pm 23$ yrBPという年代測定値が得られている。住居の建材あるいは竈の燃焼材として使用された試料に、いわゆる「古木効果」による影響があったと仮定し、新しい年代測定値がより住居の暦年代に近いと見なすと、ⅢH-3は10世紀後半、ⅢH-8・10は7世紀末～8世紀前半となる。ところが、ⅢH-8の使用時期は、床面より高台付坏須石器（図IV-2-7-21）が出土したことから、さらに新しい9世紀前半とされている。ⅢH-8は比較的規模が大きく、樹齢の高い大木の心材を利用して建築したため、測定値との乖離が大きくなった可能性がある。②はⅢH-9が $890 \pm 23 \sim 956 \pm 22$ yrBPという年代測定値から、11世紀後葉～12世紀に使用されたと推測される。この暦年代は千歳市美々8遺跡における佐藤和雄分類のIX類に相当し（北埋調報89）、周辺の包含層からも甕（図IV-3-16-24）が出土している。③はⅢH-4が $721 \pm 27 \sim 835 \pm 29$ yrBPという年代測定値から、12世紀後葉～13世紀に使用されたと推測される。擦文文化期の終末期に構築された可能性があるが、明瞭な遺物を伴わないので不明である。以上の放射性炭素年代測定の結果から、擦文文化期の住居跡の構築順は、ⅢH-8・10→ⅢH-3→ⅢH-9→ⅢH-4となる。（芝田）

(2) 祝梅川小野遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) ①

1 測定対象試料

祝梅川小野遺跡は、北海道千歳市祝梅485番地2ほか(北緯42° 49' 51"、東経141° 41' 52")に所在する。測定対象試料は、祝梅川小野遺跡から出土した炭化物11点である。

2 測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1 Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1 Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1 Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

4 測定方法

測定機器は、(株)加速器分析研究所の¹⁴C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

5 算出方法

年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する。¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表される。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを計算する。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に(加速器)と注記する。また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるときの¹³C濃度に換算した上で計算した値である。pMC(percent

Modern Carbon)は、 ^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合を示す。

年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値を暦年較正年代という。暦年較正年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001. Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入していない ^{14}C 年代値である。

6 測定結果

^{14}C 年代は、Ⅲ H - 3 では、覆土の炭化物が $1,160 \pm 30\text{yrBP}$ (No.1 : IAAA-72165)、 $1,120 \pm 30\text{yrBP}$ (No.2 : IAAA-72166)、 $1,070 \pm 30\text{yrBP}$ (No.3 : IAAA-72167)、カマドの炭化物が $1,100 \pm 30\text{yrBP}$ (No.4 : IAAA-72168) である。Ⅲ H - 4 では、床面の炭化物が $820 \pm 30\text{yrBP}$ (No.5 : IAAA-72169)、 $760 \pm 30\text{yrBP}$ (No.6 : IAAA-72170)、 $720 \pm 30\text{yrBP}$ (No.7 : IAAA-72171)、 $840 \pm 30\text{yrBP}$ (No.8 : IAAA-72172) である。Ⅲ P - 24 では、坑底の炭化物が $2,400 \pm 40\text{yrBP}$ (No.14 : IAAA-72178) である。Ⅲ P - 59 では、覆土出土の炭化物が $2,360 \pm 30\text{yrBP}$ (No.15 : IAAA-72179) である。土器集中5より出土した炭化物は $1,080 \pm 30\text{yrBP}$ (No.19 : IAAA-72183) である。

暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、No.1が780~960AD、No.2が890~970AD、No.3が900~1,020AD、No.4が895~985AD、No.5が1,205~1,260AD、No.6が1,225~1,280AD、No.7が1,265~1,290AD、No.8が1,175~1,255AD、No.14が520~400BC、No.15が510~390BC、No.19が895~995ADに含まれる。

試料の炭素含有率は十分であり、化学処理および測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。
(株式会社加速器分析研究所)

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2 A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2 A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

表Ⅵ-1-1 測定試料の¹⁴C年代および炭素の同位体比(1)

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72165	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-3 覆土	Libby Age (yrBP) : 1160 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.1	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -25.34 ± 0.60 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -134.0 ± 3.5 pMC (%) = 86.60 ± 0.35
#2040-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -134.7 ± 3.4 pMC (%) = 86.53 ± 0.34 Age (yrBP) : 1160 ± 30
IAAA-72166	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-3 覆土	Libby Age (yrBP) : 1120 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.2	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -26.76 ± 0.69 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -130.1 ± 3.2 pMC (%) = 86.99 ± 0.32
#2040-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -133.2 ± 3.0 pMC (%) = 86.68 ± 0.30 Age (yrBP) : 1150 ± 30
IAAA-72167	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-3 覆土	Libby Age (yrBP) : 1070 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.3	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -26.74 ± 0.80 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -124.7 ± 3.3 pMC (%) = 87.53 ± 0.33
#2040-3	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -127.8 ± 3.0 pMC (%) = 87.22 ± 0.30 Age (yrBP) : 1100 ± 30
IAAA-72168	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-3 覆	Libby Age (yrBP) : 1100 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.4	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -24.36 ± 0.87 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -128.4 ± 3.3 pMC (%) = 87.16 ± 0.33
#2040-4	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -127.3 ± 3.0 pMC (%) = 87.27 ± 0.30 Age (yrBP) : 1090 ± 30
IAAA-72169	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-4 床面	Libby Age (yrBP) : 820 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.5	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -24.75 ± 0.91 $\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -97.1 ± 3.3 pMC (%) = 90.29 ± 0.33
#2040-5	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -96.6 ± 2.9 pMC (%) = 90.34 ± 0.29 Age (yrBP) : 820 ± 30

表VI-1-2 測定試料の ^{14}C 年代および炭素の同位体比(2)

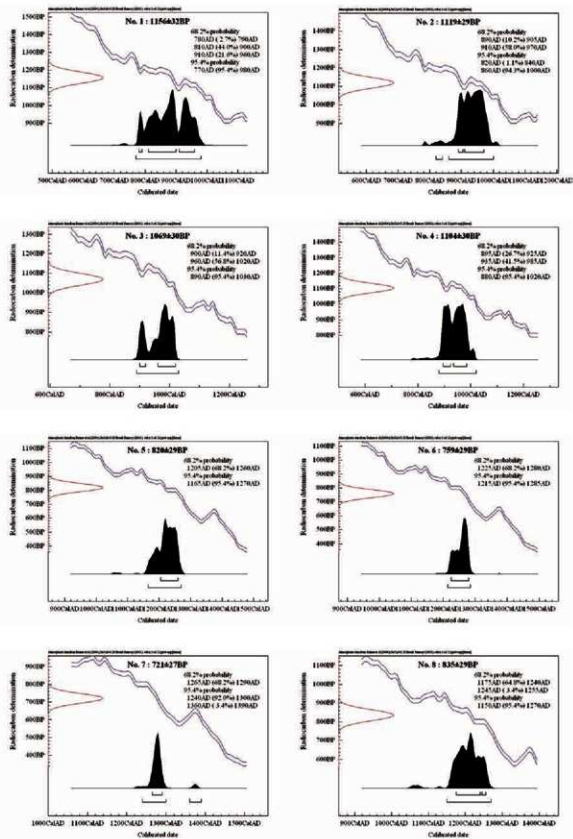
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比		
IAAA-72170	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-4 床面	Libby Age (yrBP)	:	760 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 6	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-24.98 ± 0.96
#2040-6	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-90.2 ± 3.3
		pMC (%)	=	90.98 ± 0.33
IAAA-72171	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-4 床面	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-90.2 ± 2.8
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 7	pMC (%)	=	90.98 ± 0.28
#2040-7	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP)	:	760 ± 30
		Libby Age (yrBP)	:	720 ± 30
IAAA-72172	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III H-4 床面	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-21.24 ± 0.51
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 8	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-85.9 ± 3.2
#2040-8	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	=	91.41 ± 0.32
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-78.8 ± 3.0
IAAA-72178	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-24 坑底	pMC (%)	=	92.12 ± 0.30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 14	Age (yrBP)	:	660 ± 30
#2040-14	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age (yrBP)	:	840 ± 30
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-21.18 ± 0.58
IAAA-72179	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-59 覆土	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-98.8 ± 3.3
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 15	pMC (%)	=	90.12 ± 0.33
#2040-15	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-91.7 ± 3.1
		pMC (%)	=	90.83 ± 0.31
IAAA-72178	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-24 坑底	Age (yrBP)	:	770 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 14	Libby Age (yrBP)	:	2400 ± 40
#2040-14	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-22.57 ± 0.71
		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-258.6 ± 3.2
IAAA-72179	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-59 覆土	pMC (%)	=	74.14 ± 0.32
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 15	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-254.9 ± 3.0
#2040-15	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	=	74.51 ± 0.30
		Age (yrBP)	:	2360 ± 30
IAAA-72179	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-59 覆土	Libby Age (yrBP)	:	2360 ± 30
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 15	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-26.65 ± 0.82
#2040-15	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-254.9 ± 2.8
		pMC (%)	=	74.51 ± 0.28
IAAA-72179	試料採取場所：北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 III P-59 覆土	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-257.4 ± 2.5
	試料形態：炭化物 試料名(番号)：No. 15	pMC (%)	=	74.26 ± 0.25
#2040-15	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP)	:	2390 ± 30
		Libby Age (yrBP)	:	2390 ± 30

表Ⅴ-1-3 測定試料の¹⁴C年代および炭素の同位体比(3)

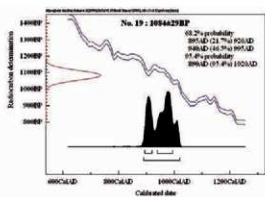
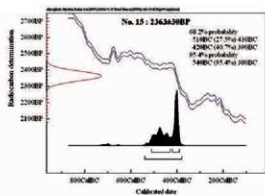
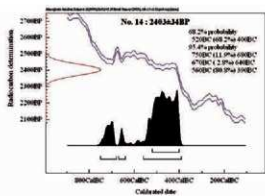
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72183	試料採取場所 : 北海道千歳市祝梅485番地2ほか 祝梅川小野遺跡 土器集中5 Ⅲ層	Libby Age (yrBP) : 1080 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器) = -25.48 ± 0.68
	試料形態 : 炭化物	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -126.3 ± 3.2
	試料名(番号) : No. 19	pMC (‰) = 87.37 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -127.1 ± 3.0 pMC (‰) = 87.29 ± 0.30
#2040-19		Age (yrBP) : 1090 ± 30

表Ⅴ-1-4 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果(1)

試料番号	試料	出土地点	層位	Code No.	前処理	暦年代正用 (yrBP - 丸め込みなし)	暦年代正1σ (yrcaBP)	暦年代正2σ (yrcaBP)
No.1	炭化物	ⅢH-3	覆土	IAAA-72165	AAA	1156 ± 32	780-790AD(2.7%) 810-900AD(44.0%) 910-960AD(21.6%)	770-980AD(95.4%)
No.2	炭化物	ⅢH-3	覆土	IAAA-72166	AAA	1119 ± 29	800-905AD(10.2%) 910-970AD(58.0%)	820-840AD(1.1%) 860-1000AD(94.3%)
No.3	炭化物	ⅢH-3	覆土	IAAA-72167	AAA	1069 ± 30	900-920AD(11.4%) 960-1020AD(56.8%)	890-1020AD(95.4%)
No.4	炭化物	ⅢH-3	竈	IAAA-72168	AAA	1104 ± 30	895-925AD(26.7%) 935-985AD(41.5%)	880-1020AD(95.4%)
No.5	炭化物	ⅢH-4	床面	IAAA-72169	AAA	820 ± 29	1205-1260AD(68.2%)	1165-1270AD(95.4%)
No.6	炭化物	ⅢH-4	床面	IAAA-72170	AAA	759 ± 29	1225-1280AD(68.2%)	1215-1285AD(95.4%)
No.7	炭化物	ⅢH-4	床面	IAAA-72171	AAA	721 ± 27	1265-1290AD(68.2%)	1260-1300AD(92.0%) 1360-1390AD(3.4%)
No.8	炭化物	ⅢH-4	床面	IAAA-72172	AAA	835 ± 29	1175-1240AD(64.8%) 1245-1255AD(3.4%)	1150-1270AD(95.4%)
No.14	炭化物	ⅢP-24	坑底	IAAA-72178	AAA	2403 ± 34	520-400BC(68.2%)	750-680BC(11.9%) 670-640BC(2.8%) 560-390BC(80.8%)
No.15	炭化物	ⅢP-59	覆土	IAAA-72179	AAA	2263 ± 30	510-430BC(27.5%) 420-300BC(40.7%)	540-380BC(95.4%)
No.19	炭化物	土器集中5	Ⅲ層	IAAA-72183	AAA	1084 ± 29	895-920AD(21.7%) 940-995AD(46.5%)	890-1020AD(95.4%)



図VI-1-1 暦年較正年代グラフ(1)



図VI-1-2 暦年較正年代グラフ(2)

(3) 祝梅川小野遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) ②

1 測定対象試料

祝梅川小野遺跡は、北海道千歳市祝梅(北緯42° 49' 50"、東経141° 41' 42")に所在する。測定対象試料は、住居跡出土木炭(1:IAAA-112152~5:IAAA-112156)の合計5点である(表VI-1-5)。

試料1~3は土壌ごと取り上げた後に、フローテーション法で回収され、4、5は調査現場で直接採取された。

2 測定の意義

遺構の年代を推定する。

3 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表VI-1-5に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表VI-1-5)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表VI-1-5に、補正していない値を参考値として表VI-1-6に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同程度)

上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表VI-1-5に、補正していない値を参考値として表VI-1-6に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表VI-1-6に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

住居跡出土木炭の ^{14}C 年代は、ⅢH-8 煙道出土の1が $1260 \pm 20\text{yrBP}$ 、ⅢH-8 火床出土の2が $1320 \pm 20\text{yrBP}$ 、ⅢH-9 坪跡出土の3が $960 \pm 20\text{yrBP}$ 、ⅢH-9 覆土出土の4が $890 \pm 20\text{yrBP}$ 、ⅢH-10 覆土出土の5が $1270 \pm 20\text{yrBP}$ である。ⅢH-8、ⅢH-9 出土の各2点の値は、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲でわずかに重ならないが、おおむね近接している。暦年較正年代 (1σ) は、1が $692 \sim 772\text{cal AD}$ 、2が $660 \sim 764\text{cal AD}$ 、3が $1028 \sim 1149\text{cal AD}$ 、4が $1052 \sim 1207\text{cal AD}$ 、5が $688 \sim 770\text{cal AD}$ の間に各々複数の範囲で示される。

試料の炭素含有率は、60%以上といずれも適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株式会社加速器分析研究所)

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表VI-1-5 測定試料の¹⁴C年代および炭素の同位体比(4)

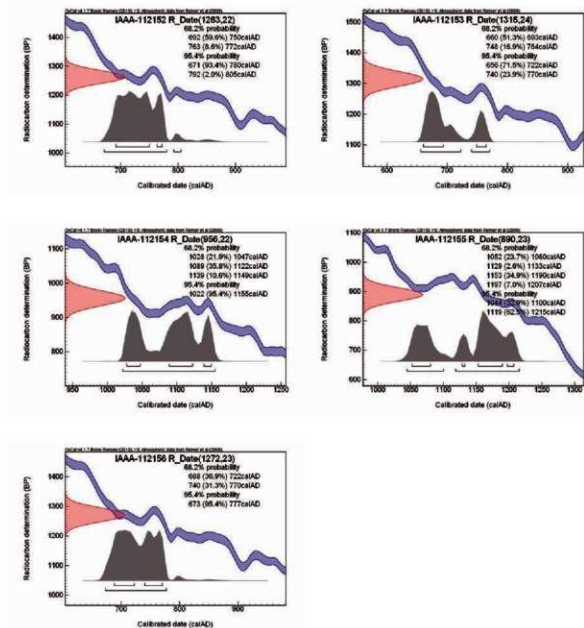
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112152	1	ⅢH-8 煙道	木炭	AAA	-24.82 ± 0.56	1,260 ± 20	85.45 ± 0.24
IAAA-112153	2	ⅢH-8 火床	木炭	AAA	-23.73 ± 0.48	1,320 ± 20	84.89 ± 0.26
IAAA-112154	3	ⅢH-9 炉跡	木炭	AAA	-25.39 ± 0.52	960 ± 20	88.78 ± 0.24
IAAA-112155	4	ⅢH-9 覆土	木炭	AAA	-28.91 ± 0.52	890 ± 20	89.51 ± 0.26
IAAA-112156	5	ⅢH-10 覆土	木炭	AAA	-27.68 ± 0.58	1,270 ± 20	85.35 ± 0.25

[#4804]

表VI-1-6 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果(2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年代正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112152	1,260 ± 20	85.45 ± 0.22	1,263 ± 22	692calAD - 750calAD (39.6%) 763calAD - 772calAD (8.6%)	671calAD - 780calAD (93.4%) 795calAD - 805calAD (2.0%)
IAAA-112153	1,290 ± 20	85.12 ± 0.25	1,315 ± 24	660calAD - 693calAD (51.3%) 748calAD - 764calAD (16.9%)	656calAD - 722calAD (71.5%) 740calAD - 770calAD (23.9%)
IAAA-112154	960 ± 20	88.71 ± 0.22	956 ± 22	1028calAD - 1047calAD (21.9%) 1089calAD - 1122calAD (35.8%) 1139calAD - 1149calAD (10.6%)	1022calAD - 1155calAD (95.4%)
IAAA-112155	950 ± 20	88.79 ± 0.24	890 ± 23	1052calAD - 1080calAD (23.7%) 1129calAD - 1133calAD (2.6%) 1153calAD - 1190calAD (34.9%) 1197calAD - 1207calAD (7.9%)	1044calAD - 1100calAD (32.9%) 1119calAD - 1215calAD (62.2%)
IAAA-112156	1,320 ± 20	84.88 ± 0.23	1,272 ± 23	688calAD - 722calAD (36.9%) 740calAD - 770calAD (31.3%)	673calAD - 777calAD (95.4%)

[参考値]



図VI-1-3 暦年較正年代グラフ(3)

2 黒曜石原産地同定結果

平成19年度に当財団が(株)第四紀地質研究所に委託し、黒曜石原産地同定の成果として提出された「黒曜石原産地同定(祝梅川小野遺跡)」を掲載する。測定対象は、縄文時代晩期後葉の土坑ⅢP-56から採取された黒曜石製Uフレイク6点(試料O-1~6)である。試料の採取位置、遺物番号、層位、大きさ、重さ、分類、原産地同定結果については表VI-2-1のとおりである。各遺物の出土位置図は図Ⅳ-1-42~44、実測図は図Ⅳ-2-18・19・60~65に掲載している。黒曜石原産地の同定により、黒曜石の搬入元を明らかにし、当時の物流の一端を明らかにすることを目的として依頼した。

(1) 同定結果について

試料の原産地は肉眼観察から白滝産と推定していたが、同定結果も赤石山Ⅱ2点、赤石山Ⅲ4点であった。このことから、縄文時代晩期後葉の祝梅川小野遺跡では、石器の材料として白滝産の黒曜石を入手し利用していたことが明らかとなった。

今回検出したⅢP-56と同じように、壺形土器の内部に黒曜石の大型剥片石器が納められた例は、余市町栄町5遺跡P-8が知られている。栄町5遺跡P-8からは、斜めの状態の壺形土器の内部に5点の黒曜石の大型剥片が出土した。壺形土器は縄文時代晩期後葉のもので、ⅢP-56出土のものと同時期と考えられる。中に入っていた大型剥片には周縁に不連続な細かい割離と稜にわずかな磨耗がみられるということなので、Uフレイクと考えられる。黒曜石原産地同定は行っていないが、肉眼観察によって白滝産の可能性が強いとしている(北埋調報66)。千歳市と余市町という距離の離れた位置にある2つの土坑には、副葬形態、出土した壺形土器、土器内部に入れられた黒曜石製大型Uフレイク、黒曜石の産地が白滝産であるといった、かなり強い共通性が見られる。栄町5遺跡は赤井川という原産地が近くにあるにもかかわらず、白滝産の黒曜石を多く利用していることも興味深い。

縄文時代晩期後葉～統縄文時代の黒曜石については、江別市対峯2遺跡で石鏃を用いた原産地同定を行っている(北埋調報231・240)。この結果と札幌市内の遺跡からの出土例とあわせて検討し、石鏃の形態の変化と絡めて黒曜石原産地の傾向がある時期を境に変わること指摘している。つまり、晩期中葉～後葉の有茎鏃では白滝エリア産や上土幌エリア産が多数を占めるのに対し、晩期末葉～統縄文時代初頭の三角形鏃では赤井川エリア産の比率が増大し、これ以後の札幌近郊では赤井川エリア産が卓越していくことが明らかになった(北埋調報240)。今報告のⅢ層から出土している石鏃は有茎鏃が卓越しており、白滝エリア産の黒曜石がⅢP-56から検出されたことは、この傾向とも一致する。ⅢP-56の出土例は、余市町栄町5遺跡P-8とともに土器と黒曜石が共存する好例であり、晩期後葉において白滝エリア産の黒曜石が余市町・札幌市・江別市・千歳市といった道央地域で多く利用されている状況を示す一例となっている。今後、黒曜石原産地同定の資料増加により、黒曜石というモノが時期・地域によってどのように動いたのかが明らかになると考えられる。(酒井)

表VI-2-1 黒曜石原産地同定試料一覧

試料番号	遺物名	遺物番号	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図番号	図版番号	同定結果
O-1	ⅢP-56	2	覆土9	Uフレイク	7.05	5.75	1.20	51.80	図Ⅳ-2-18-60	図版35	赤石山Ⅱ
O-2	ⅢP-56	3	覆土9	Uフレイク	8.60	6.75	1.75	50.00	図Ⅳ-2-18-61	図版35	赤石山Ⅲ
O-3	ⅢP-56	4	覆土9	Uフレイク	8.60	11.80	2.30	115.80	図Ⅳ-2-18-62	図版35	赤石山Ⅲ
O-4	ⅢP-56	5	覆土9	Uフレイク	10.70	7.40	2.30	83.50	図Ⅳ-2-18-63	図版35	赤石山Ⅱ
O-5	ⅢP-56	6	覆土9	Uフレイク	8.75	7.50	1.60	73.80	図Ⅳ-2-19-64	図版35	赤石山Ⅲ
O-6	ⅢP-56	7	覆土9	Uフレイク	11.70	9.00	1.90	160.70	図Ⅳ-2-19-65	図版35	赤石山Ⅲ

(2) 黒曜石原産地同定 (祝梅川小野遺跡)

1 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置(日本電子製J SX-3200)で行った。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法(FP法)による自動定量計算システムが採用されており、6C-92Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源(最大30kV、4mA)の採用で微量試料~最大290mmφ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクFP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

分析対象元素はSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Y、Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb、Sr、Y、Zrは重量%では小数点以下3~4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度(重量%)でSiO₂-Al₂O₃、Fe₂O₃-TiO₂、K₂O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

2 分析結果

祝梅川小野遺跡出土黒曜石遺物の分析結果は表VI-2-2化学分析表に示すとおりである。分析結果に基づいてSiO₂-Al₂O₃、Fe₂O₃-TiO₂、K₂O-CaO、Rb-Srの各図を、同定結果に基づいて表VI-2-3原産地対比表を作成した。

- 1) 1、2、3、6の4点は赤石山Ⅲ、4、5の2点は赤石山Ⅱである。

(株式会社第四紀地質研究所)

表VI-2-2 化学分析表

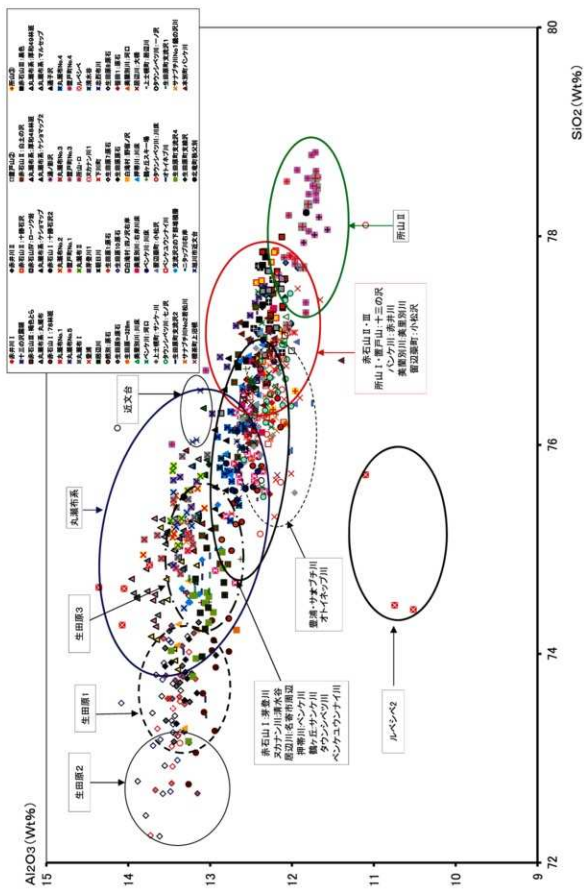
試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Total	Rb(%)	Sr(%)
O-1	3.8393	0.0000	12.1467	76.2705	1.3969	4.5295	0.5484	0.0730	0.0848	1.0843	0.0142	0.0018	0.0016	0.0092	100.0002	1159	142
O-2	3.6046	0.0000	12.3277	75.9605	1.3908	4.7203	0.6122	0.0846	0.0973	1.1671	0.0166	0.0026	0.0052	0.0104	99.9999	1255	191
O-3	3.8623	0.0000	12.0332	76.0355	1.4639	4.6733	0.6199	0.0840	0.0769	1.1190	0.0143	0.0047	0.0021	0.0071	100.0002	1164	371
O-4	3.6483	0.0000	11.9271	76.8228	1.2181	4.6703	0.5285	0.0412	0.0564	1.0317	0.0215	0.0027	0.0036	0.0078	100.0000	1754	216
O-5	3.9011	0.0000	12.1353	76.2026	1.3747	4.6436	0.5087	0.0290	0.0899	1.0801	0.0175	0.0053	0.0054	0.0099	100.0001	1410	416
O-6	3.4988	0.0000	12.0000	76.5403	1.4272	4.6543	0.5905	0.0817	0.0825	1.0841	0.0231	0.0084	0.0048	0.0042	99.9999	1638	592

表VI-2-3 原産地対比表

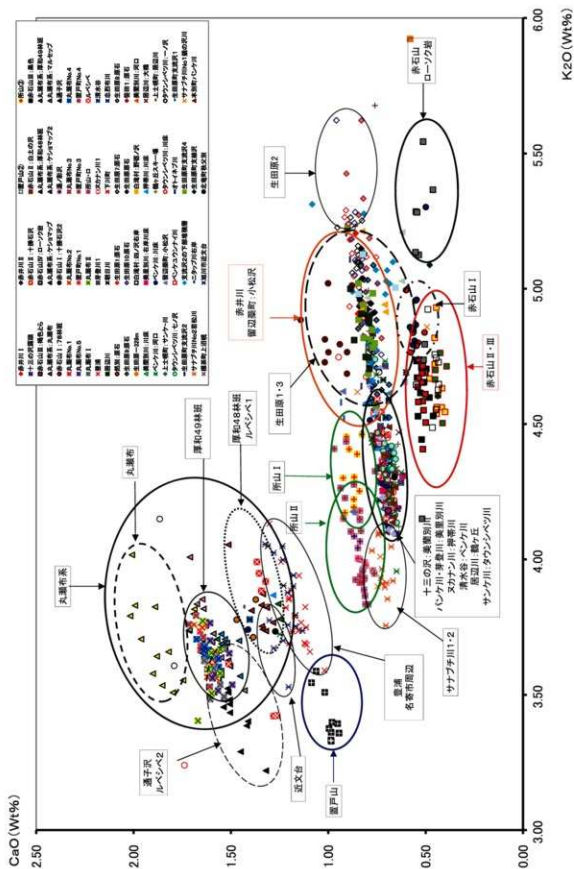
試料名	掲載図番号	遺構	遺物番号	層位	分類	原産地
O-1	図IV-2-18-60	ⅢF-56	2	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅲ
O-2	図IV-2-18-61	ⅢF-56	3	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅲ
O-3	図IV-2-18-62	ⅢF-56	4	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅲ
O-4	図IV-2-18-63	ⅢF-56	5	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅲ
O-5	図IV-2-19-64	ⅢF-56	6	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅱ
O-6	図IV-2-19-65	ⅢF-56	7	壱内部覆土	Uフレイク	赤石山Ⅱ

引用文献

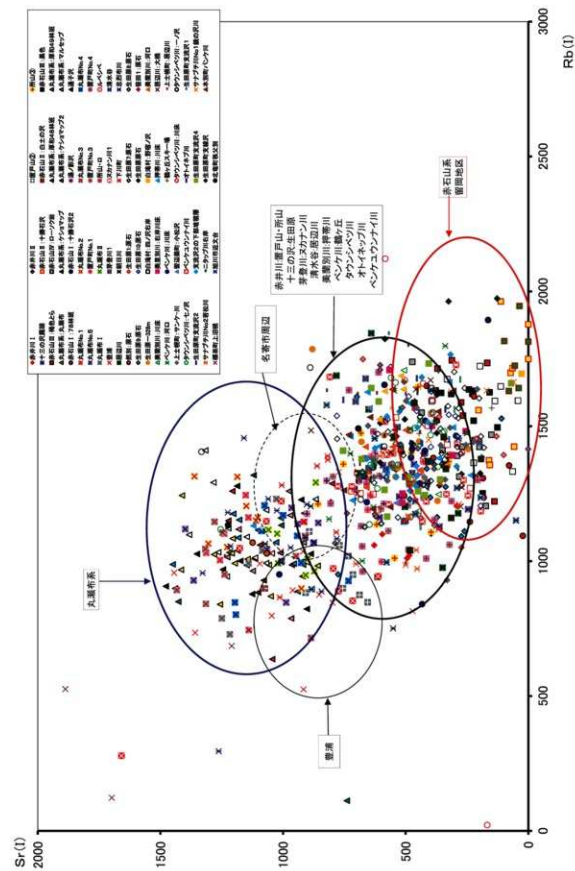
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編
井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石写真集



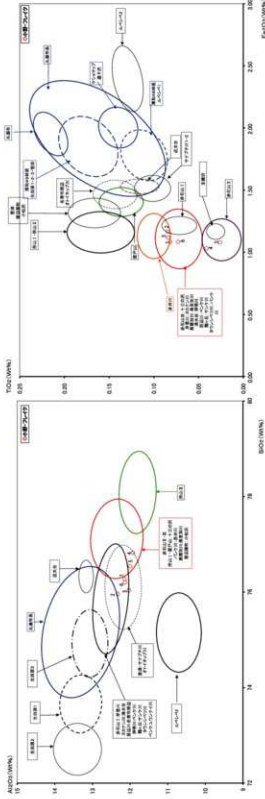
図Ⅵ-2-1 北海道の黒曜石 SiO_2 - Al_2O_3 図 (標準図)



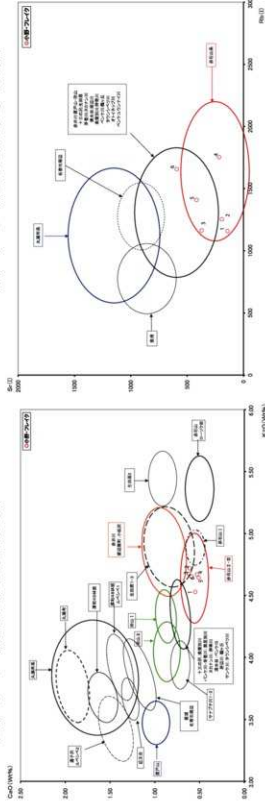
図VI-2-3 北海道の黒曜石 K₂O-CaO 図(標準図)



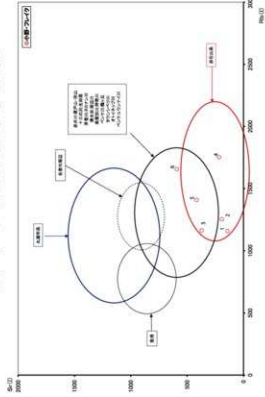
図V-2-4 北海道の黒曜石Rb-Sr図(標準図)



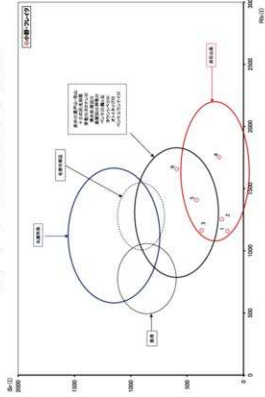
図Ⅴ-2-5 祝梅川小野SiO₂-Al₂O₃図



図Ⅴ-2-6 祝梅川小野Fe₂O₃-TiO₂図



図Ⅴ-2-7 祝梅川小野K₂O-CaO図



図Ⅴ-2-8 祝梅川小野Rb-Sr図

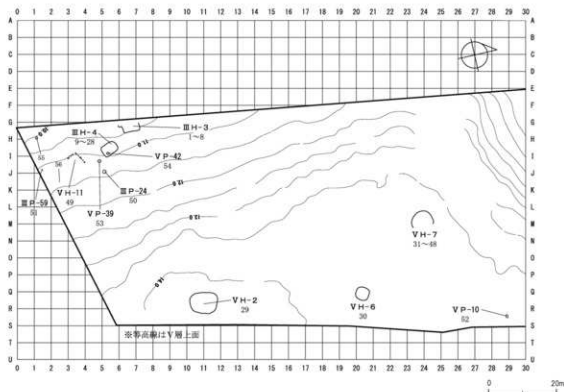
3 炭化材樹種同定結果

平成19年度に当財団がパミノ・サーヴェイ株式会社に委託し、成果として提出された「祝梅川小野遺跡出土炭化材の樹種同定」を掲載する。同定試料は主に住居跡や土坑より出土した炭化材である。各時期の木材利用を明らかにすることを目的として同定を依頼した。なお、VH-2・6・7・11、VP-10・39・42は昨年度報告済みであり（北埋調報285）、遺構の詳細はこちらを参照いただきたい。

(1) 同定結果について

縄文時代前期後半の遺構VH-2・6は、主にコナラ節が利用されている。VH-2のHP-23は用途と試料の由来は不明である。VH-6のHP-1は柱穴であり、建築部材に由来すると考えられる。後期前葉のVH-7のHF-1とVP-10は炉跡であることから試料の大半は燃焼材であり、コナラ節・カエデ属・ハリギリ・トネリコ属など様々な樹種が利用されている。後期中葉の遺構VH-11は地床炉（HF-2）周辺、VP-39・42は覆土中の廃棄焼土であることから燃焼材であり、ハリギリ・トネリコ属が利用されている。晩期後葉のⅢP-24・59はコナラ節が利用されているが、試料の由来は不明である。弥文文化期のⅢH-3は焼矢住居であり、覆土中の炭化材は建築部材に由来すると考えられる。同定結果はすべてコナラ節であった。ⅢH-4は、床面壁際で出土した炭化材がハンノキ亜属・トネリコ属・コナラ節・ハリギリなど様々な樹種に同定されている。地床炉をもたないことから燃焼材の可能性は低く、これらは建築部材に由来すると考えられる。放射性炭素年代測定の結果より、ⅢH-4は弥文文化期末葉と推測されており（Ⅵ章第1節参照）、ⅢH-3からの住居の形態と木材利用の変化だけでなく、次のアイヌ文化期への移行という点でも重要である。

近世アイヌ文化期の木材利用については、祝梅川小野遺跡の低湿地部分で杭列、梅川1遺跡で大量の切片からなる建材集積が検出されており、次年度以降報告する。（芝田）



図Ⅲ-3-1 同定試料出土地点

(2) 祝梅川小野遺跡出土炭化材の樹種同定

1 はじめに

千歳市祝梅川小野遺跡は、祝梅川の右岸段丘上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代前期の住居跡、土坑、縄文時代後期の住居跡、縄文時代晩期の住居跡、土坑、土器集中、擦文文化期の住居跡、焼土、集石、アイヌ文化期の住居跡、灰集中、柱穴、道跡等が検出されている。

今回の分析調査では、縄文時代前・後・晩期の竪穴住居跡および土坑、擦文文化期の竪穴住居跡から出土した炭化材を対象として、木材利用を明らかにするために樹種同定を実施する。

2 試料

試料は、縄文時代および擦文文化期の遺構から出土した炭化材56点である。

3 分析方法

湿っている試料については、自然乾燥させる。木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、木材組織の配列については、林(1991)および伊東(1995,1996,1997,1998,1999)も参考にする。

4 結果

樹種同定結果を表VI-3-1に示す。炭化材は、広葉樹5分類群（ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・カエデ属・ハリギリ・トネリコ属）に同定された。なお、道管が認められることから広葉樹であるが、組織の保存状態が悪く種類の同定に至らない試料が2点(試料番号22,46)、樹皮のみで同定可能な炭化材が認められなかった試料が1点(試料番号15)あった。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な模様をなす。

・ハリギリ (*Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に

紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・トネリコ属 (Fraxinus) モクセイ科

環孔材で、孔圍部は1-2列、孔圍外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

5 考察

縄文時代

縄文時代の試料は合計28点あるが、後期前葉の住居跡VH-7から出土した試料が18点を占めており、他の遺構は全て各1点のみである。各遺構別の種類構成を表VI-3-2に示す。

縄文時代前期前半は、住居跡から出土した試料2点が、いずれもコナラ節に同定された。コナラ節は本地域ではミズナラが一般的であり、重硬で強度が高い材質を有する。一方、後期前葉の住居跡と土坑では、トネリコ属を中心にカエデ属、ハリギリ、コナラ節が利用されるが、コナラ節は2点のみで少ない。後期全体をみてもコナラ節は2点のみであり、本遺跡では前期と後期でコナラ節の利用状況が異なる可能性がある。トネリコ属とカエデ属も重硬で強度が高い材質を有するが、ハリギリは比較的軽軟で、強度が低い。ハリギリとその他の木材とで出土状況に違いは見られないが、ハリギリのみ材質が異なることから、利用部位等が異なる可能性がある。

後期中葉の炭化材は、土坑から出土した試料2点がハリギリとトネリコ属に同定された。また、後期中葉の住居等から出土した炭化材は、2点がトネリコ属に同定された。これらの結果から、後期を通してトネリコ属が構築材や燃料材等に利用されていたことが推定される。

縄文時代晩期の試料は、土坑から出土した2点と土器集中から出土した1点があり、土坑の炭化材がコナラ節、土器集中の炭化材がハンノキ亜属に同定された。後期には利用の少なかったコナラ節が晩期に再び利用されるが、点数が少ないため詳細は不明である。今後試料数を増やして検証することが望まれる。

なお、本地域周辺地域では、縄文時代前期の炭化材について樹種を明らかにした例は少ないが、後期の試料ではカリンバ2遺跡で住居構築材と考えられる炭化材にトネリコ属の多い結果が報告されている(三野1998)。一方、梅川4遺跡や末広遺跡では、住居構築材と考えられる炭化材にコナラ節が多く利用されており(三野2000)、遺跡によって木材利用が異なる。縄文時代晩期では、キウス5遺跡で燃料材等と考えられる炭化材にコナラ節の多い結果が報告されているが、建築部材に関しては資料がほとんどないため、詳細については不明である(パリーノ・サーヴェイ株式会社1998)。

縄文文化期

炭化材は、縄文文化期の竪穴住居跡2軒から出土した試料である。ⅢH-3の試料は、8点全てがコナラ節に同定されたが、ⅢH-4では20点の試料がトネリコ属9点、ハンノキ亜属6点、コナラ節2点、ハリギリ1点、広葉樹1点、不明1点に同定された。ⅢH-4の炭化材は、トネリコ属を中心に4種類が利用されており、ⅢH-3とは木材利用の傾向が異なる。両住居跡の炭化材は遺存状況に違いがあるが、いずれも壁際近くから出土した炭化材を試料としており、部位に違いがあるとは考えにくい。ⅢH-4で確認された種類は、トネリコ属を中心に河畔林や湿地林の構成種が目立つことから、両住居跡における種類構成の違いは、木材採取地の植生の違い等を反映すると考えられる。

なお、ⅢH-3は、炭化材の遺存状況が良好であり、分析対象とした他にも部位を推定できる炭化

材が多数出土している。本地域では、擦文文化期後半の建築部材について樹種を明らかにした例が少ないため、部位が分かる資料は貴重であり、今後残りの炭化材についても樹種を明らかにすることが望まれる。
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
 三野 紀雄,1998,恵庭市カリンバ2遺跡出土の炭化材,「カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点」恵庭市教育委員会,299-303。
 三野 紀雄,2000,先史時代における木材の利用(3) - 石狩低地帯における木材利用の地域的・時代的な差異について - 北海道開拓記念館研究紀要28,北海道開拓記念館,1-25。
 パリノ・サーヴェイ株式会社,1998,キウス5遺跡A-2地区における木材・炭化材樹種同定,「千歳市キウス5遺跡(5) A-2地区-北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書-第2分冊」,北海道埋蔵文化財センター調査報告書第125集,北海道埋蔵文化財センター,345-351。
 高地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)AWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

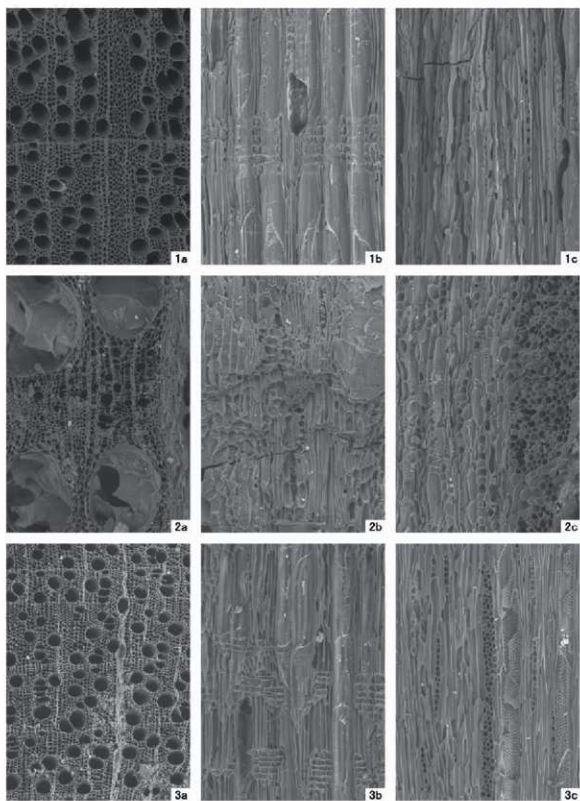
表Ⅵ-3-1 樹種同定結果

番号	遺構名等	調査区	層位	取上番号	時期	樹種
1	遺H-3	G6	覆土	1	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
2	遺H-3	G6	覆土	2	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
3	遺H-3	G7	覆土	3	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
4	遺H-3	G7	覆土	4	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
5	遺H-3	G7	覆土	5	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
6	遺H-3	G7	覆土	6	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
7	遺H-3	G7	覆土	7	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
8	遺H-3	G6	覆	8	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
9	遺H-4	H5	床面	1	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
10	遺H-4	H5	床面	2	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
11	遺H-4	H5	床面	3	弥文文化期	ハリギリ
12	遺H-4	H5	床面	4	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
13	遺H-4	H5	床面	5	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
14	遺H-4	H5	床面	6	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
15	遺H-4	I5	床面	7	弥文文化期	榎皮
16	遺H-4	H5	床面	8	弥文文化期	トネリコ属
17	遺H-4	I5	床面	9	弥文文化期	トネリコ属
18	遺H-4	I5	床面	10	弥文文化期	トネリコ属
19	遺H-4	I5	床面	11	弥文文化期	トネリコ属
20	遺H-4	I5	床面	12	弥文文化期	トネリコ属
21	遺H-4	I5	床面	13	弥文文化期	トネリコ属
22	遺H-4	I5	床面	14	弥文文化期	広葉樹
23	遺H-4	I5	床面	15	弥文文化期	トネリコ属
24	遺H-4	H5	床面	16	弥文文化期	コナラ属コナラ亜属コナラ属
25	遺H-4	H5	床面	17	弥文文化期	トネリコ属
26	遺H-4	I5	床面	18	弥文文化期	トネリコ属
27	遺H-4	I5	床面	19	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
28	遺H-4	I5	床面	20	弥文文化期	ハンノキ属ハンノキ亜属
29	VH-2 HP-23	Q11	坑底	1	縄文時代前期後半	コナラ属コナラ亜属コナラ属
30	VH-6 HP-1	Q20	覆土4	1	縄文時代前期後半	コナラ属コナラ亜属コナラ属
31	VH-7 HP-1	M23-24	覆土	1	縄文時代後期前葉	トネリコ属
32	VH-7 HP-1	L-H23	覆土	2	縄文時代後期前葉	トネリコ属
33	VH-7 HP-1	M23	覆土	3	縄文時代後期前葉	トネリコ属
34	VH-7 HP-1	L23	覆土	4	縄文時代後期前葉	トネリコ属
35	VH-7 HP-1	L23	覆土	5	縄文時代後期前葉	カエデ属
36	VH-7 HP-1	L24	覆土	6	縄文時代後期前葉	カエデ属
37	VH-7 HP-1	L24	覆土	7	縄文時代後期前葉	ハリギリ
38	VH-7 HP-1	L24	覆土	8	縄文時代後期前葉	トネリコ属
39	VH-7 HP-1	M24	覆土	9	縄文時代後期前葉	カエデ属
40	VH-7 HP-1	I23	覆土	10	縄文時代後期前葉	トネリコ属
41	VH-7 HP-1	I23	覆土	11	縄文時代後期前葉	トネリコ属
42	VH-7 HP-1	I23	覆土	12	縄文時代後期前葉	トネリコ属
43	VH-7 HP-1	I23	覆土	13	縄文時代後期前葉	トネリコ属
44	VH-7 HP-1	M24	覆土1	14	縄文時代後期前葉	カエデ属
45	VH-7 HP-1	L24	覆土1	15	縄文時代後期前葉	トネリコ属
46	VH-7 HP-1	M24	覆土1	16	縄文時代後期前葉	広葉樹
47	VH-7 HP-1	M24	覆土1	17	縄文時代後期前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ属
48	VH-7 HP-1	M24	覆土1	18	縄文時代後期前葉	カエデ属
49	VH-11	I5	床面付着	1	縄文時代晩期前葉	トネリコ属
50	遺P-24	J5	坑底	1	縄文時代晩期前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ属
51	遺P-59	I1	覆土	1	縄文時代晩期前葉	コナラ属コナラ亜属コナラ属
52	VP-10	R28	覆土1	2	縄文時代後期中葉	コナラ属コナラ亜属コナラ属
53	VP-39	I4	覆土	1	縄文時代後期中葉	ハリギリ
54	VP-42	H5	覆土	1	縄文時代後期中葉	トネリコ属
55	土器集中5	H1	Ⅱ	1	縄文時代晩期後葉	ハンノキ属ハンノキ亜属
56		J2	V	1	縄文時代後期中葉～後葉	トネリコ属

表Ⅵ-3-2 遺構別種類構成

分類別・遺構	縄文時代										合計		
	前期後半					後期中葉			晩期後葉			弥文文化期	
	住居	住居	土坑	住居	土坑	土坑	その他	土坑	その他	住居			
	VH-2	VH-6	VH-7	VP-10	VH-11	VP-39	VP-42	包含層	遺P-24	遺P-59	土器集中5	遺H-3	遺H-4
ハンノキ亜属											1		
コナラ属	1	1	1	1					1	1	1	8	2
カエデ属			5										
ハリギリ			1			1						1	3
トネリコ属			10		1	1	1					9	22
広葉樹			1									1	2
榎皮													1
合計	1	1	1	18	1	1	1		1	1	1	8	20

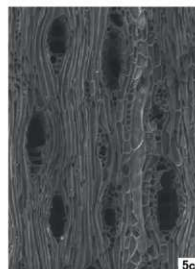
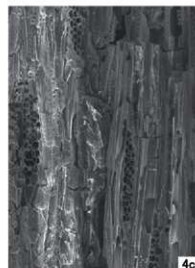
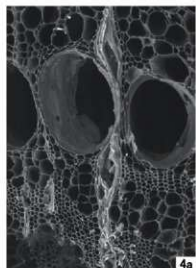
図版VI-3-1 炭化材(1)



1. ハンノキ属ハンノキ亜属(試料番号55)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号52)
 3. カエデ属(試料番号35)
- a: 木口, b: 椀目, c: 板目

200 μ m
200 μ m

図版VI-3-2 炭化材(2)



4. ハリギリ(試料番号53)
5. トネリコ属(試料番号56)
a:木口, b:柁目, c:板目

200 μ m a
200 μ m b,c

引用・参考文献

個人論文・著作等

- 市石慎三 2001 「縄文時代晩期後葉から鉄器時代初期の突如土器について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』3号
- 今村峰雄 2001 「縄文-弥生時代移行期の年代を考える－問題と展望－」『第四紀研究』第40巻第6号 日本第四紀学会
- 大沼忠春 1986 「北海道における縄文晩期から鉄器文化への変遷」『日本考古学協会昭和61年度大会発表要旨』日本考古学協会
- 小山正史・竹原秀雄 1967 「新版 標準土色帖」2004年版 日本色研事業株式会社
- 金森典夫 1989 「簡式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・縄文』小学館
- 柳原文文 2002 「データベース・アイヌ語地名3」北海道出版企画センター
- 鈴木 信・西脇対名夫 2003 「北海道縄文晩期後葉の土器製作技法について－江別市対馬2遺跡土器集中1の事例から－」
『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
- 藤野光行 1994 「北海道東部の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』葦山園
- 玉口時雄・小金井靖 1998 「改訂新版 土器器・須臾器の知識」東京美術
- 戸島賢二・土屋 啓 2000 「北海道の石」北海道大学図書刊行委員会
- 中田由香 1998 「北海道美尻川流域における縄文時代晩期中葉から後葉の土器について」
『北方の考古学』野村崇先生追悼記念論集編集委員会
- 長見義三 1976 「ちとせ地名散歩」北海道新聞社
- 野村 崇 1985 「北海道縄文時代終末期の研究」みやま書房
- 野村 崇 1994 「北海道南部・中部の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』葦山園
- 林 謙作 1981 「北海道」『縄文土器大成4 晩期』講談社
- 福田正宏 2004 「縄文文化後・晩期」『北海道考古学』第40輯 北海道考古学会
- 福田正宏 2007 「樺東ロシアの先史文化と北海道－紀元前1千年紀の考古学－」北海道出版企画センター
- 橋山英介 1990 「縄文文化」ニュー・サイエンス社

団体・組織刊行物

- 石狩町教育委員会 1979 「SHIBISHIUSUⅡ」
- えりも町教育委員会 2000 「油駒遺跡」
- 追分町教育委員会 1981 「追分町の埋蔵文化財」
- 空知地方史研究協議会 1977 「長沼町クナントウ遺跡の発掘調査」
- 千歳市教育委員会 1967 「千歳遺跡」
- 千歳市教育委員会 1971 「ママナ遺跡」
- 千歳市教育委員会 1979 「続千歳遺跡」
- 千歳市教育委員会 1979 「ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書Ⅴ
- 千歳市教育委員会 1981 「未広遺跡における考古学的調査（上）」千歳市文化財調査報告書Ⅵ
- 千歳市教育委員会 1982 「未広遺跡における考古学的調査（下）」千歳市文化財調査報告書Ⅶ
- 千歳市教育委員会 1985 「未広遺跡における考古学的調査（続）」千歳市文化財調査報告書Ⅷ
- 千歳市教育委員会 1986 「梅川3遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅡ
- 千歳市教育委員会 1991 「祝梅川山田遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅤ
- 千歳市教育委員会 1994 「九子山遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅧ
- 千歳市教育委員会 1996 「未広遺跡における考古学的調査Ⅱ」千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅠ
- 千歳市教育委員会 2002 「ユカシボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅣ
- 千歳市教育委員会 2002 「梅川4遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅤ
- 千歳市教育委員会 2003 「祝梅川遺跡・祝梅川矢島遺跡・梅川4遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅦ
- 七飯町教育委員会 1979 「聖山」
- 日本ベドロジー学会 1997 「土壌調査ハンドブック 改訂版」博友社
- 北海道火山防災名委員会 1982 「北海道の火山」北海道火山防災名委員会
- 北海道教育委員会 1977 「美尻川流域の遺跡群1」
- 由仁町教育委員会 1986 「川端遺跡・川端2遺跡」

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983 『千歳市 ママチ道路』北理調報9
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987 『千歳市 ママチ道路Ⅱ』北理調報36
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990 『美沢川流域の遺跡群XⅡ』北理調報62
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990 『余市町 栄町5道路』北理調報66
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『美沢川流域の遺跡群XⅤ』北理調報77
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『美沢川流域の遺跡群XⅧ』北理調報89
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市 オサツ2道路(1)・オサツ14道路』北理調報96
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『美沢川流域の遺跡群XⅧ』北理調報102
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市 キウス5道路(3)』北理調報115
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市 キウス5道路(5)』北理調報125
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市 ユカボンシC15道路(1)』北理調報128
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市 キウス4道路(3)』北理調報134
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『千歳市 ユカボンシC15道路(3)』北理調報146
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 『千歳市 ウサクマイN道路』北理調報156
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『千歳市 チブニー1道路・チブニー2道路』北理調報173
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『江別市 対雁2道路(3)』北理調報177
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市 オルイカ1道路』北理調報188
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市 オルイカ2道路』北理調報189
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『江別市 対雁2道路(4)』北理調報193
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2004 『恵庭市 柏木川13道路』北理調報203
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2004 『千歳市 オルイカ1道路(2)』北理調報206
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2004 『千歳市 チブニー2道路(2)』北理調報207
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2005 『千歳市 オルイカ2道路(2)』北理調報221
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『千歳市 チブニー2道路(3)』北理調報225
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『江別市 対雁2道路(7)』北理調報226
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006 『江別市 対雁2道路(8)』北理調報231
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2007 『千歳市 祝梅川上田道路・梅川2道路』北理調報238
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2007 『江別市 対雁2道路(9)』北理調報240
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市 キウス5道路(8)』北理調報251
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市 キウス9道路』北理調報252
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『千歳市 梅川4道路(1)』北理調報253
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 『江別市 対雁2道路(10)』北理調報255
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2009 『千歳市 オルイカ2道路(3)』北理調報267
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2009 『千歳市 アンカリト7道路・アンカリト9道路』北理調報268
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2009 『千歳市 梅川4道路(2)』北理調報269
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 『千歳市 キウス5道路(9)』北理調報284
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『千歳市 祝梅川小野道路(1)・梅川1道路(1)』北理調報285

写真図版



25%調査開始 (平成19年度)



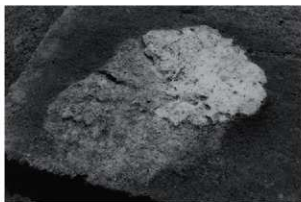
調査状況 (平成20年度)

調査状況

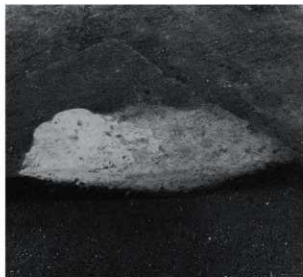
図版 2



ⅢH-1 完掘



ⅢH-1 HF-1検出



ⅢH-1 HF-1セクション



ⅢH-1 HP-7セクション



ⅢH-1 HP-9セクション

住居跡(1)



ⅢH-2 完掘



ⅢH-2 HF-1 検出



ⅢH-2 HF-1 セクション



ⅢH-2 HP-2 セクション



ⅢH-2 HP-6 セクション

図版 4



Ⅲ H-3 調査状況



Ⅲ H-3 炭化材出土状況



Ⅲ H-3 南北セクション



Ⅲ H-3 東西セクション



Ⅲ H-3 掘り上げ土セクション



Ⅲ H-3 竈検出



Ⅲ H-3 竈セクション



Ⅲ H-3 竈燃焼部セクション



Ⅲ H-3 床面粘土検出



Ⅲ H-3 HP-1セクション



Ⅲ H-3 HP-2セクション

図版 6



ⅢH-4 発掘



ⅢH-4 セクション



ⅢH-4 セクション



ⅢH-5 検出



ⅢH-5 HF-1 セクション



ⅢH-5 HP-3 セクション



ⅢH-5 HS-1

図版 8



Ⅲ H-6 遺物出土状況



Ⅲ H-6 南北セクション



Ⅲ H-6 HP-2セクション



Ⅲ H-6 HP-15セクション

住居跡(7)



ⅢH-7 遺物出土状況



ⅢH-7 HP-1 セクション



ⅢH-7 HP-2 セクション



ⅢH-7 HP-3 遺物出土状況



ⅢH-8 検出



ⅢH-8 東西セクション



ⅢH-8 炭化材・B-Tm出土状況



ⅢH-8 竈袖・火床セクション(西から)



ⅢH-8 竈煙道部セクション(北西から)



ⅢH-8 竈煙道・煙出部セクション(西から)



ⅢH-8 竈煙道部セクション(南から)



ⅢH-8 HP-2セクション



ⅢH-8 甕出土状況



ⅢH-8 須恵器・炭化材出土状況



ⅢH-8 紡錘車出土状況

図版12



ⅢH-9 完掘



ⅢH-9 東西セクション



ⅢH-9 HF-1検出



ⅢH-9 HP-5セクション



ⅢH-10 検出



ⅢH-10 炭化材出土状況



ⅢH-8・10 掘り上げ土セクション



ⅢH-10 セクション



掘り上げ土

图版14



土坑群完掘(N·O 8~10区)



土坑群完掘(I 12~13区付近)

土坑(1)



Ⅲ P-2



Ⅲ P-3



Ⅲ P-8



Ⅲ P-9



Ⅲ P-10



Ⅲ P-20



Ⅲ P-24



Ⅲ P-28



Ⅲ P-30



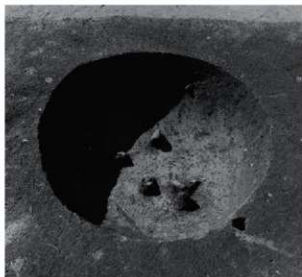
Ⅲ P-31



Ⅲ P-33



III P-39



III P-43



III P-46



III P-47



III P-49



III P-54



Ⅲ P-56



Ⅲ P-60



Ⅲ P-66



Ⅲ P-67



Ⅲ P-73



III SP-32



III SP-35



III SP-54



III SP-55



III SP-82



III SP-114

小ビット



Ⅲ F-1



Ⅲ A-2



Ⅲ S-1·2



Ⅲ S-3



Ⅲ S-4



Ⅲ R-1



〇 8 調査区



M 5 調査区



Ⅲ H-6・土器集中6



Ⅲ H-6・土器集中5



Ⅲ H-6・土器集中3



ⅢH-6 (土器集中2)

1



ⅢH-6 (土器集中3)

2



ⅢH-6 (土器集中3)

4



ⅢH-6 (土器集中4)

3



ⅢH-6 (土器集中5)

6



ⅢH-6 (土器集中5)



5 ⅢH-6

7



ⅢH-6 (土器集中6)

8 ⅢH-7

9





Ⅲ H-7

10



Ⅲ H-7

11

Ⅲ P-56

14



Ⅲ P-24

12



III P-54



13 III H-3

15



III H-3

16 III H-8

17



ⅢH-8

18



ⅢH-8

20



ⅢH-8

21



ⅢH-8

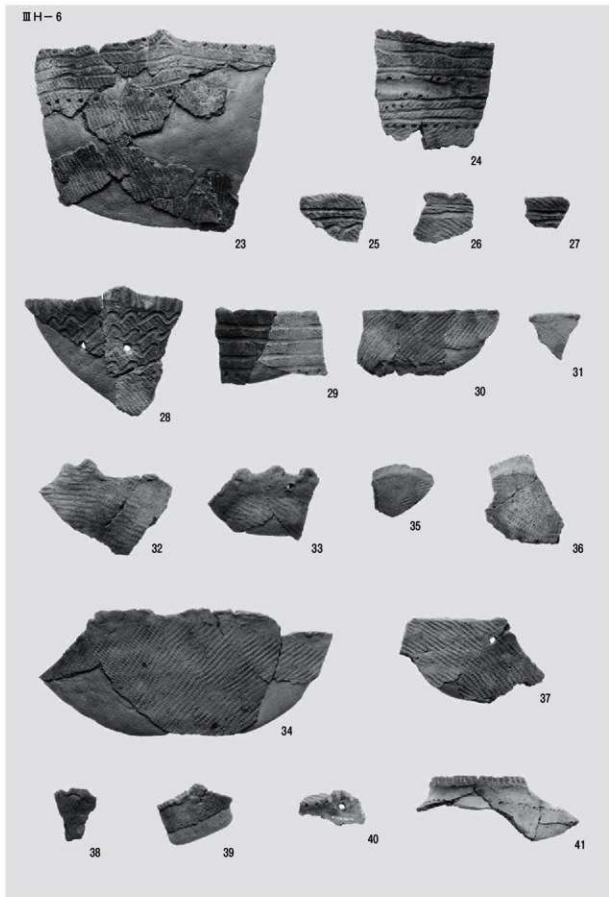
19



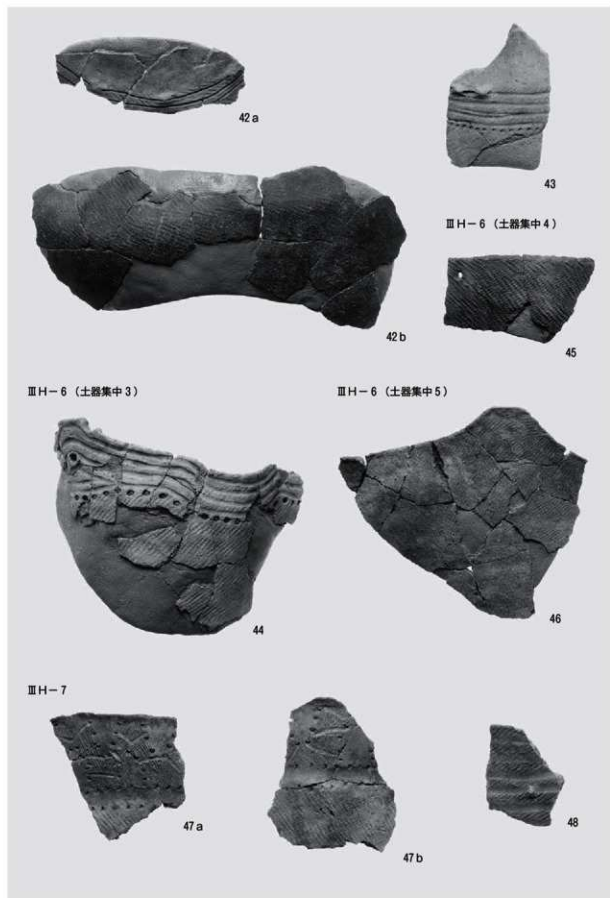
ⅢH-8

22

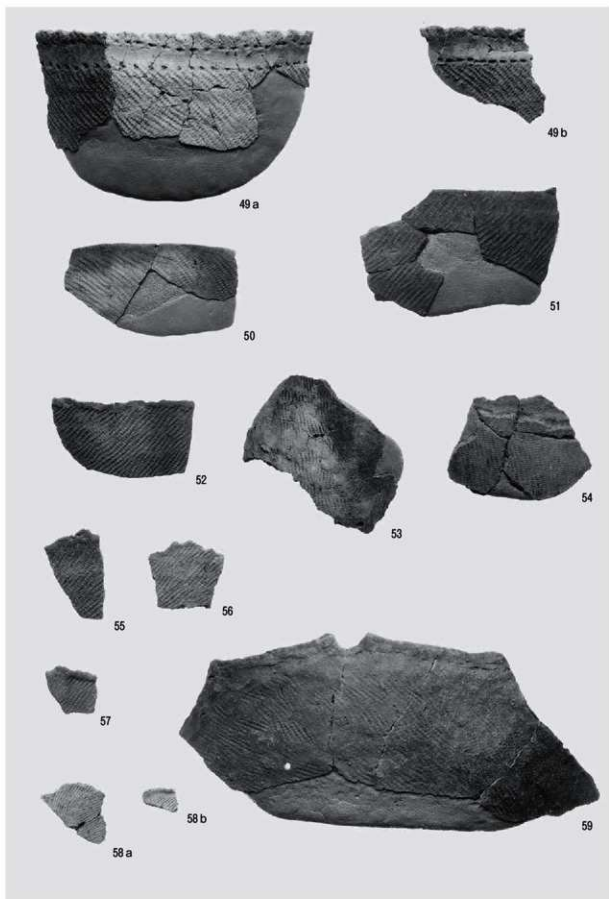
ⅢH-6



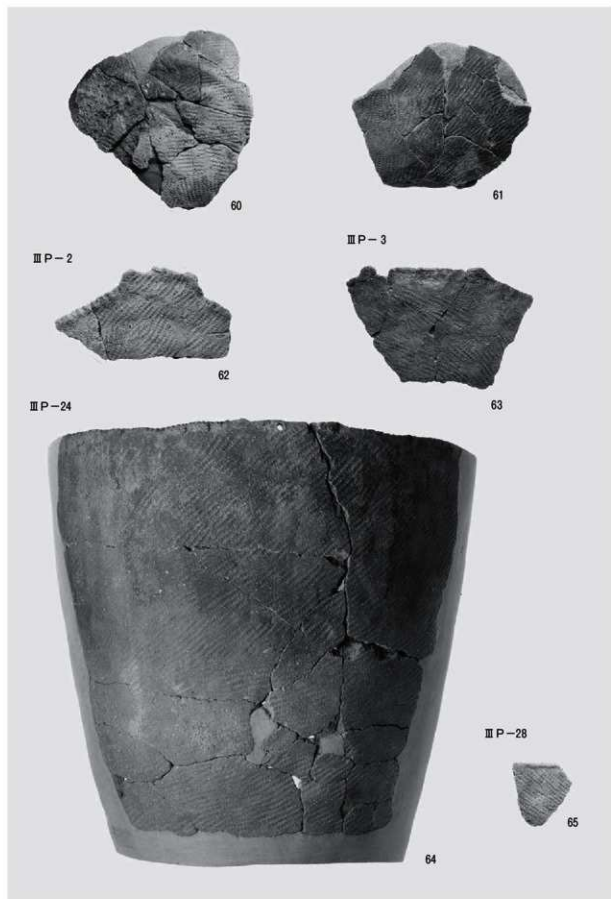
遺構の土器等（6）



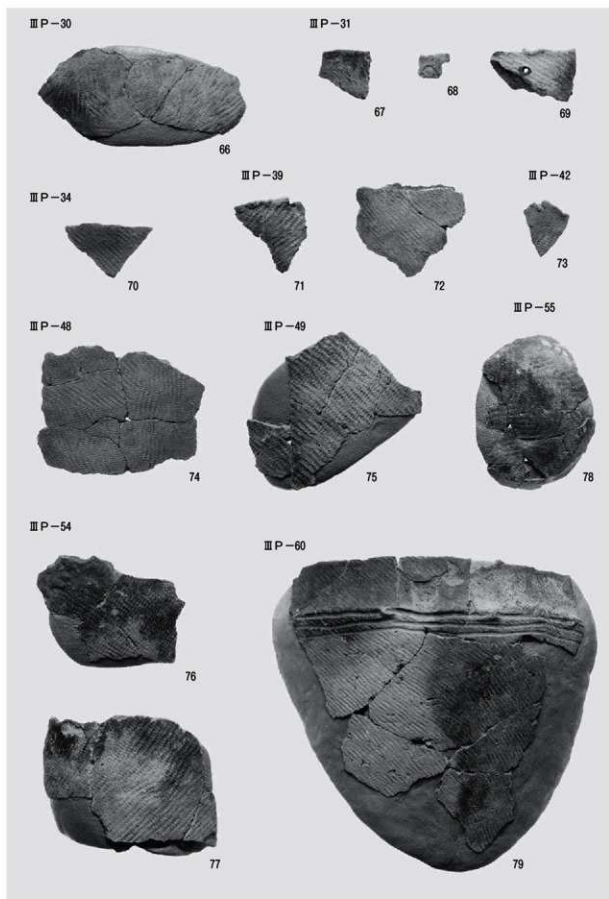
遺構の土器等(7)

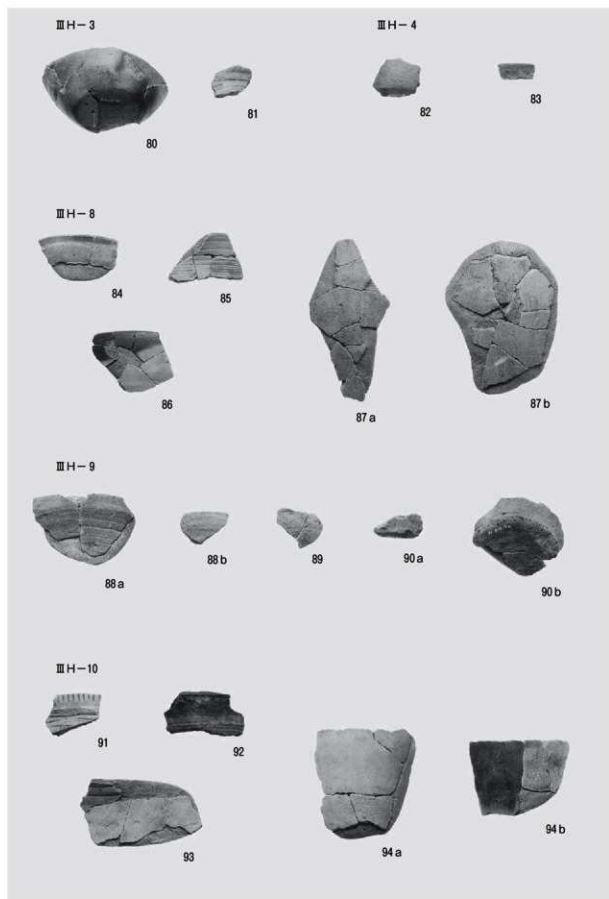


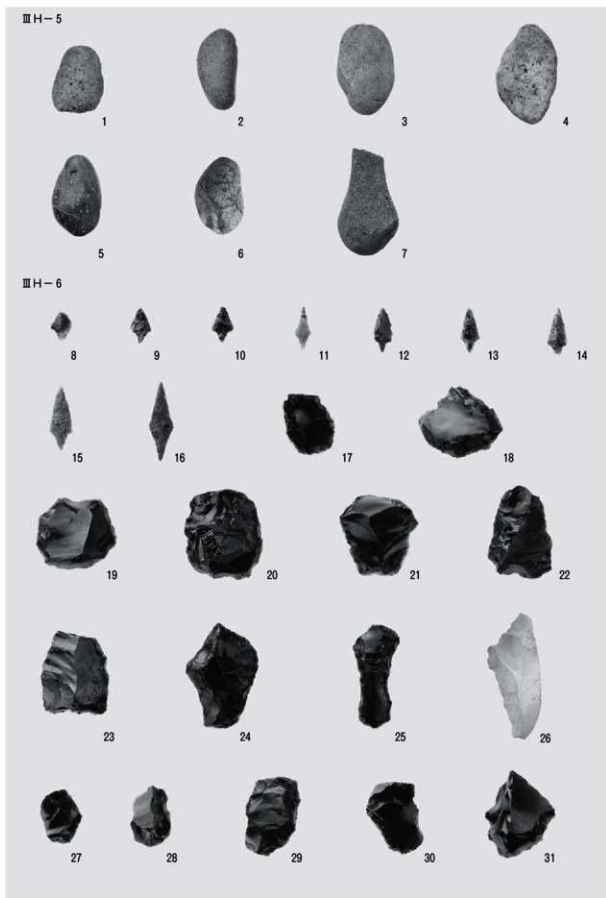
遺構の土器等（8）



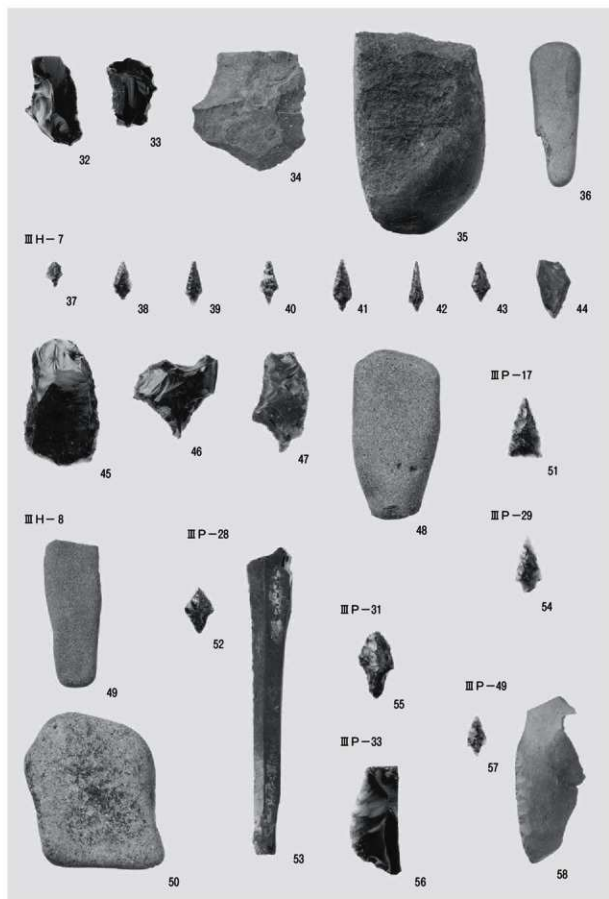
遺構の土器等（9）







遺構の石器等（1）



Ⅲ P-56



60



61



62



63



64



65

Ⅲ P-58



59

Ⅲ S-4



66



67



68

遺構の石器等（3）



1



2



3



4

包含層の土器等（1）



5



6



7



8



9

包含層の土器等（2）



10



11



12



13



14



15



17



16



18



19



20



21



23



25



22



24



26



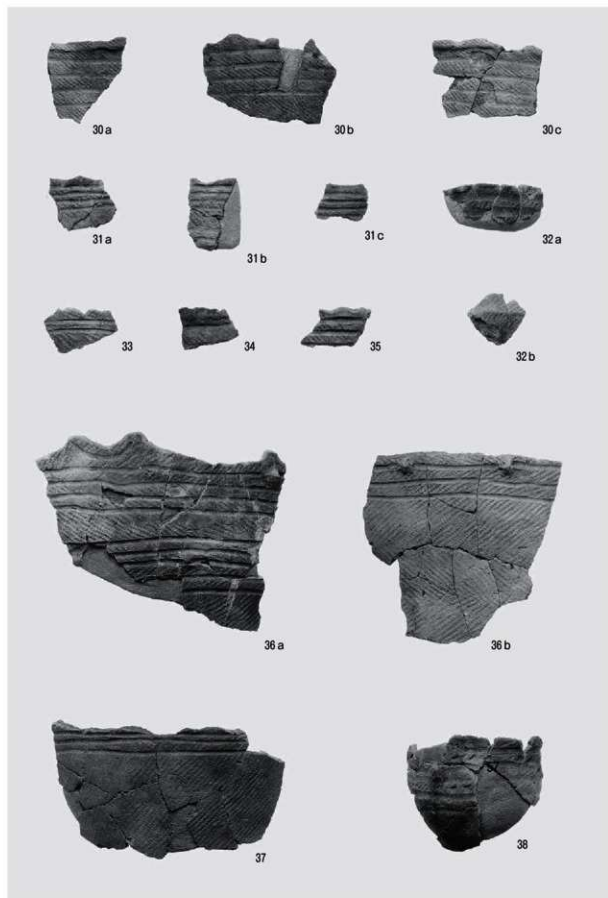
27



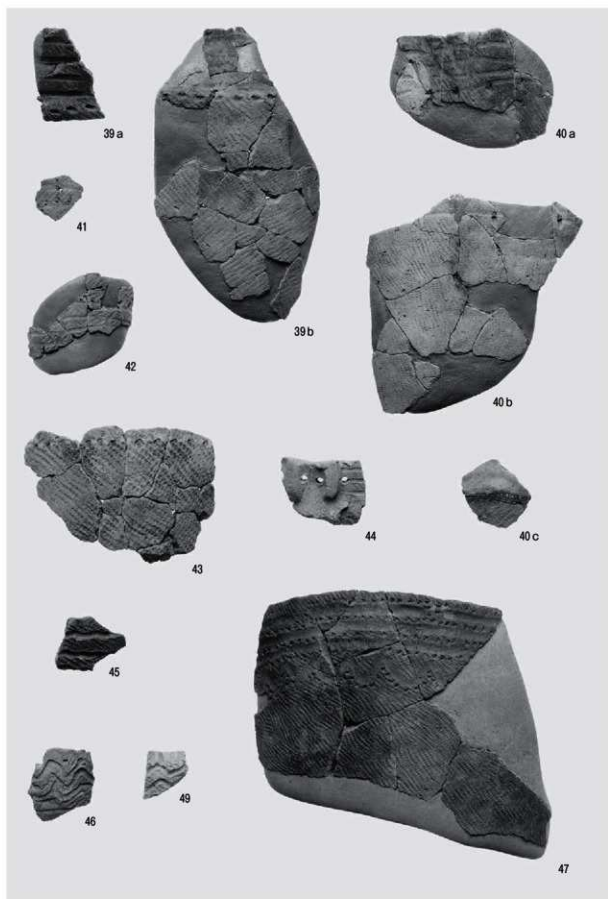
28



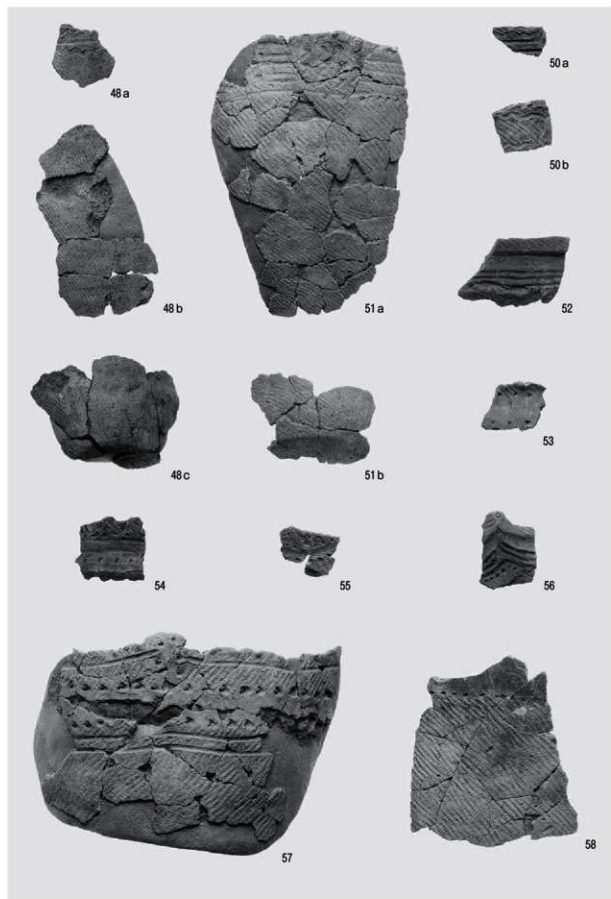
29



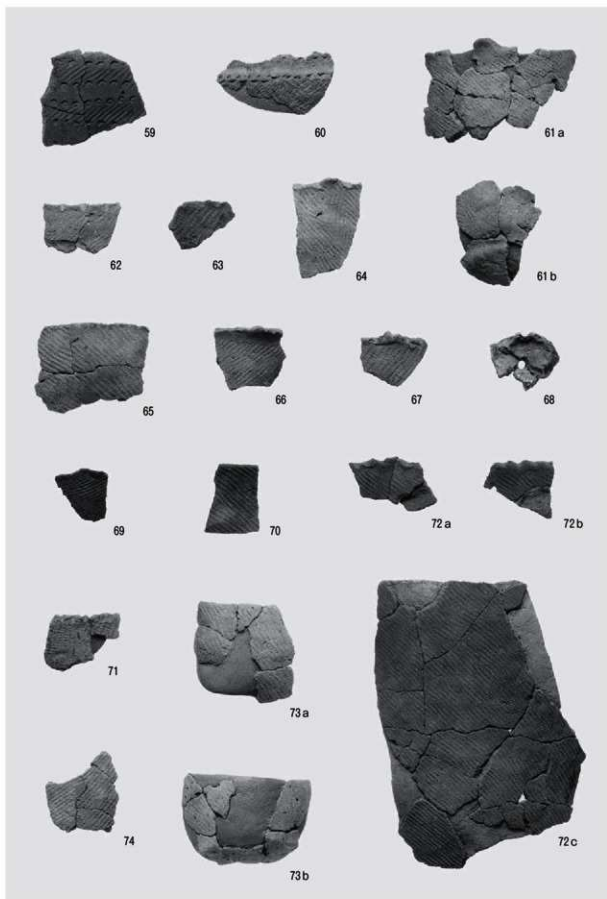
包含層の土器等（7）



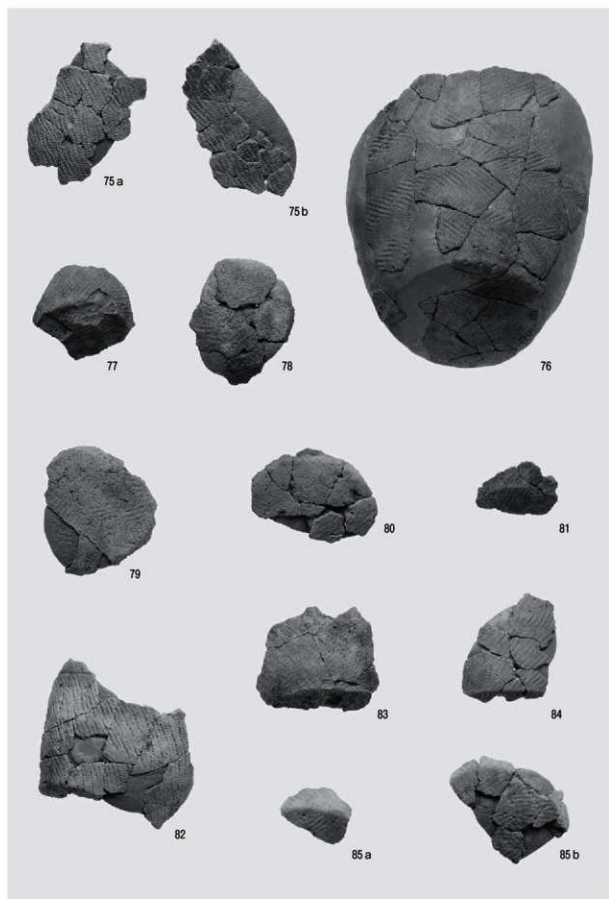
包含層の土器等（8）



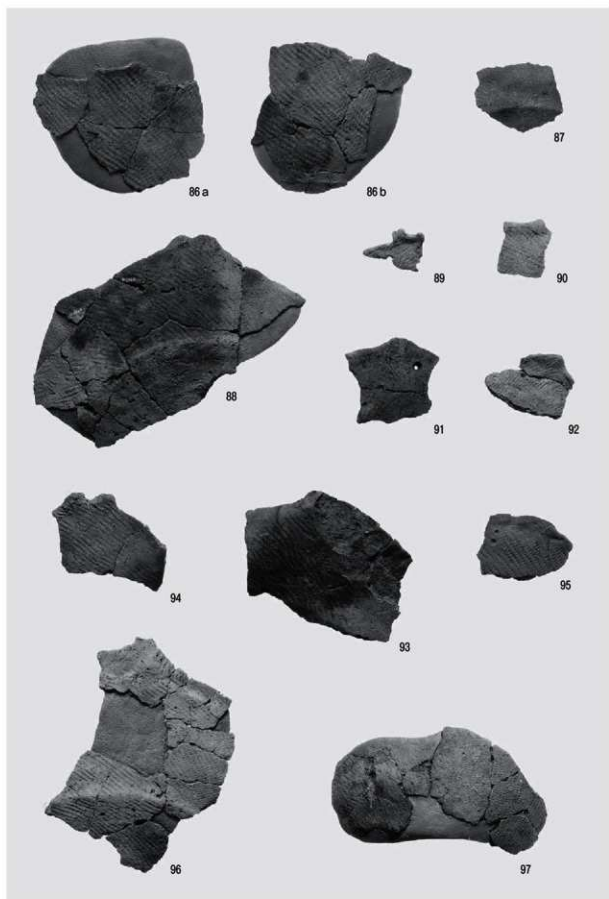
包含層の土器等（9）



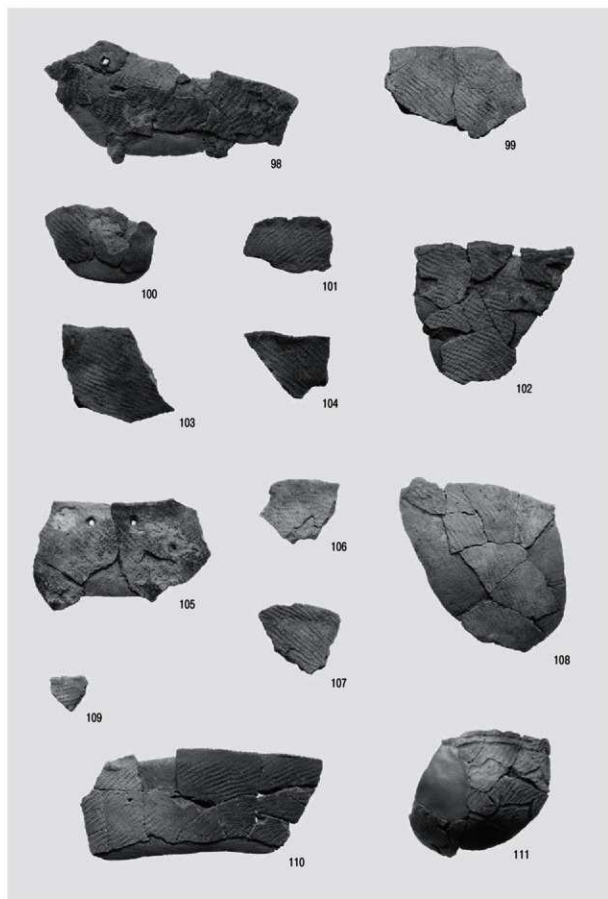
包含層の土器等 (10)



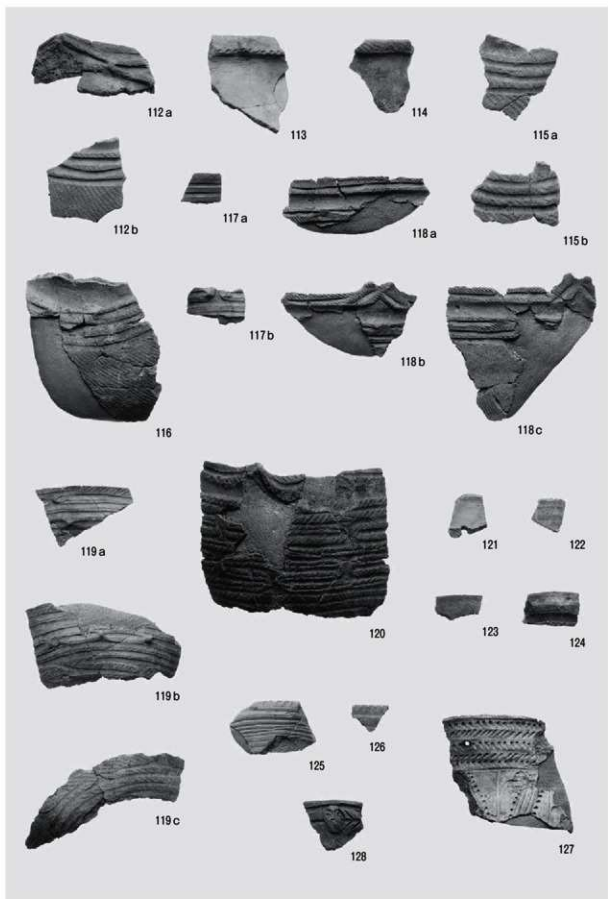
包含層の土器等 (11)



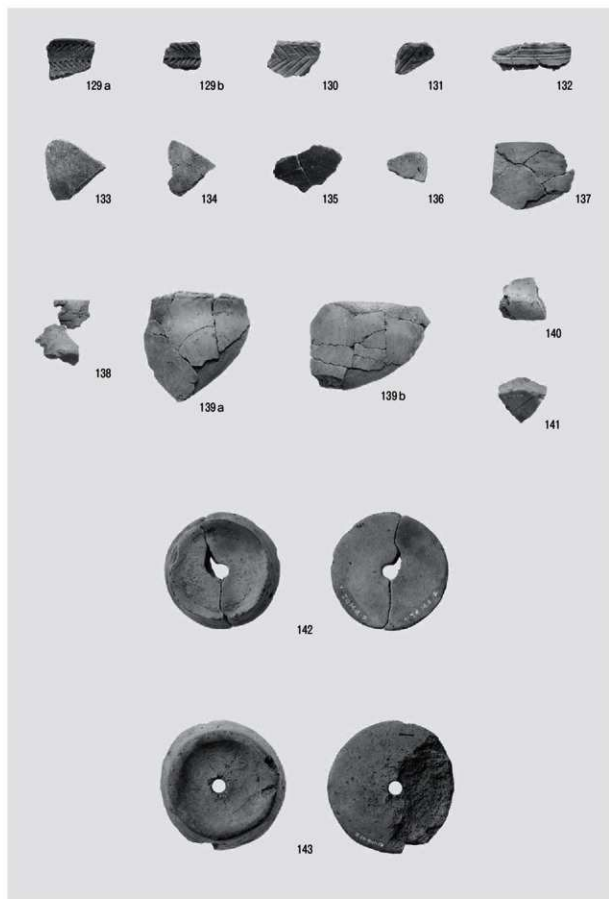
包含層の土器等 (12)



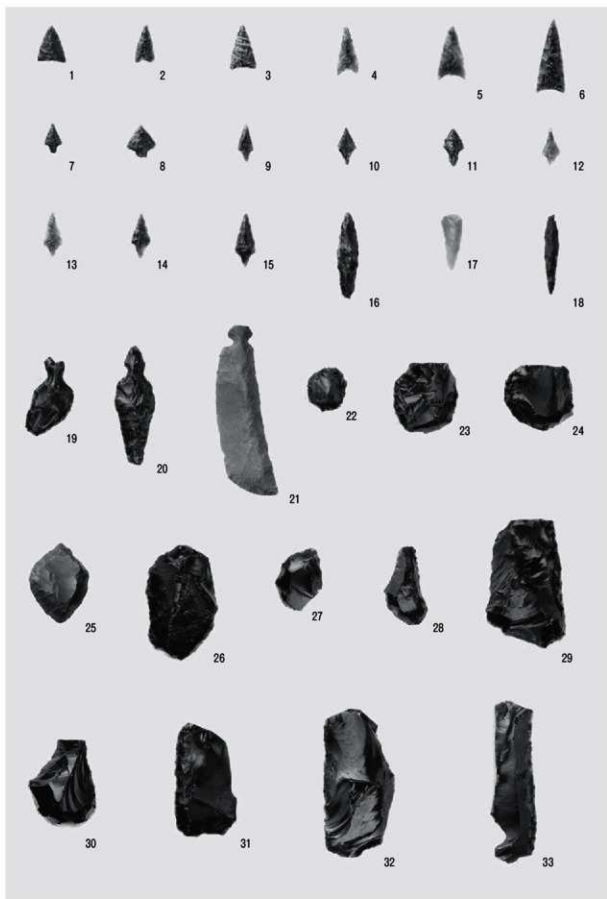
包含層の土器等 (13)



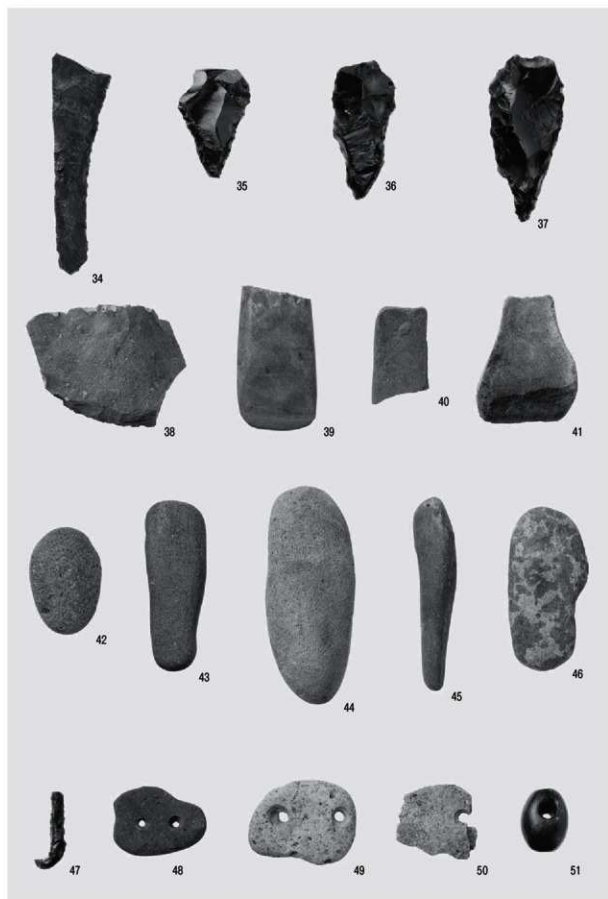
包含層の土器等 (14)



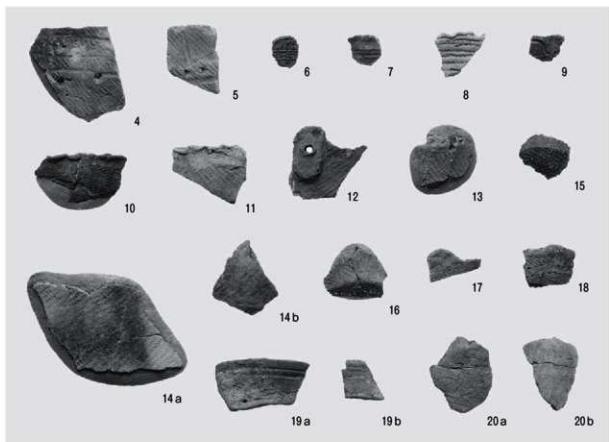
包含層の土器等 (15)



包含層の石器等（1）

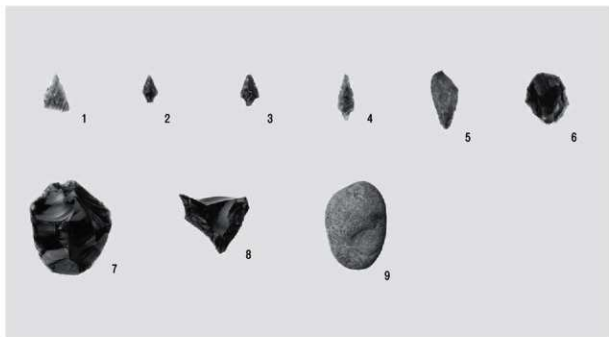


包含層の石器等（2）



包含層の土器等（梅川1遺跡）

図版54



包含層の石器等（梅川1遺跡）

報告書抄録

ふりがな	ちとせし しゆくばいがわおのいせき(2)・うめかわいせき(2)							
書名	千歳市 祝梅川小野遺跡(2)・梅川1遺跡(2)							
副書名	道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第297集							
編著者名	鈴木信・菊池慈人・芝田直人・山中文雄・酒井秀治							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685-1 TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成25(西暦2013)年1月31日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
祝梅川小野遺跡 <small>ちとせし しょうのいのち</small>	千歳市祝梅 485-2ほか	01224	A-03-48	M20杭		20070507 ~20071031	1,550㎡	道路敷設に伴う記録保存
				42度49分 57.75689秒	141度41分 27.39113秒	20080507 ~20081031	6,787㎡	
梅川1遺跡 <small>うめかわ いせき</small>	千歳市祝梅 498-3	A-03-56	S72杭		20080507 ~20081031	893㎡		
			42度50分 05.77447秒	141度41分 31.15295秒				
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
祝梅川小野遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期後葉 擦文文化期 近世アイヌ文化期		住居跡10軒、土坑77基、 小ピット54基、焼土2か所、 灰集中2か所、集石4か所、道跡1条		土器 土製品 (紡錘車など) 石器等 石製品 (玉類など)		
梅川1遺跡	遺物包含地	縄文時代晩期後葉 擦文文化期				土器 石器等		
要約		平成19・20年度の2か年の調査報告である。本書はⅢ層で検出された遺構・遺物についての報告書である。ただし、Ⅲ層のうち低湿地で検出された遺構・木製品・金属製品については、次年度以降に報告を予定している。両遺跡は、千歳市街地から東へ約3km、千歳川の支流である梅川の左岸、標高7~15mに立地する。 祝梅川小野遺跡からは、縄文時代晩期後葉、擦文文化期、近世アイヌ文化期の遺構・遺物が検出されている。遺構は、住居跡10軒、土坑77基などが確認された。遺物は、土器等18,330点、石器等4,406点の合計22,736点が出土している。土製品では紡錘車、石製品では玉類などが出土している。 梅川1遺跡からは、縄文時代晩期後葉、擦文文化期の土器等445点、石器等117点の合計562点が出土している。						

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第297集

千歳市 **祝梅川小野遺跡(2)・梅川1遺跡(2)**

—道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成25(2013)年1月31日発行

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 総北海 札幌支社
〒065-0021 札幌市東区北21条東1丁目4-6
TEL (011)731-9500 FAX (011)731-9515
